松原市文化財報告　第１冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第282集

松原市

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡（Ｃ２－４－２）発掘調査
埋蔵文化財発掘調査報告書

2017年７月

松原市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

松原市文化財報告　第１冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第282集

松原市

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡（Ｃ２－４－２）発掘調査
埋蔵文化財発掘調査報告書

松原市教育委員会
公益財団法人　大阪府文化財センター

１．池内遺跡（Ｃ２－４－２）遺構面全景

１．Ⅰ－ｂ２区全景（南東から）

２．Ⅰ－ｃ区全景（北から）

1．弥生時代土器集合（S0540 出土）

2．古墳時代土器集合（S0376・S0562・S0509・S0515・S0673 出土）

１．古代土器集合（S0772 出土）

２．古墳時代土器集合（S0205・S0480 出土）

序　　文

松原市は、大阪の中央部に位置し、北は大和川を隔てて大阪市、南と西は堺市に接するまちで、古来より交通の要衝として、また、南大阪における広域交通の拠点として発展を続けてまいりました。

この度の「池内遺跡発掘調査報告書」は、都市計画道路堺松原線と大阪河内長野線の幹線道路が交差する天美地区における、まちづくりの一環として行われる天美東土地区画整理事業に先立つ発掘調査の成果に基づくものです。今回の発掘調査によって池内遺跡の実相がより明らかとなる貴重なものとなりました。

本書により、ふるさと松原の歴史、文化財への理解と保護に寄与することが出来れば幸いでございます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力をいただきました松原市天美東土地区画整理組合、大阪府教育庁、公益財団法人大阪府文化財センター並びに地権者・関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 29 年 7 月

松原市教育長　東野　光弘

序　　文

池内遺跡は松原市の北部、大和川の南岸に立地する、弥生時代から近世の遺跡であります。松原市は大阪府のほぼ中央、河内平野の南に位置しています。古代には河内国丹比郡、後には丹北郡に属しており、難波宮の朱雀大路から南下する難波大道や、大阪平野を東西に結ぶ大津道や丹比道が通り、交通の要衝でもありました。

池内遺跡はこれまでの調査で、弥生時代前期の集落や水田、平安時代の屋敷地や大型建物を含む集落などが発見されています。長期間にわたって広大な範囲が利用され、当時の人々が生活していた様子が明らかになっています。

今回の調査は天美東土地区画整理事業に伴うもので、池内遺跡の南東部にあたります。総面積約16,400㎡に及ぶ調査で、様々な調査成果を得ることができました。弥生時代から奈良時代の土坑群や井戸、平安時代前期から中期の掘立柱建物や溝、轍などが発見されています。なかでも、弥生時代後期から古墳時代については、これまでの調査では余り分かっていなかった時期であり、新たな知見を得ることができました。

最後になりましたが、調査にあたって松原市天美東土地区画整理組合、大阪府教育庁、松原市教育委員会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成29年7月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は大阪府松原市天美東三丁目に所在する池内遺跡（調査名：池内遺跡Ｃ２－４－２）の発掘調査報告書である。
2．調査は、株式会社竹中土木大阪本店の委託を受け、大阪府教育庁、松原市教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。
3．受託契約名、受託期間、調査及び整理体制は以下の通りである。

受託契約名：松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡（Ｃ２－４－２）発掘調査
受託期間：平成 27 年 7 月 21 日～平成 29 年 7 月 31 日
現地調査：平成 27 年 8 月 1 日～平成 28 年 5 月 16 日、平成 28 年 10 月 17 日～平成 28 年 12 月 16 日
整理期間：平成 28 年 5 月 17 日～平成 28 年 10 月 31 日、平成 28 年 12 月 17 日～平成 29 年 3 月 31 日
調査体制：〔平成 27（2015）年度〕
松原市教育委員会事務局　教育総務部　文化財課
課長　芝田和也、主幹兼係長　足立俊彦、係員　大矢祐司
公益財団法人大阪府文化財センター
事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、副主査　川瀬貴子
〔平成 28（2016）年度〕
松原市教育委員会事務局　教育総務部　文化財課
課長　芝田和也、係長　東　克則、係員　大矢祐司
公益財団法人大阪府文化財センター
事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、
調査課長補佐　三好孝一、副主査　川瀬貴子
〔平成 29（2017）年度〕
松原市教育委員会事務局　教育総務部　文化財課
課長　芝田和也、係長　大矢祐司、係員　樫木規秀
公益財団法人大阪府文化財センター
事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、調査課長　岡戸哲紀、
調査課長補佐　三好孝一、副主査　川瀬貴子

4．遺構写真撮影は調査担当者が、遺物写真撮影は南部調査事務所写真室が行った。
5．本書の作成は、第１・２章の執筆の一部を芝田、大矢が、それ以外の執筆・編集を川瀬が担当した。
6．本書に関わる池内遺跡についての写真・実測図などの記録類、出土遺物は松原市教育委員会において保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。使用単位はｍである。
2．座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はｍである。
3．全体図及び遺構実測図の方位はすべて平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4．現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5．土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。記号、土色名、土質名の順に記述している。
6．遺構名は、検出順の通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：１土坑）をつけて表示している。
　個々の遺構（柱穴、溝など）を組み合わせて性格を把握できる遺構については、それとは別個に性格を表す名称と番号で構成される遺構名を付与した（例：掘立柱建物１）。
7．本書では、調査区平面図は 250 分の１・300 分の１、遺構平・断面図は 40 分の１、遺構断面図は 20 分の１を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8．遺物実測図の縮尺は４分の１を基本として掲載するが、一部のものに関しては、石器を３分の２にした様に縮尺を変更して掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文、挿図、写真図版ともに一致する。

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言
凡　　例
目　　次
第１章　調査にあたって…… 1
　第１節　調査の経緯と経過…… 1
　第２節　調査・整理の方法…… 6
第２章　遺跡の位置と環境…… 12
　第１節　地理的・歴史的環境…… 12
第３章　基本層序…… 17
　第１節　基本層序…… 17
第４章　調査成果…… 25
　第１節　遺構…… 25
　（１）東部域 …… 25
　（２）中央域東半北部 …… 46
　（３）中央域東半南部 …… 73
　（４）中央域西半 …… 102
　（５）西部域 …… 123
　第２節　遺物…… 139
　（１）東部域 …… 139
　（２）中央域東半北部 …… 145
　（３）中央域東半南部 …… 157
　（４）中央域西半 …… 175
　（５）西部域 …… 186
第５章　総括…… 190
　第１節　遺構の変遷…… 190
　（１）弥生時代 …… 190
　（２）古墳時代 …… 193
　（３）古代 …… 194
　第２節　古代の遺構…… 198
　（１）掘立柱建物、轍、大溝 …… 198
写真図版
抄　　録
奥　　付

挿　図　目　次

図１　遺跡位置図 …… 1
図２　調査区位置図…… 3
図３　調査区配置図
（『池内遺跡３』の図７に加筆）…… 4
図４　地区割図（１）…… 6
図５　地区割図（２）…… 9
図６　周辺遺跡図…… 13
図７　基本層序模式図…… 19
図８　東壁・南壁断面図……21・22
図９　東部域（Ⅰ－ａ区東半、Ⅰ－ｂ１区、
Ⅰ－ｃ２区）平面図 ……23・24
図 10　Ⅰ－ａ区掘立柱建物１平・断面図 …… 26
図 11　Ⅰ－ａ区 S0107・S0137・S0142・
S0169・S0301 平・断面図…… 28
図 12　Ⅰ－ａ区東半遺構断面図 …… 30
図 13　Ⅰ－ｂ１区遺構断面図 …… 33
図 14　Ⅰ－ｂ１区 S0337 平・断面図…… 35
図 15　Ⅰ－ｃ２区 S0825 平・断面図…… 36
図 16　Ⅰ－ｃ２区 S0835 平・断面図…… 37
図 17　Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区 S0325
平・断面図…… 38
図 18　Ⅰ－ｃ２区遺構断面図（１）…… 39
図 19　Ⅰ－ｃ２区遺構断面図（２）…… 42
図 20　中央域東半北部（Ⅰ－ａ区西半、
Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区）平面図 ……47・48
図 21　Ⅰ－ｄ１区掘立柱建物２平・断面図 …… 49
図 22　Ⅰ－ｄ１区掘立柱建物３断面図 …… 50
図 23　Ⅰ－ａ区掘立柱建物４平・断面図 …… 51
図 24　Ⅰ－ａ区 S0187・S0190・S0199
平・断面図…… 52
図 25　Ⅰ－ａ区西半遺構断面図 …… 53
図 26　Ⅰ－ａ区 S0202・S0205 平・断面図 …… 55
図 27　Ⅰ－ｄ２区掘立柱建物８平・断面図 …… 57
図 28　Ⅰ－ｄ２区 S0772
平面図・土器出土状況図…… 59
図 29　Ⅰ－ｄ２区 S0772 断面図…… 60
図 30　Ⅰ－ｄ２区 S0977 平・断面図…… 61
図 31　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（１）…… 63
図 32　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（２）…… 67
図 33　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（３）…… 69
図 34　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（４）…… 72
図 35　中央域東半南部（Ⅰ－ｂ２区）平面図 …… 74
図 36　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物５平・断面図 …… 75
図 37　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物６平・断面図 …… 76
図 38　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物７平・断面図 …… 77
図 39　Ⅰ－ｂ２区 S0376 平・断面図…… 78
図 40　Ⅰ－ｂ２区 S0357 平・断面図…… 80
図 41　Ⅰ－ｂ２区 S0358 平・断面図…… 81
図 42　Ⅰ－ｂ２区 S0540 平・断面図…… 82
図 43　Ⅰ－ｂ２区 S0515・S0562 平・断面図 …… 83
図 44　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（１）…… 84
図 45　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（２）…… 86
図 46　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（３）…… 87
図 47　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（１）…… 89
図 48　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（２）…… 93
図 49　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（３）…… 96
図 50　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（４）…… 100
図 51　中央域西半（Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区）
平面図…… 103・104
図 52　Ⅰ－ｃ区掘立柱建物９平・断面図 …… 106
図 53　Ⅰ－ｃ区掘立柱建物 10 平・断面図 …… 107
図 54　Ⅰ－ｃ区掘立柱建物 11 平・断面図 …… 108
図 55　Ⅰ－ｃ区 S0772、Ⅰ－ｅ区
S0772・S1241 断面図…… 110
図 56　Ⅰ－ｃ区 S0673 平・断面図…… 111
図 57　Ⅰ－ｃ区遺構断面図（１）…… 113
図 58　Ⅰ－ｃ区遺構断面図（２）…… 116
図 59　Ⅰ－ｃ区遺構断面図（３）…… 119
図 60　Ⅰ－ｅ区遺構断面図 …… 122
図 61　西部域（Ⅱ－ａ区）平面図 …… 125・126

図 62　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 12・柵列 1
平・断面図…… 127
図 63　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 13 平・断面図 …… 128
図 64　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 14 平・断面図 …… 129
図 65　Ⅱ－ａ区遺構断面図（1）…… 132
図 66　Ⅱ－ａ区遺構断面図（2）…… 135
図 67　Ⅱ－ａ区 S1370 断面図…… 137
図 68　Ⅰ－ａ区東半遺構出土土器実測図 …… 140
図 69　Ⅰ－ｂ１区遺構・第２層
出土遺物実測図…… 142
図 70　Ⅰ－ｃ２区遺構・第２層
出土遺物実測図…… 144
図 71　Ⅰ－ｄ１区遺構出土土器実測図 …… 146
図 72　Ⅰ－ａ区西半遺構出土土器実測図 …… 147
図 73　Ⅰ－ａ区第２層出土遺物実測図 …… 150
図 74　Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｄ２区 S0772
出土土器実測図…… 151
図 75　Ⅰ－ｄ２区遺構出土遺物実測図 …… 154
図 76　Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区第２層
出土遺物実測図…… 156
図 77　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（1）…… 158
図 78　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（2）…… 162
図 79　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（3）…… 164
図 80　Ⅰ－ｂ２区遺構出土遺物実測図（4）…… 168
図 81　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（5）…… 171
図 82　Ⅰ－ｂ２区遺構出土石器実測図 …… 174
図 83　Ⅰ－ｂ２区第２層出土遺物実測図 …… 175
図 84　Ⅰ－ｃ区遺構出土土器実測図（1）…… 177
図 85　Ⅰ－ｃ区遺構出土土器実測図（2）…… 179
図 86　Ⅰ－ｃ区遺構・第２層、Ⅰ－ｅ区遺構・
第２層出土遺物実測図…… 184
図 87　Ⅱ－ａ区遺構・第２層
出土遺物実測図…… 187
図 88　弥生時代遺構の分布状況 …… 192
図 89　古墳時代遺構の分布状況 …… 193
図 90　古代遺構の分布状況 …… 195
図 91　古墳時代主要遺構出土土器（1）…… 196
図 92　古墳時代主要遺構出土土器（2）…… 197
図 93　全体平面図 …… 199・200

写　真　目　次

写真１　調査地遠景…… 2
写真２　機械掘削…… 10
写真３　遺構実測（平板実測）…… 10
写真４　写真撮影…… 10
写真５　遺構実測…… 10
写真６　洗浄…… 10
写真７　注記…… 10
写真８　遺物実測…… 10
写真９　デジタルトレース…… 10
写真 10　編集 …… 11
写真 11　収納 …… 11
写真 12　立会風景 …… 11
写真 13　現地説明会風景 …… 11
写真 14　天美北小学校見学風景 …… 11
写真 15　天美北小学校現場見学風景 …… 11

表　目　次

表１　池内遺跡調査一覧…… 5
表２　掘立柱建物一覧…… 45
表３　池内遺跡主要遺構…… 191

写　真　図　版　目　次

巻頭図版１
　１．池内遺跡（Ｃ２－４－２）遺構面全景
巻頭図版２
　１．Ｉ－ｂ２区全景（南東から）
　２．Ｉ－ｃ区全景（北から）
巻頭図版３
　１．弥生時代土器集合（S0540 出土）
　２．古墳時代土器集合（S0376・S0562・S0509・S0515・S0673 出土）
巻頭図版４
　１．古代土器集合（S0772 出土）
　２．古墳時代土器集合（S0205・S0480 出土）

写真図版１
　１．池内遺跡（Ｃ２－４－２）遺構面全景
写真図版２
　１．調査区遠景（南西から）
　２．調査区遠景（東から）
写真図版３
　１．Ｉ－ａ区西半全景（北から）
　２．Ｉ－ａ区西半全景（北東から）
写真図版４
　１．Ｉ－ａ区東半全景（北西から）
　２．Ｉ－ａ区東半全景（北から）
写真図版５
　１．Ｉ－ａ区東半近景（南西から）
　２．掘立柱建物１（北西から）
　３．Ｉ－ａ区東半溝群（南から）
写真図版６
　１．土坑 S0205 土器出土状況（北東から）
　２．土坑 S0199 土器出土状況（西から）
　３．土坑 S0202 土器出土状況（北から）
写真図版７
　１．土坑 S0144 断面（東から）
　２．土坑 S0199 断面（北から）
　３．掘立柱建物１柱穴 S0092 断面（北西から）
　４．土坑 S0207 断面（南から）
　５．柱穴 S0190 断面（南から）
　６．柱穴 S0301 土器出土状況（南から）
　７．柱穴 S0190 木製品出土状況（南から）
　８．井戸 S0142（南西から）
写真図版８
　１．Ｉ－ｂ１区全景（西から）
　２．Ｉ－ｂ１区南壁断面（北から）
　３．土坑状変形 S0321 断面（南東から）
　４．土坑 S0328 断面（南から）
　５．井戸 S0337 土器出土状況（北から）
写真図版９
　１．Ｉ－ｃ２区遺構検出状況（南東から）
　２．Ｉ－ｃ２区全景（南東から）
写真図版 10
　１．土坑 S0825 検出状況（北西から）
　２．土坑 S0825（北西から）
　３．Ｉ－ｃ２区深掘トレンチ断面（北東から）
写真図版 11
　１．井戸 S0830 断面（北西から）
　２．土坑 S0841 断面（東から）

３．土坑 S0325 土器出土状況（西から）

写真図版 12

１．Ｉ－ｂ２区全景（南東から）

２．Ｉ－ｂ２区全景（南から）

写真図版 13

１．Ｉ－ｂ２区全景（東から）

２．Ｉ－ｂ２区全景（西から）

写真図版 14

１．掘立柱建物５（北西から）

２．Ｉ－ｂ２区南部中央溝群近景（南から）

３．Ｉ－ｂ２区北東部近景（北西から）

写真図版 15

１．土坑 S0540 土器出土状況（南西から）

２．土坑 S0515 断面（東から）

３．土坑 S0515 土器出土状況（北東から）

写真図版 16

１．井戸 S0402 土器出土状況（東から）

２．土坑 S0562 土器出土状況（東から）

３．土坑 S0480 土器出土状況（東から）

写真図版 17

１．土坑 S0539 土器出土状況（南東から）

２．井戸 S0376 土器出土状況（西から）

３．土坑 S0358 断面（南から）

写真図版 18

１．土坑 S0467、土坑 S0468 断面（南から）

２．土坑 S0466 断面（南から）

３．土坑 S0357 断面（南から）

４．土坑 S0363 断面（南から）

５．掘立柱建物７柱穴 S0373 断面（南から）

６．柱穴 S0368、柱穴 S0369 断面（南から）

７．土坑 S0560 断面（南から）

８．土坑 S0565 断面（東から）

写真図版 19

１．Ｉ－ｄ１区遺構検出状況（東から）

２．Ｉ－ｄ１区全景（北西から）

写真図版 20

１．掘立柱建物２柱穴 S0891 断面（東から）

２．掘立柱建物２柱穴 S0892 断面（東から）

３．掘立柱建物２柱穴 S0893 断面（東から）

４．掘立柱建物２柱穴 S0901 断面（北から）

５．掘立柱建物２柱穴 S0900 断面（北東から）

６．掘立柱建物２柱穴 S0897 断面（南西から）

７．掘立柱建物２柱穴 S0898 断面（西から）

８．掘立柱建物３柱穴 S0886 断面（南から）

写真図版 21

１．Ｉ－ｄ２区全景（南東から）

２．Ｉ－ｄ２区全景（南から）

写真図版 22

１．Ｉ－ｄ２区全景（北東から）

２．Ｉ－ｄ２区全景（北から）

写真図版 23

１．溝 S0772（南西から）

２．溝 S0772 断面（北から）

３．溝 S0772 土器出土状況（南から）

写真図版 24

１．土坑 S0977 断面（南から）

２．土坑 S0977 土器出土状況（南から）

３．土坑 S1134 断面（南から）

写真図版 25

１．土坑 S1037 断面（西から）

２．井戸 S0986 断面（北から）

３．土坑 S1163 断面（南西から）

写真図版 26

１．Ｉ－ｃ区南半全景（北東から）

２．Ｉ－ｃ区北半全景（南東から）

写真図版 27

１．Ｉ－ｃ区轍検出状況（南東から）

２．Ｉ－ｃ区溝 S0772 検出状況（南西から）

写真図版 28

１．Ｉ－ｃ区北半全景（北から）

２．Ｉ－ｃ区北側近景（南東から）

写真図版 29

１．掘立柱建物 11（南西から）

２．掘立柱建物９（南東から）

写真図版 30

１．掘立柱建物９柱穴 S0648 断面（北から）

２．掘立柱建物９柱穴 S0658、柱穴 S0659
断面（南から）
３．掘立柱建物 11 柱穴 S0690 断面（北東から）
４．掘立柱建物 11 柱穴 S0691 断面（南から）
５．掘立柱建物 11 柱穴 S0693 断面（東から）
６．掘立柱建物 11 柱穴 S0694 断面（北から）
７．柱穴 S0695 断面（北から）
８．轍 S0743 断面（南東から）

写真図版 31
１．溝 S0772（北東から）
２．溝 S0772（南西から）
３．溝 S0772 断面（南西から）

写真図版 32
１．土坑 S0674 断面（南から）
２．土坑 S0731 断面（西から）
３．土坑 S0786 断面（北から）

写真図版 33
１．土坑 S0673 断面（南西から）
２．土坑 S0685 断面（東から）
３．土坑 S0685 土器出土状況（北東から）

写真図版 34
１．Ⅰ－ｅ区全景（南東から）
２．Ⅰ－ｅ区全景（北から）

写真図版 35
１．土坑 S1169 断面（西から）
２．土坑 S1174 断面（東から）
３．溝 S1235 断面（南から）

写真図版 36
１．Ⅱ－ａ区全景（北から）
２．Ⅱ－ａ区全景（南から）

写真図版 37
１．掘立柱建物 12 検出状況（北西から）
２．掘立柱建物 12（北西から）

写真図版 38
１．溝 S1370（東から）
２．土坑 S1340 断面（西から）
３．掘立柱建物 13、掘立柱建物 14（南東から）

写真図版 39
１．掘立柱建物 12 柱穴 S1264、柱穴 S1265
断面（北から）
２．掘立柱建物 12 柱穴 S1267 断面（南から）
３．掘立柱建物 12 柱穴 S1272、柱穴 S1273、
柱穴 S1274 断面（南から）
４．掘立柱建物 12 柱穴 S1277 断面（北から）
５．掘立柱建物 12 柱穴 S1281 断面（北から）
６．掘立柱建物 12 柱穴 S1279 断面（南から）
７．溝 S1311、溝 S1312、溝 S1313 断面
（南東から）
８．土坑 S1339 断面（南から）

写真図版 40　Ⅰ－ａ区土器
１、３．S0205
２．S0202
４．S0199

写真図版 41　Ⅰ－ａ区土器
１．S0301
２．S0144
３．S0169
４．S0192
５．S0091、S0092、S0100、S0107、S0167 他

写真図版 42　Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区土器
１．S0337
２．S0321
３．S0841
４．S0325
５．S0837
６．S0825
７．１－ｃ２区第２層

写真図版 43　Ⅰ－ｂ２区土器
１、２．S0357
３～５．S0358
６．S0359、S0360
８．S0363
７、９、10．S0402

写真図版 44　Ⅰ－ｂ２区土器
１～７．S0376

写真図版 45　Ⅰ－ｂ２区土器
　１．S0376 土器集合
　２．S0376 土器俯瞰
写真図版 46　Ⅰ－ｂ２区土器
　１．S0480
　２．S0467
　３．S0470
　４～６．S0468
写真図版 47　Ⅰ－ｂ２区土器
　１～４．S0406
　５．S0429
　６．S0414
　７～９．S0425
　10．S0422、S0466
写真図版 48　Ⅰ－ｂ２区土器
　１～３．S0540
　４．Ⅰ－ｂ２区第２層
写真図版 49　Ⅰ－ｂ２区土器
　１、２．S0539
　３～５．S0562
　６．S0534
　７．S0542
　８、９．S0515
　10．S0509
写真図版 50　Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区土器
　１．S0894、S0911
　２～４．S0977
　5．S0917、S1094、S0932、S0941、S1070、S1113
写真図版 51　Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｄ２区土器
　１～９．S0772
写真図版 52　Ⅰ－ｃ区土器
　１～８．S0673
写真図版 53　Ⅰ－ｃ区土器
　１、２．S0601
　３～５．S0608
　６．S0601、S0602、S0608
写真図版 54　Ⅰ－ｃ区土器
　１、２．S0631
　３．S0687
　４．S0637
　５．S0786
　６．S0683
　７．S0685
　８．S0670、S0638、S0762
写真図版 55　Ⅰ－ａ区、Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区土器
　１．Ⅰ－ａ区第２層
　２．Ⅰ－ｃ区第２層、Ⅰ－ｅ区 S1169、S1174、第２層
写真図版 56　石器
　１．石鏃
　２．石核
写真図版 57　石製品・瓦
　１．滑石製紡錘車
　２．平瓦
　３．滑石製双孔円盤、臼玉
　４．軒平瓦
　５．砥石
写真図版 58　土製品
　１．土製勾玉、土製円盤、土錘
　２．蛸壺
写真図版 59　Ⅱ－ａ区土器・瓦
　１．S1370
　２．掘立柱建物 12 他
　　（S1262、S1263、S1277、S1280）
写真図版 60　Ⅱ－ａ区土器
　１．S1369、S1381、S1390
　２．Ⅱ－ａ区第２層

第１章　調査にあたって

第１節　調査の経緯と経過

（１）調査の経緯

本書は、松原市天美東土地区画整理事業に伴う、池内遺跡の発掘調査報告書である。

池内遺跡は、松原市天美東三～五丁目、天美北一・六丁目に所在する遺跡である（図１）。東を河内台地、西を上町台地に挟まれた沖積低地に立地する。北側には大和川が位置する（写真１）。

遺跡範囲は東西最大長約 900 m、南北最大長約 650 mである。主に東西に長い形をとり、西端は近鉄南大阪線付近、東端は今井戸川までとする。今井戸川を挟んで東には三宅西遺跡が隣接する（図２）。南に突き出して長い部分は、都市計画道路大阪河内長野線にあたる。

池内遺跡は周知の遺跡であったが、平成 15 年までは大規模な調査は行われていなかった。

平成 15・16 年度に、都市計画道路大和川線外の建設工事や府道堺松原線整備工事に先立ち、大阪府富田林土木事務所と阪神高速道路公団の依頼を受け、財団法人大阪府文化財センター（現在は公益財団法人大阪府文化財センター、以下当センターと呼称）が確認調査を行った。この確認調査で遺構・遺物が広範囲で確認されたため、遺跡範囲は路線内すべてとなり、大幅に拡大された。

確認調査の結果を受けて、平成 17 ～ 22 年度に当センターが都市計画道路大和川線外の建設に伴う発掘調査を実施した。東西長約 900 m、南北幅 23 m以上、総面積約 26,000 ㎡という大規模な調査である。

その結果、弥生時代前期の水田跡や環濠集落や平安時代後期の掘立柱建物、井戸、土壙墓、区画溝などから構成される屋敷地、集落群を確認することとなった（『池内遺跡』2010）。

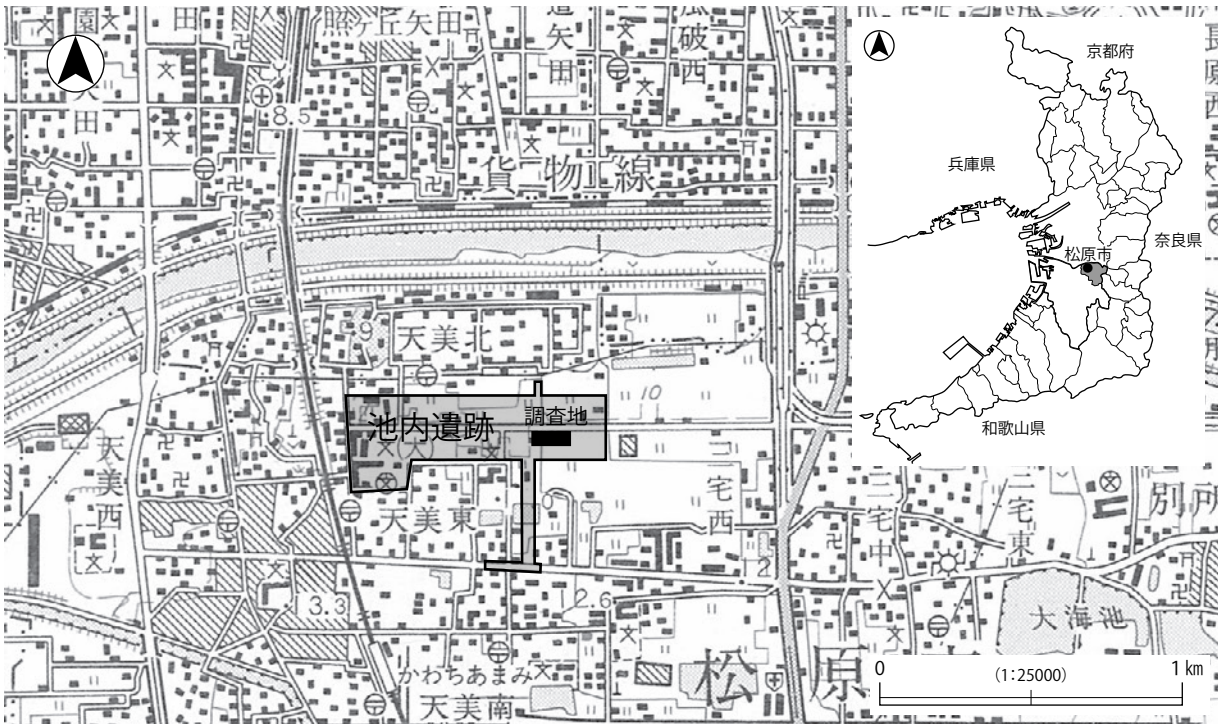


図１　遺跡位置図

その後、この大和川線と南に位置する一般府道大堀堺線を結ぶために、両道間をつなぐ南北方向の府道、都市計画道路大阪河内長野線が建設されることとなった。確認調査によって、池内遺跡の範囲はさらに南に拡大されることとなった。

そこで、当センターによって平成 21 ～ 23 年にわたって、発掘調査が実施された。その規模は、南北約 460 m、東西幅 30 m超、総面積約 11,560 ㎡にも及ぶ。この調査では大阪河内長野線の南端に接する、大堀堺線の拡幅工事も含めて実施した。

この調査でも古代から中世の掘立柱建物、溝、土坑などからなる集落や耕作溝、条里坪境に合致する溝、堤などを確認した (『池内遺跡２』2012)。

また、平成 23 年度にも当センターが、都市計画道路大阪河内長野線外（松原市道（仮称）天美北 105 号線）の建設に伴って、大和川線のさらに北側の部分を、南北方向に発掘調査を行っている。

ここでも古代から中世の掘立柱建物、溝などからなる集落が確認された（『池内遺跡３』2012)。

このように、池内遺跡は遺跡範囲の主に北側で遺構が密に確認されている。中でも北西部では弥生時代の居住域・生産域が、北側中央部では古代から中世の居住域が発見されている。これまでの調査区と調査については図３、表１にまとめた。

大和川線を始めとする幹線道路建設に伴い、沿道の天美地区の開発への機運が高まった。

松原市では、幹線道路沿道のまちづくりの一環として、都市計画道路堺松原線と大阪河内長野線が交差する天美東４交差点を中心とした天美地区のまちづくりに地権者と協働で取り組んでいる。

上記の天美地区については、交差点を中心として４分割し、北東をＡ地区（一部Ｃ地区）、南東をＢ地区、北西をＣ地区、南西をＤ地区と名付けた。

南東部にあたる天美Ｂ地区については、市と地権者の間で土地区画整理事業によるまちづくりの検討が行われる中で、（株）イトーヨーカ堂が出店を表明し、平成 26 年２月に松原市天美東土地区画整理

写真１　調査地遠景

事業準備組合が設立された。さらに、平成 27 年 6 月には松原市天美東土地区画整理組合が設立され、業務代行者として（株）竹中土木大阪本店（以下、竹中土木と呼称）が決定された。

天美東土地区画整理事業は総面積が約 9.9ha であり、現行の用水路の付け替えや調整池の設置及び道路整備など、(株)イトーヨーカ堂が建設する大型商業施設等の用地に必要な基盤整備を行うものである。事業期間は平成 27（2015）年度から平成 31（2019）年度までを予定している。

これらの建設に先立って、この区域が池内遺跡の包蔵地にあたることから、平成 26 年度に松原市教育委員会が 15 か所のトレンチを設定して確認調査を行った。確認調査結果と隣接する大和川線、大阪河内長野線の調査成果も参考にした結果、天美東 B 地区の北端から約 100 m、東西約 150 mの面積にして約 15,000 ㎡を文化財調査範囲に決定した。

松原市教育委員会は、竹中土木からの依頼を受けて発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会に協力を依頼した。さらに、大阪府教育委員会からの協力依頼が当センターにあったため、松原市教育委員会、竹中土木、当センター 3 者が平成 27 年 7 月 16 日付で協定書を取り交わした。

調査方式としては、松原市教育委員会と当センターが共同調査の形で実施することとなった。実際の発掘調査・整理事業は当センターが行い、調査終了後に出土遺物、図面、写真類は松原市教育委員会に返却し、保管することとなっている。

実施期間は発掘調査、整理事業をあわせて平成 27 年 8 月 1 日から平成 29 年 7 月 31 日である。

（2）調査の経過

今回の調査対象箇所は、北は都市計画道路大和川線、西は大阪河内長野線、東と南は市道に接し、調査地内には 2 本の南北用水路が流れる (図 2、写真 1)。東西約 180 m、南北約 100 mである。

協定締結以降、現地調査に入るまでに松原市教育委員会、竹中土木、その協力業者である（株）島田

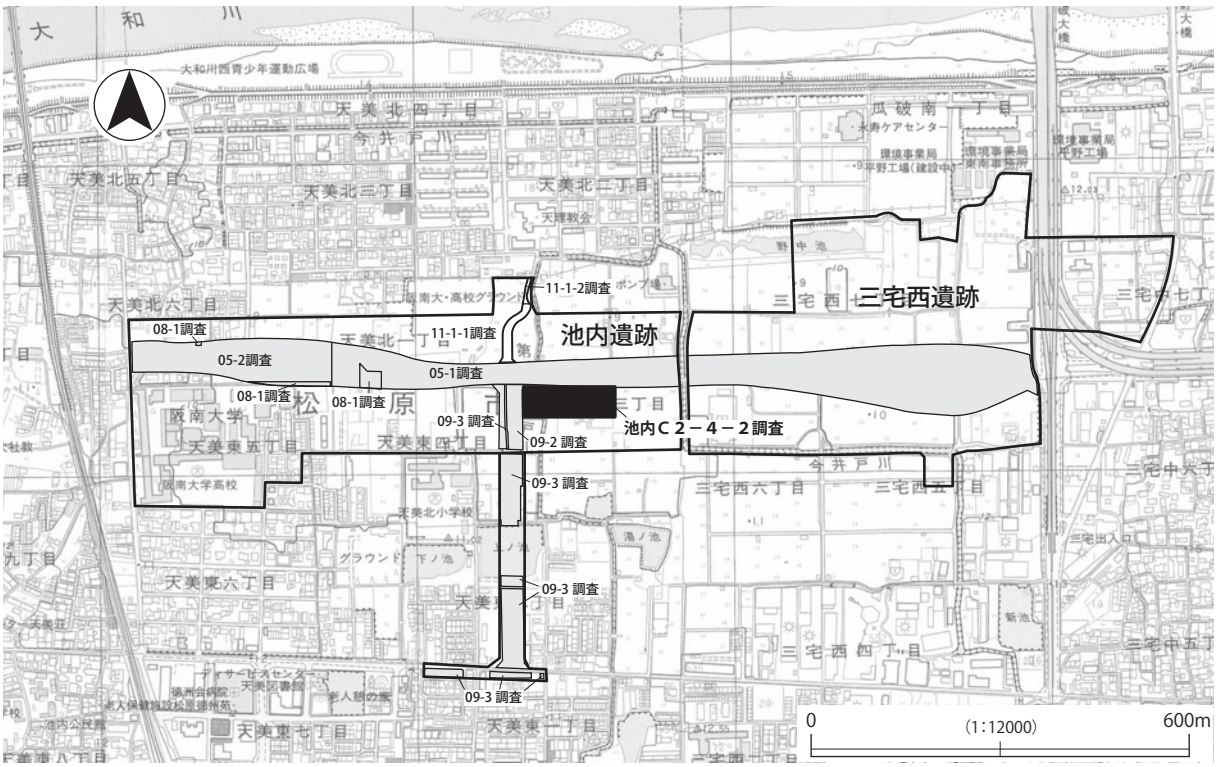


図 2　調査区位置図

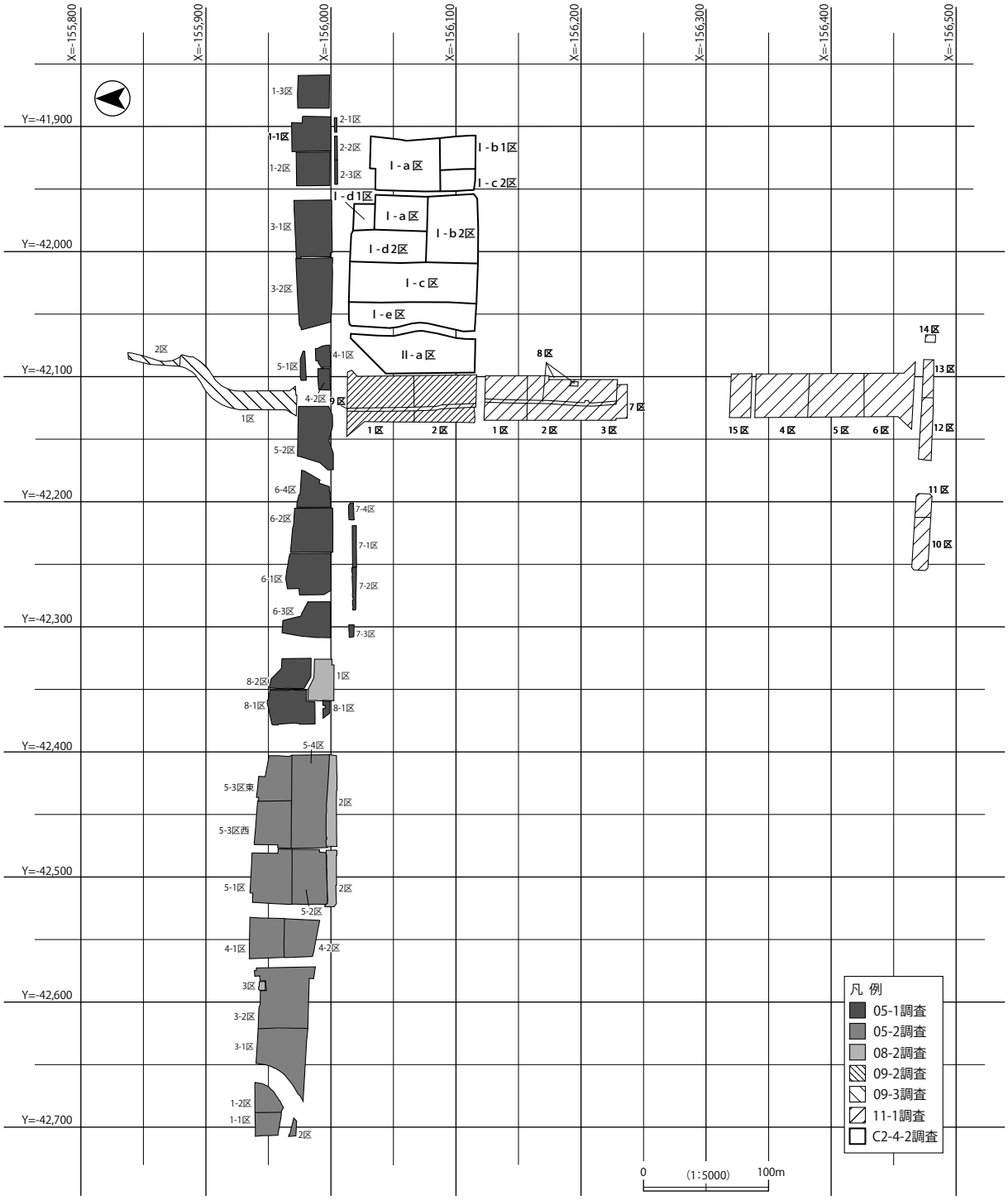


図３　調査区配置図（『池内遺跡３』の図７に加筆）

組、当センターで調査方法などの協議や確認を行った。

発掘調査は松原市教育委員会との共同調査の形式をとり、文化財調査の諸手続きは松原市教育委員会が行うこととした。立会は調査区ごとに松原市教育委員会が行い、松原市教育委員会が調査完了したと判断すると竹中土木に引き渡すこととした。

整理作業終了後、調査成果一式は松原市教育委員会に引き渡すので、整理や収納の詳細は松原市教育委員会の調査方法に沿うようにすること、調査期間中１回は現地説明会もしくは現地公開を実施し、調査成果を近隣住民に公開することを取り決めた。また、測量方法はヘリコプターを使用した航空測量を

用い、これと同時に高所作業車もしくは足場からの写真撮影を行うこと、などを取り決めた。

工程は、用地買収等の関係で一度に実施できず、調査地は大きくは２期に分けて発掘調査を実施することとなった。

１期目は平成 27 年８月１日から平成 28 年５月 16 日まで発掘調査を行い、その後南部調査事務所で整理事業を行った。１期目の調査地も面積が広いことや用地買収の関係上一度に調査できず、調査区を７つに分割し、これを５回に分けて発掘調査を行った（Ⅰ－ａ～ｅ区）。

各調査区では機械掘削、人力（包含層）掘削、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、図化作業などを順次行った。遺構面は基本的には地山直上の一面を調査し、遺構面の調査終了時には、ヘリコプターによる航空測量や高所作業車、足場を使用した写真撮影を５回行った。

また、Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｃ２区の調査時には、これまでの調査成果を近隣住民の方に公開するのを主目的として、平成28年１月16日（土）に現地説明会を実施した。天候にも恵まれて松原市内の方を中心に、約 180 名の参加を得た（写真 13）。

現地説明会後の１月 18 日（月）には、天美北小学校３・４・５年生と引率の先生も含め、約 140 名が現場見学に訪れた。生憎の雨だったため現場に入ることはできなかったが、出土遺物などの説明から地元の歴史を学んでもらった（写真 14）。

２期目は西側用水路より西の大阪河内長野線に接する箇所（Ⅱ－ａ区）で、平成 28 年 10 月 17 日から平成 28 年 12 月 16 日まで発掘調査を行った。１期目同様に遺構掘削や図化、写真撮影作業と最終遺構面での航空測量を実施した。

また、12 月１日（木）に天美北小学校の２・３年生の現場見学を受け入れ、発掘作業の見学を行った。児童、先生あわせて 110 名の参加を得た（写真 15）。

発掘調査終了後、２期の調査成果も盛り込んで整理作業を引き続き行い、報告書を平成 29 年７月に刊行して、すべての作業を完了した。

発掘調査や整理作業の方法の詳細は次節に、調査成果は第３章以降にまとめている。

表１　池内遺跡調査一覧

調査名	調査期間	所在地	調査面積（㎡）	調査組織	調査原因	主な遺構	主な遺物	掲載文献
池内遺跡05－１・05－２・07－１・08－１・09－１	2005.09～2009.06	天美北１・６丁目、東３・５丁目	26,005	センター	都市計画道路大和川線外建設（阪神高速道路大和川線）、堺松原線整備	水田畦畔、方形周溝墓、掘立柱建物、土坑墓、溝、土坑、ピット、井戸、落ち込み、柱列、堤、轍、流路	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦質土器、陶磁器、瓦、石器、石製品、土製品、木製品、銭貨	池内遺跡
池内遺跡09－２・09－３	2009.06～2011.08	天美東１・２・４丁目	11,558	センター	都市計画道路大阪河内長野線建設、大堀堺線拡幅	掘立柱建物、溝、土坑、ピット、井戸、落ち込み、柱列、堤、轍、流路	弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、瓦質土器、陶磁器、瓦器、石器、石製品	池内遺跡２
池内遺跡11－１	2011.10～2012.01	天美北地内	1,629	センター	都市計画道路大阪河内長野線外（松原市道（仮称）天美北105号線）建設	掘立柱建物、溝、土坑、ピット、落ち込み、畠、轍、流路	土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、灰釉陶器、輸入磁器、瓦、石器	池内遺跡３
池内遺跡Ｃ２－４－２	2015.08～2016.12	天美東１・２・４丁目	16,365	松原市教委・センター	松原市天美東土地区画整理事業	掘立柱建物、溝、土坑、ピット、井戸、落ち込み、柱列、轍	弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器陶磁器、瓦、石器、石製品、土製品	本報告書

第２節　調査・整理の方法

松原市教育委員会との共同調査ということもあり、発掘調査及び整理作業は、調査着手前に両者で協議し、検討を行った。

松原市教育委員会には『発掘調査取扱い基準』、当センターには『遺跡調査基本マニュアル』2010という発掘調査の統一や標準化をはかるマニュアルがあり、これをもとに発掘調査はセンターの方式に準じて、調査成果として残るものの表記や保管収納に関しては、保管先である松原市に近い方式をとることとした。

（１）調査の方法

調査区割　遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第Ⅵ系（測地成果 2000）を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小４段階の区画を設定した（図４）。

第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 X= － 192,000 m、Y= － 88,000 mを基準とし、南北方向に６㎞、東西方向に８㎞で府域を 62 区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へＡ～Ｏ、東へ０～８とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に 1.5 ㎞、東西方向に 2.0 ㎞でそれぞれ４分割し、計 16 区画を設定する。表示は南西端を１とし、東へ４まで、あとは西端を５、９、13、北東端を 16 と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100 m単位で、南北 15、東西 20 に区画する。表示は北東端を基点に、

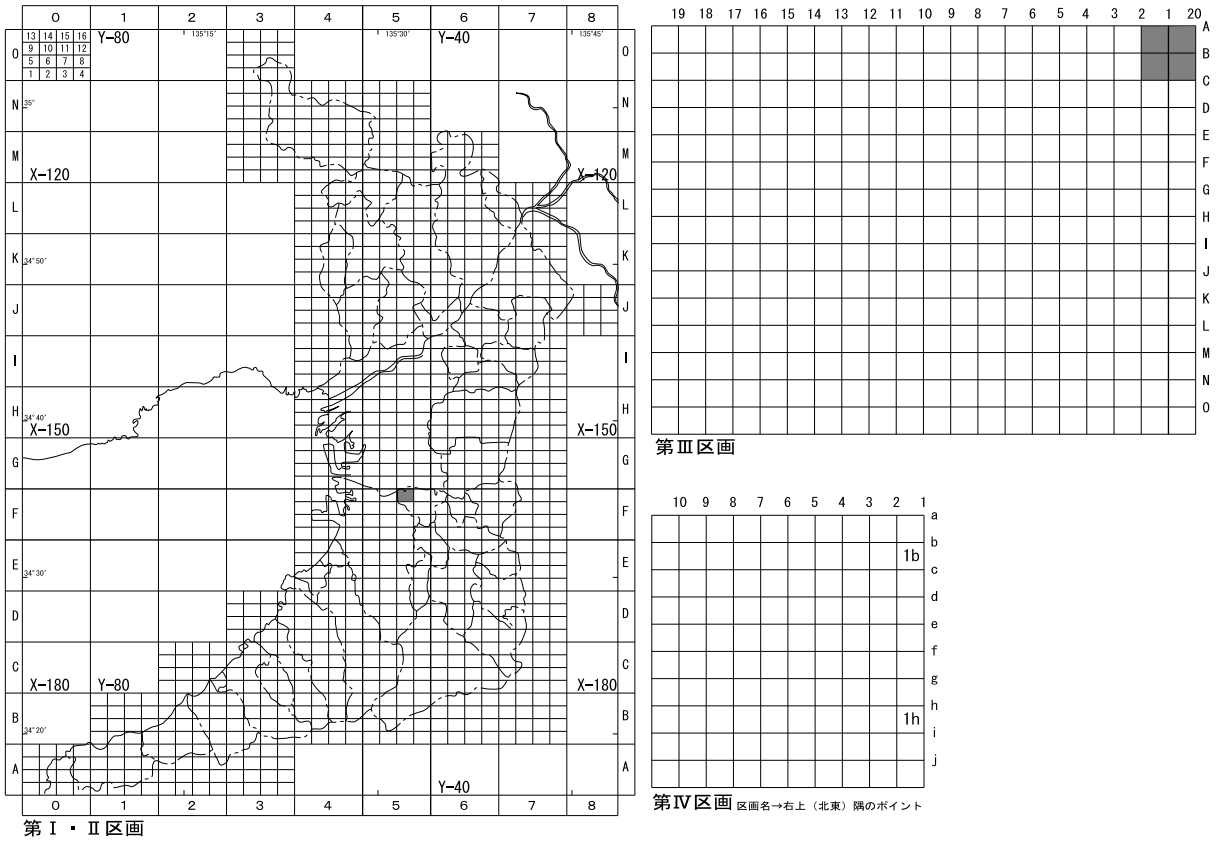


図４　地区割図（１）

南へＡ～Ｏ、西へ１～20とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を10ｍ単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へａ～ｊ、西へ１～10とする。

今回の調査地は第Ⅰ区画がＦ５、第Ⅱ区画が15、16、第Ⅲ区画が１Ａ、１Ｂ、20Ａ、20Ｂにあたる。第Ⅳ区画は１から10、ａからｊのすべてにまたがる。出土遺物を取り上げる際には、第Ⅰ区画から第Ⅳ区画までをラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。

調査名・調査区の設定・呼称　当センターでは、前述のマニュアルに従って遺跡名に調査年度を加えた調査名称を使用している（池内遺跡15－１など）。

しかし、松原市では「松原市道路台帳地図」における図画割を基準とした記号で表記しているため、当センターで使用している区画割とは別の区画割法をとる。松原市域にあたるX=－155.4㎞、Y=－44.0㎞～X=－160.8㎞、Y=－37.6㎞の範囲を東西800ｍ、南北600ｍの区画で東西に８つ、南北に９つに分け、西から東へＡ～Ｈ、北から南へ１～９とする（大地区）。１つの大地区はさらに東西400ｍ、南北300ｍの区画で分けられる（小区画）。

つまり、１つの大地区は４つの小地区に細分され、北西から南東に１から４の番号がふられる。この地区の下に、調査業務発生順に業務番号を付与しており、大地区番号－小区画番号－業務番号で調査名は表される。今回の調査地の所在する地域をこの地区名にあてはめると、Ｃ２－４－２となる。

今回は、返却後の保管方法などを考慮し、遺跡名に松原市の調査名を併記する形式、**池内遺跡（Ｃ２－４－２）**をとることとした。従って、遺構実測図、写真ラベル、出土遺物ラベルなどすべてこの形式で表記している。

調査区名も基本は松原市での呼称方法に基づいた。

平成27年度に調査を予定していた調査区をⅠ区、平成28年度後半に調査を予定していた調査区をⅡ区とした。その中で、さらに複数の調査箇所に分かれるため、まとまって調査する単位（航空測量の単位）ごとにａからｅの地区名を付与した。（例：Ⅰ－ａ区）。この調査区が隣接しない時、この後にさらに数字を１から順に付与した（例：Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｂ２区）。ただし、３回目の調査については、Ⅰ－ｃ区にⅠ－ｃ２区が突発的に追加されたため、Ⅰ－ｃ１区とⅠ－ｃ２区という調査区名になっていない。整理作業時にⅠ－ｃ区をⅠ－ｃ１区と名称変更することもできたが､あえて調査時のままとした。

本報告での調査区はⅠ－ａ区、Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｂ２区、Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｃ２区、Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区、Ⅰ－ｅ区、Ⅱ－ａ区の９つ存在する（図５）。

遺構名　松原市で使用している遺構名称に従い、アルファベットのＳに続き遺構の検出順に、４桁の１からの通し番号を遺構種別の前に付与した（例：S0001）。調査区をまたぎ連続して同一の遺構になる場合や、明らかに連続する遺構には同一遺構番号を与えた。ただし、同一遺構になるか紛らわしいものは別個の遺構番号を与え、整理作業時にどちらかに統一した。

また、複数調査区を並行して調査していたため、遺構番号が調査区内でも連続しない場合がある。

また、掘立柱建物などは個別の柱穴等に対し調査時は遺構番号を付与したが、整理作業の際に、掘立柱建物１、轍１などの遺構種類を前に、番号を後ろにした遺構番号を別に付与することとした。

掘削方法　盛土、近世～近代期の耕作土層、確認調査坑の撹乱などを重機で掘削した（写真２）。機械掘削深度は0.3～2.0ｍであった。

それ以下を人力によって地層ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。

人力掘削は平均 0.15 m、厚いところでは 0.5 mであった。人力掘削はシャベル等を使用して行い、土砂の排出はベルトコンベアを使用した。遺構の掘削はヘラやスコップを用いて慎重に行った。湧水や雨水はポンプを用いて場外へ排出した。

遺構面と層　近～現代の整地層や盛土は除外して、近世～近代の耕作土を第１層、古代末～中世後半と考えられる遺物を包含する土を第２層とし、遺物を包含しない基盤層（地山）を第３層とした。第１層と第２層の間には、さらに地層が存在し、分層できる箇所もあり、それらを第２－１層、第２－２層などと表現した。

遺構面は第３層上面を第１面とした。実際には、第２層上面で中世後半期以降の鋤溝を検出できるところもあるが、調査区によっては検出し得なかったところもあった。よって、基本的には地山上面のみを遺構面として捉え、調査を行った。

本報告書では地山面のみを第１面として掲載している。

記録作業　遺構面は平板測量で 100 分の１の略平面図を作成し、遺構の把握に努めた（写真３）。必要な場合には、地形測量を行い、高低差など地形の変化を記録した。最終遺構面でヘリコプターによる航空測量を行い、50 分の１の平面図・遺構図、100 分の１の平面図を作成した。

また、個別遺構の平面図･断面図･立面図や出土状況図については、必要に応じて５分の１、10 分の１、20 分の１等で作成した（写真５）。土層観察用の断面に関しては調査区外周の北、南、東の壁面を通して 20 分の１の断面図を作成した。

現場での写真撮影は、６× ７カメラ、35 ㎜一眼レフデジタルカメラを使用し、６× ７カメラについては黒白フィルム、カラーリバーサルフィルムを用いて行った（写真４）。また、写真台帳作成用にコンパクトデジタルカメラを使用して撮影を行った。フィルムカメラについては､ネガと焼き付け写真を、デジタルカメラについては TIFF データを成果品として作成した。

主要な遺構面の全景写真撮影に関しては足場及び高所作業車を用いて行った。

また、特に重要な遺構面に関しては、ヘリコプターによる航空測量を６回行った。垂直写真と斜め写真、50 分の１の平面図と遺構図、100 分の１の縮小平面図等がその成果品である。

立会など　各調査区の調査が終了した時点や、指示を仰ぐ必要がある時などは、松原市教育委員会の立会を受けた（写真 12)。全調査区で計６回行い、完了すると竹中土木に引き渡しを行った。

基礎整理作業　現地調査の合間には遺物の登録、洗浄、注記や遺構実測図、遺構写真の整理などの基礎整理作業を行った（写真６・７）。

（２）整理の方法

平面図や主要遺構については現地で作成した実測図や航空測量図を編集し、遺構挿図を作成した。遺構挿図の合成は adobe 社製 PhotshopCS6 を用いて行い、浄書は IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行った（写真９）。

出土遺物は、接合、復元を行った後、実測作業を実施した（写真８）。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。遺物実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、合成は adobe 社製 PhotshopCS6 を用いて行い、浄書は IllustratorCS6 を用いてデジタルトレースを行った（写真９）。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、フィルム写真のスキャニング作業を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。また、出土遺物については、

報告書に掲載するものを選別して写真撮影を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。

以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施して報告書を完成した（写真 10）。入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

また、編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、挿図や写真図版番号が確定すると個々の遺物に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。

写真台帳は FileMaker でデータベースの台帳を現地作業時から作成していたが、掲載遺物番号、掲載写真番号、収納コンテナ番号なども台帳を作成し、整備して、今後の活用に対応できるよう努めた。

遺物台帳は現場での取り上げ時の簡易なものを作成し、整理後エクセル形式で台帳入力し、出土地区、遺構ごとなどで検索できるよう努めた。

遺構実測図についても地区や図面種類ごとに並べ替え、図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号順に並べ替え、図面ケースに収納した。

以上の調査成果品並びに航空測量成果品は納品確認を行った後、整理作業完了後に松原市教育委員会に引渡した。今後は松原市教育委員会によって保管され、展示などにより地域の歴史を知る資料として活用されることとなる。

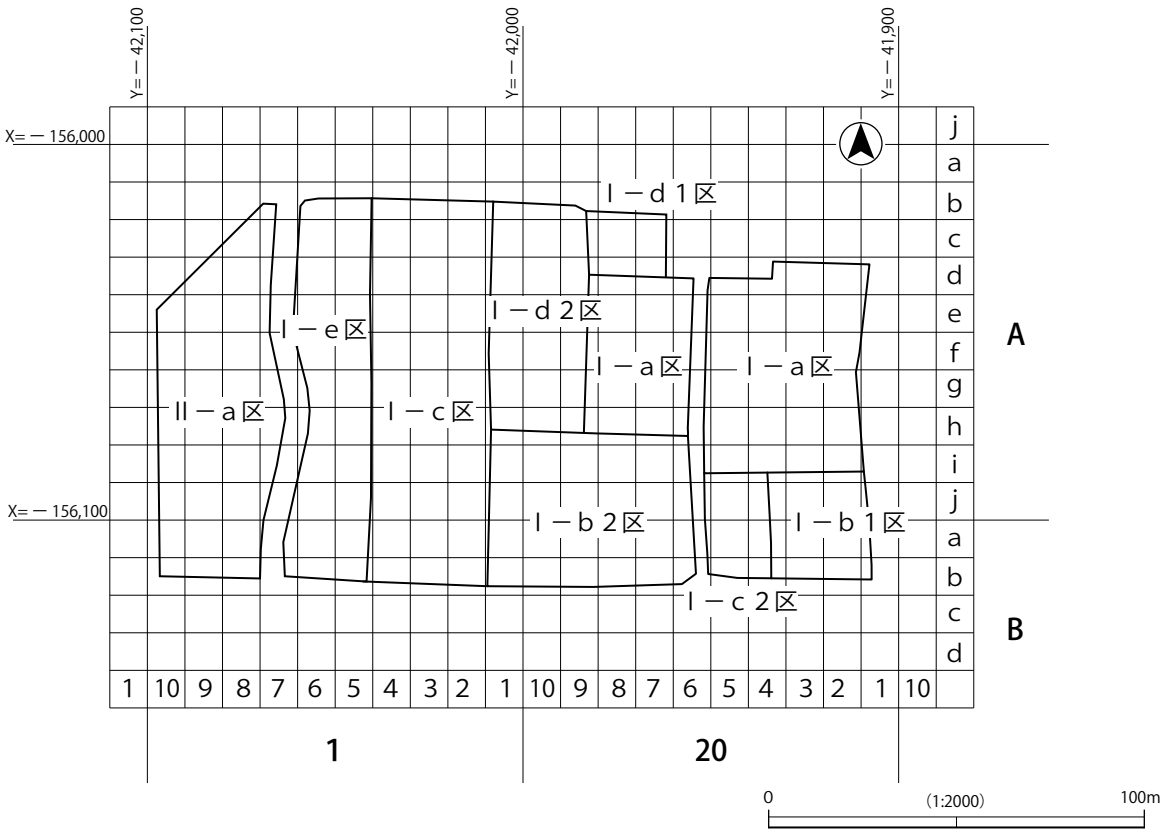


図５　地区割図（２）

写真２　機械掘削

写真３　遺構実測（平板実測）

写真４　写真撮影

写真５　遺構実測

写真６　洗浄

写真７　注記

写真８　遺物実測

写真９　デジタルトレース

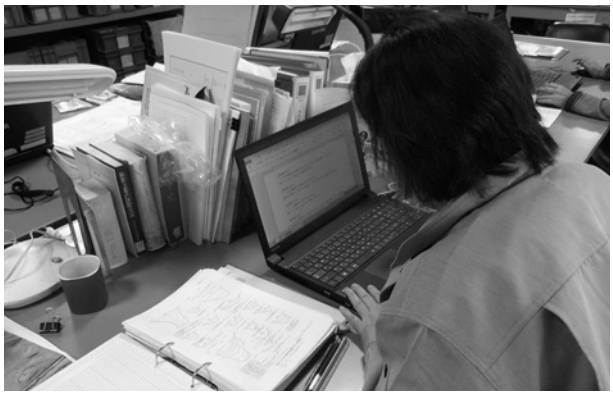


写真 10　編集

写真 11　収納

写真 12　立会風景

写真 13　現地説明会風景

写真 14　天美北小学校見学風景

写真 15　天美北小学校現場見学風景

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

池内遺跡は松原市天美北一・六丁目と天美東三・五丁目にかけて所在する。東西約 900m、南北約 650m の範囲で広がる、弥生時代から近世の複合遺跡である。

池内遺跡が所在する松原市は大阪府のほぼ中央、河内平野の南に位置する。現在の行政区分で言えば北は大阪市平野区・東住吉区、西と南は堺市北区・美原区、東は八尾市、藤井寺市、羽曳野市と接する。人口は平成 29 年２月末現在で約 12 万 1260 人を数える。昭和 30 年に市制が施行されて、平成 27 年２月で市制 60 周年を迎えた。

池内遺跡の北側には大和川が東西に流れ、それと交わるように東には狭山池に源を発する東除川が、西にも狭山池から発する西除川が流れる。東除川左岸には河内台地（大和川以北では瓜破台地）と呼ばれる洪積段丘が南からのびている。現在の天野川の前身である、古天野川によって形成された扇状地が古天野川自身の浸食で段丘化したものが河内台地、瓜破台地と考えられている。

また、現在の西除川、東除川は大和川に合流するが、これは 18 世紀初め（宝永元（1704）年）の大和川付け替え以後の景観である。それ以前は、旧西除川は狭山池から北上して東除川と合流し、北流して旧大和川に流れていた。旧西除川右岸には北に広がる氾濫原が形成されており、池内遺跡はこの氾濫原上に立地していることになる。

松原市は標高 T.P.10.0 mから T.P.40.0 mの間に位置し、大きな起伏がほとんどない地形である。その中では南南東に高く、北北西に緩やかに低くなる。最低部は市の北西端の大和川沿いであり、池内遺跡はここに位置する。

（２）歴史的環境

池内遺跡が立地する河内平野南部には、旧石器時代から近世の遺跡が数多く所在している（図６）。

また、古代には河内国丹比郡、後の丹北郡に属していた。以下、各時代に従って主要な遺跡を概観していく。

旧石器時代　大和川今池遺跡では翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器などの石器が出土する。

瓜破遺跡では西地区で石器製作時のサヌカイトのチップがみつかっており、後期旧石器時代まで遡ると考えられる。

その東の長原遺跡でも石器が出土している。

縄文時代　縄文時代になると、大和川今池遺跡、三宅西遺跡、瓜破遺跡などで当該期の遺構・遺物が確認される。

大和川今池遺跡では、包含層から石鏃や有舌尖頭器、石匙などの石器が出土している。

三宅西遺跡では大和川線の調査で、縄文時代後期中葉の土器が一括で出土した。この一括資料は放射

性炭素年代測定によって、B.C.1600 年という実年代が示された。

瓜破遺跡では縄文時代中期から晩期の土器や石器が自然流路からまとまって出土しており、集落が存在したと考えられる。突帯文土器が多く出土している。

また、長原遺跡で出土する縄文時代晩期終末期の土器は、この時期の指標土器となっている。

弥生時代　池内遺跡のほか、大和川今池遺跡、三宅西遺跡、瓜破遺跡、長原遺跡、天美南遺跡、高木遺跡、東新町遺跡などがあげられる。

大和川今池遺跡では、弥生時代前期・後期、あるいは古墳時代の遺構と遺物が確認されているが、その数は多くない。

三宅西遺跡では、弥生時代中期の竪穴建物が 30 棟以上と土器が確認されており、集落の存在が判明した。

瓜破遺跡では、西地区南部で弥生時代前期から後期まで継続する集落が確認されている。大和川以南、三宅西遺跡に隣接する地域では、弥生時代中期前葉の集落や墓域が確認されている。

天美南遺跡では、弥生時代中期の掘立柱建物が確認されている。

高木遺跡では、弥生時代中期から後半の竪穴建物や井戸が確認されている。

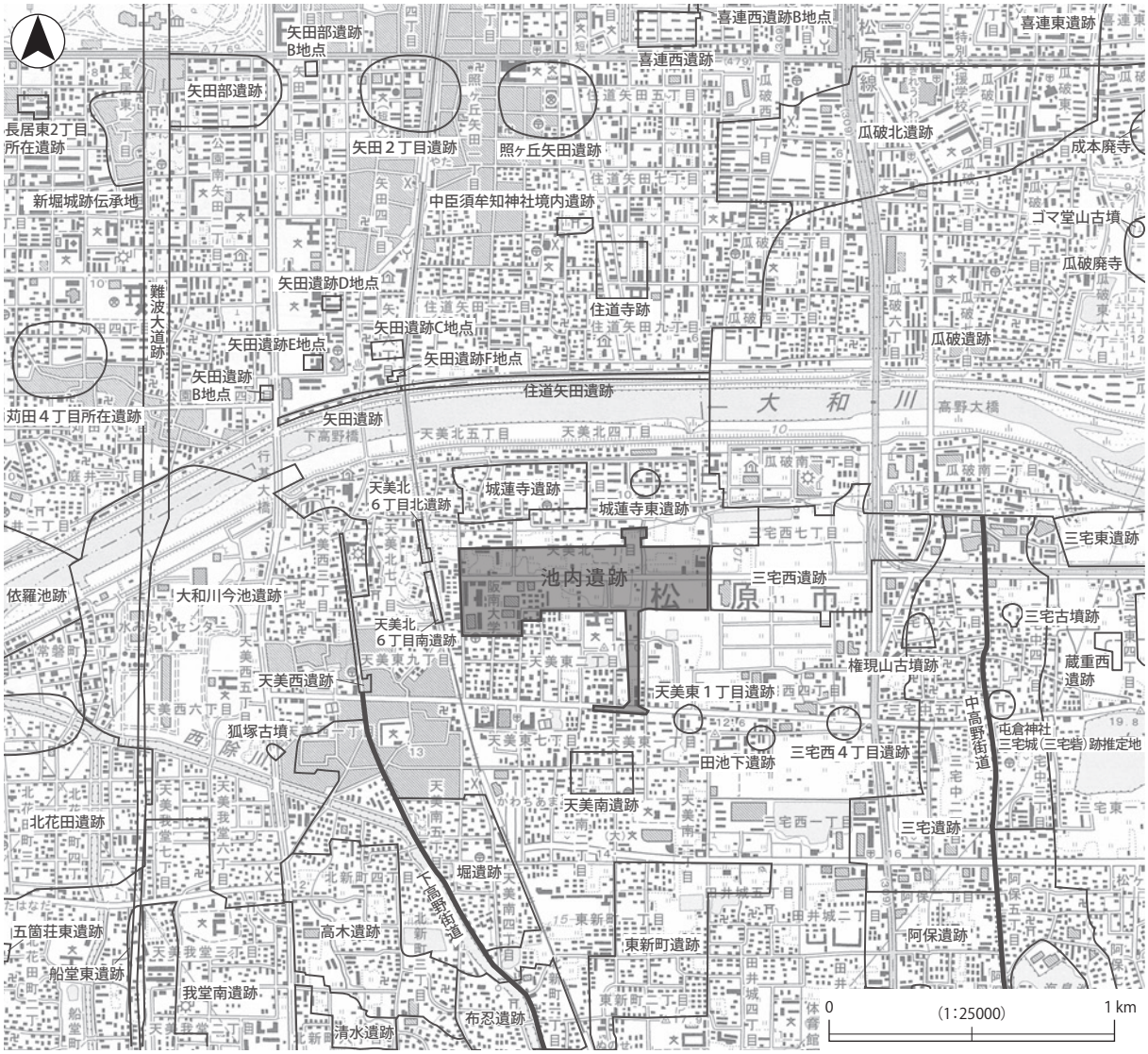


図６　周辺遺跡図

東新町遺跡では、弥生時代中期の溝が確認されている。

池内遺跡では、西側で弥生時代前期中葉の小区画水田や流路、土坑、溝などからなる生産域を検出している。

また、東側でやや新しい弥生時代前期の平地建物、竪穴建物、掘立柱建物からなる居住域を検出している。この居住域は、２条１対の溝が周囲に巡らされており、規模が相当大きいことからも環濠集落ともいえる。遺跡の西端では方形周溝墓の周溝が検出されていることから、西側に墓域が広がっていた可能性も示唆される。

南北方向では弥生時代中期の溝が検出されたほかは、石器などに当時代の遺物が散見されるのみである。

古墳時代　古墳時代になると遺跡数が大幅に増加する。大和川今池遺跡、新堂遺跡、三宅遺跡、瓜破北遺跡、上田町遺跡、大堀遺跡、東新町遺跡などである。

大和川今池遺跡では、古墳時代前期や後期の竪穴建物や掘立柱建物、井戸、溝、土坑、中期の埋没古墳などが確認されている。遺物でも韓式系土器や須恵器、埋没古墳に伴う家形埴輪や円筒埴輪などがみつかっている。

三宅西遺跡では、古墳時代前期から中期の流路から大量の土器が出土しており、出土例の少ない百済土器なども出土している。

上田町遺跡や大堀遺跡では古墳時代の竪穴建物が、東新町遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代後期の水路が確認されている。

池内遺跡では、これまでに古墳時代の顕著な遺構・遺物は検出されていない。

古代　池内遺跡のほか、大和川今池遺跡、高木遺跡、堀遺跡、河合遺跡、東新町遺跡、三宅遺跡などがある。

大和川今池遺跡で「難波大道」が検出されている。「難波大道」とは、大阪市中央区法円坂付近一帯にあった難波宮の朱雀大路から直線で南下し、大津道（長尾街道）や丹比道（竹内街道）と連絡する官道である。横大路をへて藤原宮や平城京に至る道として、推古天皇 21（613）年に造られたとされる。『日本書紀』推古天皇 21 年 11 月条に「又難波ヨリ京ニ至ルマデニ大道ヲ置ク」という記述がある。

昭和 55（1980）年の調査により、難波宮中軸線の延長上に幅 18 mの間隔をもつ２条の溝が検出され、難波大道と断定された。平成 20（2008）年に当センターが実施した調査で、難波大道と思われる道路状遺構を南北 46 mにわたって検出している。

大和川今池遺跡では、他に飛鳥時代の掘立柱建物、奈良時代の水田などが検出されている。

最新の調査は、大阪府教育委員会（平成 28 年 4 月から大阪府教育庁）が平成 27 年度から平成 28 年度に遺跡の南部、天美我堂で実施した。この調査で、平安時代の掘立柱建物９棟や柱穴、土坑などが東西の溝によって区画される屋敷地が検出されている。

高木遺跡では、「難波大道」から東へ１里の里境畦畔を確認している。複数時期に開削された溝がみつかっているが、初現は奈良時代に遡るので、「難波大道」を基準とした条里制の施行が奈良時代まで遡ることを示唆する。水田区画や大形掘立柱建物の配置から、条里地割に基づいて整然とした配置がなされていたと考えられる。奈良時代から平安時代の大形掘立柱建物が検出され、海獣葡萄鏡や陶硯などが出土することから、官衙か居館となる集落遺跡であったと考えられる。

堀遺跡は複数の水田が確認されているが、奈良時代後期の水田は条里地割を示さない。その後、８世

紀後半から９世紀前半に形成された水田が条里地割に基づいたものである。

河合遺跡では、飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物群や大溝が検出され、人面墨画土器や人形などの祭祀遺物が出土している。平成 21 年度の調査で、奈良時代の掘立柱建物群が検出されている。大形建物３棟から４棟がコの字形に配置され、総柱建物を含む７棟で構成される。硯や墨書土器などが出土していることからも、官衙遺跡と考えられる。

阿保遺跡では飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が確認されている。

東新町遺跡でも平安時代末の掘立柱建物が確認されている。

三宅遺跡でも弥生時代から中世までの掘立柱建物が検出されており、古代の屯倉があったと目されている。

池内遺跡では、北部にあたる大和川線の調査では、平安時代中期から後期（９世紀後半～ 11 世紀中葉）の、総数 60 棟以上の掘立柱建物で構成される居住域を確認した。居住域はさらに東、西、中央に分けることができ、それぞれが掘立柱建物、井戸、溝などで構成される。

なかでも西側の居住域は、東西南辺に４分の３町四方の区画溝をもち、区画溝内には庇付の大形建物が３棟とそれに付属する小形建物の 32 棟から構成される。建物以外にも井戸や土壙墓も確認され、屋敷地の形態をとる。９世紀後半から 10 世紀の遺構である。

東側居住域は９世紀後半から 11 世紀、中央居住域は 11 世紀後半から 12 世紀と、居住域によりやや時期差がある。遺物も土師器、黒色土器などの他に緑釉陶器、灰釉陶器、銙帯などの希少遺物が出土することから、在地有力層の集落と推定されている。

河内長野線の調査でも、北側で南面庇付建物などを含む掘立柱建物３棟や、井戸、緑釉陶器を含む土坑、区画溝などを検出した。９世紀後葉から 10 世紀後半の遺構が主体となる。

今回の調査は遺跡の北側中央部にあたり、大和川線や河内長野線に接する地域であることから（図３）、古代の集落域を検出すると予想された。

中世　平安時代末以降は、耕地開発が盛んになり段丘上が削平されるためか、当該期の遺跡は減少する。

大和川今池遺跡では、掘立柱建物・井戸・土坑・溝・水田などを検出している。大阪府教育委員会が平成 27 年度に実施した調査では、大形の掘立柱建物２棟と木櫃を井筒とする井戸などが濠で囲まれた、中世の居館を確認した。

天美西遺跡では、平安時代末の集落が確認されている。

長原遺跡でも平安時代末から鎌倉時代初期の堀で区画される集落を検出している。大堀遺跡では、鎌倉時代や室町時代の溝・井戸・畔などを検出している。

他に、高木遺跡などでも中世の遺構・遺物を検出している。

＜参考・引用文献＞

松原市教育委員会　1985 『松原市史』 第１巻

松原市教育委員会　1978 『松原市史』 第３巻

財団法人大阪府文化財センター　2006 『池内遺跡の発掘調査－平成 17 年度都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線（一般府道住吉八尾線）建設に伴う発掘調査－　現地説明会資料Ⅰ』

財団法人大阪府文化財センター　2007 『池内遺跡の発掘調査Ⅱ－平成 17 年度都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線（一般府道住吉八尾線）建設に伴う発掘調査－　現地説明会資料Ⅱ』

森屋美佐子・入江正則・平田洋司・新海正弘・正岡大実・永田由香編　2010 『池内遺跡－都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 財団法人大阪府文化財センター

川瀬貴子・林日佐子編　2012 『池内遺跡２－都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 公益財団法人大阪府文化財センター

永野仁編　2012 『池内遺跡３－都市計画道路大阪河内長野線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 公益財団法人大阪府文化財センター

松原市教育委員会・公益財団法人大阪府文化財センター　2016 『池内遺跡の発掘調査－松原市天美東土地区画整理事業に伴う発掘調査－　現地説明会資料』

中村淳磯・村上富喜子・森井貞雄・池田研・小倉徹也・河端智・清水梨代編　2009 『三宅西遺跡』 財団法人大阪府文化財センター

正岡大実・森屋美佐子編　2010 『三宅西遺跡Ⅱ』 財団法人大阪府文化財センター

大和川・今池遺跡調査会編　1980 『大和川・今池遺跡Ⅱ　第３・４・５地区　発掘調査報告書』

村上富喜子・森本徹・後川恵太郎・三辻利一・渡辺正巳・安部みき子・山口誠治著編　2000 『大和川今池遺跡（その１・その２）』 財団法人大阪府文化財調査研究センター

村上富喜子・杉本清美・岡本圭司・渡辺正巳・渡辺栄次・吉村佐紀恵著編　2001 『大和川今池遺跡（その３・その４）』 財団法人大阪府文化財センター

佐伯博光編　2002 『大和川今池遺跡（その５・その６・その７）』 財団法人大阪府文化財センター

三宮昌弘・福佐美智子・水野恵理子著編　2009 a 『大和川今池遺跡Ⅰ－難波大道の調査－』 財団法人大阪府文化財センター

市村慎太郎・森屋美佐子著編　2009 b 『大和川今池遺跡Ⅱ』 財団法人大阪府文化財センター

森屋美佐子編　2010 『大和川今池遺跡Ⅲ』 財団法人大阪府文化財センター

小野久隆・小林千夏著編　2011 『大和川今池遺跡Ⅳ』 財団法人大阪府文化財センター

永野仁編　2011 『大和川今池遺跡・天美西遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター

山田隆一編　2017 『大和川今池遺跡－都市計画道路堺港大堀線整備事業に伴う発掘調査－』 大阪府教育委員会

桝本哲、服部文章、阪田育功著編　2010 『大阪府埋蔵文化財調査報告 2010 －３　高木遺跡』 大阪府教育委員会

大阪府立狭山池博物館　2010 『H22 年度秋期企画展　古代西除川沿いの集落景観』

日下雅義　1980 『歴史時代の地形環境』 古今書院

松原市教育委員会編　2017 『たじひのだより－松原市文化財情報誌　NO.16』

第３章　基本層序

第１節　基本層序

池内遺跡（Ｃ２－４－２）調査区は、東西約 150 m、南北約 100 mと東西に長い、ほぼ長方形の形をとる（図５）。

調査区全域は起伏が激しい地域ではないため、10 mや 20m 単位での層序の把握は必要ないと判断した。そこで、調査区の外周、東西南北に排水用の側溝を設ける際に生じる壁面を土層観察用の壁として、写真及び土層断面図を作成して記録することとした。ただし、西壁や南壁の一部については、近現代の用水路や住宅造成などによって大きく撹乱を受けているため、連続して層位を確認できなかった部分がある。

北、南、東、西それぞれの壁の連続した断面において、写真と縮尺 20 分の１の断面図を作成し、本報告ではこれをもとに柱状の基本層序模式図を作成した（図７）。

西壁については、既往の調査である、都市計画道路大阪河内長野線 09 －２－１・09 －２－２区の東壁と接している。北壁についても、都市計画道路大和川線、府道堺松原線によって南北に約 10 mの隔たりはあるが、これらの道路建設に先行する調査が行われているので、堆積状況はある程度把握されている。そこで、北と西を除いた、東壁と南壁の縮小断面図を作成し、今後の調査の一助になるよう掲載した（図８）。

調査区は第２章の地理的環境で述べたように、松原市が南南東に高く、北北西に低い地形をとるため、北から南に、また、西から東に高くなる傾向にある。

平面調査は、基本的に１遺構面として、遺構面を形成する基盤層 (第３層) まで実施した。井戸などの深い遺構などを掘削した際に、第３層より下層、砂礫層よりさらに下層に、土壌化が著しい暗色帯層が存在することが判明した。そこで、最も現標高が高い東南部にあるＩ－ｃ２区の西側に、東西幅２m、南北長 25 mの深掘トレンチを設定して、下層確認を行い、松原市教育委員会の立会を受けた。掘削深度は約１mである。遺構、遺物は検出されなかったが、既往の調査成果（05 －１調査や 11 －１調査）と大きくは違わない、地層堆積状況を確認することができた（写真図版 10 －３）。これも合わせて基本層序模式図を作成した（図７）。

以下、基本層序模式図に従って概説する。

(1) 基本層序

盛土層

現代の造成に伴う盛土で、砕石や撹拌された土からなる。調査区全体が元来は耕作地だったのが、北側の現府道堺松原線や西側の現河内長野線といった道路に取りつくために、かさあげするために盛った土であろう。したがって調査区の北壁、Y= － 41,955 から Y= － 42,100 の間や、西壁で顕著にみられ、東壁や南壁ではほとんどみられない。

層厚は 0.2 ～ 1.0 mである。発掘調査時には、重機などの機械で掘削した。

耕土層 (第１層)

現代の耕作に伴う耕作土層である。調査区全域で広くみられるが、調査区の東や南は畑などの耕作地であったため、厚く堆積していた。耕土層が厚いところは造成などによる撹乱が少なく、遺構の遺存状況がよかった。

2.5Y5/2 暗灰黄色極細砂混じりシルト～礫を基本とする、黒くて粒子の細かい土である。層厚は平均 0.1 ～ 0.4 mである。発掘調査時には、重機で掘削した。

盛土上面、もしくは第１層上面にあたる現地表高は、T.P.9.6 ～ 10.5 mをはかる。

床土層

耕土層の直下にみられる貼土である。2.5Y5/3 黄褐色細砂混じりシルト、もしくは５Ｙ 6/2 灰白色シルト～粘質土を基本とする。固くしまりが良い。

層厚は 0.05 ～ 0.1 m程度である。現地表からこの層までを重機で掘削した。

第２層

第３層に至るまでの遺物を包含する層をすべて第２層とした。第２層からを人力掘削を開始した。床土層を除去した第２層上面の高さは、T.P.8.9 ～ 9.5 mをはかる。

第２層は 10YR4/1 灰褐色極細砂～細砂混じりシルトを基本とするが、マンガン斑が顕著に認められる。第２層は単層とみなした場合もあるが、堆積が厚い北側などでは２、３層に分層できたり、シルトから砂質が強まる場合もある。そこで、第２層を第２－１層、第２－２層と分層したり、第２層の下層に第２－２層があるとみなした場合もある。第２－１層は 2.5Y5/4 黄褐色極細砂混じりシルト、第２－２層は 10YR5/6 黄褐色シルトを基本とする。第２－１層はマンガンの沈着が著しいため、褐色が強い。

層厚は 0.05 ～ 0.3 mで、平均 0.2 m程度だが、第２層が全く確認できない箇所もある。これも後世に削平されたためとみる。

遺構は第２層の上面から検出されるものと第３層上面で検出されるものがあるが、第２層で遺構を確認するのが難しく、遺構検出はほとんど第３層上面で行った。よって、遺構面は１面として捉えた。

第２層には弥生時代前期から平安時代中期までの遺物が含まれる。ごく少量だが中世後半期から近世の遺物も含まれるが、これは耕土層の遺物の混入であろう。

第３層

遺構面を形成する基盤層（地山面）である。遺構は第２層上面と、この第３層上面の両方から検出される。第３層までを平面調査の対象とした。

10YR5/3 にぶい黄褐色極細砂混じりシルトを基本とするが、下層に細砂や礫を含む箇所がある。層厚は 0.1 ～ 0.4 mである。北側中央で薄く、南西部では比較的厚い。第３層上面の高さは T.P.8.9 ～ 9.3 mをはかる。

土質はシルトを基本とするが、砂質が強くなり粗砂から礫が主で、それにシルトが混じる区域がＩ－ｃ区、Ｉ－ｄ２区、Ｉ－ｂ２区で部分的に認められる。俯瞰写真等で確認すると幅７～ 10 mの帯状に蛇行しながら、調査区を南北に縦断する自然流路の痕跡が確認できた（図 93、写真図版１）。砂質が強まるのは、自然流路が流れていた旧地形を反映しているといえる。自然流路は部分的に掘削したのみだが、顕著な遺物は出土していない。北に位置する、大和川線調査区の 05 －１－３区で検出した第６面の溝につながるが、この溝は弥生時代前期以前とされる層（池内７ｂ層上面）にあるので、今回検出した旧自然流路も弥生時代前期以前と考えられる。

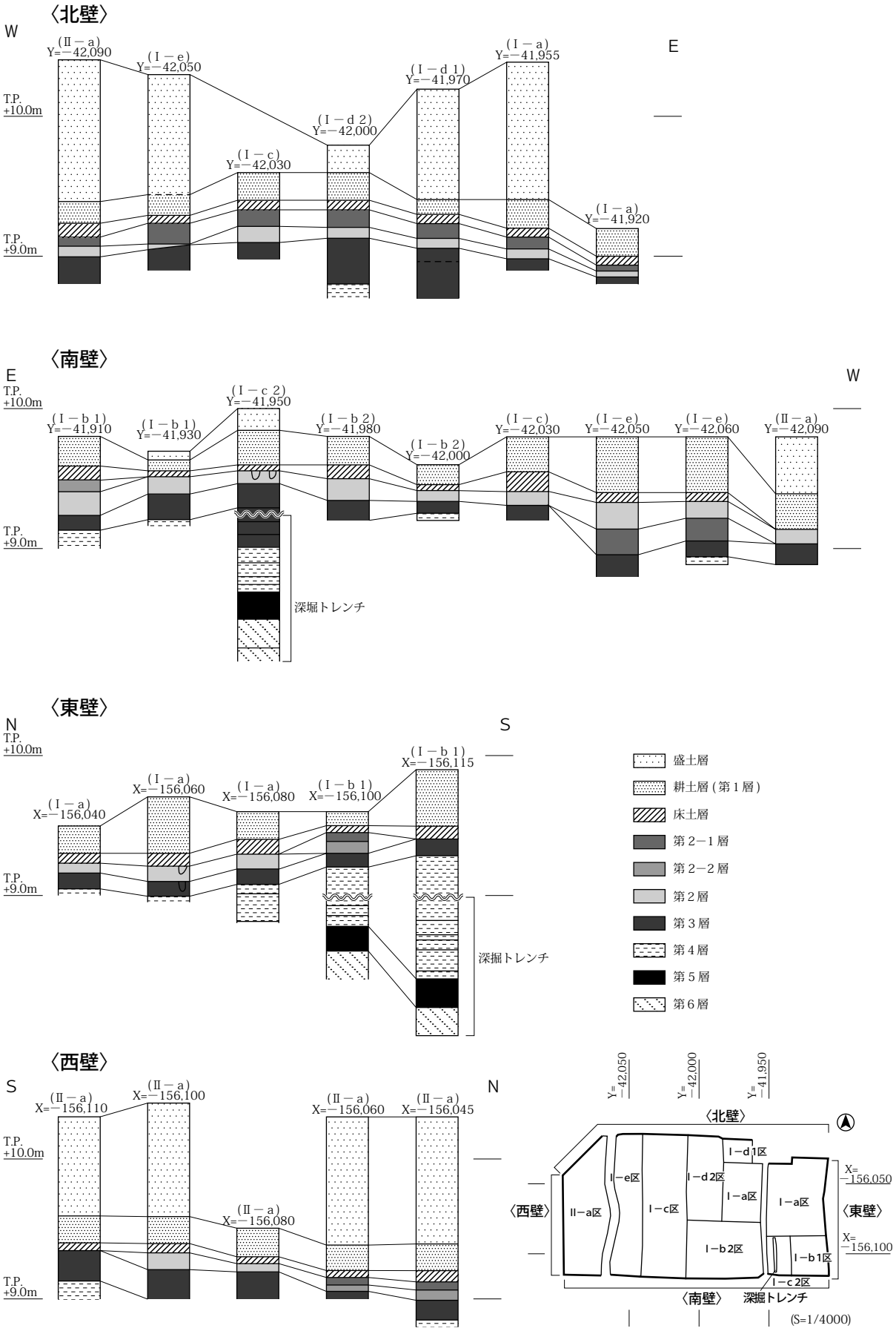

〈北壁〉
W
E
T.P. +10.0m
T.P. +9.0m
(Ⅱ－a) Y=－42,090
(Ⅰ－e) Y=－42,050
(Ⅰ－c) Y=－42,030
(Ⅰ－d 2) Y=－42,000
(Ⅰ－d 1) Y=－41,970
(Ⅰ－a) Y=－41,955
(Ⅰ－a) Y=－41,920
〈南壁〉
E
W
(Ⅰ－b 1) Y=－41,910
(Ⅰ－b 1) Y=－41,930
(Ⅰ－c 2) Y=－41,950
(Ⅰ－b 2) Y=－41,980
(Ⅰ－b 2) Y=－42,000
(Ⅰ－c) Y=－42,030
(Ⅰ－e) Y=－42,050
(Ⅰ－e) Y=－42,060
(Ⅱ－a) Y=－42,090
深掘トレンチ
〈東壁〉
N
S
(Ⅰ－a) X=－156,040
(Ⅰ－a) X=－156,060
(Ⅰ－a) X=－156,080
(Ⅰ－b 1) X=－156,100
(Ⅰ－b 1) X=－156,115
深掘トレンチ
盛土層
耕土層（第１層）
床土層
第２－１層
第２－２層
第２層
第３層
第４層
第５層
第６層
〈西壁〉
S
N
(Ⅱ－a) X=－156,110
(Ⅱ－a) X=－156,100
(Ⅱ－a) X=－156,080
(Ⅱ－a) X=－156,060
(Ⅱ－a) X=－156,045
Y=－42,050
Y=－42,000
Y=－41,950
〈北壁〉
〈西壁〉
〈東壁〉
〈南壁〉
深掘トレンチ
Ⅰ－d1区
Ⅰ－e区
Ⅰ－d2区
Ⅰ－a区
Ⅰ－a区
Ⅱ－a区
Ⅰ－c区
Ⅰ－b2区
Ⅰ－b1区
Ⅰ－c2区
X=－156,050
X=－156,100
(S=1/4000)

図７ 基本層序模式図

この旧自然流路を挟むように弥生時代後期や古墳時代中期の遺構が北西―南東を軸として点在する。この区域が古墳時代以前に微高地を形成しており、この微高地に人が集まり、土地利用されていたという推測が成り立つ。

深掘トレンチ断面はＩ－ｃ２区の西側において、約 T.P.8.0 mまでを部分的に掘削し、西側と南側の壁面の断面を観察し、写真や図化によって堆積状況の把握に努めた。第３層以下の第４層から第６層はここで観察できた。いずれの層からも遺構、遺物の出土はみられなかった。

第４層

河川の氾濫堆積による砂礫層であり、何層かに分層できる。第４層上面の高さは、T.P.8.8 ～ 9.1 m をはかる。

大和川線の調査時の池内６層から８層に相当すると考えられる。池内６層では、弥生時代前期の溝が検出されており、弥生時代前期から縄文時代晩期に相当する。

第４－１層　地山直下に堆積する層である。層厚 0.1 m程度である。10YR5/1 褐灰色粗砂～礫混じりシルトを基本とする砂礫層である。

第４－２層　第４－１層の下層に堆積する層である。層厚 0.05 ～ 0.1 m程度である。2.5Y5/2 暗灰黄色細砂混じりシルト～細砂を基本とする。

第４－３層　第４－２層の下層に堆積する層である。層厚 0.1 ～ 0.2 m程度である。10YR5/2 灰黄褐色細砂～礫を基本とする砂礫層である。

第４－４層　第４－３層の下層に堆積する層である。層厚 0.05 m程度である。10YR5/4 にぶい黄褐色シルトを基本とする。

第５層

第４層の下層に堆積する層である。層厚 0.2 m程度である。10YR3/1 黒褐色礫混じりシルト～粘質土を基本とする土壌化した、後背湿地の堆積層である。黒い層が調査区の広範囲でみられ、いわゆる暗色帯と呼ばれる鍵層である。第５層上面の高さは、T.P.8.5 ～ 8.8 mをはかる。

大和川線の調査では、池内９層に相当すると考えられる。池内９層は、縄文時代晩期に相当する層と考えられている。

第６層

第５層の下に堆積する、河川の氾濫堆積層である。何層かに分層可能である。第６層上面の高さは、T.P.8.2 ～ 8.5 mをはかる。

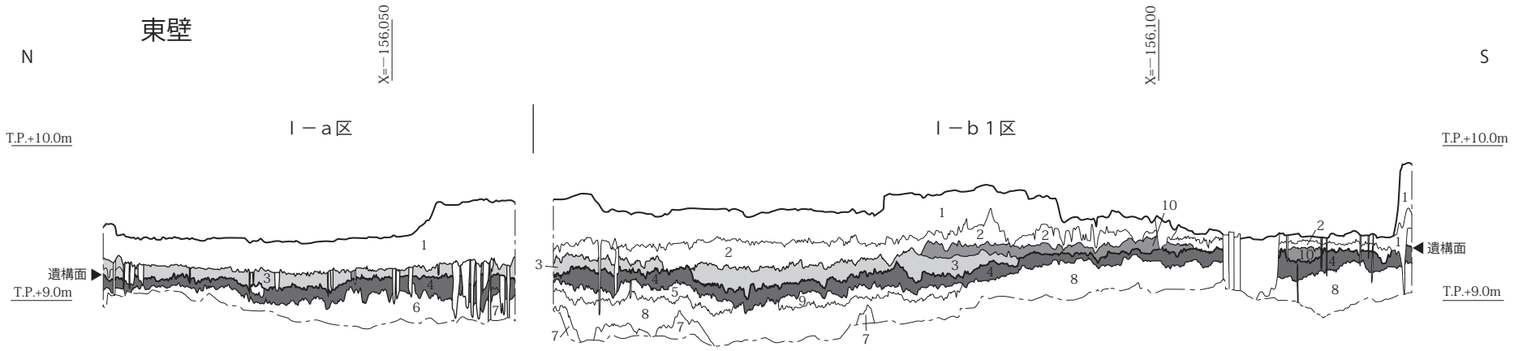
第６－１層　第５層の下層に堆積する層である。層厚 0.2 m程度である。10YR4/2 灰黄褐色細砂～礫を基本とする。

第６－２層　第６－１層の下層に堆積する層である。層厚 0.1 ～ 0.2 m程度である。10YR4/1 褐灰色細砂混りシルトを基本とする。

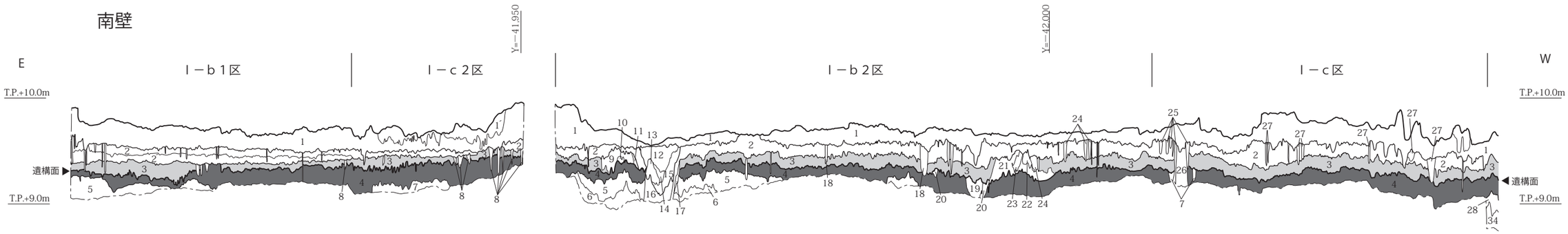
大和川線調査の池内 10 層に相当すると考えられる。

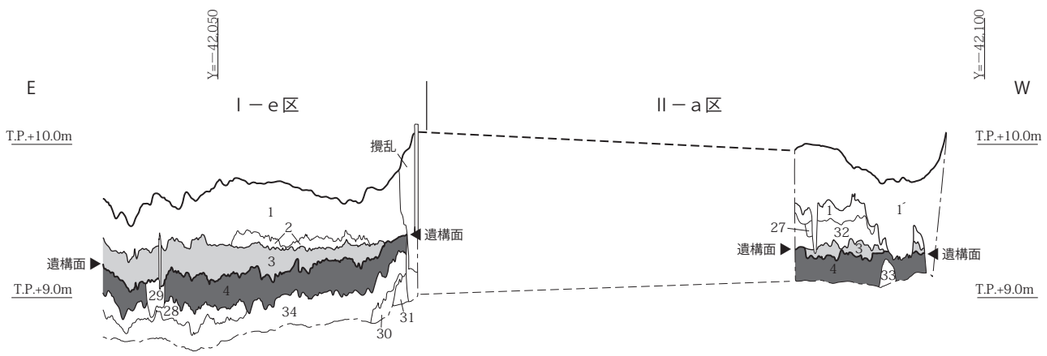
第４層以下は平面的な調査を実施していないため、詳細な時期設定はできないが、大和川線の調査などの既往の調査成果を裏付ける結果となった。

東壁、南壁断面図からも北から南に高くなるなどの傾向はあるが、急激な地形の変化はない。自然の微高地状の地形も古代以降の土地開発によって削平され、平坦化したと考えられる。



東壁
1 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂〜粗砂混じりシルト (耕土層、第1層)
2 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂混じりシルト (第2−1層)
3 2.5Y6/2 灰黄 シルト (第2−2 層)
4 5Y6/2 灰オリーブ 細砂混じりシルト マンガン斑含む (第3層)
5 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト マンガン斑含む
6 10YR4/2 灰黄褐 粗砂〜礫
7 10Y4/1 灰 粗砂〜礫
8 2.5Y5/2 暗灰黄 中砂〜礫
9 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
10 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルト (床土)





南壁
1 2.5Y4/2 暗灰黄 粗砂〜礫混じりシルト (耕土層、第1層)
1´ 10YR4/3 にぶい黄褐 粗砂〜礫 (盛土)
2 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルト (床土)
2´ 10YR5/6 黄褐 シルト
3 10YR4/1 灰褐 極細砂〜細砂混じりシルト (ややマンガン斑あり)(第2層)
4 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂〜礫混じりシルト (第3層)
5 10YR5/2 灰黄褐 細砂〜礫混じりシルト (第4層)
6 10YR5/1 褐灰 細砂〜礫混じりシルト (第4層)
7 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト混じり粗砂〜礫 (第4層)
8 5Y5/2 灰オリーブ 細砂〜粗砂混じりシルト (遺構)
9 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂〜礫 (径10㎜以上の礫を多く含む)
10 2.5Y6/3 にぶい黄 礫混じりシルト
11 2.5Y6/2 灰黄 シルト礫含む
12 2.5Y5/3 黄褐 シルトに 2.5Y6/2 灰黄 シルトの細かいブロックを多量に含む
13 2.5Y6/2 灰黄 シルトと 2.5Y5/2 暗灰黄 シルトが径10㎜以下の大きなブロック状に混じる
14 2.5Y5/1 黄灰 細砂〜礫
15 10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり粗砂〜礫 径20〜30㎜以上の石で構成される
16 2.5Y3/2 暗灰黄 シルトと 2.5Y6/2 灰黄 シルトの 大きなブロックが混じり合う
17 2.5Y6/2 灰黄 細砂〜中砂
18 10YR4/3 にぶい黄褐 細砂〜礫混じりシルト (遺構)
19 2.5Y5/3 灰黄褐 粗砂〜礫
20 2.5Y6/3 にぶい黄 細砂混じりシルト
21 2.5Y5/3 黄褐 粗砂〜礫
22 10YR 4/4 褐 礫混じりシルト マンガン斑あり
23 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト
24 10YR 5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト (遺構)
25 2.5Y5/3 黄褐 細砂混じりシルト (遺構)
26 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂混じりシルトに 10YR 4/3 にぶい黄褐 細砂混じる (遺構)
27 2.5Y5/1 黄灰 細砂混じりシルト (遺構)
28 10YR 5/4 にぶい黄褐 極細砂〜礫混じりシルト
29 10YR 6/2 灰黄褐 シルトにわずかに 28 のシルトブロック混じる
30 2.5Y5/2 暗黄灰 シルト混じり粗砂〜礫
31 2.5Y4/4 オリーブ褐 極細砂混じりシルト
32 10YR5/2 灰黄褐 極細砂〜礫混じりシルト
33 2.5Y4/1 灰黄 極細砂〜細砂混じりシルト
34 2.5Y5/4 黄褐 細砂混じりシルト

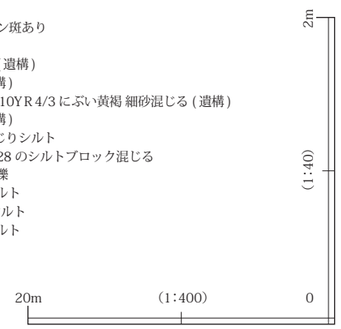


図8　東壁・南壁断面図

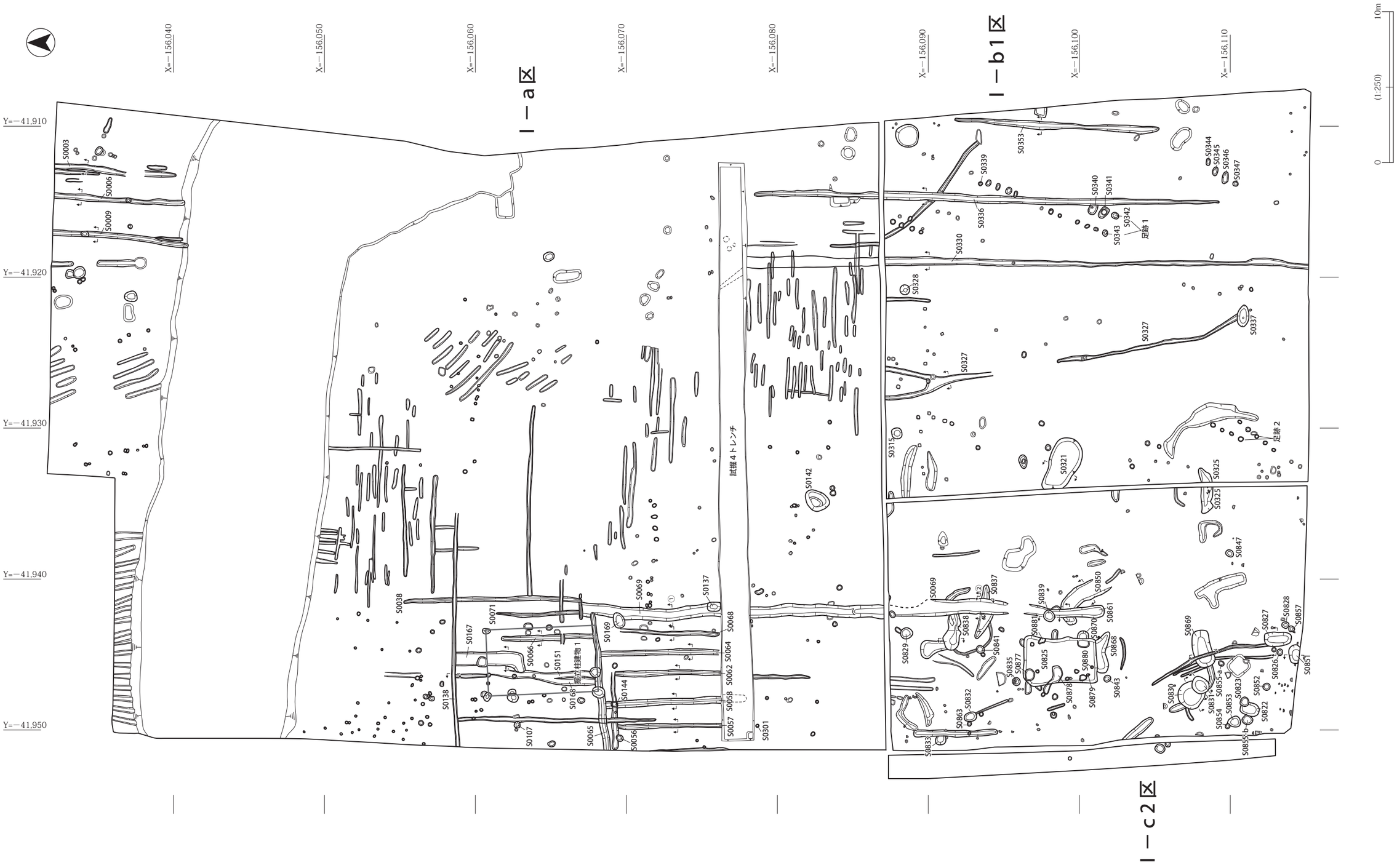


図9　東部域（Ⅰ−a区東半、Ⅰ−b1区、Ⅰ−c2区）平面図

第４章　調査成果

第１節　遺構

（１）東部域（Ⅰ－ａ区東半、Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区）の遺構（図９～ 19、写真図版４、５、７～ 11）

およそ、Y=－ 41,950 ～ Y=－ 41,955 にある南北の大きな用水路より東に位置する調査区を東部域と呼称する。調査区としてはⅠ－ａ区東半、Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区が含まれる。東部域の形はほぼ長方形だが、東北角が約５ｍ ×25 ｍ飛び出している（図９）。南北長約 82 ｍ、東西幅約 40 ～ 45 ｍの範囲である。

東部域は北部及び東半は遺構が希薄である。南北中央、X=－ 156,085 辺りまでは、中世後半以降の耕作溝が東西方向や斜め方向に多数検出できたが、それ以前の遺構はほとんど確認できなかった。

北から南にむかって高くなり、西から東にむかって下がっていく地形をとる。東側は遺構面以前に自然河川があったようで、地山を構成する地質が砂礫層となり、東に下がっていく。西にいくほど黄褐色から灰褐色のシルト質の地山となる。遺構面の標高は、東壁北側が T.P.9.2 ｍ、東壁南側が T.P.9.3 ～ 9.4 ｍである。包含層（第２層）は 15 ～ 20 ㎝の厚さで、古代の遺物などを含むが包含量は少ない。

Ⅰ－ａ区東半は、東部域の北に位置する調査区である。調査面積は約 2,242 ㎡である。

主に中央から西半で、掘立柱建物や柱穴、井戸、土坑、溝などを検出した。出土遺物はほぼ平安時代前期から中期のものである。松原市教育委員会が実施した試掘調査の４トレンチが、東西方向に中央に位置する。

Ⅰ－ｂ１区は、東部域で南東に位置する調査区である。調査面積は約 750 ㎡である。

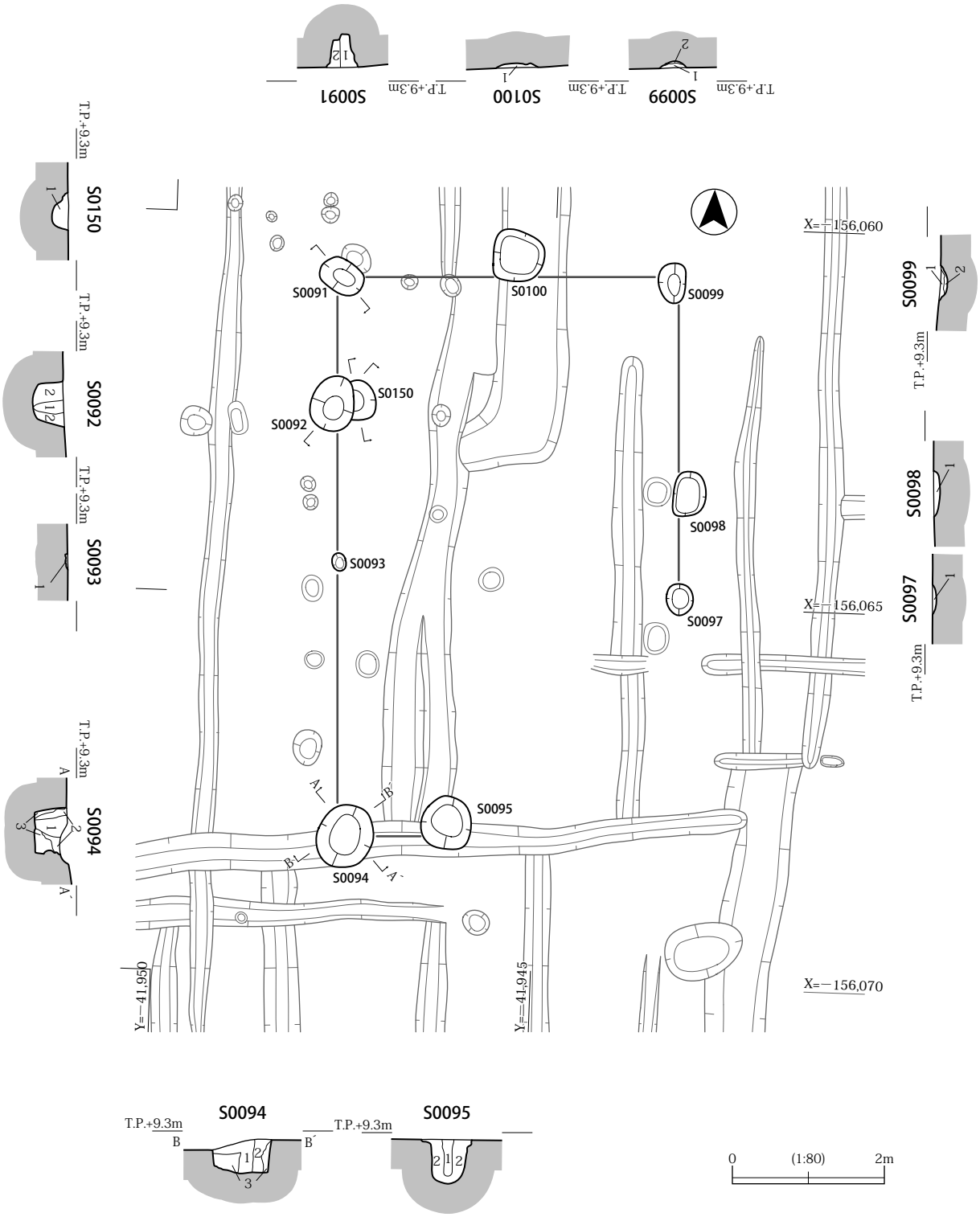
井戸、土坑、溝などを検出した。西側で検出した不定形の土坑 S0321 は、自然地形で地震による変形を受けている。Ⅰ－ｂ１区になると古代のほか､弥生時代後期から古墳時代の遺物を含むようになり、複数の時代の遺構、遺物が混在している。遺構面の標高は南壁西端で T.P.9.3 ｍ、東壁南端で T.P.9.4 ｍである。

Ⅰ－ｃ２区は、東部域の南西に位置する調査区である。調査面積は約 470 ㎡と、各調査区中、Ⅰ－ｄ２区に次いで小さい。

井戸、土坑、溝などを検出した。中央で長方形の土坑 S0825 を検出したほか、南部では多数の円形もしくは長円形の土坑を検出した。これらの土坑は、Ⅰ－ｂ２区で検出した土坑と形状や埋土が似ており、弥生時代後期から古墳時代を主体にする遺構と目される。古代の遺構も存在するが、量的には古墳時代の遺構が多くなる。

掘立柱建物１（図 10、写真図版４、５－２、７－３）

Ⅰ－ａ区の東半、X=－ 156,060 ～ X=－ 156,070、Y=－ 41,943 ～ Y=－ 41,948 間で検出した。調査時には掘立柱建物と判明しなかったが、各柱穴の規模が大きく深いこと、柱穴に柱痕跡がみられるものがあることなどから、掘立柱建物と判断した。ただし、南北や東西の溝（S0065 など）と切り合っているため、柱穴は失われており、特に南東部などでは柱穴を確認できなかった。



S0091
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
2 2.5Y4/1 黄灰 シルト
S0092
1 2.5Y4/1 黄灰 シルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト

S0093
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
S0094
1 2.5Y5/1 黄灰 シルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
3 2.5Y5/3 黄褐 シルト

S0095
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
2 10YR5/2 灰黄褐 シルト
S0097
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
S0098
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト

S0099
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
2 10YR5/2 灰黄褐 シルト
S0100
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
S0150
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト

図 10　Ⅰ－a 区掘立柱建物 1 平・断面図

南北を桁行とする東西２間、南北推定４間（３間の可能性もある）の側柱建物である。中軸線は南北で、東西軸線はわずかに東に傾く。柱と柱の間隔は 1.6 ～ 2.0 mである。

柱穴は短径 0.4 ～ 0.5 m、長径が 0.5 ～ 0.8 m程度の円形もしくは隅丸方形のものが多く、周辺の他の柱穴と比較すると大きいのが特徴である。建て替えを示す切り合いが認められる柱穴もある。

柱穴の深さは 0.4 ～ 0.5 mで、中心に直径約 0.2 mの柱痕跡をもつものもある（写真図版７－３、柱穴 S0092、柱穴 S0094、柱穴 S0095 など）。遺構面をかなり削り込んでから柱穴を検出しているので、実際の柱穴の規模はさらに大きかったと思われる。西柱列のさらに西には、平行するようにやや小形の柱穴が並ぶので、柵列等を有していたかも知れない。南北や東西の溝を切るが、溝との時期差はさほどないようである。各調査区で検出した掘立柱建物の概要は表２にまとめた。

建物の柱穴 S0092 や柱穴 S0100、柱穴 S0091 から黒色土器椀や土師器皿などが出土している（図 68 － 5 ～ 9・12・13、写真図版 41 － 5）。よって、掘立柱建物１は平安時代中期の遺構と考えられる。

掘立柱建物１の北側などにも柱穴と思われる小穴を多数検出したが、建物を復元するに至らなかった。

井戸 S0142（図 11、写真図版７－８）

Ⅰ－ａ区東半の南端中央で検出した。

楕円形で、深さや断面形状から素掘りの井戸とした。

長径 1.6 m、短径 1.3 m、深さ 1.4 mをはかる。平面は北がやや尖った楕円形を呈し、掘方は東側に落ちる段を有する。断面でみると、深さ 0.8 mまでは直径が約 0.9 mをはかる台形をなすが、そこから下位は底径が直径約 0.2 mになり、急激にすぼまるＵ字形を呈するので、井戸と考えた。

東側の段を有する部分の埋土は、掘形を作った後の裏込土であろう。井筒埋土はほぼ水平に、何層かにわたって堆積することから、時間をかけた緩やかな自然堆積の結果、埋没したと考えられる。

底部から須恵器杯身と杯蓋が出土している（図 68 － 15・16）。これらの出土遺物は古墳時代のものであるので、古墳時代の遺構と考える。しかし、掘立柱建物１などに付随した居住域内の遺構と考えるなら、古代の遺構の可能性もある。

柱穴 S0301（図 11、写真図版７－６）

Ⅰ－ａ区東半の南西隅で検出した。南北溝群の途切れる部分に位置する。

円形の小形の土坑である。直径 0.2 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土は単層で、短時間で一気に埋まったことを示唆する。

底部から土師器杯が内面を上に向けた状態で出土した（図 68 － 14、写真図版 41 － 1）。約３分の２が残存する。平安時代中期のものである。出土状況からも意図的におかれたもので、地鎮などの行為が示唆できる。

柱根や周辺部で等間隔に並ぶ同規模の柱穴などは検出できなかったが、S0301 は柱穴と考えられる。掘立柱建物１からはやや距離が離れているが、ほぼ同時期であり、掘立柱建物１の周辺には他にも、柱穴 S0301 等を柱穴とする掘立柱建物があったと推測できる。

柱穴 S0107（図 11）

掘立柱建物１の西列西側で検出した。

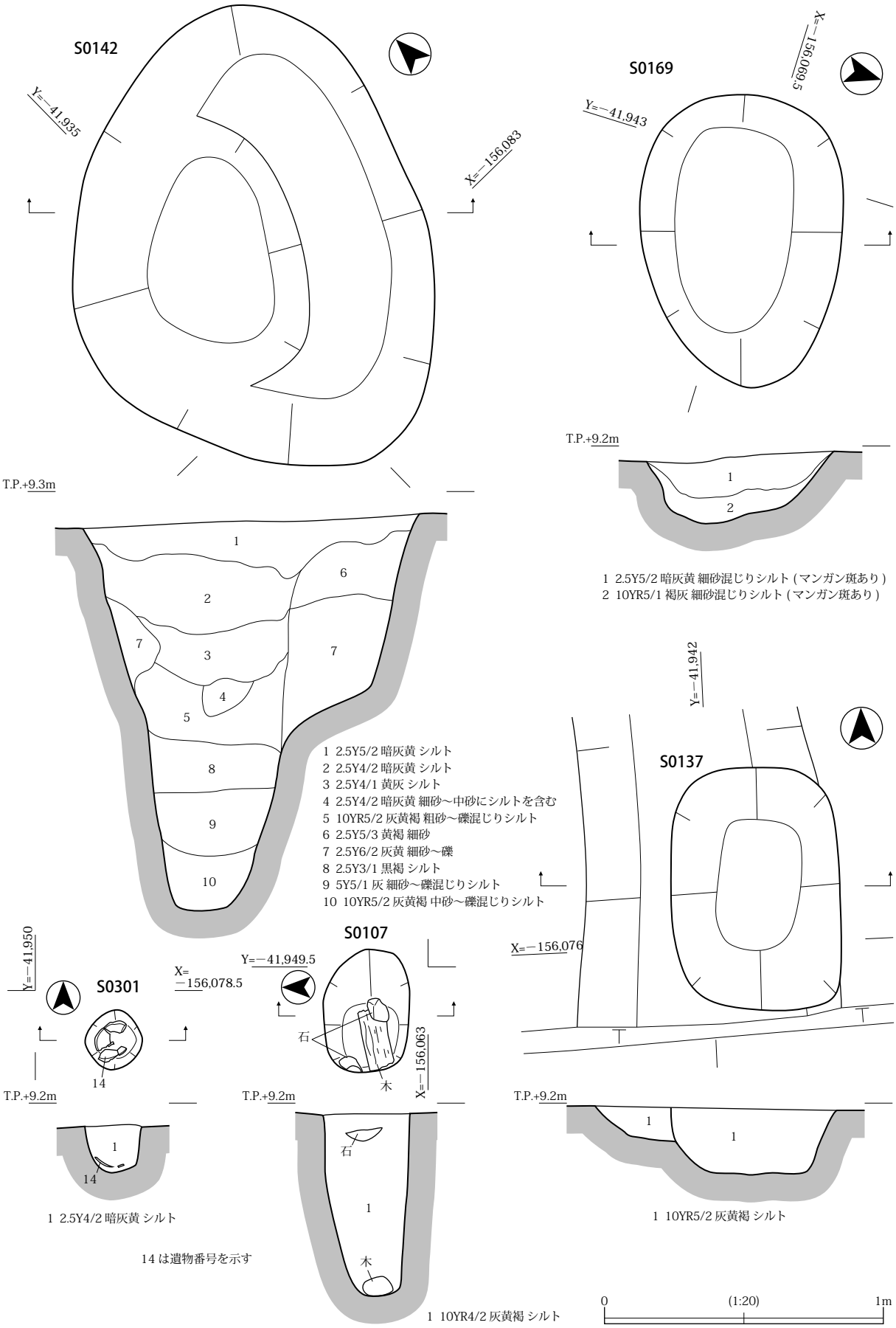


図 11　Ⅰ－a 区 S0107・S0137・S0142・S0169・S0301 平・断面図

東西に長い長円形の柱穴である。長径 0.45 m、短径 0.3 m、深さ 0.65 mをはかる。断面は深いU字形を呈する。

埋土の上層で拳大の自然石を、中層で黒色土器B類椀や土師器皿を検出した（図 68 － 10・11、写真図版 41 － 5）。最下部では拳大の石と長さ約0.25 mの角材を検出した。石や角材は柱の下に敷く礎石、礎板と考えられる。

柱の痕跡は確認できなかったが、深さや礎板があることから柱穴と考えられる。掘立柱建物 1 に近接することから、それに付随する遺構と考えられる。

出土した土師器皿が平安時代前期末～中期初めを示すことからも、掘立柱建物 1 と同時期の遺構と考えてよいだろう。

土坑 S0169（図 11）

掘立柱建物 1 の東列の南側で検出した。南北溝 S0069 を切る。

東がやや尖った長円形の大形の土坑である。

長径 1.05 m、短径 0.75 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は皿形を呈する。平面形に比べると掘削深度は浅いが、実際はもっと深かったと思われる。

土師器甕が出土した（図 68 － 20、写真図版 41 － 3）。平安時代前期と考えられる。溝 S0069 との切り合いからも、土坑 S0169 も古代の遺構であろう。

土坑 S0137（図 11）

掘立柱建物 1 の南列より南側、南北溝 S0069 の中から検出した。

南北に長い隅丸方形の大形の土坑である。

長辺 0.9 m、短辺 0.6 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑 S0169 に規模や形状が似る。土坑 S0169 と土坑 S0137 は対をなす遺構だったかもしれないが、北西や南西に同様の土坑は確認されなかった。土器小片は出土しているが、時期は不明である。土坑 S0169 と対をなすなら、土坑 S0137 も古代の遺構となる。

溝 S0167（図 12）

掘立柱建物 1 の中心を南北に走る溝である。北端は溝 S0138 によって切られる。南端は西に曲がり、逆L字状に曲がって、さらに南北の溝 S0151 に切られる。

長さ 4.0 m、幅 1.0 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

時期の分かる遺物は出土していないが、溝 S0138 から黒色土器A類椀が出土していること、この溝を切る掘立柱建物 1 を平安時代中期とするなら、溝 S0167 はそれ以前の遺構と考える。

溝 S0069（図 12、写真図版 5 － 2）

Ｉ － a 区の東半の南西部では、東西方向あるいは南北方向の溝が約 1.5 mの等間隔に並ぶ。溝 S0069 はそれらの南北溝の中では最も東に位置し、南端は調査区を超えてＩ － c ２区まで長くのびる。幅も他の東西溝の約２倍あるが、北は溝 S0071 と溝 S0038 に分かれており、元来は２つの溝だったかもしれない。この溝の長さはＩ － a 区だけで約 20 m、Ｉ － c ２区の溝 S0861 も合わせると 35 m以上

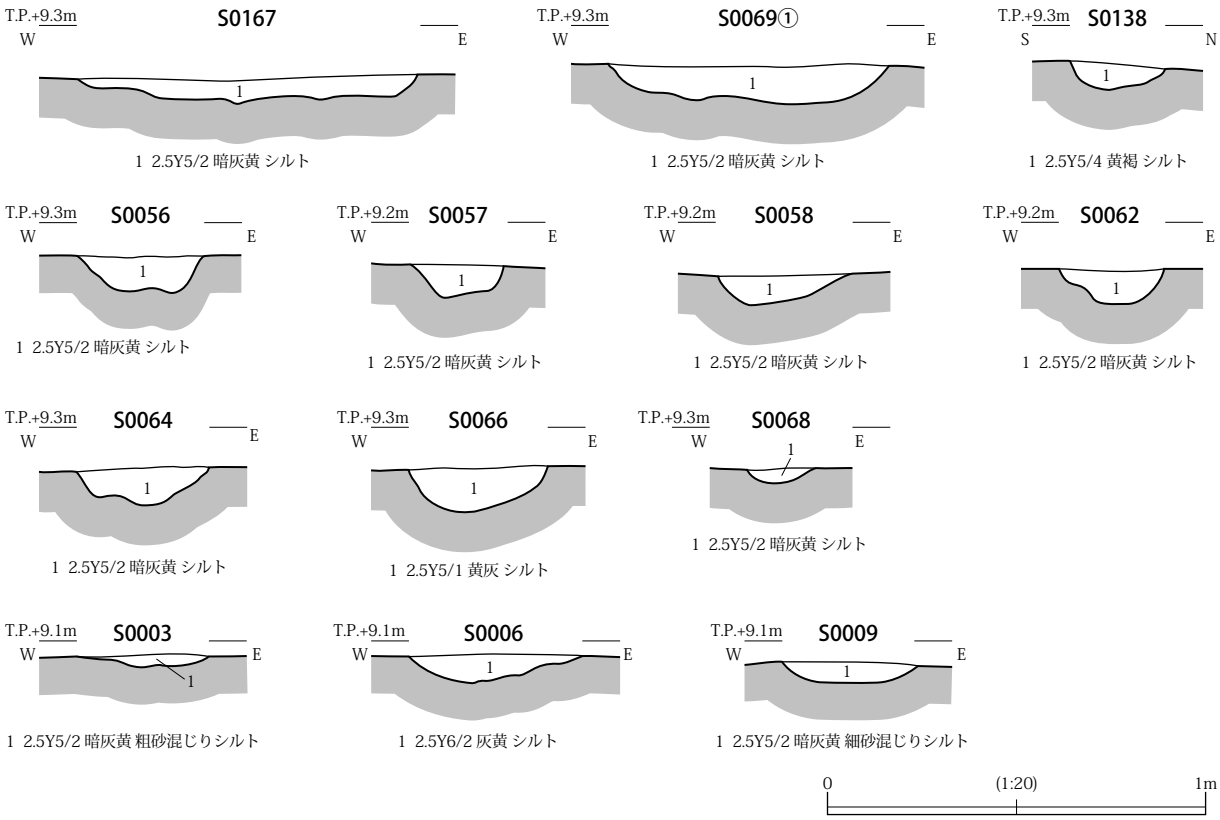


図 12　Ⅰ－a 区東半遺構断面図

となる。幅は約 0.75 m、深さ 0.1 ～ 0.25 mをはかる。断面は皿形を呈する。

詳細な時期は不明だが、この溝を切る東西溝 S0065 から黒色土器 B 類が出土しているので、平安時代中期の遺構と考えられる。掘立柱建物 1 の東列に平行に位置することや規模が他の溝より大きいことから、掘立柱建物 1 等の居住域を囲む、東の区画溝とも考えられる。

溝 S0138（図 12）

掘立柱建物 1 の北列に平行して東西に長くのびる溝である。

溝 S0138 のさらに北側にも約 1.5 mの等間隔で東西溝が数条走る。溝 S0138 より南には溝 S0069 などの南北溝が多数走り、南北溝と東西溝が交差するが、東西溝が南北溝を切る。

等間隔で並ぶが、間隔が狭いことから耕作溝の可能性が高い。しかし、溝 S0138 とそれより約 10 m南にある溝 S0065 は、ちょうど掘立柱建物 1 の北列と南列に位置することから、掘立柱建物 1 を囲む区画溝の役割を果たしていたとも考えられる。

溝 S0138 からは黒色土器 A 類の椀が出土している（図 68 － 18）。およそ、平安時代前期末～中期初めの遺構と考える。

土坑 S0056（図 12）

掘立柱建物 1 の南列より南側にあって、東西溝 S0065 と平行する溝を切って検出した。

円形の土坑である。柱穴の可能性もある。

直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土師器皿や土師器甕が出土した（図 68 － 1 ・ 2）。平安時代前期のものである。

溝 S0057（図 12、写真図版５－３）

溝 S0069 から始まる南北溝群の中では最も西に位置する溝である。北端は溝 S0065 に、南端は試掘４トレンチによって切られる。

長さ 7.0 m、幅 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

溝 S0057 から溝 S0068 までは一連の関連性のある溝群と考えられる。遺物は出土していない。

溝 S0058（図 12、写真図版５－３）

溝S0057の東に位置する南北溝である。北端は溝S0065に、南端は試掘４トレンチによって切られる。

長さ 7.2 m、幅 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

溝 S0058 からは黒色土器Ａ類や黒色土器Ｂ類が出土しており（図 68 －３・４）、平安時代前期後半から中期前半の年代が与えられる。平行する他の溝からは遺物が出土しないが、関連性のある遺構とするなら、すべてこの時期におさまるものだろう。

溝 S0062（図 12）

溝 S0058 の東に位置する南北溝である。北端は溝 S0168 と合流して溝 S0151 となり、南端は試掘４トレンチのさらに南まで延長する。

長さ 13.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0064（図 12）

溝S0062の東に位置する南北溝である。北端は溝S0065に、南端は試掘４トレンチによって切られる。

長さ 7.4 m、幅 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0065（図９）

掘立柱建物１の南列に平行する東西溝である。西端は調査区外にのび、東端は溝 S0069 と接して止まる。掘立柱建物１の柱穴 S0094 や柱穴 S0095 に切られるが、南北溝を切る。比較的しっかりとした溝であり、掘立柱建物１に付随して区画溝や排水溝などの機能を要していたとも考えられる。

長さ 8.8 m、幅 0.5 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0066（図 12）

掘立柱建物１の東辺の内側に平行する南北溝である。

長さ 5.7 m、幅 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0068（図 12）

溝 S0064 の東、溝 S0069 の西に位置する南北溝である。溝 S0057 から溝 S0064 までの南北溝よりやや幅が狭く、長さも短い。

長さ 6.3 m、幅 0.17 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0003（図 12）

Ⅰ－ａ区東半の北東端で検出した。南北方向の溝である。途中で途切れて再び出現する。

長さ 8.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

Ⅰ－ａ区東半の北側では溝 S0003 から始まる南北溝群以外にも、やや斜め方向の溝群、西側でも南北方向の溝群、撹乱を挟んでそれより南には東西方向の溝群など、いくつかのかたまりでみられる。いずれも同規模の溝が等間隔で並ぶ。

溝 S0006（図 12）

Ⅰ－ａ区東半の北東端で検出した。南北方向の溝で、溝 S0003 の西に位置する。

長さ 9.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0009（図 12）

Ⅰ－ａ区東半の北東端で検出した。南北方向の溝で、溝 S0006 の西に位置する。溝 S0003、溝 S0006、溝 S0009 とそのさらに西の溝も含めて約 2.0 mの等間隔に並んでいることから、これらの溝は耕作溝と考えられる。

長さ 9.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

Ⅰ－ａ区東半で検出した遺構は、主に西側中央でみられる掘立柱建物 1 とその周辺の柱穴、溝などが主要である。時期的にも平安時代前期後半～中期に限定される。遺構数は少ないが、古代の居住域の一部を検出したと言える。東側でも耕作溝とみられる南北や東西の等間隔の鋤溝を検出しているが、これはより新しい時期の遺構であろう。

土坑 S0315（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の北西部、Ⅰ－ａ区南端との境界で検出した。溝 S0327 の西に位置する。

ほぼ円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は水平に堆積する。土器片を含むが、時期は不明である。

土坑 S0328（図 13、写真図版８－４）

Ⅰ－ｂ１区の北端、中央よりやや東で検出した。溝 S0330 の西に位置する。

ほぼ円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土は水平に堆積する。下層から土器片が出土しているが、時期は不明である。

溝 S0353（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の東端で検出した。南北方向の溝であり、XY 座標軸に沿った方向よりわずかに東に傾く。長さ 13.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。時期は不明である。

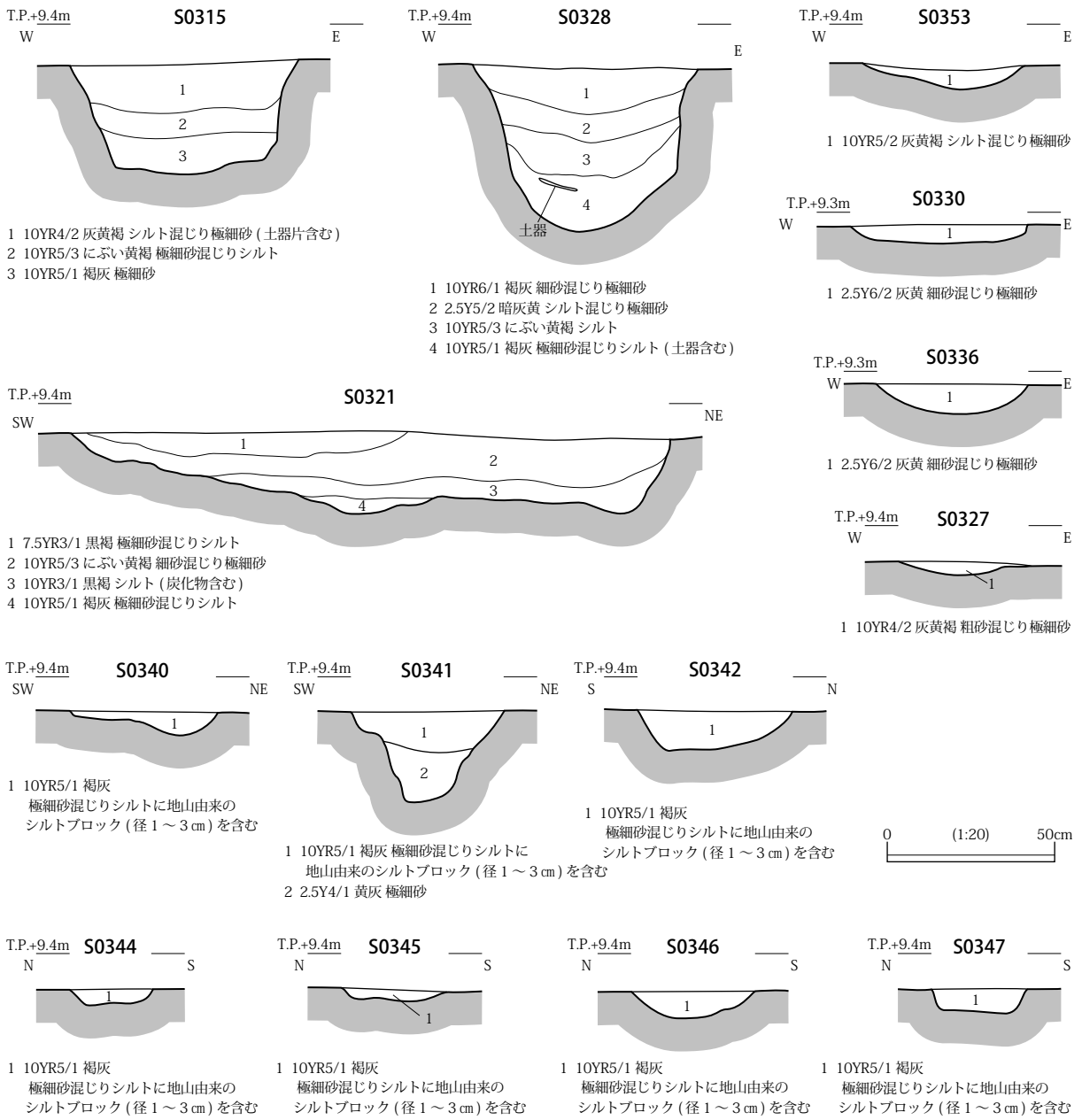


図 13　Ⅰ－ｂ１区遺構断面図

溝 S0330（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の東側で検出した。溝 S0336 の西、溝 S0327 の東に位置する。

Ⅰ－ａ区から続く南北方向の溝であり、南はⅠ－ｂ１区の外にのびている。ほぼ正方位を走る。溝 S0336 とは約 4 mの間隔で平行である。

Ⅰ－ａ区からも含めると長さは約 37.0 mになる。幅 0.55 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物はわずかに出土しているが、時期は不明である。

溝 S0336（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の東側で検出した。溝 S0330 の東に平行して位置する。

南北方向の溝であり、ほぼ正方位となる。北はⅠ－ａ区から続き、南はⅠ－ｂ１区よりさらにのびる。Ⅰ－ａ区からも含めると長さは 30.8 mになる。幅 0.45 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。

遺物は出土しているが、時期は不明である。

Ⅰ－ａ区西端でみられた南北溝群と比較すると、溝 S0330 と溝 S0336 との間隔が４ｍと約２倍あり、長さが長い点が異なる。ただし、Ⅰ－ａ区西端の溝 S0058、溝 S0062 がⅠ－ｃ２区北端で検出される溝につながる可能性も高く、そうするとⅠ－ａ区西端の溝も 20 ｍの長さがあることになる。

土坑状変形 S0321（図 13、写真図版８－３）

Ⅰ－ｂ１区の西端中央で検出した。長円形の土坑である。

長径 3.6 ｍ、短径 1.8 ｍ、深さ 0.25 ｍをはかる。断面は逆台形を呈する。

断面をみると埋土に不自然な変形がみられることから、地震による影響を受けたと考えられる。

井上智博によれば、このような「堆積物が、堆積順序をほぼ保って一方向に傾斜した状態で存在する」土坑を、『土坑状変形』と名付けており、これまで風倒木痕とされてきた土坑に、この土坑状変形が一定数含まれるとしている。土坑状変形 S0321 はまさに、南西から北東に堆積物がすべっている様子が断面から観察され、土坑状変形といえる。今回の調査では、他にもⅠ－ｂ２区の北西隅の大形土坑などで、数基であるが土坑状変形が観察できた。

弥生土器壺の底部が出土している（図 69 － 24 、写真図版 42 － 2）。地震の発生した時期は弥生時代後期か、その前後の時期と思われる。

溝 S0327（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の中央で検出した。南北溝であるが、正方位からやや東にふる。

北側は二条の溝が一つに収束していったん途切れる。再び現れて南にのび、東に屈曲して井戸 S0337 によって切られる。

全長約 24.0 ｍ、幅 0.3 ｍ、深さ 0.05 ｍをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

足跡１（S0339、S0340、S0341、S0342、S0343）（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の南東部で検出した足跡で、足跡 S0340、足跡 S0341、足跡 S0342 は一列に並び、この北西にも約２ｍ離れて、同様に列状に並ぶ足跡群が認められる（足跡 S0339、足跡 S0343 など）。その北西にも４ｍないし２ｍの間隔で同様の列が認められる。いずれも列であることに意味がある、関連性のある遺構と捉えられる。

『池内遺跡３』でも轍の近くに同様の２列の足跡群が認められ、牛馬の足跡として報告されており、足跡 S0340 や足跡 S0341、足跡 S0342 は連続する足跡として捉えられる。

足跡 S0340 は長円形である。長径 0.5 ｍ、短径 0.45 ｍ、深さ 0.05 ｍをはかる。断面は皿形を呈する。

足跡 S0341 はⅠ－ｂ１区の南東部で検出した。足跡 S0340 の南に位置する。長円形である。長径 0.5 ｍ、短径 0.45 ｍ、深さ 0.25 ｍをはかる。断面は逆台形を呈する。

足跡 S0342 はⅠ－ｂ１区の南東部で検出した。足跡 S0341 の南に位置する。ほぼ円形である。直径 0.45 ｍ、深さ 0.1 ｍをはかる。断面は皿形である。いずれの足跡からも、遺物は出土していない。

足跡 S0344（図 13）

Ⅰ－ｂ１区の南東部で検出した。溝 S0336 の南東に位置する。

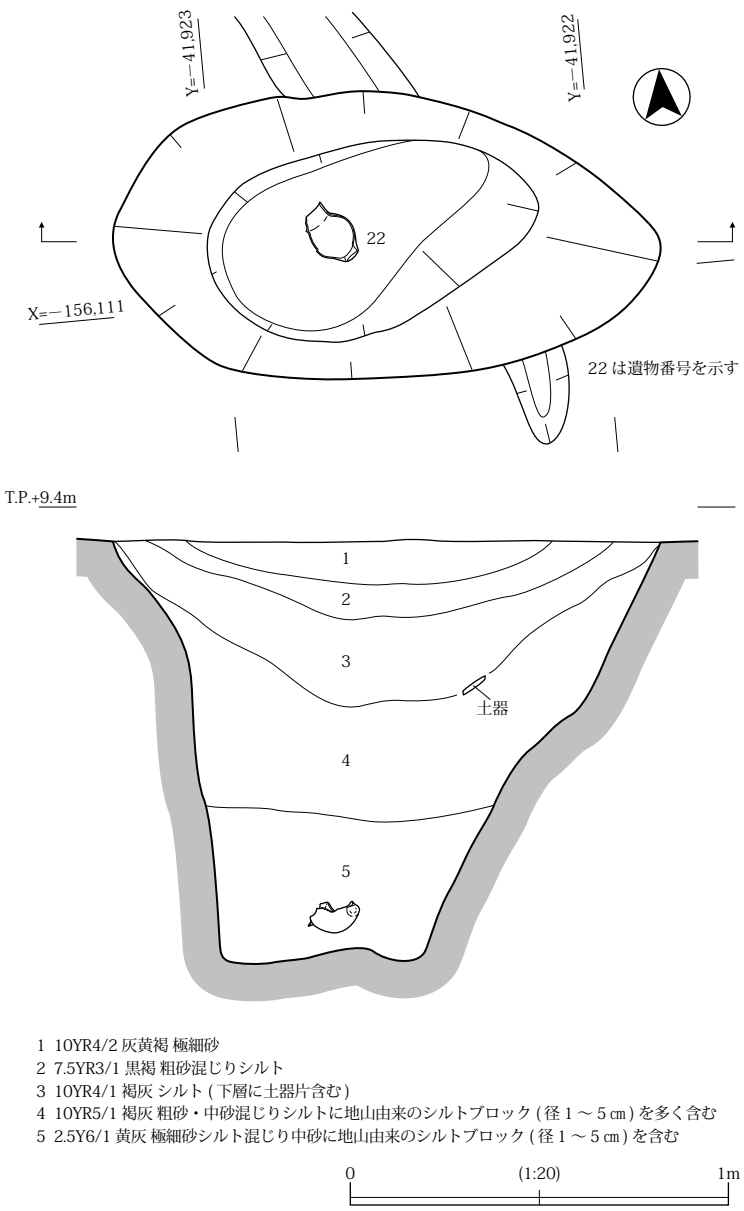


図 14　Ⅰ－ｂ 1 区 S0337 平・断面図

北東の足跡 S0339 から南西の足跡 S0343 までの足跡の並び、足跡 S0340・足跡 S0341・足跡 S0342 の並びより南東にも、足跡 S0344 から足跡 S0347 が列をなして並ぶ。

長円形で、長径 0.5 m、短径 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

足跡 S0345（図 13）

Ⅰ－ｂ 1 区の南東部で検出した土坑で、土坑 S0344 の南西に位置する。

長円形で、長径 0.5 m、短径 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

足跡 S0346（図 13）

Ⅰ－ｂ 1 区の南東部で検出した足跡で、足跡 S0345 の南西に位置する。

長円形で、長径 0.8 m、短径 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

足跡 S0347（図 13）

Ⅰ－ｂ 1 区の南東部で検出した足跡で、足跡 S0346 の南西に位置する。

円形で、直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

井戸 S0337（図 14、写真図版８－５）

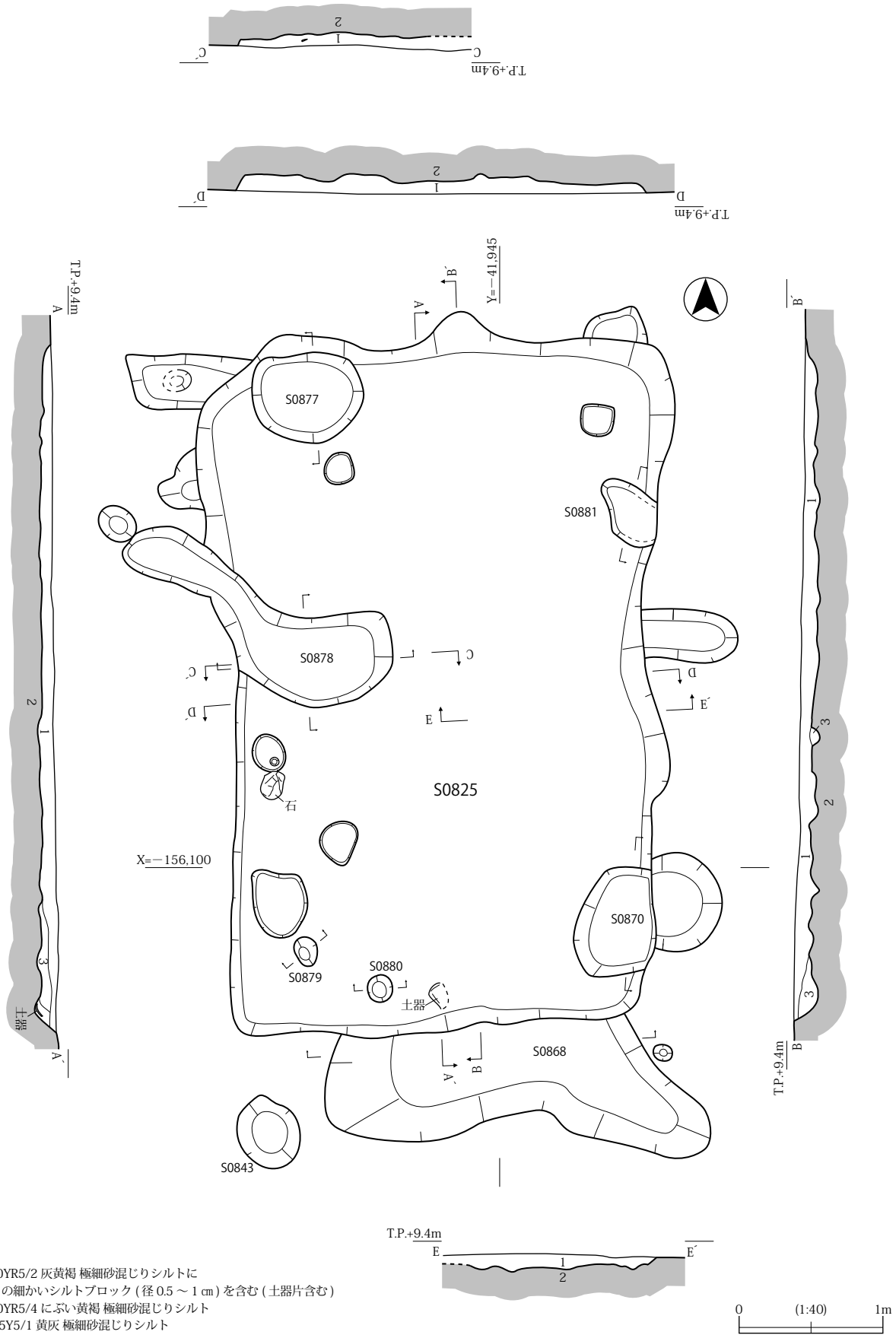
Ⅰ－ｂ 1 区の中央南側、X= － 156,111、Y= － 41,922 ～ Y= － 41,923 間で検出した。溝 S0327 の南端を切る。

東西を長軸とする、やや尖った長円形の遺構である。深さや断面形状から素掘りの井戸と判断した。

長径 1.5 m、短径 0.75 m、深さ 1.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

埋土は水平もしくはたわんだように数層にわたって堆積するので、短期間の埋め戻し等でなく自然の営力により、徐々に埋没したと思われる。

中層から弥生土器甕の破片（図 69 － 23）、最下部からは弥生土器壺（図 69 － 22、写真図版 42 － 1）が出土した。壺は横位になり、口を北西に向けた状態で出土した。ほぼ完形を保っており、弥生時代後期後半のものと考えられる。従って、井戸 S0337 は弥生時代後期の遺構と捉える。



1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに
　2 の細かいシルトブロック (径 0.5 ～ 1 ㎝) を含む (土器片含む)
2 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト
3 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルト

0　(1:40)　1m

図 15　Ⅰ－ｃ２区 S0825 平・断面図

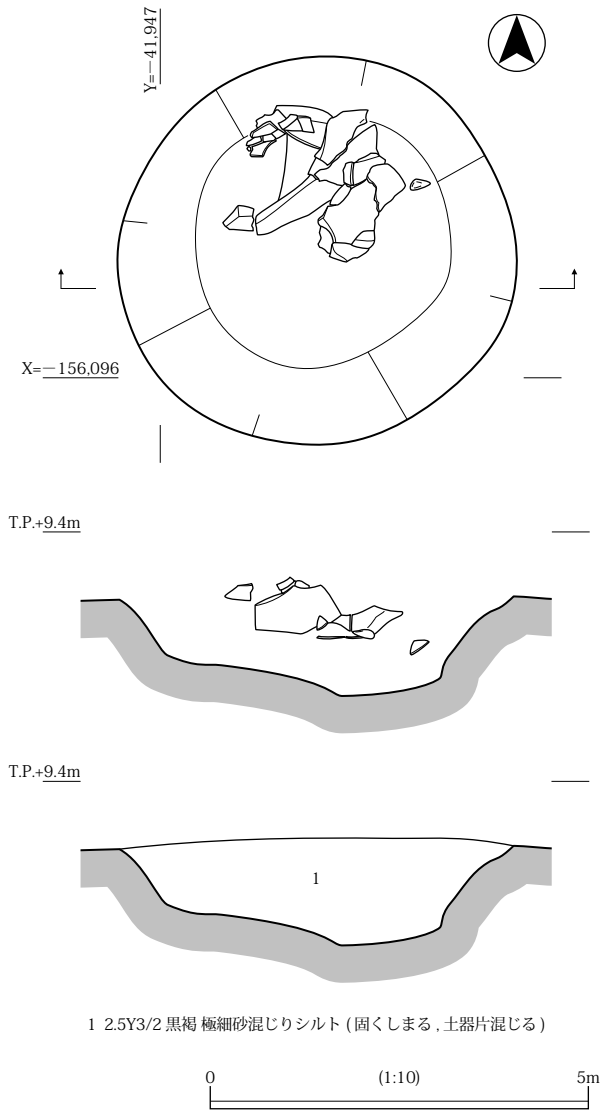


図 16　Ⅰ－ｃ２区 S0835 平・断面図

Ⅰ－ｂ１区で検出される遺構は、Ⅰ－ａ区で検出される遺構より古い、弥生時代後期のものなどが多くなる。包含層の遺物も南に進むほど、古代よりも古い、弥生時代や古墳時代の遺物を包含するようである。

土坑 S0825（図 15、写真図版 10 － 1 ・ 2）

Ⅰ － ｃ ２区の中央、X= － 156,096 ～ X= － 156,102、Y= － 41,943 ～ Y= － 41,948 で検出した。

南北を長軸とする長方形の土坑である。

長辺 4.8 m、短辺 3.0 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

平面形が長方形であることと、土坑 S0825 内に炭化物を含む土坑 S0878 が西辺中央でみられたことから、当初は土坑 S0878 を炉として、竪穴建物の可能性を考えたが、建物を構成するには柱穴の数が十分でないことから建物ではないと判断した。

土坑 S0825 の周辺にも多数の溝もしくは不定形の土坑が検出できるが、ほとんどが土坑 S0825 によって切られている。

遺物も、破片ではあるが土器が一定量出土しており、拳大の礫なども最下部から出土した。土師器杯や須恵器高杯が出土している（図 70 － 28・29、写真図版 42 － 6）。土坑 S0825 は古墳時代中期の遺構と考える。

土坑 S0835（図 16）

Ⅰ － ｃ ２区の中央より北西、X= － 156,096、Y= － 41,947 で検出した。土坑 S0825 の北西角に位置する。

円形の土坑である。直径 0.55 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑内北側で土器が押しつぶされた状態で、土師器の高杯が出土した（図 70 － 32）。従って、土坑 S0835 は古墳時代の遺構と考えられる。

土坑 S0325（図 17、写真図版 11 － 3）

Ⅰ－ｂ１区西端、Ⅰ－ｃ２区東端の両区にまたがって検出した。

東西を長軸とする不整形な土坑である。東西の先端がやや尖った形状である。風倒木痕などの自然地形の可能性が高いが、遺物が出土したため遺構番号を付与した。

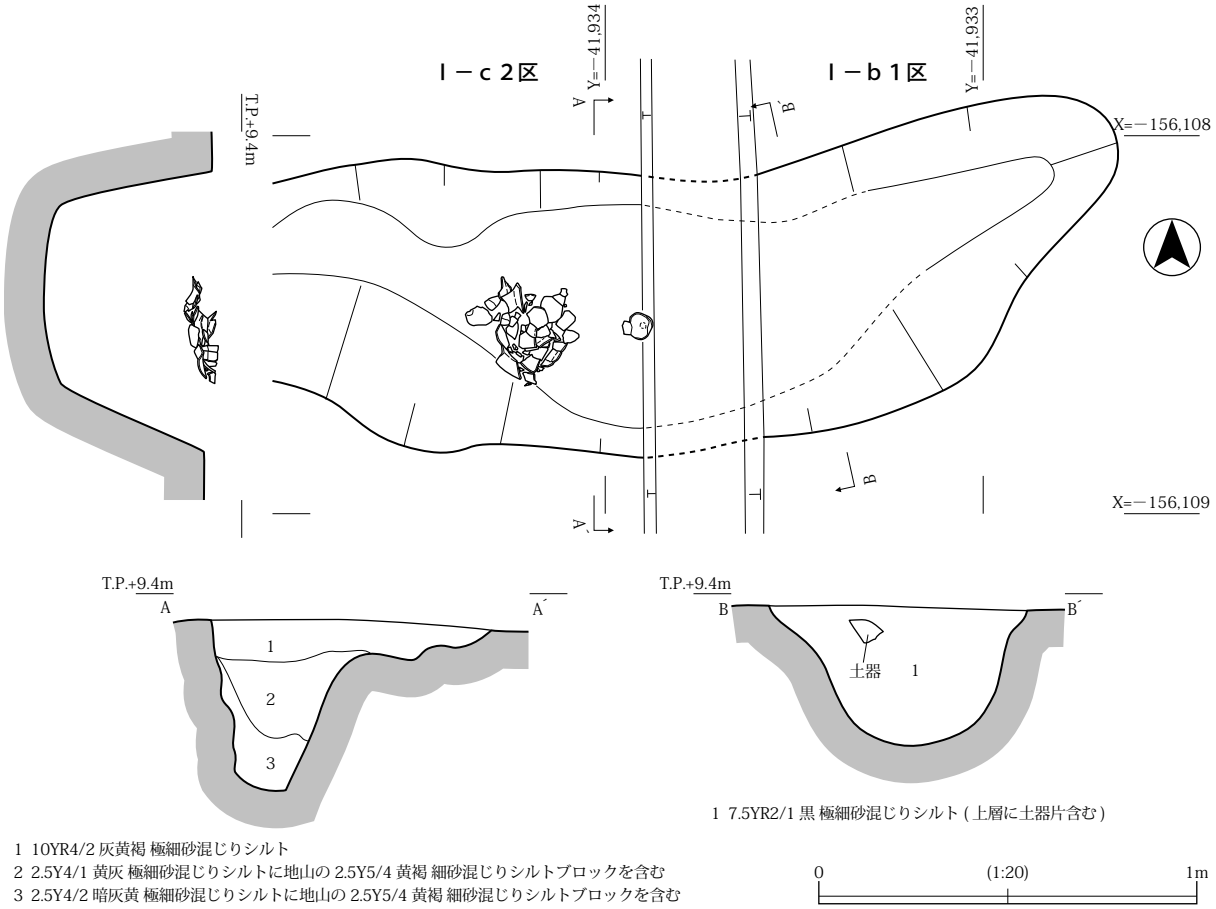


図 17　Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区 S0325 平・断面図

長さ約 2.4 m、最大幅 0.85 m、深さ 0.35 ～ 0.45 mをはかる。断面はU字形を呈する。

中央の比較的上層で土器がかたまって出土した。弥生時代後期の甕や甕底部である（図 70 － 26・27、写真図版 42 － 4）。

従って、土坑 S0325 付近では弥生時代後期に生活、機能していた遺構面があったと考えられる。

土坑 S0881（図 18）

土坑 S0825 内の北東部にある不定形の土坑である。東半は土坑 S0825 に切られる。

残存長 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0878（図 18）

土坑 S0825 内の西端より中央にある不定形の土坑である。

長さ約 2.0 m、幅 0.6 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。

埋土に炭化物を多く含むため、土坑 S0878 は炉跡になるのではと考えたが、確認のため掘り下げていくと平面形が土坑 S0825 より外に広がったため、関連性のない遺構と判断した。遺物は小片が出土するのみである。

土坑 S0877（図 18）

土坑 S0825 内の北西部にある円形の土坑である。土坑 S0877 に対角方向となる南東部にも同規模の

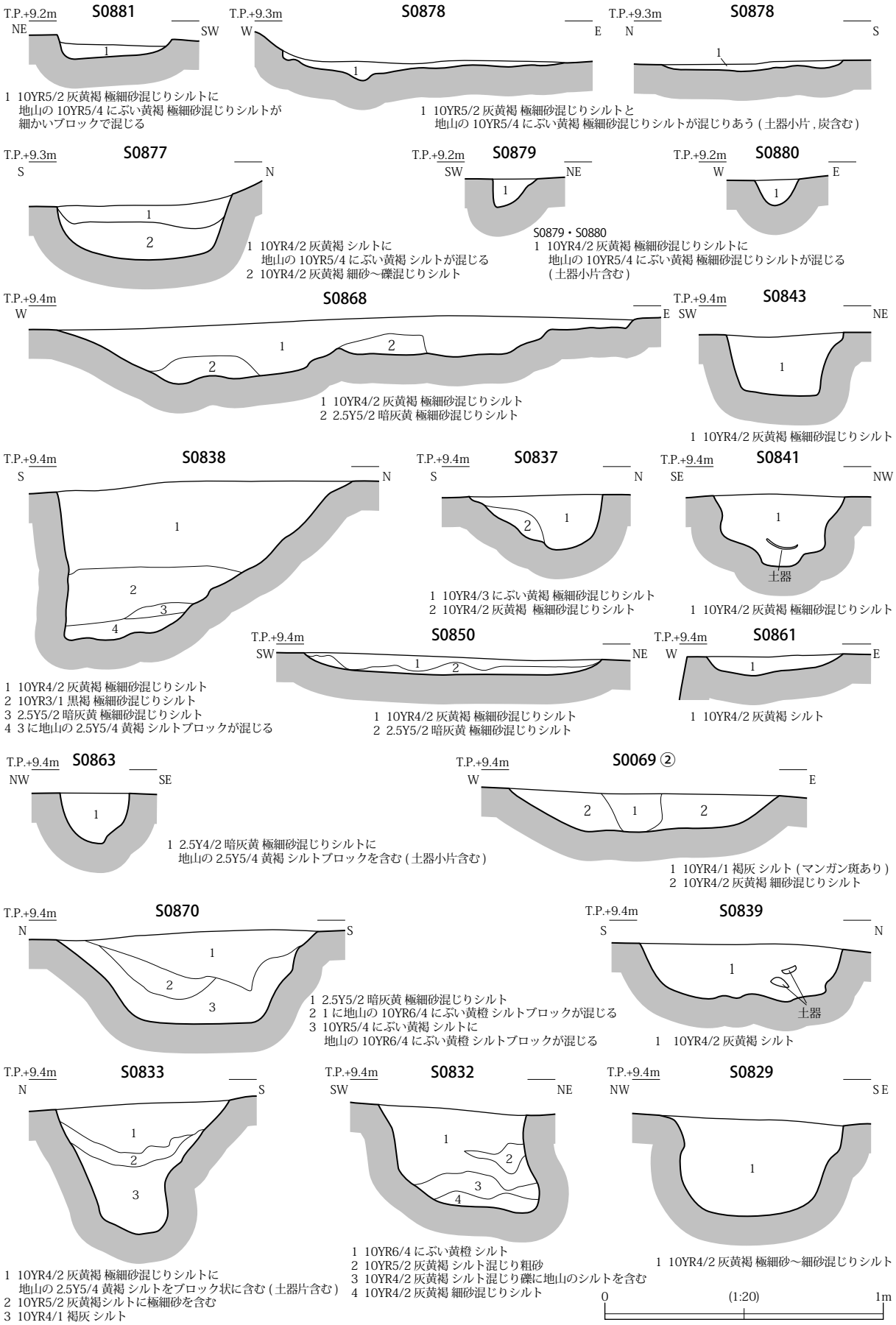


図 18　Ⅰ－ｃ２区遺構断面図（１）

円形土坑 S0870 がある。

直径 0.6 ～ 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

土坑 S0879（図 18）

土坑 S0825 内の南西部にある円形の小土坑である。

直径 0.15 m、深さ 0.1 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。土器の小片を含む。

土坑 S0880（図 18）

土坑 S0825 内の南西部にある円形の小土坑である。土坑 S0879 の南東にある。

直径 0.15 m、深さ 0.1 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。土器の小片を含む。

土坑 S0868（図 18）

土坑 S0825 の南にある不定形の土坑である。土坑 S0825 に切られる。

長さ 2.1 m、幅 1.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0843（図 18）

土坑 S0825 の南、土坑 S0868 の西にある円形の土坑である。

直径 0.4 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

風倒木痕 S0838（図 18）

Ｉ－ｃ２区の北側中央にある不定形の風倒木痕である。南に存在する風倒木痕 S0837 と対をなし、馬蹄形の土坑になる。今回の調査でも多くみられる、風倒木痕と考えられる。溝 S0069 に切られる。

長さ 4.5 m、最大幅 1.1 m、深さ 0.55 mをはかる。断面は逆台形である。遺物は出土しているが、時期は不明である。

風倒木痕 S0837（図 18）

Ｉ－ｃ２区の北側中央にある不定形の風倒木痕である。北にある風倒木痕 S0838 と対をなし、馬蹄形になる。今回の調査でも多くみられる、風倒木痕と考えられる。溝 S0069 に切られる。

長さ 3.5 m、最大幅 1.0 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

中央で土器がかたまって出土した。土師器壺の体部である（図 70 － 30、写真図版 42 － 5）。この土器の破片と土坑 S0825 出土資料が接合した。古墳時代のものである。

土坑 S0841（図 18、写真図版 11 － 2）

Ｉ－ｃ２区の北側中央にある円形の土坑である。

直径 0.5 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈するが、側面の凹凸が激しい。

底部からほぼ完形の土師器杯が、内面が上を向けた状態で出土した（図 70 － 35、写真図版 42 － 3）。平安時代前期の遺構である。

土坑 S0850（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の中央にある不定形の土坑である。溝S0861によって切られる。蛇行しながら北西にのび、先端は南に曲がる。

長さ約 4.0 m、最大幅 1.1 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。時期は不明である。

溝 S0861（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の中央にある南北方向の溝である。溝 S0069 がいったん途切れて、その南に溝 S0861 が現れるので別の遺構番号を付与したが、溝 S0069 の続きである可能性が高い。

長さ約 5.5 m、最大幅 0.5 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0863（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北西部にある、円形の土坑である。

直径 0.25 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

溝 S0069（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北側中央にある南北方向の溝である。Ⅰ－ａ区からⅠ－ｃ２区まで延伸しており、上述のように南は溝 S0861 につながる可能性が高い。その場合、総延長約 35 mをはかる溝となる。

Ⅰ－ｃ２区内での長さは約 7.5 m、最大幅 1.0 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

Ⅰ－ｃ２区出土遺物では時期は判断できないが、Ⅰ－ａ区からの一連の遺構とすると、平安時代中期の遺構と言える。

土坑 S0870（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の中央にある、東西に長軸をもつ長円形の土坑である。土坑 S0825 に切られる。

長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。時期は不明である

土坑 S0839（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北側中央にある円形の土坑である。溝 S0861 を切る。

直径 0.75 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。ほぼ完形の蛸壺が出土した（図 70 － 36、写真図版 58 － 2）。器形から弥生時代中期末から後期初めのものである。

土坑 S0833（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北西隅にある円形の土坑である。南北の溝に切られる。

直径 0.6 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土に土器を含むが、時期は不明である。また、埋土は第２層の灰黄褐色シルトに地山の黄褐色シルトが細かいブロックとなって混じり合う。

土坑 S0832（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北西部にある長円形の土坑である。

長径 0.8 m、短径 0.55 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は袋状を呈する。壁面が垂直ではなく、東

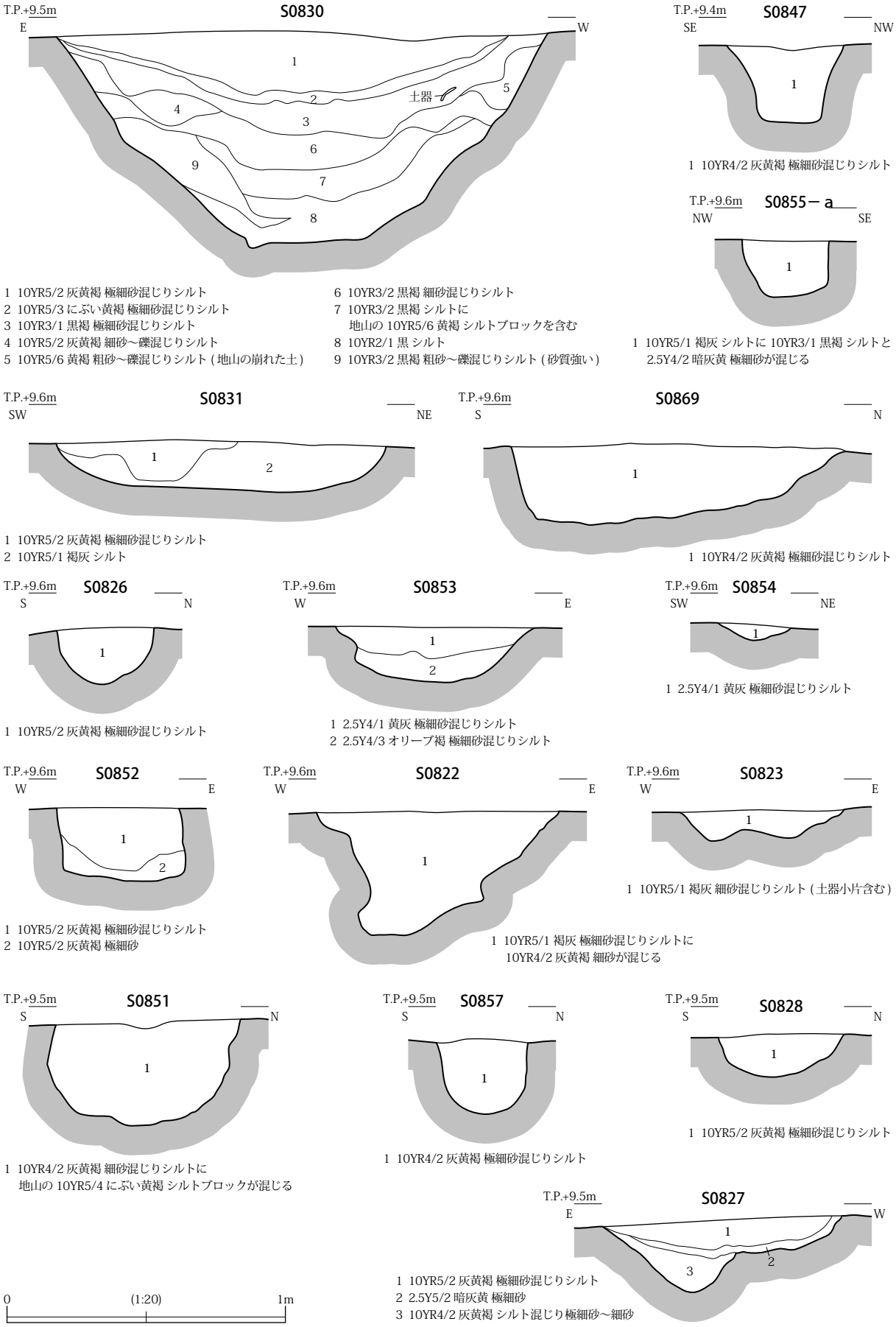


図 19　Ⅰ－ｃ２区遺構断面図（２）

にえぐられて掘削されている。埋土も層位が乱れて堆積し、各層の中に地山のシルトがブロック状となって含まれる。遺物は出土しているが、時期は不明である。

土坑 S0829（図 18）

Ⅰ－ｃ２区の北端中央にある円形の土坑である。

直径 0.6 m、深さ 0.35 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

井戸 S0830（図 19、写真図版 11 － 1 ）

Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の大形土坑である。土坑 S0831 に切られる。

直径 1.8 m、深さ 0.8 mをはかる。断面は椀形を呈する。規模から素掘りの井戸と判断した。

埋土は何層にもわたって、中心が下方にたわむ。堆積がみられ、中層には土器片を含む。下層にはシルトのブロックを含み、Ⅰ－ｂ２区で検出された土坑群のような、黒色シルトと灰黄褐色シルトが互層になる状況を示す。この遺構を切る土坑 S0831 から弥生時代後期末から古墳時代初めの土器が出土しているので、井戸 S0830 は同時期か、それ以前の遺構と言える。

土坑 S0847（図 19）

Ⅰ－ｃ２区の南東部にある円形の土坑である。他の土坑からややはずれた場所に位置する。

直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0855 － a（図 19）

Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の土坑である。土坑 S0869 の南西に位置する。

直径 0.3 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0831（図 19）

Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の大形の土坑である。井戸 S0830 を切る。

直径 1.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

土師器高杯の裾部が出土している（図 70 － 33）。弥生時代後期末から古墳時代初めのものである。

土坑 S0869（図 19）

Ⅰ－ｃ２区の南西部にある隅丸方形の大形の土坑である。轍とみられる細い溝に切られる。

東西方向を長軸とする。長辺 2.5 m、短辺 1.2 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

土坑 S0826（図 19）

Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の土坑である。土坑 S0827 の西に位置する。

直径 0.35 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0853（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の大形の土坑である。土坑 S0854 に切られる。
直径 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0854（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の小さな土坑である。土坑S0853の北西に位置し、土坑S0853を切る。
直径 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0852（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の土坑である。
直径 0.4 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0822（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南西部にある、長円形の大形の土坑である。土坑 S0823 に切られる。
南北方向を長軸とし、長辺 1.4 m、短辺 0.9 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は袋状を呈する。
埋土は単層だが、やはり第２層の土に地山の細砂からシルトのブロックが混じり、短期間で埋め戻しが行われたことを示唆する。弥生時代後期の高杯が出土している（図 70 － 31）。

土坑 S0823（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南西部にある円形の土坑である。土坑 S0822 の北東に位置し、土坑 S0822 を切る。
直径 0.6 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。土坑 S0855―ｂ出土資料と接合する高杯が出土している（図 70 － 34）。

土坑 S0851（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南端中央にある。隅丸方形の大形の土坑である。
東西方向を長軸とする。長辺 1.3 m、短辺 0.7 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。
埋土は単層だが、第２層の土に地山のシルトブロックが混じる。時期は不明である。

土坑 S0857（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南端中央にある。円形の土坑である。
直径 0.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0828（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南端中央にある円形の土坑である。土坑 S0827 の東に位置し、土坑 S0857 と隣接する。
直径 0.45 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0827（図 19）
Ⅰ－ｃ２区の南端中央にある隅丸方形の土坑である。土坑 S0826、土坑 S0851 の東に位置し、土坑

S0828、土坑 S0857 の西に位置する。

南北方向を長軸とする。長辺 1.8 m、短辺 0.85 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆向きの凸形を呈する。時期は不明である。

Ⅰ－ｃ２区の南西部で検出した土坑群は、Ⅰ－ｂ２区で多数検出した土坑群と規模や形状、埋土が似ており、弥生時代後期から古墳時代後期初めの遺構と推測される。

Ⅰ－ｃ２区は北半では、Ⅰ－ａ区東部域から続く古代の遺構を検出したが、南にいくと弥生時代後期から古墳時代中期の遺構が主となり、遺構数も弥生時代後期から古墳時代中期のものの方が多い。

また、Ⅰ－ｃ２区の西側、X=－156,089 ～ X=－156,115、Y=－41,946 ～ Y=－41,948 間で下層の地層を確認するための深掘りトレンチを入れた（写真図版 10－３）。

層序の概略は基本層序模式図に示した（図７）が、地山の基盤層以下は自然堆積による砂礫層となり、T.P.8.5 mでは既往の調査でも報告されている縄文時代に相当する黒色シルト層、第５層が観察される。

表２　掘立柱建物一覧

遺構名称	区名	建物種類	主軸方向	建物規模（間×間）	桁行（m）	梁行（m）	柱間（m）	出土遺物	挿図番号	写真図版番号
掘立柱建物１	Ⅰ－ａ東半	側柱	南－北	2×4(?)	7.4	4.4	1.6 ～ 2.0	黒色土器椀 土師器皿	10	５－２ ７－３
掘立柱建物２	Ⅰ－ｄ１	総柱	南－北	2×3	4.2	2.8	1.5	土師器椀 土師器皿 土師器羽釜	21	20－１～７
掘立柱建物３	Ⅰ－ｄ１	不明	不明	不明	5.6		2.0		22	20－８
掘立柱建物４	Ⅰ－ａ西半	側柱	東－西	4×5 or4×6	7.2	5.2	1.0 ～ 1.6		23	
掘立柱建物５	Ⅰ－ｂ２	総柱	北西－南東	2×2	3.5	3.1	1.5 ～ 1.6		36	14－１
掘立柱建物６	Ⅰ－ｂ２	側柱	東－西？	2(?)×2	3.3		1.5		37	
掘立柱建物７	Ⅰ－ｂ２	側柱	北西－南東	3×4	7.0	5.2	1.8		38	
掘立柱建物８	Ⅰ－ｄ２	総柱	東－西	2×2	4.5	4.0	1.9 ～ 2.0		27	
掘立柱建物９	Ⅰ－ｃ	側柱	東－西	2×3	5.1	3.3	1.7 ～ 1.8		52	29－２ 30－１・２
掘立柱建物 10	Ⅰ－ｃ	側柱	東－西	2×4	8.0	3.6	1.5 ～ 1.8		53	
掘立柱建物 11	Ⅰ－ｃ	側柱	南－北	2×3	5.2	3.8	1.8		54	29－１ 30－３～６
掘立柱建物 12	Ⅱ－ａ	総柱	東－西	2×6	10.8	3.4	1.5 ～ 1.8	黒色土器椀 土師器椀 土師器皿	62	37－１・２ 39－１～６
掘立柱建物 13	Ⅱ－ａ	側柱	南－北	2×3	3.9	2.8	1.5 ～ 1.9		63	38－３
掘立柱建物 14	Ⅱ－ａ	側柱	南－北	2×3	5.0	2.9	1.5 ～ 1.7	黒色土器椀	64	38－３

（２）中央域東半北部（Ｉ－ａ区西半、Ｉ－ｄ１区、Ｉ－ｄ２区）の遺構（図 20 ～ 34、写真図版３・６・７、19 ～ 25）

南北方向の大きな用水路が調査区の中を２箇所縦断しており、それぞれの用水路を東用水路、西用水路と名付けた。２つの用水路に挟まれた調査区を中央域東半、中央域西半とし、中央域東半については遺構が多いこともあり、さらに北部と南部に分けた。

中央域東半北部は X= － 156,016 ～ X= － 156,077、Y= － 41,955 ～ Y= － 42,009 に位置する。南北長約 60 m、東西幅約 50 mの範囲である。調査区としてはＩ－ａ区西半、Ｉ－ｄ１区、Ｉ－ｄ２区が含まれる（図 20）。中央域東半北部は正方形に近い形である。

遺構面の標高は、北側（Ｉ－ｄ２区北壁）が T.P.9.2 m、南側（Ｉ－ｄ２区南壁）が T.P.9.4 mである。

Ｉ－ｄ１区は中央域東半北部の中では北東に位置し、面積は全調査区中で最小の 239 ㎡である。遺構は少なく、北東部に集中してみられる。掘立柱建物２と掘立柱建物３の南柱列を検出した。掘立柱建物などは平安時代前期から中期の遺構であるが、弥生時代後期などの遺物も認められる。

Ｉ－ａ区西半は、Ｉ－ｄ１区の南、Ｉ－ｂ２区の東にあたる南北に長い調査区である。調査面積は約 1105 ㎡である。掘立柱建物４や柱穴、土坑、井戸、溝、轍などを検出した。全体に遺構密度が高いが、東や南にいくと疎らになる。これはＩ－ｂ２区に近い南端から約８ｍの区域は、上層の構造物築造の際に撹乱されているためである。

全体では、平安時代の遺構が多いが、一部に古墳時代中期の遺構も認められる。

Ｉ－ｄ２区は、中央域東半北部の中でも西部に位置する調査区で、調査面積は約 1612 ㎡である。東端は現代の南北用水路が通っていたため、東西に２～３ｍの幅で大きく撹乱されている。

遺構は多く全域にみられるが分布は北と南に多く、中心はやや希薄である。特筆すべき遺構は、Ｉ－ｄ２区の西中央をやや西寄りに南北に縦断し、西に曲がってＩ－ｃ区へと続いていく溝 S0772 の存在である。また、Ｉ－ａ区西半でいくつか検出した轍が、この調査区ではどれが対になるか分らないほど無数に検出されている。

溝 S0772 の他には、中央から北では、掘立柱建物や柱穴、土坑、溝などが検出されており、主に古代の遺構である。南にいくと土坑の割合が多くなり、これは、後述するＩ－ｂ２区からの古墳時代の土坑群の続きと考えられる。

Ｉ－ｄ２区は古墳時代、平安時代の遺構が混在すると言える。

掘立柱建物２（図 21、写真図版 19・20）

Ｉ－ｄ１区の北東部で検出した。梁行２間、桁行３間の総柱建物である。南北方向を長軸とし、中軸線はほぼ正方位となる。柱間は約 1.5 mである。

柱穴の平面形は円形で、直径 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.4 m程度のものが多い。断面は逆台形もしくはＵ字形を呈する。

柱穴 S0900 のみ、掘形の中心に柱根が残っていた（写真図版 20 － 5）。柱根は直径 0.1 m未満である。他は中心に柱痕が確認できるものもあるが、直径 0.1 m程度である。

ほとんどの柱穴の埋土は単層で、包含層（第２層）に地山の土の細かいシルトブロックを含む。

柱穴 S0894 の上層から土師器椀や土師器皿、土師器羽釜が出土している（図 71 － 41 ～ 43、写真図版 50 － 1）。いずれも平安時代前期後半から中期前半のものである。

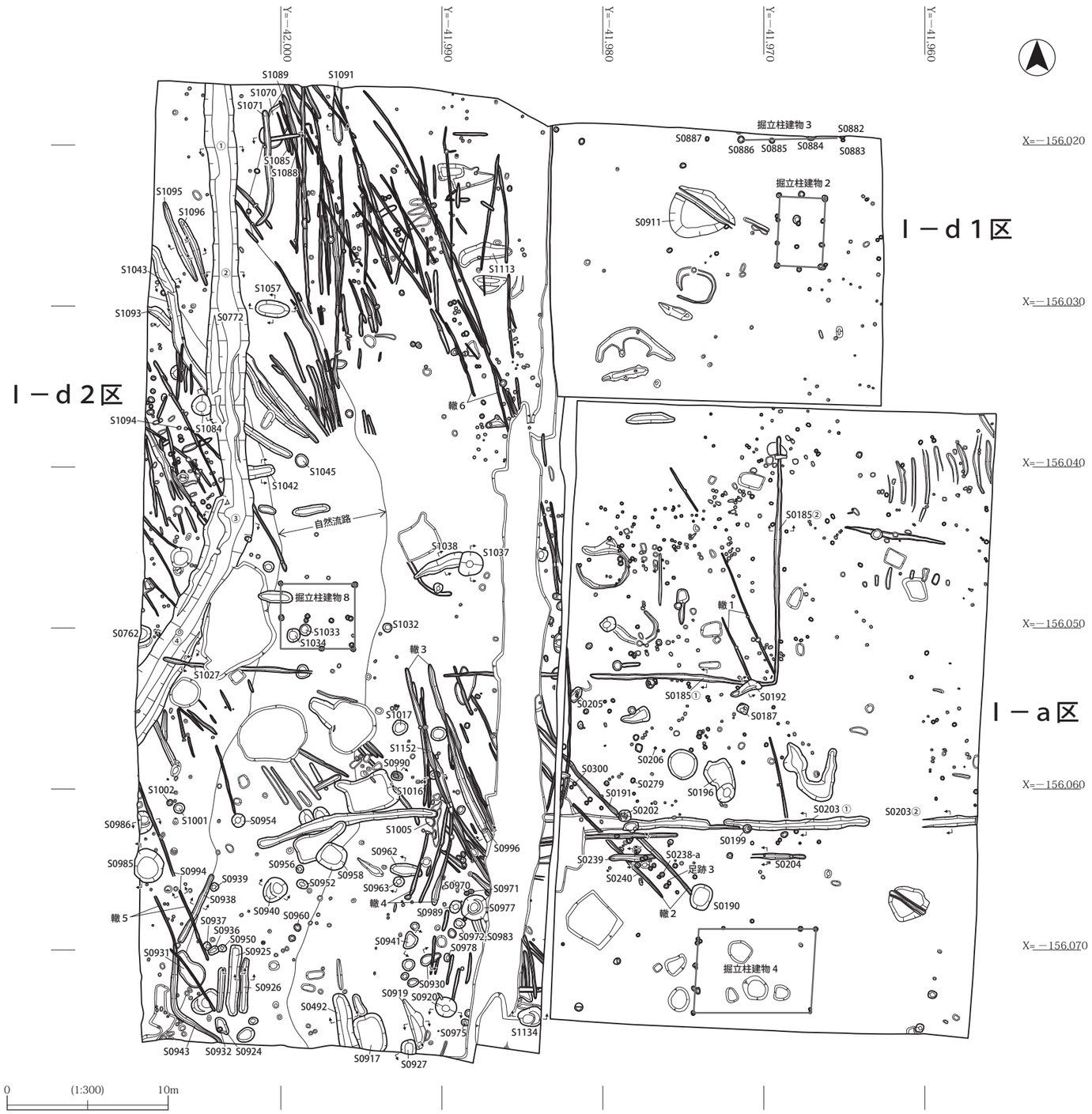
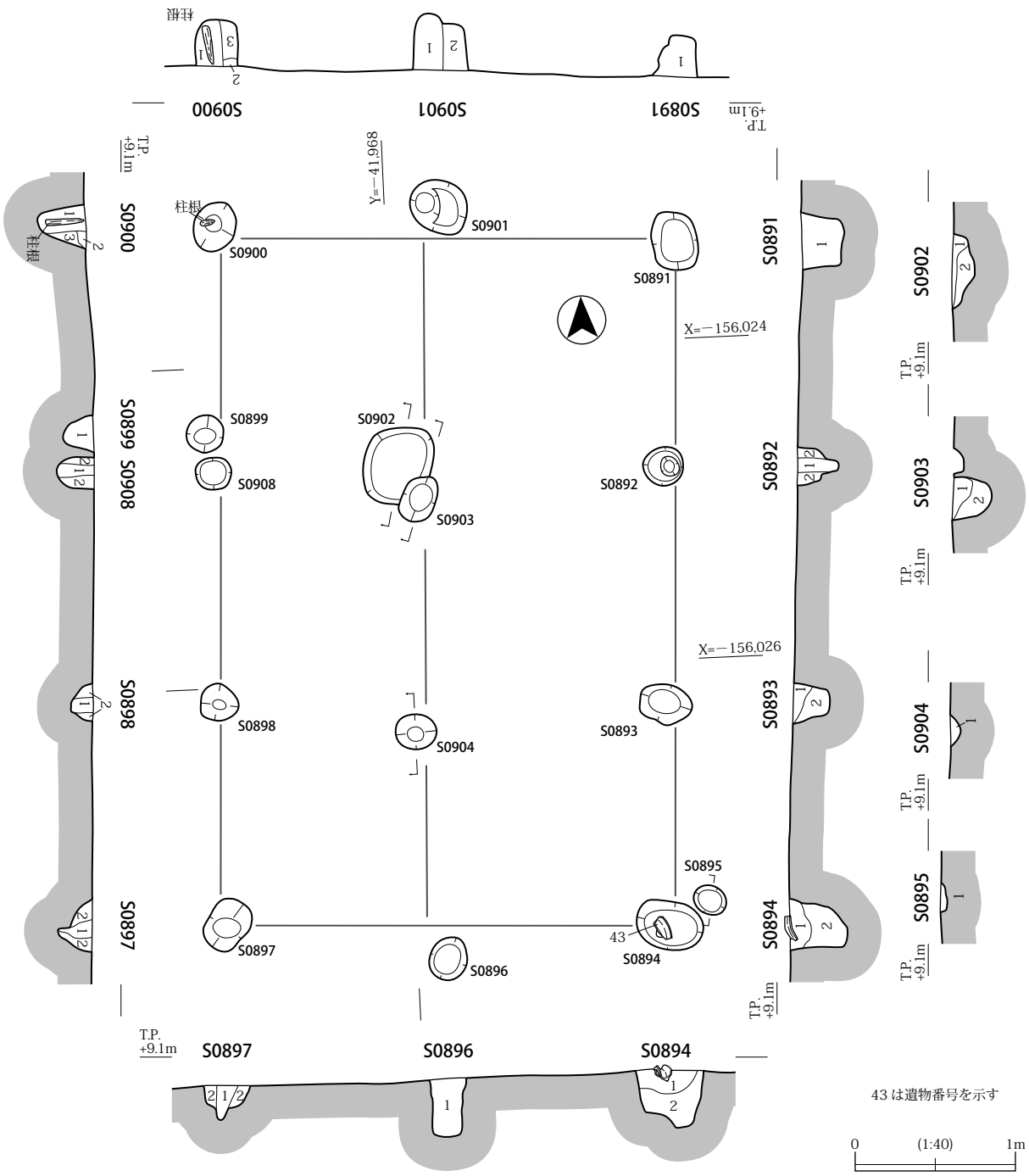


図 20　中央域東半北部（Ⅰ−ａ区西半、Ⅰ−ｄ１区、Ⅰ−ｄ２区）平面図



S0891
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂～細砂混じりシルト
(マンガン斑含む)
S0892
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y4/1 黄灰 極細砂混じりシルト
S0893
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (炭化物含む)
2 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
S0894
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (炭化物含む)
2 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
S0895
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0896
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0897
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルト細かいブロックを含む
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルトの細かいブロックを含む
S0898
1 2.5Y4/1 黄灰 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルトのブロック
(径 3 ㎝以上) を含む
S0899
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0900
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
3 2 に地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルトのブロックを含む
S0901
1 2.5Y4/1 黄灰 粗砂～礫混じりシルト
2 1 に地山の 2.5Y5/6 黄褐シルトブロックを含む
S0902
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルト
S0903
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂～粗砂混じりシルト
S0904
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
S0908
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルトの細かいブロックを含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/6 黄褐 シルトの細かいブロックを含む

図 21　Ⅰ－ｄ１区掘立柱建物２平・断面図

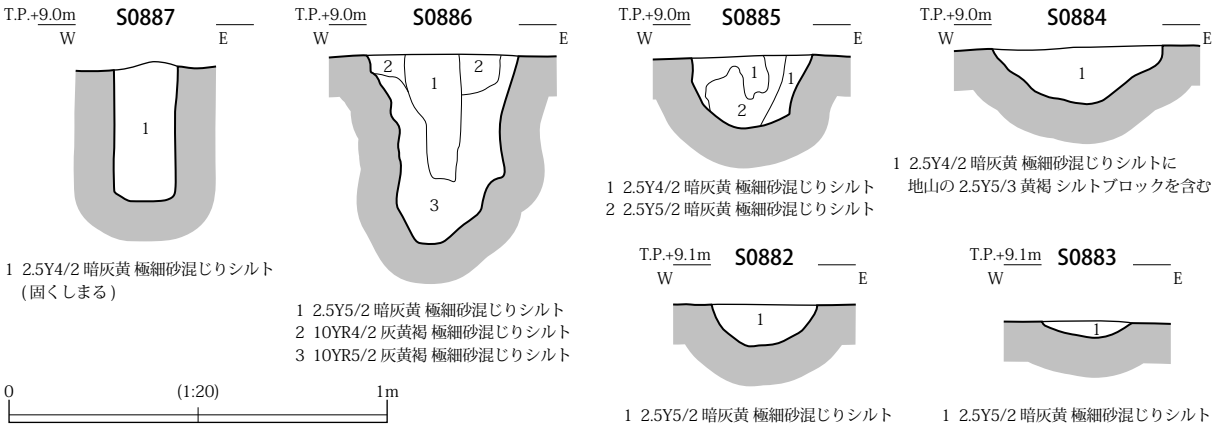


図 22　Ⅰ－ｄ１区掘立柱建物３断面図

他の柱穴からは時期の分かる遺物が確認されていないが、掘立柱建物２は、遺物の時期と建物柱穴の規模などから平安時代前期後半から中期前半の遺構と考えられる。

掘立柱建物３（図 22、写真図版 19・20）

Ⅰ－ｄ１区の北東端で、掘立柱建物２の北に等間隔に並ぶ柱穴を６基検出した。

柱間は 2.0 mで並ぶことから、掘立柱建物の南側柱になると推定し、掘立柱建物３とした。５基の柱穴のうち柱穴 S0887 は柱穴の平面規模も小さく、掘立柱建物３から除外した。掘立柱建物３は、Ⅰ－ｄ１区では南列のみ検出したことになる。軸線は正方位よりやや南にふる。

柱穴は大小があるが、最も残りが良い柱穴 S0886 の場合、直径 0.4 m、深さ 0.5 mをはかる（写真図版 20 － 8）。断面はＵ字形を呈する。中心に直径 0.1 mの柱痕跡が認められる。

いずれの柱穴からも遺物が出土していないが、相関するものと捉えると掘立柱建物２と同時期の遺構と考えられる。

風倒木痕 S0911（図 20）

Ⅰ－ｄ１区の中央よりやや北で検出した。掘立柱建物２の西に位置する。

大形の不定円形を呈する。自然の風倒木痕の可能性が高い。

長径 4.1 m、短径 3.5 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。弥生土器壺底部が出土した（図 71 － 44、写真図版 50 － 1）。

Ⅰ－ｄ１区では他にも風倒木痕や小穴などを多数検出したが、遺構でないと判断した。比較的遺構密度が低く、遺物もきわめて少ない。掘立柱建物など平安時代前半の遺構が主と言える。

掘立柱建物４（図 23）

Ⅰ－ａ区西半の南端中央、X= － 156,068 ～ X= － 156,074、Y= － 41,967 ～ Y= － 41,975 で検出した。

Ⅰ－ａ区西半は、X= － 156,065 辺りから南は撹乱によって遺構面が削平され、検出地表高は本来の高さより低くなっている。掘立柱建物４として検出した柱穴は、どれも平面形、深さとも他の掘立柱建物に比べると小さく、浅いが、これも本来の地表面より下位で遺構を検出したためと考えられる。

南北を梁行、東西を桁行とする、梁行４間、桁行５間または６間と推測される側柱建物である。中軸線が正方位よりやや北東にふる。西柱列以外は柱穴の検出状況はよくないが、西柱列の柱間から推定す

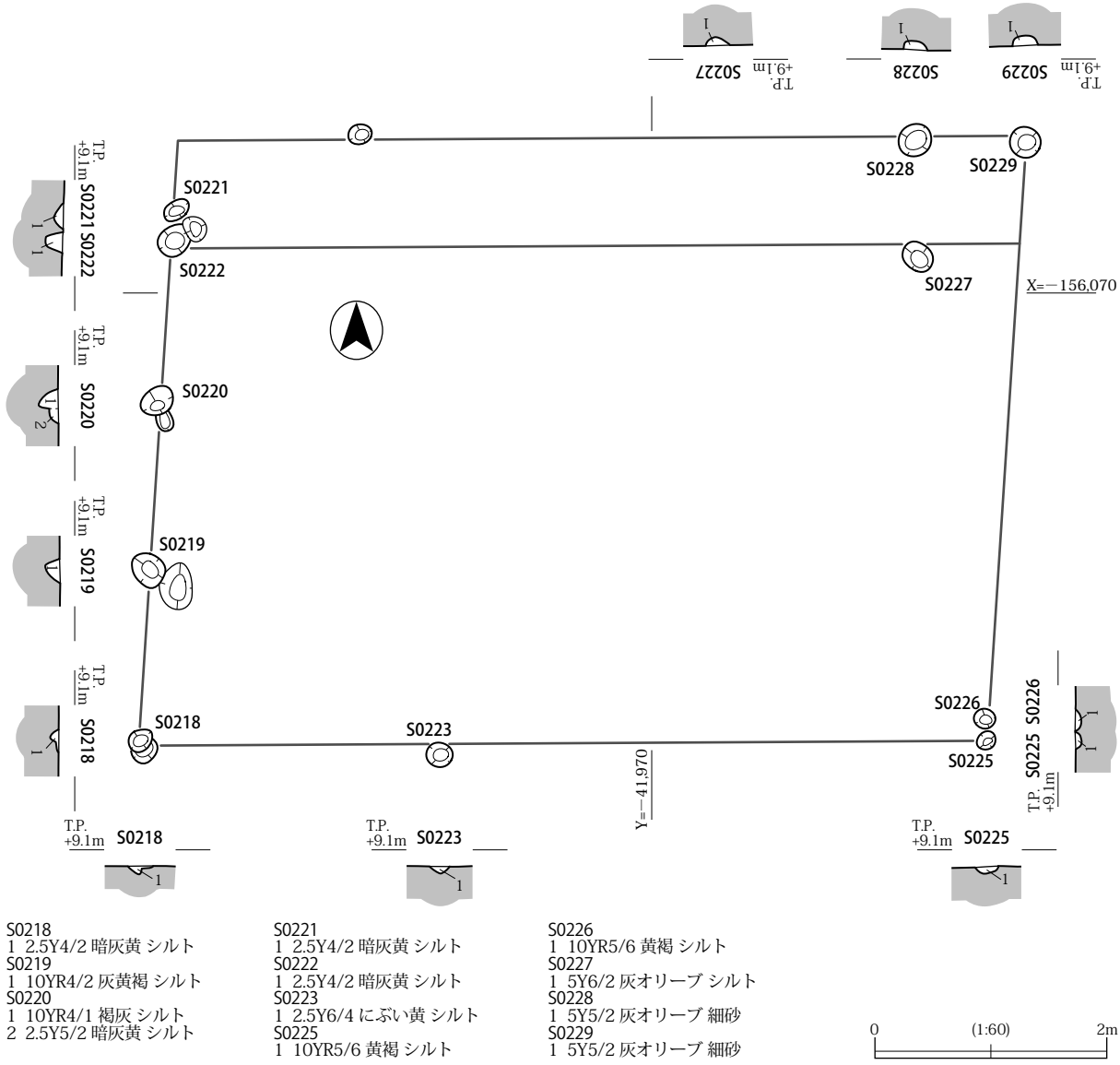


図 23　Ⅰ－ａ区掘立柱建物４平・断面図

ると東西方向に５、６基程度の柱穴があったと考えられる。

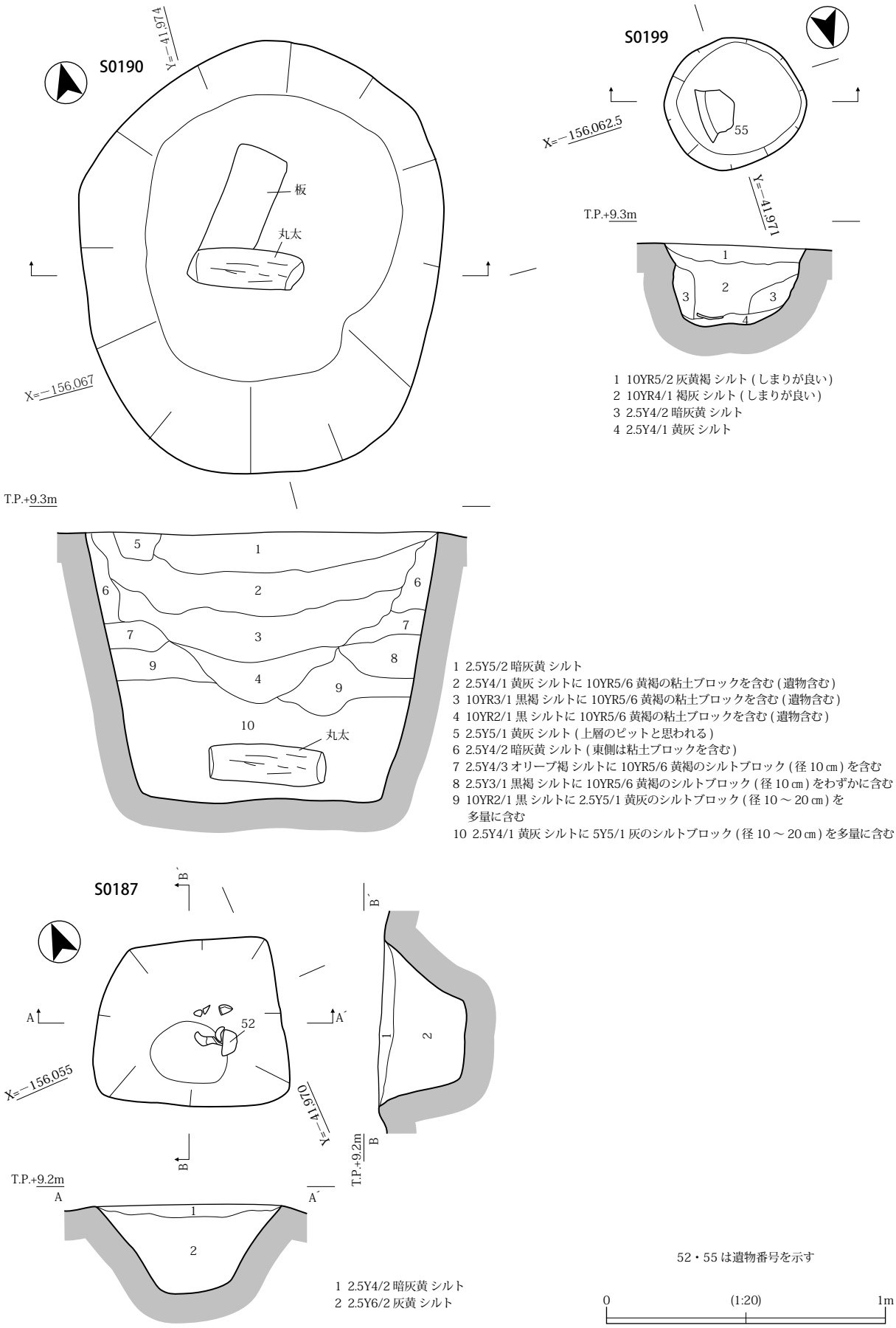
西柱列は約 1.6 ｍの等間、最北列（柱穴 S0228、柱穴 S0229）とその次に北に来る柱列（柱穴 S0222、柱穴 S0227 など）の間隔のみ約 1.0 ｍである。このことから、最北列は柵列など建物以外の施設とも考えられる。その場合には、３間 × ５間の建物となる。

柱穴は直径 0.2 ｍ、深さ 0.1 ｍ程度である。断面は皿形を呈する。遺物が出土していないため、時期は不明であるが、周辺の遺構や包含層出土遺物から勘案すると、平安時代前半の遺構と考える。

土坑 S0190（図 24、写真図版７－５・７）

Ⅰ－ａ区西半の南東部、X= － 156,067、Y= － 41,974 で検出した。大形の円形の土坑である。

素掘りの井戸の可能性もある。直径 1.3 ～ 1.5 ｍ、深さ 1.0 ｍをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土はシルトブロックを含み、上層には遺物を含むが、時期は不明である。底部から板状木製品と丸太が出土した。



1 10YR5/2 灰黄褐 シルト (しまりが良い)
2 10YR4/1 褐灰 シルト (しまりが良い)
3 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
4 2.5Y4/1 黄灰 シルト

1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
2 2.5Y4/1 黄灰 シルトに 10YR5/6 黄褐の粘土ブロックを含む (遺物含む)
3 10YR3/1 黒褐 シルトに 10YR5/6 黄褐の粘土ブロックを含む (遺物含む)
4 10YR2/1 黒 シルトに 10YR5/6 黄褐の粘土ブロックを含む (遺物含む)
5 2.5Y5/1 黄灰 シルト (上層のピットと思われる)
6 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト (東側は粘土ブロックを含む)
7 2.5Y4/3 オリーブ褐 シルトに 10YR5/6 黄褐のシルトブロック (径 10 ㎝) を含む
8 2.5Y3/1 黒褐 シルトに 10YR5/6 黄褐のシルトブロック (径 10 ㎝) をわずかに含む
9 10YR2/1 黒 シルトに 2.5Y5/1 黄灰のシルトブロック (径 10 ～ 20 ㎝) を多量に含む
10 2.5Y4/1 黄灰 シルトに 5Y5/1 灰のシルトブロック (径 10 ～ 20 ㎝) を多量に含む

1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
2 2.5Y6/2 灰黄 シルト

52・55 は遺物番号を示す

0 (1:20) 1m

図 24　Ⅰ－a 区 S0187・S0190・S0199 平・断面図

土坑 S0187（図 24）

Ⅰ－a 区西半の中央部で検出した。隅丸方形の土坑である。東西方向がやや長い。

長辺が 0.7 m、短辺は 0.6 m、深さが 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

底部から土器が出土している。この資料と土坑 S0192 から出土した土器が接合した（図 72 － 52、写真図版 41 － 4）。壺の口縁部で、弥生時代後期末の壺と思われる。

土坑 S0199（図 24、写真図版６－２、７－２）

Ⅰ－a 区西半の中央よりやや南で検出した。円形の土坑で、東西溝 S0203 を切る。

直径が 0.5 m、深さが 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈する。

底部から弥生土器鉢の口縁部から体部上半が出土した（図 72 － 55、写真図版 40 － 4）。弥生時代後期末から古墳時代前半のものである。

溝 S0185（図 25）

Ⅰ－a 区西半の中心から北西部で検出した。逆Ｌ字形を呈する溝である。

Ⅰ－a 区西半の Y= － 41,970 付近を通る溝が南北方向に 15 m南下してきて、直角に曲がる。X= － 156,054 ラインを通り、西に約 20 mのびてⅠ－ｄ２区まで続く。南北、東西ともほぼ正方位にのっている。幅 0.3 ～ 0.35 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

溝の規模は小さいが、正方位に位置することや、この溝から西に建物柱穴やピットなどの遺構が多数検出されることから、建物などの居住域を区画する溝と考える。同様のＬ字や逆Ｌ字の溝はⅠ－ｃ区等でもみられる。この溝の屈曲部にちょうど 45°斜行するように轍１が通る。

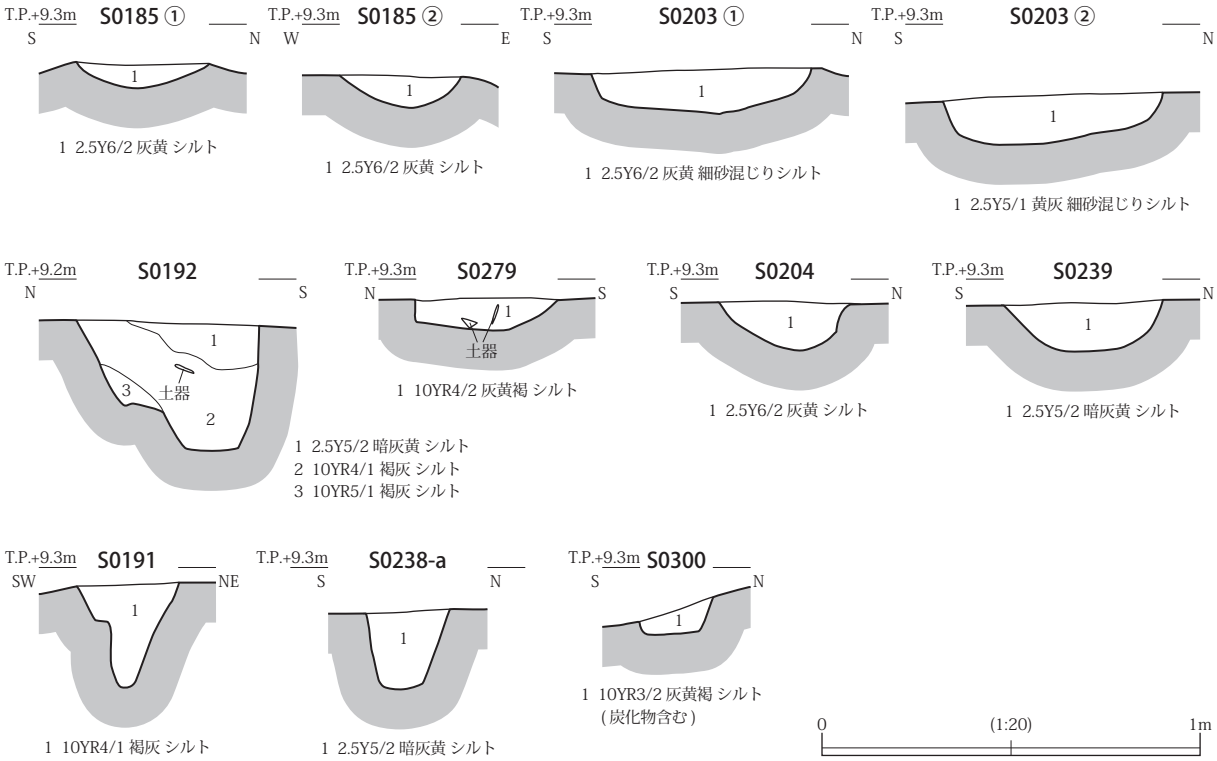


図 25　Ⅰ－a 区西半遺構断面図

轍１、轍２（S0240・S0191）（図 20・25）

Ｉ－ａ区西半で検出した。２条１対の細い溝（轍２の場合には S0240 と S0191 が該当）が一定間隔を保って平行に並ぶ。２つの溝の間隔は轍１、轍２のいずれも 1.5 mである。各溝の幅は 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mをはかる。断面は鋭角的で、逆三角形を呈する。

いずれも、正方位に対して 45°の角度で南東－北西にのびる。ただし、轍１は南西を中心として円弧を描くようにやや曲線的であるが、轍２は直線的である。また、轍２では２つの溝の間に２個１対の等間隔に並ぶ土坑が検出される。

これらのことから、２つの溝はおそらく牛車の車輪の痕で、間にみられる土坑は牛の足跡と判断した（足跡３）。幅がない細い溝の割に深さが相当あり、断面形が鋭角的なのは、積載重量が重く、圧力がかかっていたためか、あるいは地表面がぬかるんでおり、車輪が深く沈んだためとも考えられる。しかし、ぬかるんでいたとしたら轍２にのみ足跡が顕著にみられ、他ではみられないのが不明点である。

Ｉ－ａ区では明確な轍は轍１、轍２の２組しか確認していないが、西のＩ－ｄ２区に入ると、無数に検出される。

『池内遺跡３』でも、同様の轍が報告されている。『池内遺跡３』では、轍や足跡が土地開発に伴うものと仮定しているが、廃棄場の位置や何を掘削したかは明らかでない。また、大阪市長原遺跡でも同様の検出例がある。江浦洋の新家遺跡の轍に関する考察でも、轍が道らしいところを通るのでなく、縦横無尽にみられることから、水田開発に伴うものとしている。しかし、今回の調査では、轍がみられるのは居住域であって、水田畦畔や畝などは検出されておらず、耕作地と考えられない。

今回の轍も踏み込みの深さからすると相当重量の荷を積載していたようである。溝などの掘削によって生じた土砂を運搬し、どこかに廃棄したことが考えられる。南東から北西が車輪の進行方向とみるが、掘削開墾した溝などは確認できなかった。また、廃棄された土砂の堆積も現状では確認できていない。あるいは物資を運搬し、集積したものか。その場合はＩ－ｃ区で述べるが、掘立柱建物との関係を考えなければいけない。

遺物はわずかに出土するのみだが、遺構の検出箇所から古代の遺構と考える。

足跡３（S0238 － a ～ S0300）（図 25）

Ｉ－ａ区西半の南西部で検出した。S0238 － a から S0300 まで、同規模、同形状の土坑である。轍２の両車輪の間にみられる土坑群である。0.7 ～ 0.8 m間隔で、南東から北西に２個ずつ並んでみられることから、荷車をひく牛の足跡と推定した。

土坑の一つ一つは長円形もしくは円形で、直径 0.3 m、深さ 0.3 m程度のものが多い。断面は逆台形を呈する。轍１の間では足跡が検出できていないが、地表面が乾いていたためか、荷重が軽かったためと思われる。遺物は出土しているが、時期は不明である。

溝 S0203（図 25）

Ｉ－ａ区西半の東西中心よりやや南で検出した。東西方向の比較的大きな溝で、Ｉ－ａ区全体で検出され、X= － 156,062 ラインを通る（S0203 ①）。

S0203 ②は調査区東端から３ mほど西にのびるが、いったん途切れる。約４ mはなれて再び現れ、そこから 15 mほど西にのびる。幅 0.6 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土し

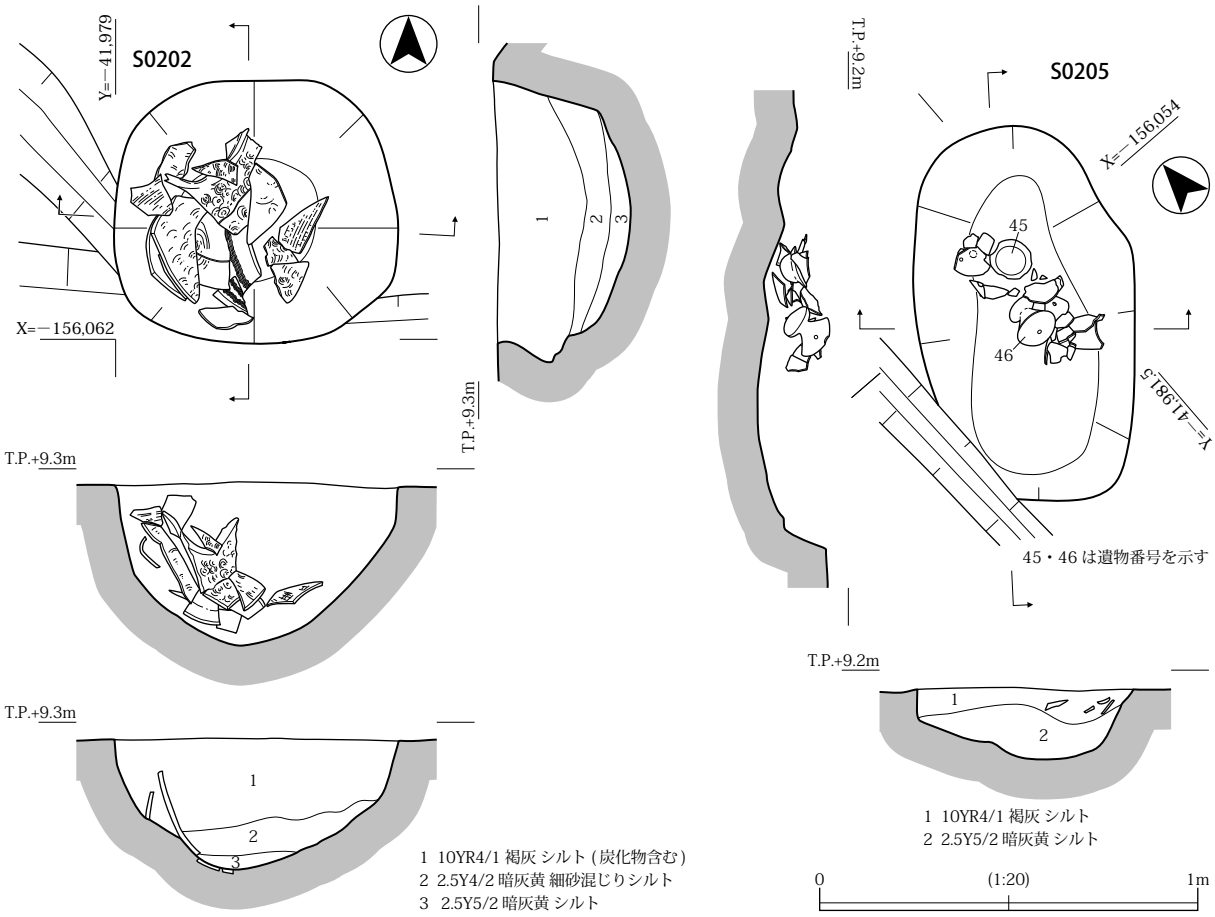


図 26　Ⅰ－a 区 S0202・S0205 平・断面図

ていない。比較的規模が大きく、居住域を区画する機能をもつ溝と考える。

溝 S0204・溝 S0239（図 25）

Ⅰ－a 区西半の東西中心よりやや南で検出した。溝 S0203 の南に位置し、溝 S0203 に平行な溝である。溝 S0204 と溝 S0239 は間隔が離れているので別名称としたが、同一の溝となる可能性が高い。

幅 0.4 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

風倒木痕 S0192（図 25）

Ⅰ－a 区西半の中央部で検出した。溝 S0185 の東西部分と北を接する。

不定形で、風倒木痕と思われる。

長さ 2.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈する。壺口縁部が出土している（図 72 － 52）。土坑 S0187 と接合する資料で、弥生時代後期末と思われる。

土坑 S0279（図 25）

Ⅰ－a 区西半の西部中央で検出した。小形の円形の土坑である。

直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。ここから約 2.5 m離れた土坑 S0206 から出土した土師器皿が接合した（図 72 － 54）。内面に放射状暗文がみられ、今回の調査出土遺物のなかでは、やや古い奈良時代後半の遺物と思われる。

土坑 S0202（図 26、写真図版６－３）

Ⅰ－ａ区西半の南西部、中心よりやや南よりの X= － 156,062、Y= － 41,979 で検出した。東西溝 S0203 や轍２（S0191）を切る。

大形の隅丸方形の土坑である。一辺 0.7 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

埋土は３層に分かれる。上層には、炭化物を含んでいたが、出土した遺物等に焼けた痕跡は認められなかった。従って、土坑内で火が焚かれたのではないと判断した。

土坑の最下部から多数の須恵器の破片が出土した。いずれも大形の甕の破片だが、接合、復元したところ、少なくとも３個体以上あることが分かった。しかし、口縁部や体部上半が多く、全体の器形を復元できるものはなかった。従って、完形の土器が埋納されたのでなく、壊れた状態の土器が埋められたと考えられる。

このうちの２個体を図化した（図 72 － 50・51、写真図版 40 － 2）。どちらも体部径が 40 ～ 60 ㎝以上もある大形品である。いずれも外面は細かい平行タタキの上にカキメを、内面は同心円タタキを施しており、古墳時代後期のものである。従って、土坑 S0202 は古墳時代後期の遺構と考えられる。

土坑 S0205（図 26、写真図版６－１）

Ⅰ－ａ区西半の西端中央で検出した。調査区西端の X= － 156,054、Y= － 41,981.5 に位置する。

南北に長い楕円形の土坑である。長径 1.0 m、短径 0.55 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

北側で多数の土器がかたまった状態で出土した。すべて土師器で、甕１点以外は、小型鉢か小型器台である（図 72 － 45 ～ 49、写真図版 40 － 1）。土坑北半に散乱していたが完形に近いものが多く、原位置に近い状態を保っていた。すなわち、破損した土器を廃棄したのでなく、意図的に埋納した土坑と考えられる。

小型器台は、倒立した状態で出土しており、その横に小型鉢が口縁を上に向けた状態で出土していることから、小型器台の上に小型壺がのせられた状態で土坑底部に置かれていたことも考えられる。

出土遺物はいずれも須恵器出現以前の古墳時代前期末から中期初めの時期を示す。一時期に埋納された遺構と考えられる。

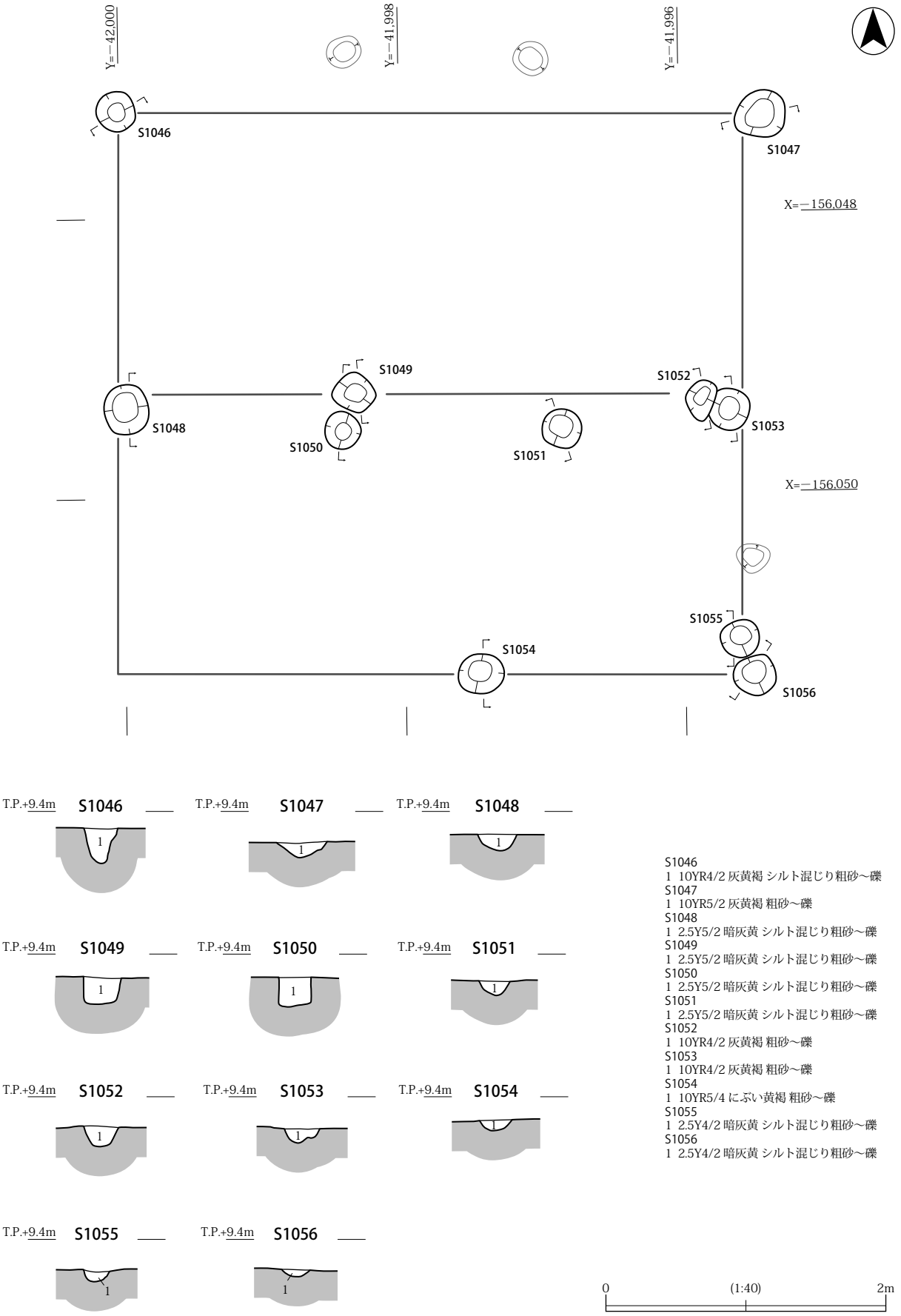
掘立柱建物８（図 27）

Ⅰ－ｄ２区のほぼ中心、X= － 156,047 ～ X ＝－ 156,051、Y= － 41,995 ～ Y= － 42,000 付近で検出した。Ⅰ－ｄ２区は遺構が密集するが、掘立柱建物はこの１棟のみ検出した。

掘立柱建物８が位置する基盤層が旧自然流路の影響を受けた砂礫層であるため、遺構が明確に検出できなかった。従って、柱穴の検出も不完全で、柱穴がすべて揃うのは東列と中央東西列のみである。

建物の向きはほぼ正方位になっている。２間 × ２間の総柱の掘立柱建物として復元した。柱と柱の間は 1.9 ～ 2.0 mである。柱穴は直径 0.2 m程度のものが多く、深さ 0.1 ～ 0.2 mである。断面は皿形もしくはＵ字形を呈する。柱痕跡は確認できない。

遺物は出土していないが、規模・形状から他の掘立柱建物と同じく、平安時代前半の遺構と考える。



S1046
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト混じり粗砂～礫
S1047
1 10YR5/2 灰黄褐 粗砂～礫
S1048
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫
S1049
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫
S1050
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫
S1051
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫
S1052
1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫
S1053
1 10YR4/2 灰黄褐 粗砂～礫
S1054
1 10YR5/4 にぶい黄褐 粗砂～礫
S1055
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫
S1056
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり粗砂～礫

図 27　Ⅰ－ｄ２区掘立柱建物８平・断面図

溝 S0772（図 28・29、写真図版 23）

Ⅰ－ｄ２区の西半で検出した南北方向を基本とする大溝である。

調査区の北よりさらに北にも続いており、Y=－42,003 を中心として、南に約 30 mまっすぐのびる。X=－156,045 付近で西に約 30°の角度で緩やかに曲がり、さらに約 15 mのびてⅠ－ｃ区へ入る。Ⅰ－ｃ区は南半で、そのまま 60 mの長さで斜めに南に進み、西端で再び屈曲して東西方向の溝となり、Ⅰ－ｅ区へ入る。

Ⅰ－ｅ区での東西長は約 10 mあり、Ⅰ－ｄ２区、Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区あわせると、溝 S0772 の全長は 115 mである。Ⅰ－ｅ区では、撹乱によって溝は途切れる。

Ⅰ－ｅ区の撹乱や用水路を挟んで、Ⅱ－ａ区では溝 S0772 とほぼ同位置に東西溝 S1370 が検出される。溝 S1370 は西に隣接する既往の調査区、09－２区の 460 溝と同一であるのは確実であり、その長さは約 60 mであるが、09－２区よりさらに西に続いている（第５章図 93 参照）。

溝 S0772 と溝 S1370 は、幅や深さなどの規模・形状・埋土なども似ており、同一の溝と考えるのが自然である。すると、南北長 30 m以上、北東－南西と斜行する部分長が 60 m、東西長が 100 m以上の長大な溝となる。

一方、Ⅰ－ｄ２区の北にも既往の調査区、05－２－３－１区が存在するが、古代の遺構面の該当する場所に、溝 S0772 につながる南北溝は検出されていない。

溝の幅は狭いところで 1.4 m、広いところで 2.7 mをはかる。深さは 0.4 mから 0.5 mで、断面は逆台形を呈する。埋土は５～９層に分層できる。両壁が鋭角的に掘削されていることからも人為的に掘削された溝と推定される。南北溝の北部が幅や深さがあり、南にいくとやや細くなる。地形としては南にいくほど標高が高くなるので、水流は南から北に流れていたと考えられる。

また、南北と東西部分はほぼ正方位であることや、屈曲の仕方からも自然河川などでなく、人為的な溝であることは疑いない。しかし、屋敷地の堀などで一般的な、南北から東西に直角に屈曲しないのは、斜行する部分は当時の自然地形でまっすぐ南北に溝を掘削できないか斜めにせざるを得ない、制限要因があったと思われる。

Ⅰ－ｄ２区では、溝 S0772 の東にこの溝に沿うように、遺構が形成された以前の自然流路の痕跡が認められる。しかし、この自然流路は常に溝 S0772 の東にあるわけではなく、蛇行しながら正方位に 45°斜行するように北西―南東を流れていたようで、南側はⅠ－ｂ２区の中心を斜めに通り、Ⅰ－ｄ２区の北側で溝 S0772 と交差して、Ⅰ－ｃ区の北東隅にかかってさらに北上する。

溝 S0772 の用途としては、居住域などの区画溝と考えるのが最も一般的だが、溝を挟んだ東西両方に掘立柱建物などが存在する。掘立柱建物などと異なる時期に形成されたとも考えられるが、溝内から出土する遺物は、当調査区で広くみられる掘立柱建物、柱穴、井戸などより時期的に古いか、同時期と思われる。

Ⅰ－ｃ区の溝内からは、土師器皿が１点出土している。それ以外はⅠ－ｄ２区の溝が屈曲する、断面番号③から④の間で土器が出土した。一箇所で出土したのは、流れの澱んだ地点に土器がたまったとも考えられる。

出土した土器は、須恵器の杯や壺、土師器椀や杯、黒色土器椀で完形に近いものが多い（図 74－73～82、写真図版 51）。奈良時代後半から平安時代前期の遺物で、９世紀前半のものが最も多い。

溝 S0772 はこの時期の溝で、周辺の居住域の土器が溝内に落ち込んだ後、10 世紀初めには自然に埋

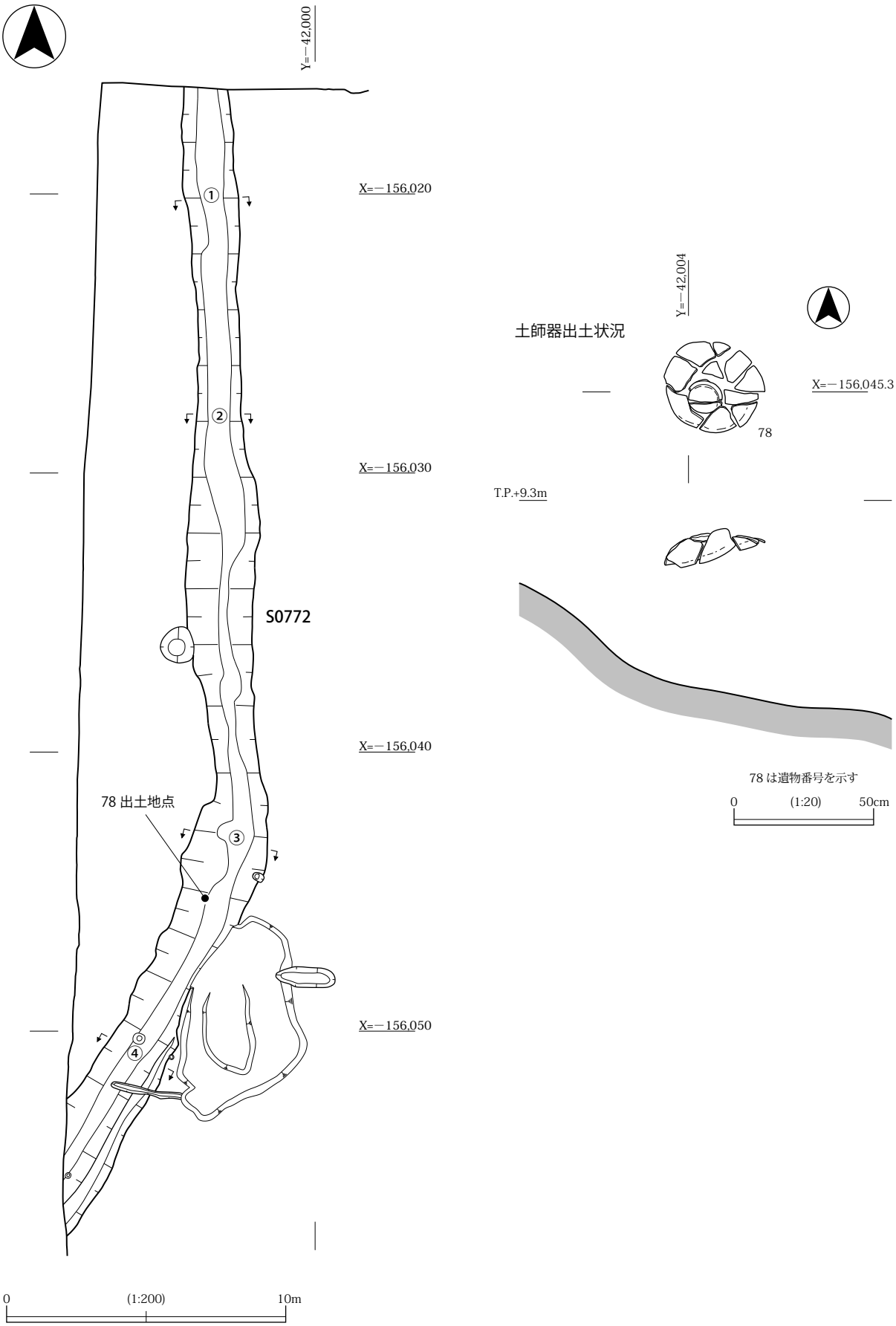


図 28　Ⅰ－ｄ２区 S0772 平面図・土器出土状況図

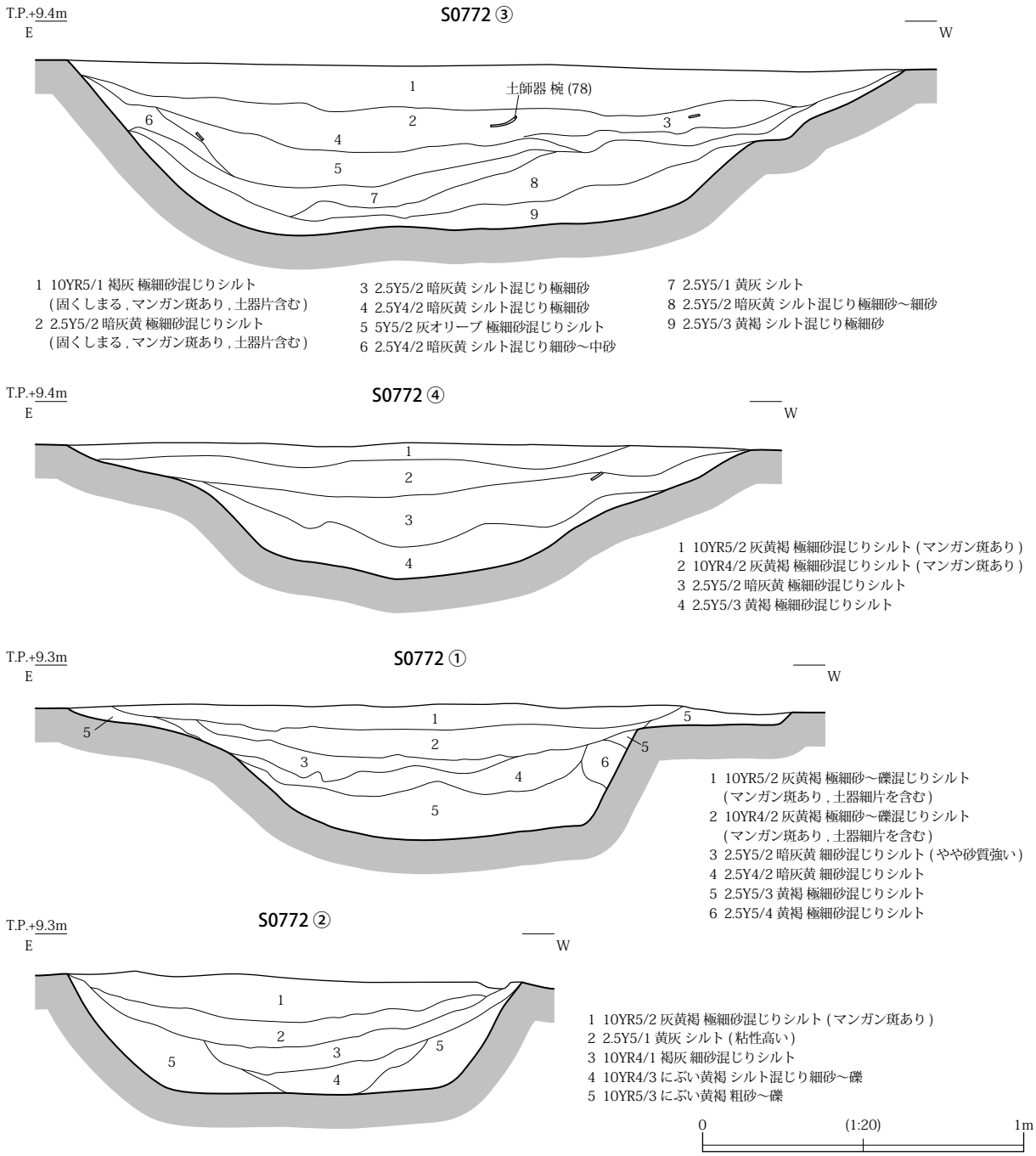


図 29　Ⅰ－ｄ２区 S0772 断面図

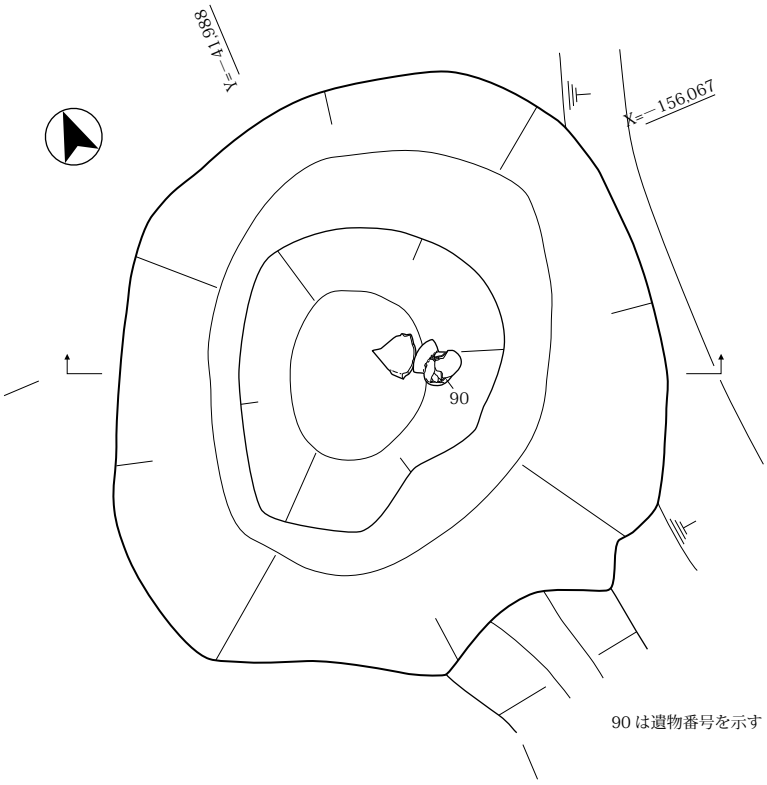
没したと捉える。

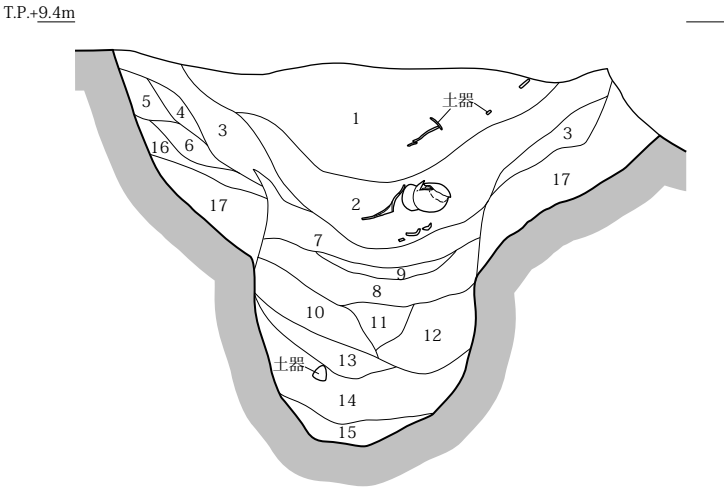
井戸 S0977（図 30、写真図版 24 － 1 ・ 2）

Ⅰ－ｄ２区の南東部、X= － 156,067、Y= － 41,988 付近で検出した。遺構の東端は旧用水路の撹乱に接している。

ほぼ円形の土坑で、直径 1.5 ～ 1.7 m、深さ 1.0 mをはかる。地表面から 0.5 mの深さまでは 1.5 m前後の径をもつが、それより下層は直径約 0.5 mに径がすぼまり垂直に落ちる、二重底の形状をとる。よって、断面は逆向きの凸状を呈する。この形状から素掘りの井戸と判断した。

埋土は細かく分層できるが、たわみながら堆積している。上層の径が大きく広がる両脇部分に堆積す





1 10YR3/2 黒褐 極細砂混じりシルト (固くしまる , 遺物含む)
2 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト (下方にラミナ状堆積がみられる , 遺物含む)
3 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
4 10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト
5 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混じり極細砂
6 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
7 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト混じり極細砂
8 10YR3/2 黒褐 極細砂混じりシルトに地山のシルトブロックをわずかに含む
9 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
10 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
11 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
12 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルトに地山の 2.5Y5/3 黄褐 シルトブロックをわずかに含む
13 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
14 5Y3/1 オリーブ黒 シルトに極細砂をわずかに含む
15 2.5Y4/4 オリーブ褐 極細砂
16 2.5Y4/4 オリーブ褐 シルト混じり極細砂
17 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに地山の 2.5Y5/3 黄褐 シルトブロックを含む

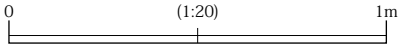


図 30　Ⅰ－ｄ２区 S0977 平・断面図

る土は、井筒の裏込めの土とも考えられる。

上・中・下層とも土器が出土した。上層と下層の土器は破片で少量である。中層からはほぼ完形の土師器小型丸底壺が２点とミニチュア土器が出土した（図 75 － 90・93・94、写真図版 50 － 2 ～ 4）。

出土遺物から判断して、井戸 S0977 は古墳時代中期の遺構と考える。

井戸 S0920（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。井戸 S0977 のさらに南にあたる。

ほぼ円形の大形の土坑である。直径 1.1 m、深さ 0.9 mをはかる。断面は逆台形を呈する。壁面はややオーバーハングしたように凹凸が激しいが、底面は平らである。素掘りの井戸と判断した。

埋土には掘削時に生じたと思われる、地山ベース層の黄褐色シルト、その下層の褐灰色シルトがブロック状に混じる。時期は不明である。

土坑 S0975（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。井戸 S0920 の南東にあたる。

円形の小さな土坑である。直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。

埋土は単層で、土器の破片が出土している。時期は不明である。

土坑 S0492（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南端で検出した。楕円形の土坑で、南半は調査区外にの

びる。

長さ 3.5 m、幅 1.0 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

遺物は出土していないため、時期は不明である。隣接する土坑 S0917 からは土師器高杯や弥生土器甕が出土している（図 75 － 83）。

風倒木痕 S0919（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東端で検出した。不定形で風倒木痕などの自然地形と思われる。

長さ 3.3 m、幅 0.85 m、深さ 0.55 mをはかる。断面は逆台形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0978（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。円形の土坑である。

直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0930（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。楕円形の土坑である。

長径 1.4 m、短径 0.45 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0927（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東隅で検出した。円形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土の下層には、地山の大きなブロックが混じる。上層には土器小片を含むが、時期は特定できなかった。

土坑 S0941（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。不定形の土坑である。

長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。上部が削平されており、実際はもっと深かったと思われる。

土坑内から弥生土器甕の口縁や底部がつぶれた状態で広がって出土した（図 75 － 91・92）。弥生時代後期の遺構と思われる。

土坑 S0971・土坑 S0970（図 31）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。井戸 S0977 の北西に位置する。円形の小さな土坑で、２つの土坑は隣接する。

土坑 S0971 は直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

土坑 S0970 は直径 0.2 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。いずれも遺物は出土していない。

轍３（S0996 － a・S0996 － b、S1152）（図 31・33）、**轍４（S0964、S0988）**（図 20）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した。S0996 － a・S0996 － b は対になる轍３の右部分で、２つの轍が

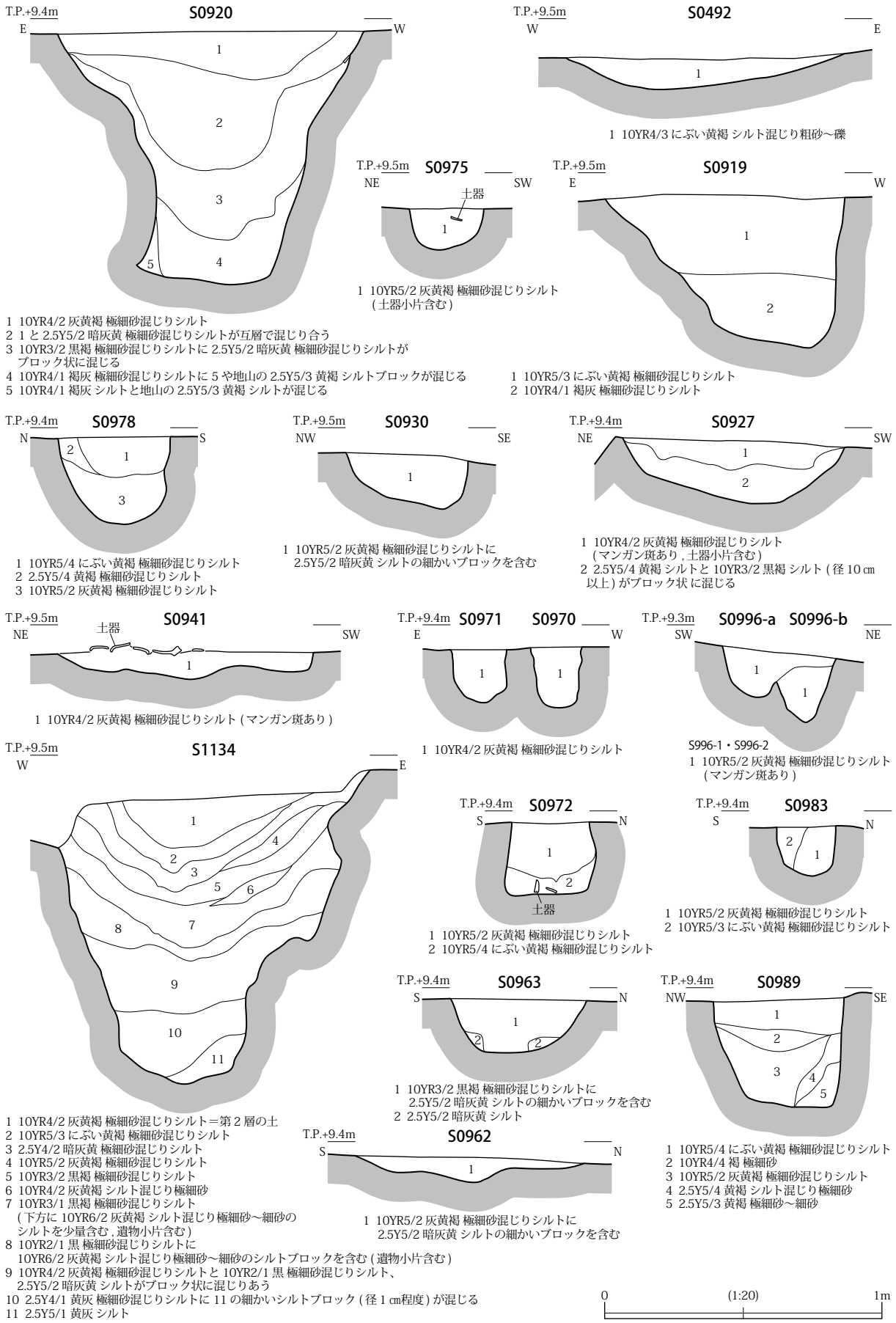


図 31　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（１）

重なり合っている。

長さ 12.0 ～ 15.0 mで、北東を中心とする円弧を描くように、南東－北西にのびる。S0996 － a ・S0996 － b と対になる轍（S1152）の間隔は 1.5 mである。車輪幅、方向とも Ｉ － a 区西半で検出した轍１、轍２と同じである。S0996 － a は幅 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.2 mで、断面はＵ字形を呈する。

S0996 － b は幅 0.2 m､深さ 0.25 mで､断面はＵ字形を呈する。S1152 は幅 0.25 m､深さ 0.35 mで、断面はＵ字形を呈する。轍３に切られるように轍４（S0964、S0988）が存在する。西に中心をおくように円弧を描く。車輪幅は轍３と同じである。

周辺には同じ幅の轍が複数みられ、複雑に重複している。いずれも南東から北西に、あるいは南から北へ向かっているようにみえる。

この轍３（S0996 － a ・S0996 － b ・S1152）から出土した土器と、近辺の土坑 S1005、土坑 S0958 や第２層から出土した土器が接合した。須恵器大甕の頸部から口縁部だったため、図化していないが、内面に同心円タタキ、外面は平行タタキを施し、全体に濃緑色の自然釉がかかる。土坑 S0202 から出土した須恵器甕などと同時期のものと考えられる。

よって、他の調査区で検出した轍同様、轍３、轍４は古代の遺構と考える。

土坑 S0972（図 31）

Ｉ － d ２区の南東部で検出した。井戸 S0977 の南西に位置し、中に土坑 S0983 を含む。

円形の小さな土坑である。直径 0.3 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は台形を呈する。底部からわずかに土器が出土したが、時期は特定できない。

土坑 S0983（図 31）

Ｉ － d ２区の南東部で検出した。井戸 S0977 の南西に位置する。

土坑 S0972 内で検出した、円形の土坑である。直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0963（図 31）

Ｉ － d ２区の南東部で検出した。北を土坑 S0962 と接する。円形の土坑である。

直径 0.5 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0962（図 31）

Ｉ － d ２区の南東部で検出した。南を土坑 S0963 と接し、轍によって切られる。東西に長い長円形の土坑である。

長径 2.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0989（図 31）

Ｉ － d ２区の南東部で検出した。井戸 S0977 の西と接する。

円形の土坑である。直径 0.5 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。時期は不明である。

土坑 S1134（図 31、写真図版 24 －３）

Ｉ－ｄ２区の南東角で検出した。旧用水路の撹乱よりさらに東の、Ｉ－ａ区西半と接する。

円形の土坑もしくは井戸である。埋土がＩ－ｂ２区で検出した土坑群と近似するため土坑と呼称したが、深さがあることや湧水が激しいことから、井戸としたほうが良いかもしれない。

直径 1.0 m、深さ 1.1 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土は細かく互層状に、灰黄褐色シルトと地山の黄褐色のシルトが堆積する。各々のシルトにはさらに細かいシルトのブロックが含まれている。遺物はわずかに出土したが、破片で時期が特定できない。

土坑 S0954（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。やや大形の円形の土坑である。

直径 0.65 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。時期は不明である。

井戸 S0986（図 32、写真図版 25 －２）

Ｉ－ｄ２区の南西端で検出した。西半分はＩ－ｃ区に含まれる。井戸 S0985 の北に位置する。

大形の円形を呈する。深さがあるので素掘りの井戸とした。

直径 0.8 m、深さ 0.7 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。下層に行くと中心と周囲で埋土が分かれており、井筒があったのかもしれない。遺物は出土していない。

井戸 S0985（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西端で検出した。北西部のわずかな部分はＩ－ｃ区に含まれる。井戸 S0986 の南に位置する。大形の円形を呈する。深さがあるので素掘りの井戸とした。

直径 1.8 m、深さ 1.4 mをはかる。断面は現地表から 1.1 mまでは急激にすぼまるＶ字形をとるが、そこから底面は方形となる。かつては円柱状の井筒があったのかもしれない。

下層から軒平瓦が出土した（図 75 － 95、写真図版 57 － 4）。他にも磁器破片などが出土しており、中世後半以降の遺構と思われる。

土坑 S1001（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。井戸 S0986 の北東に位置する。円形の土坑で土坑 S1002 と隣接する。

直径 0.55 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1002（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。井戸 S0986 の北東に位置する。円形の小土坑で土坑 S1001 と隣接する。

直径 0.2 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は長方形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0938（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。土坑 S0939 と隣接し、東に中心をもって円弧を描くようにまがり、轍５（S0994）に切られる。長さ 4.5 m、幅 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺

物は出土しているが、時期は不明である。

轍５（S0994）（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西端で検出した。溝 S0938、溝 S0943 を切る。いったん途切れるが断続し、南東から北西に直線的にのびる。対になる轍との間隔は 1.5 mである。

長さは 12.0 m、幅 0.1 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0931（図 20）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。不定形の、南北にやや長い土坑である。

長さ 2.3 m、幅 1.0 mをはかる。土師器の小型丸底壺が出土した（図 75 － 86）。古墳時代のものである。

土坑 S0936（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。轍５（S0994）の南端に接し、土坑 S0937 の南、土坑 S0950 の西に位置する。 長円形の土坑である。

長径 0.6 m、短径 0.35 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

土坑 S0937（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した土坑で、轍５（S0994）の南端に接し、土坑 S0936 の北、土坑 S0950 の西に位置する。円形の土坑である。

直径 0.35 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。土製円盤（図 75 － 96、写真図版 58 － 1 ）が出土している。

土坑 S0950（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。轍５（S0994）の南端に近く、土坑 S0936 の東に位置する。円形の土坑である。

直径 0.35 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は小片を含むが、時期は不明である。

土坑 S0939（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。溝 S0938 の北東端に接する。円形の土坑である。

直径 0.3 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

溝 S0925（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。南北に長い隅丸方形の溝もしくは土坑で、溝 S0926 と隣接する。

長さ 4.5 m、幅 0.6 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。

溝 S0926（図 32）

Ｉ－ｄ２区の南西部で検出した。南北に長い隅丸方形の溝もしくは土坑で、溝 S0925 と隣接する。

長さ 3.5 m、幅 0.4 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

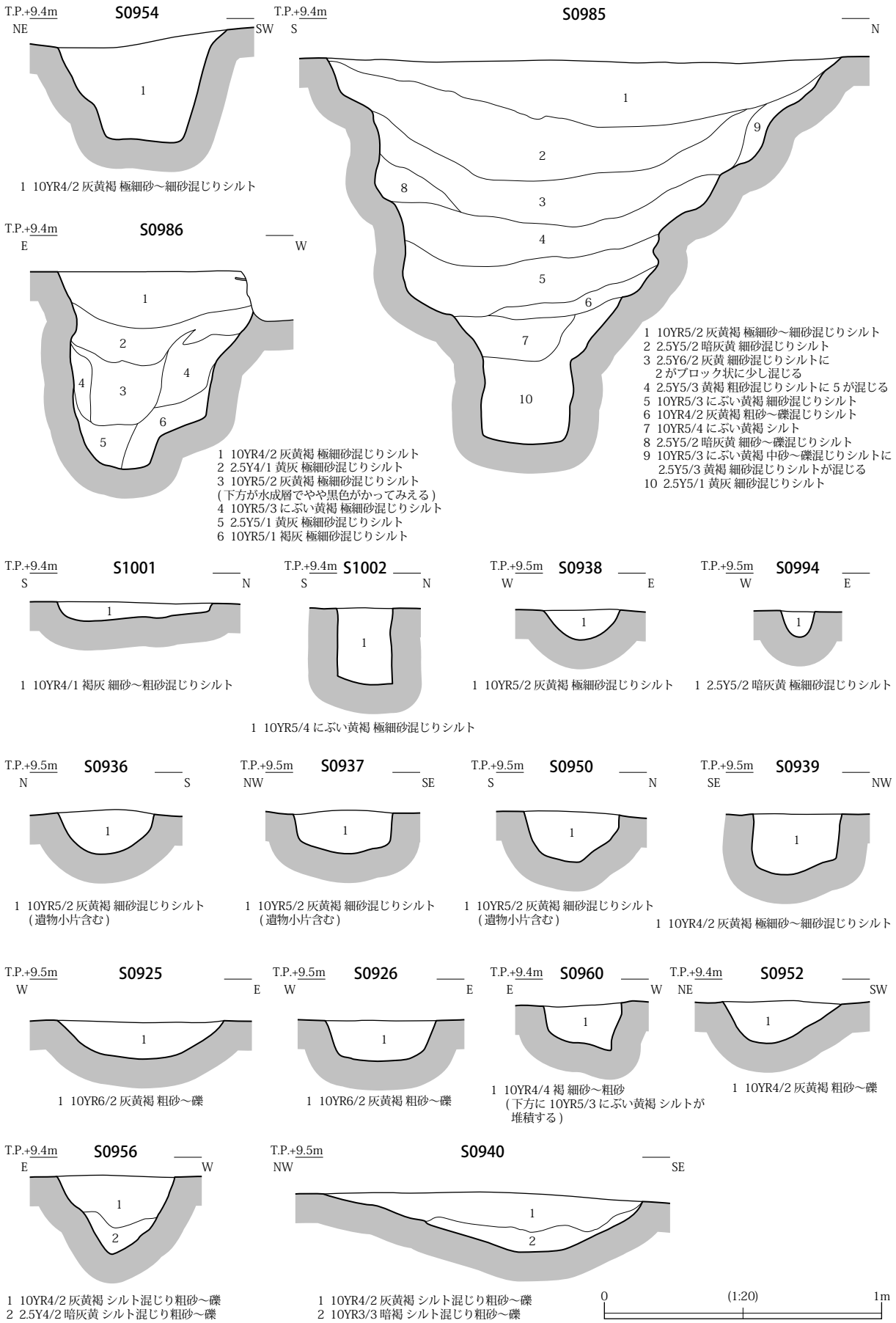


図 32　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（２）

土坑 S0932（図 20）

Ⅰ－ｄ２区の南西隅で検出した。溝 S0925 の南西に位置する。土坑 S0924 の中にある、いびつな小形の円形の土坑である。土師器杯が出土した（図 75 － 87）。古墳時代中期のものである。

土坑 S0960（図 32）

Ⅰ－ｄ２区の南西部で検出した円形の土坑である。

直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0952（図 32）

Ⅰ－ｄ２区の南西部で検出した。長円形の土坑である。

長径 0.8 m、短径 0.45 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0956（図 32）

Ⅰ－ｄ２区の南西部で検出した円形の土坑である。土坑 S0952 の北に位置する。

直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＶ字形を呈する。

土坑 S0940（図 32）

Ⅰ－ｄ２区の南西部で検出した。土坑 S0952、土坑 S0956 の南西に位置する。

円形の大形の土坑である。

直径 1.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

土坑 S1037（図 33、写真図版 25 － 1 ）

Ⅰ－ｄ２区の中央部東側で検出した円形の大形土坑である。深さがあるため、素掘りの井戸になる可能性もある。土坑 S1038 を切る。直径 1.3 m、深さ 0.8 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

土坑 S1038（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部東側で検出した、東西の細長い土坑である。東側は土坑 S1037 に切られる。

長径 3.0 m、短径 0.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1033（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部で検出した。掘立柱建物８の中にあり、土坑 S1034 に隣接する。円形の土坑である。直径 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1034（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部東側で検出した。掘立柱建物８の中にあり、土坑 S1033 と隣接する。

円形の土坑である。直径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

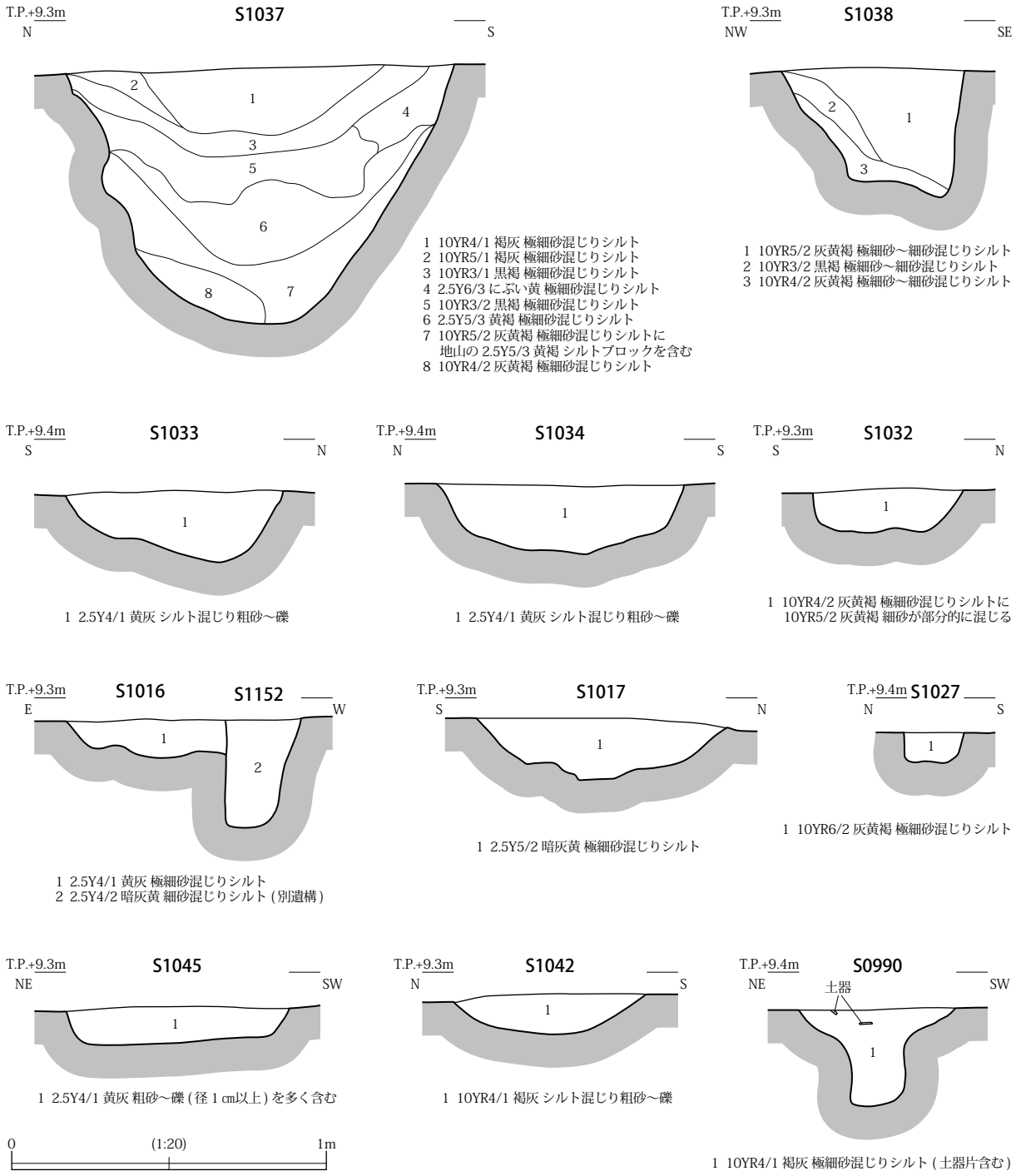


図 33　Ⅰ－ｄ２区遺構断面図（３）

土坑 S1032（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部で検出した。掘立柱建物８の東にある。

円形の土坑である。直径 0.5 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。

土坑 S1016（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の南東部東側で検出した長円形の土坑である。轍３（S1152）に切られる。

長径 0.7 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1017（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部東側で検出した円形の大形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1027（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部西側で検出した東西溝である。溝 S0772 を切る。

長さ 9.2 m、幅 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

図化しえなかったが、古墳時代の土師器鉢の口縁部が出土した。混入と考えられる。

土坑 S1045（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部やや北で検出した円形の大形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1042（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の中央部やや北で検出した隅丸方形の大形の土坑である。溝 S0772 に切られる。

長さ 1.7 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0990（図 33）

Ⅰ－ｄ２区の南東部で検出した円形の土坑である。

直径 0.5 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆凸形を呈する。上層に土器片を含む。

土坑 S1084（図 34）

Ⅰ－ｄ２区の北西部で検出した円形の大形の土坑である。東端は溝 S0772 に接し、溝 S0772 を切る。

直径 1.2 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は中央に向かってたわみながら堆積する。

埋土にシルトのブロックが多数含まれる堆積状況が、今回の調査で多数検出した古墳時代の土坑に似る。

土坑 S1057（図 34）

Ⅰ－ｄ２区の北西部で検出した楕円形の大形土坑である。東西に長い。

長径 2.1 m、短径 1.0 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

溝 S1093（図 34）

Ⅰ－ｄ２区の北西部で検出した溝である。溝 S1043 に切られる。

長さ 2.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1043（図 34）

Ⅰ－ｄ２区の北西部で検出した溝である。北東を中心とした円を描くように、蛇行しながら北西から

南東にのびる。溝 S1093 を切り、溝 S0772 に切られる。西端はＩ－ｃ区までのびていく。
長さ約 16.0 m、幅 0.7 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。
弥生土器の壺か甕の底部が２片出土しているが、図化できなかった。

溝 S1091（図 34）
Ｉ－ｄ２区の北端中央で検出した溝である。北は調査区外にさらにのびる。
長さ約 3.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1095（図 34）
Ｉ－ｄ２区の北西端で検出した溝である。溝 S1096 と対をなすと思われる。
長さ約 5.5 m、幅 0.4 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1096（図 34）
Ｉ－ｄ２区の北西端で検出した溝である。溝 S1095 と対をなすと思われる。
長さ約 4.6 m、幅 0.3 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

轍（S1089・S1088・S1085）、土坑 S1070、溝 S1071（図 34）
Ｉ－ｄ２区の北端中央で検出した溝や土坑、轍である。
轍はいずれも南北方向にのび、3.5 m程度の長さで途切れる。轍 S1089、S1088、S1085 は、いずれも幅 0.1 ～ 0.2 m、深さ 0.05 ～ 0.1 mである。断面はＶ字形もしくはＵ字形を呈する。
溝 S1071 は南北溝だが、南の先端が西に曲がる。長さ約 14.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は逆台形である。
土坑 S1070 は隅丸方形の土坑である。土坑 S1070 の上を轍や溝が切っている。
長さ 3.0 m、幅 1.55 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。
この土坑 S1070 中からは多数の土器破片が出土したが、摩耗が激しく、復元できたのは土師器高杯の杯部のみである（図 75 － 85、写真図版 50 － 5）。また、完形の土玉が出土している（図 75 － 97、写真図版 58 － 1）。古墳時代中期と考えてよいだろう。

土坑 S1113（図 20）
Ｉ－ｄ２区の北東端で検出した不定形の土坑である。南側の土坑と対で、馬蹄型の土坑だった可能性もある。風倒木痕などの可能性が高い。
弥生土器壺底部が出土している（図 75 － 89、写真図版 50 － 5）。詳細な時期は不明だが、弥生時代の遺構か土壌化層に含まれていた土器が巻き上げられ、後世に形成された土坑 S1113 内に混入したと考えられる。

Ｉ－ｄ２区は面積に比して、遺構密度が高い。特にＩ－ａ区東半の北西部からみられる轍が調査区の広い範囲でみられた。いずれも斜行してさらに北西のＩ－ｃ区や調査区外北にむかっている。
古代の遺構と明確に判断できるのは溝 S0772、掘立柱建物８と轍であろう。主に、調査区の中央か

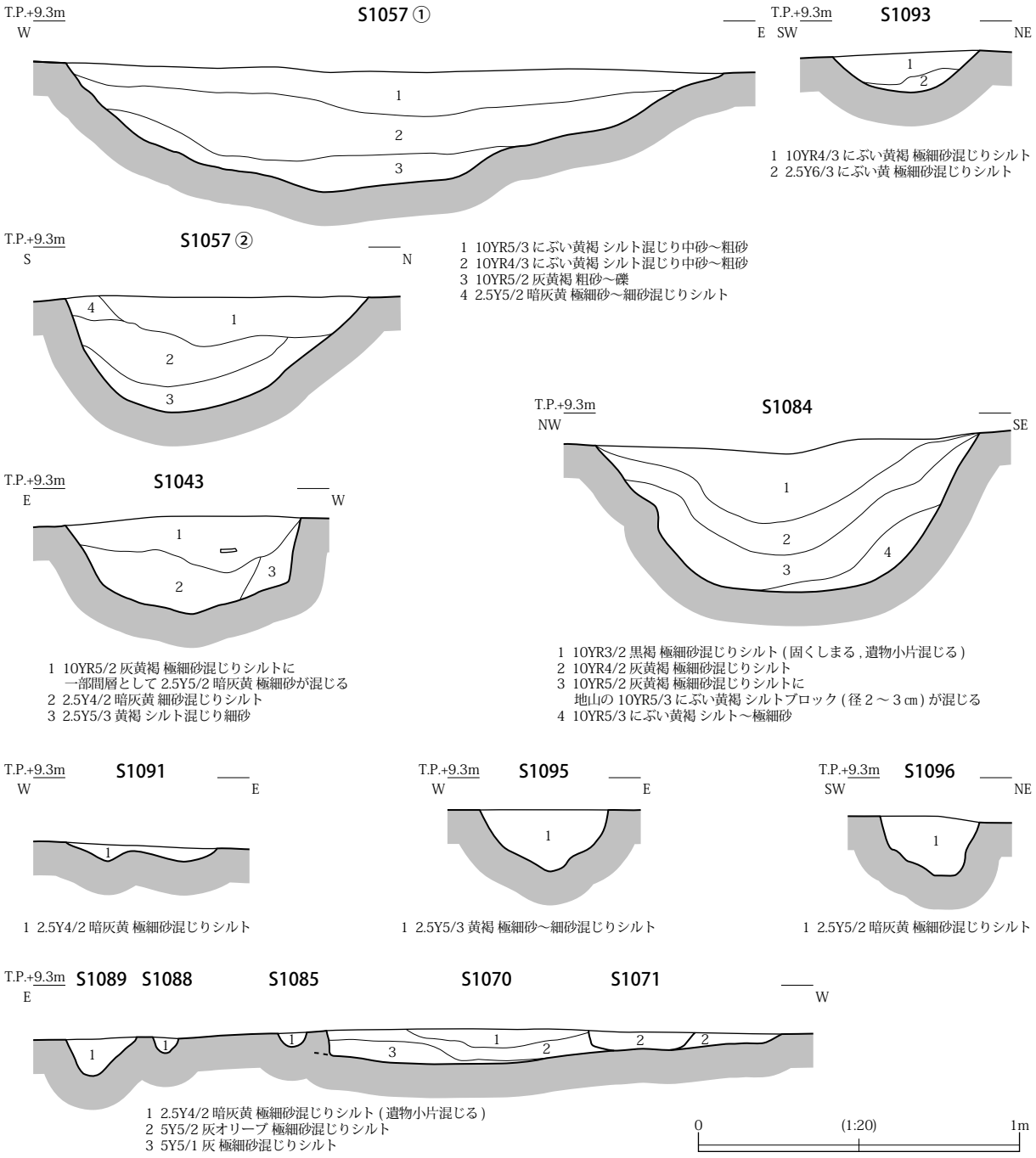


図 34　Ｉ－ｄ２区遺構断面図（４）

ら南半で検出された土坑や落ち込みには、弥生時代後期から古墳時代中期の遺物が含まれている。

また、溝 S0772 の東側に、幅５～８ｍにわたって南北をやや西に蛇行していく砂礫層が認識できた。南はＩ－ｂ２区から続き、北は溝 S0772 と交差して西にふり、Ｉ－ｃ区へと入っていく。旧自然流路の痕跡と思われる。この自然流路はさらに北にのびていき、大和川線の 05 －３区の第６面で検出した 2207 流路と位置的に合致する。05 －３区第６面は弥生時代前期作土層の下層、縄文時代か弥生時代前期の土壌層の上層にあたる第５ｂ層上面の遺構面と報告されている。深さも 1.2 ｍとされる。Ｉ－ｃ区で部分的に掘削した際は、深さは 0.2 ～ 0.3 ｍで、遺物も検出できなかったが、周辺の包含層から、弥生時代前期から後期の遺物が少量だが出土していることは、この自然流路の存在とあわせて当該期に人の生活痕跡があったことを示す、有力な手掛かりとなる。

（３）中央域東半南部（Ⅰ－ｂ２区）の遺構（図 35 ～ 50、写真図版 12 ～ 18）

中央域東半南部とは中央部北半の南に位置し、調査区としてはⅠ－ｂ２区が相当する。南北長約 40 m、東西幅約 55 mで、東西に長い長方形の形をとる（図 35）。

松原市教育委員会が実施した試掘調査の３トレンチ（南北方向）が当区の東側、Y= － 41,965 辺りに位置する。今回調査した 10 調査区中で、遺構、遺物とも最も遺構密度が高い調査区である。調査面積は 2300 ㎡である。

直前まで畑など耕作地として利用されていたためか、構造物の撹乱を受けず、遺構面の残存状況が良好であった。ただし、元来の地表面高が高かったためか、第２層の堆積は北に比べて薄い。

遺構面の標高は、北東端が T.P.9.2 mで、南にいくに従い次第に高くなり、南東端が T.P.9.4 mである。東から西へも、局所的に低いところを除いては高くなる傾向にある。北西部では T.P.9.3 ～ 9.4 mとなる。南端は中央が T.P.9.2 ～ 9.3 mと若干低いが、南西部では 9.4 mである。調査区中心でも T.P.9.3 ～ 9.4 mであり、この調査区の平均標高が T.P.9.3 ～ 9.4 mと言える。

調査区の南東端から北西端へと、ちょうど対角線を描くように幅７、８mの砂礫層が帯状に検出できるが、これは検出遺構形成以前の自然流路の痕跡である。この流路の周囲が最も標高が高く、この自然流路の氾濫堆積物によって微高地が形成されていたと推測する。

中央部南半では、掘立柱建物、井戸、土坑、溝、落ち込みなどを検出した。時期も弥生時代後期から平安時代中期までと多岐にわたる。

掘立柱建物５（図 36、写真図版 14 － 1）

Ⅰ－ｂ２区の北東部、X= － 156,078 ～ X= － 156,083、Y= － 41,969 ～ Y= － 41,975 で検出した。

２間 × ２間の総柱建物として復元した。建物を構成するすべての柱穴を検出した。

建物の向きが正方位に対して、ほぼ 45°の角度をとる。今回検出した掘立柱建物のほとんどは東西、南北どちらかの正方位を主軸とするが、Ⅰ－ｂ２区で検出した掘立柱建物５と掘立柱建物７のみ、正方位でなく斜めになる点が異なる。

柱間は 1.5 ～ 1.6 mである。柱穴は直径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 m程度の円形のものが多い。検出時には遺構面が削平されており、平面規模、深さとも実際はもっと大きかったと考えられる。残存状況が悪いこともあるが、柱根は認めらず、底部から礎盤石や礎板なども検出されない。断面は皿形を呈する。埋土は第２層の土が堆積する。

柱の建て替えを示す、１箇所に２つの柱穴の切り合いが認められる箇所が多数あるので、少なくとも１回は柱の建て替えが行われたと示唆できる。

複数の柱穴の埋土に土器の小片を含むが、時期は特定できなかった。しかし、柱穴の規模などから、他の掘立柱建物と同時期、平安時代前期から後期の遺構と考える。ただ、建物の向きが他と違うことからすると、掘立柱建物５と掘立柱建物７は、他の建物よりやや新しくなるなど、小さな時期差はあるかも知れない。掘立柱建物５と掘立柱建物７が建物の向きから関連性のある遺構と捉えた。

掘立柱建物６（図 37）

Ⅰ－ｂ２区の北東端で検出した。

掘立柱建物５の北にあたる。東西方向に３から４基、南北に２基の柱穴を検出したので、東西を主軸

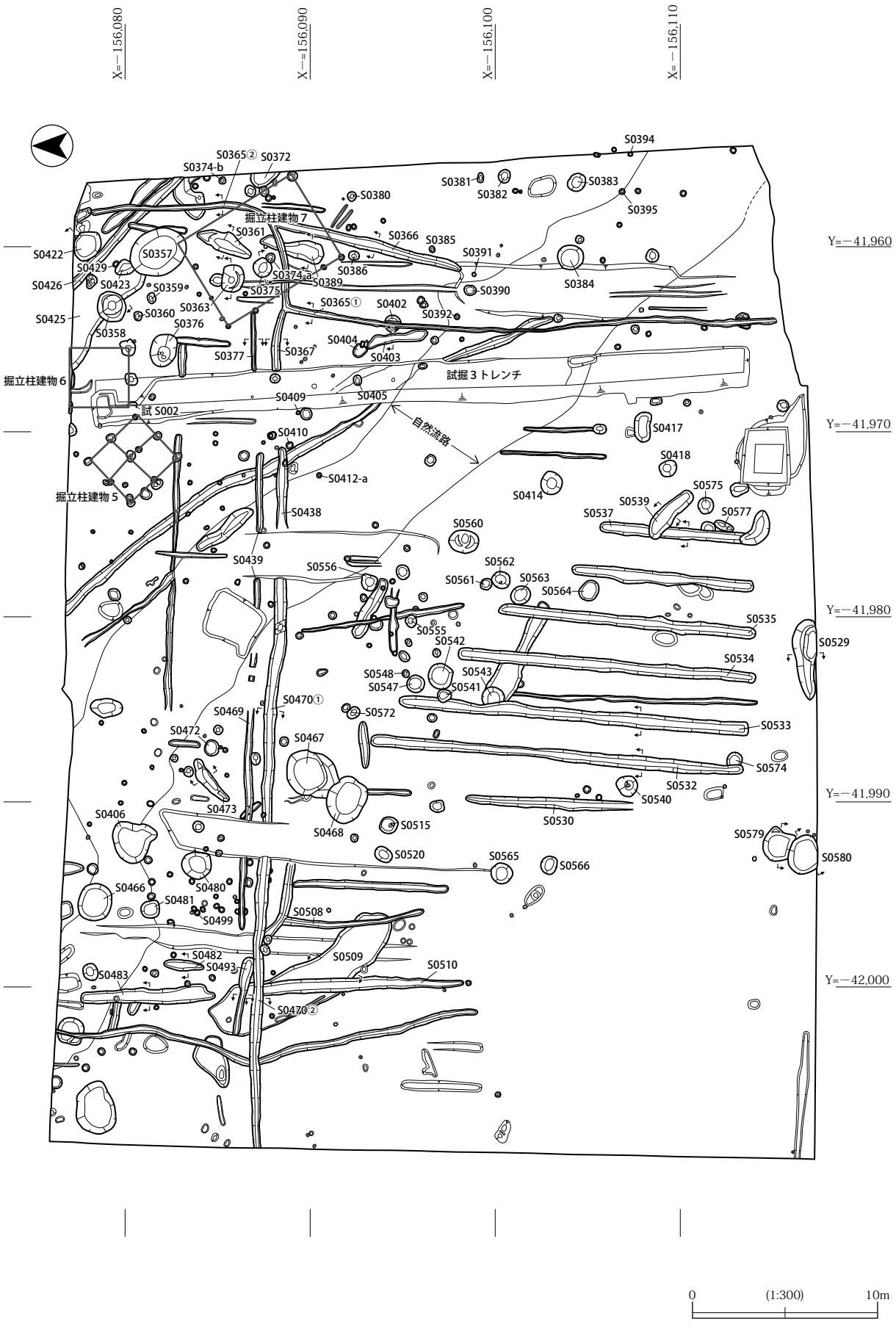
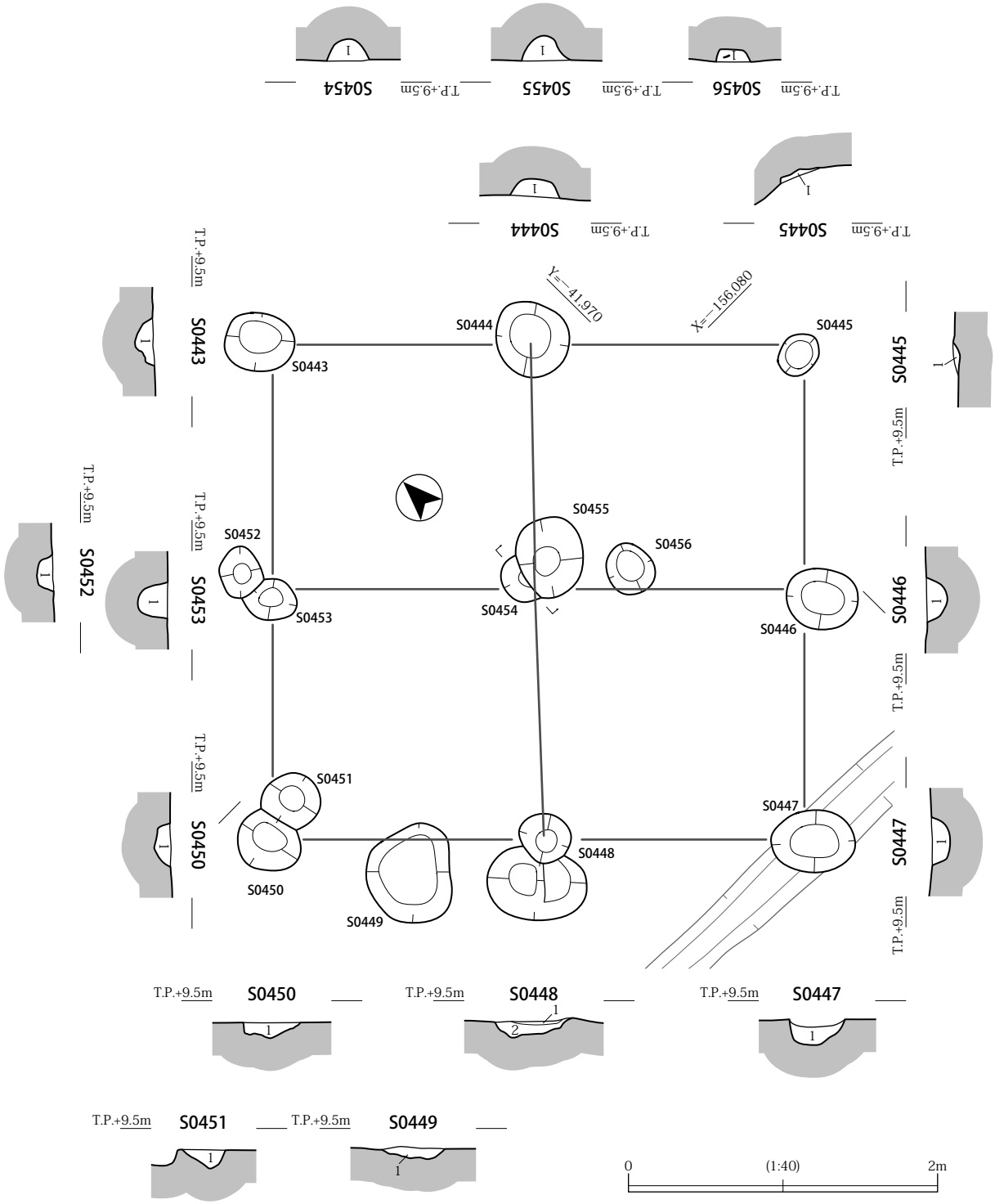


図 35　中央域東半南部（Ⅰ－ｂ２区）平面図



S0443
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0444
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0445
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト (土器小片含む)
S0446
1 2.5Y5/2 暗灰黄 細砂～中砂混じりシルト
S0447
1 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂混じりシルト
S0448
1 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂混じりシルト
2 10YR6/3 にぶい黄橙 極細砂混じりシルト
S0449
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0450
1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂混じりシルト
S0451
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S0452
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
S0453
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
S0454
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト
S0455
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト
S0456
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト

図 36　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物５平・断面図

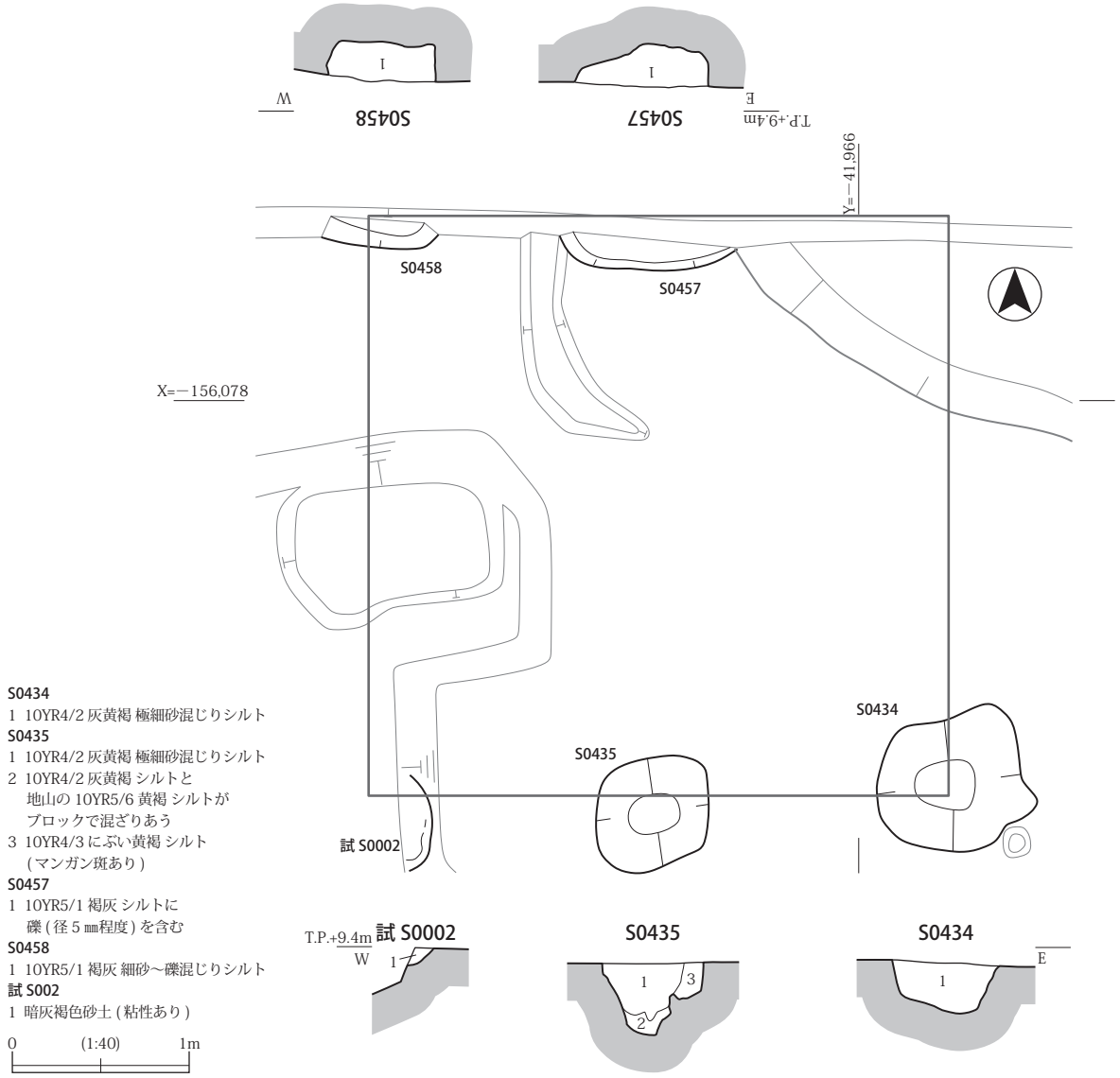


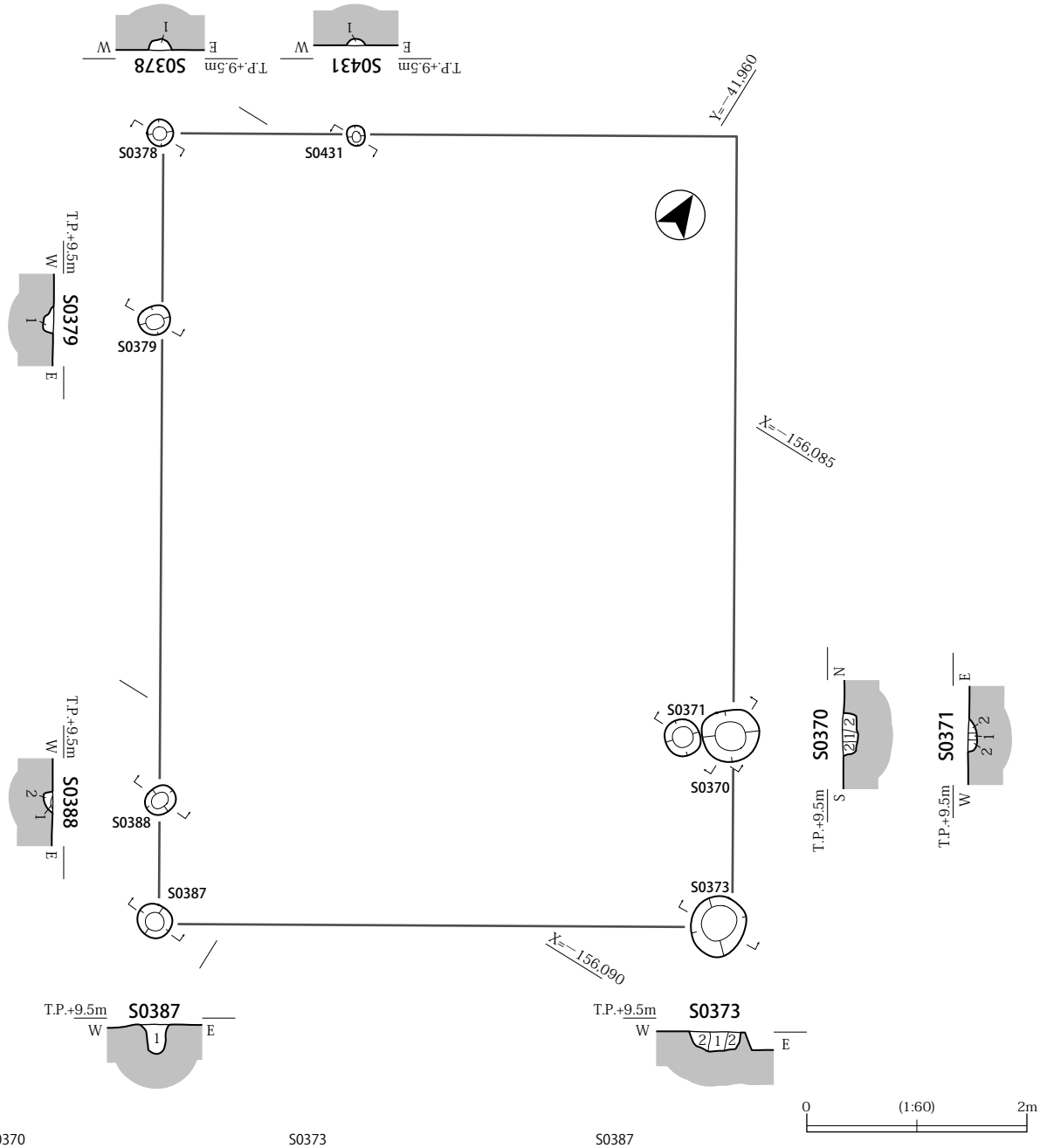
図 37　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物６平・断面図

とする、梁行１間、桁行２間の掘立柱建物として復元した。正方位に従って造られている。また、今回の調査で検出した掘立柱建物の中では、柱穴の規模が大きく、形も方形であるのが特徴的である。柱穴の規模から行くと、もっと大きな建物になる可能性もある。

柱穴 S0457、柱穴 S0458 の並ぶ列を北側柱列、柱穴 S0434、柱穴 S0435 及び松原市教育委員会の試掘２トレンチで検出した柱穴試 S0002 の並ぶ列を南側柱列とした。梁行が１間では小さいので、これより北にも柱列が続く可能性もある。しかし、Ⅰ－ａ区西半で検出できるはずだが、Ⅰ－ａ区西部域の南端が撹乱されており、不明である。柱間は約 1.5 mである。

北側柱列の柱穴 S0457、柱穴 S0458 は南半２分の１の検出にとどまっている。推定直径約 0.6 mと大きいが、円形でなく隅丸方形になる可能性もある。柱穴の深さは 0.2 mで、断面は逆台形もしくは方形を呈する。

南側柱列の柱穴 S0435 は隅円方形の平面形を呈し、直径 0.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。柱穴 S0434 は円形の平面形を呈し、直径 0.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。柱穴試 S0002 は部分的な検出であるので、詳細は不明である。



S0370
1 10YR5/1 褐灰 シルト
2 10YR4/2 灰黄褐 シルトに細砂を含む
S0371
1 10YR5/1 褐灰 シルト
2 10YR4/2 灰黄褐 シルトに細砂を含む
S0373
1 10YR5/1 褐灰 シルト (土器片含む)
2 10YR5/2 灰黄褐 シルト (土器片含む)
S0378
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0379
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0387
1 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
S0388
1 10YR5/2 灰黄褐 シルト
2 10YR5/1 褐灰 シルト
S0431
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト

図 38　Ⅰ－ｂ２区掘立柱建物７平・断面図

柱穴 S0457、柱穴 S0458、柱穴 S0434 からは、土器の小片が出土しており、これらから平安時代前半の遺構としてよいであろう。

主軸の振れから、掘立柱建物５・７より、掘立柱建物４などとの関係を考えるべきであろう。

掘立柱建物７（図 38、写真図版 18 － 5）

Ⅰ－ｂ２区の北東部、X= － 156,083 ～ X= － 156,092、Y= － 41,956 ～ Y= － 41,964 で検出した。調査時には掘立柱建物と認識していなかったが、整理段階で柱穴が等間隔で並ぶため掘立柱建物とみ

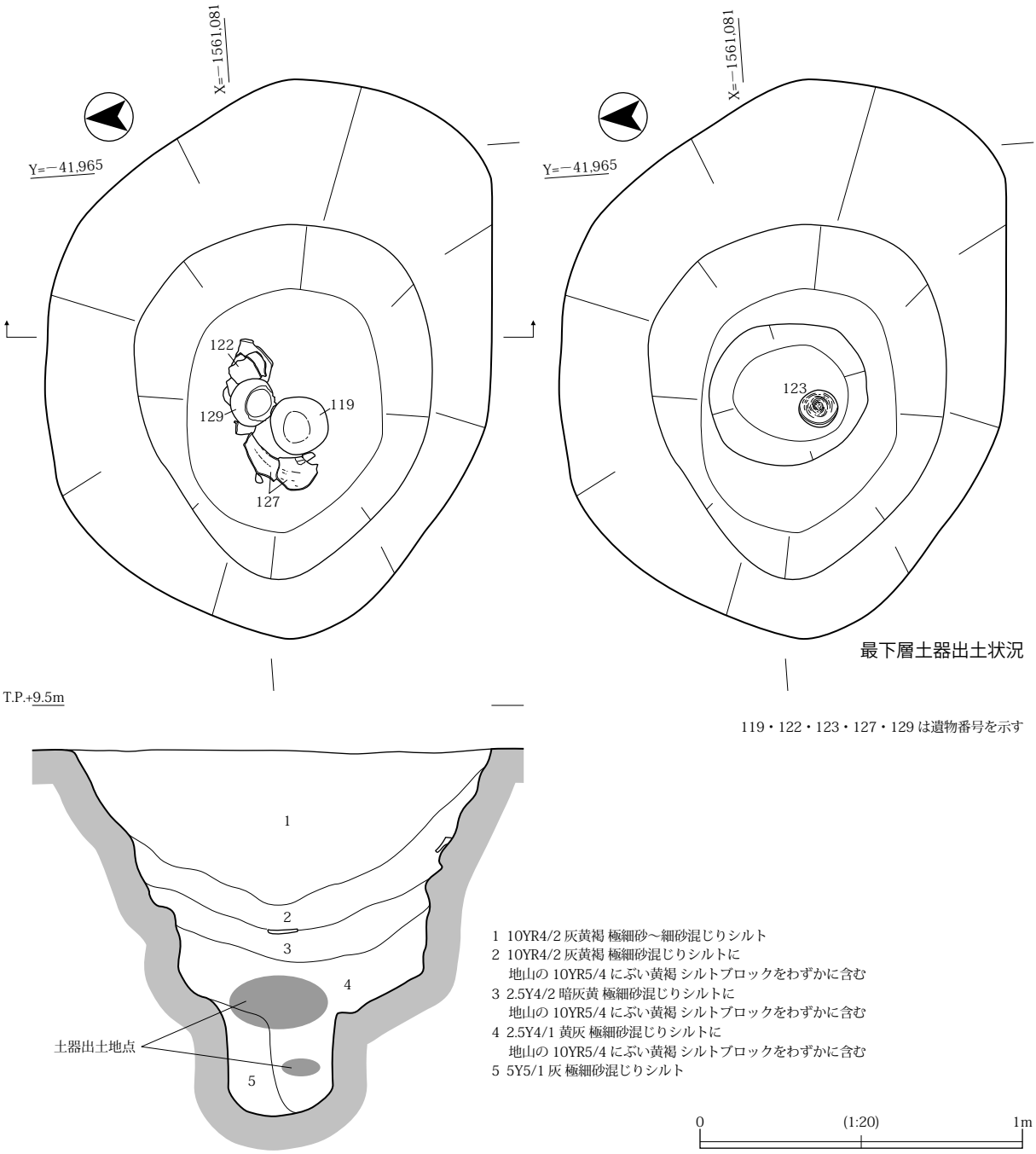


図 39　Ⅰ－ｂ２区 S0376 平・断面図

なした。検出した柱穴は少なく、柱穴の並びは不完全である。

南北棟で、梁行３間、桁行４間の側柱建物と考える。柱間は約 1.8 mである。

主軸の方向が掘立柱建物５と同じく、正方位に対して 45°斜めをとる。

柱穴は直径 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.2 m程度のものが多い。断面は皿形もしくはＵ字形を呈する。柱穴 S0373 や柱穴 S0370 などは中心に直径約 0.1 mの柱痕跡がみられる。

掘立柱建物５と掘立柱建物７は相関性のある遺構と考える。規模からすると、掘立柱建物７が主屋になり、掘立柱建物５が副屋となるだろう。

柱穴 S0373 から弥生土器壺底部が出土している（図 77 － 118）が、掘立柱建物７は平安時代前期の遺構と捉える。掘立柱建物５と同様に、主軸を正方位にとる他の掘立柱建物とは、多少の時期差があ

るかもしれない。

掘立柱建物７の周辺には、他にも柱穴をいくつか検出したが、建物を復元し得なかった。そして、Ｉ－ｂ２区の北西部、土坑 S0480 や土坑 S0406 を検出した周辺にも、東西に長い長方形もしくは正方形をとる柱穴群がみられ、掘立柱建物の可能性があるが、建物を復元し得なかった。Ｉ－ｂ２区でさらに数棟の建物があったのかもしれない。

井戸 S0376（図 39、写真図版 17 －２）

Ｉ－ｂ２区の北東部、X= － 156,081、Y= － 41,965 で検出した。

大形の楕円形を呈する。長軸は東西方向になる。深さや断面の形状､底部が湧水層に達していること、底部から完形に近い土器が多数出土したことなどから、素掘りの井戸と判断した。

長径 1.7 m、短径 1.4 m、深さ 1.1 mをはかる。断面は逆向きの凸形を呈する。地表から深さ 0.8 mまでは緩やかにＵ字形ににすぼまるが、そこから下層は急激に狭くなって、垂直に直径約 0.35 m、深さ 0.35 mの円柱形に掘りぬかれているので、下層が突き出しているようにみえる。上面からみると２段になった形状をとる。

埋土は中心がややたわむが、５層にわたって堆積する。第２層の灰黄褐色シルトに、地山の黄褐色シルトがブロック状に混じる。井戸を掘削する際生じた土が混じったのであろう。中心がたわみながら堆積する状況から、自然の営力で徐々に埋没したと思われる。

主に下層から多数の土器が出土した。中層（断面土層の２底部）からは黒色土器の破片が出土した。

下層（断面土層の４と５の境界）から土器がかたまって出土した（図 77 － 119 ～ 122、124 ～ 129、写真図版 44･45）。須恵器の壺や甕、杯身や杯蓋、高杯、土師器の短頸壺や直口壺、甕などである。

最下層からは須恵器の高杯蓋が出土した（図 77 － 123、写真図版 44 － 1）。

出土した土器のほとんどが完形に近いか、器形を復元しうる位大きく形をとどめていた。土師器壺や須恵器甕の口縁や体部などには、意図的な打ち欠きや穿孔が認められるものもある。このことから、出土した土器は破損して廃棄するために投げ込まれたのではなく、意図的に沈められたか、あるいは置かれたと考えられる。つまり、水鎮めなどの祭祀儀礼を行った可能性が示唆される。

出土した土器は須恵器がＴＫ 208 型式など５世紀半ばの時期を示すものが多く、最新のもので６世紀初めである。今回出土した資料中でも、須恵器出現以降で最も古い段階に属するものである。須恵器と土師器の様々な器種が出土した点でも、資料的価値が高い。

出土遺物からみて、井戸 S0376 は古墳時代中期でも古い段階の遺構であろう。

Ｉ－ｂ２区では他にも、遺物を含む井戸や土坑を多数検出しているが、平面規模も深さも井戸 S0376 が最大か、最大に近いといえる。また、須恵器を包含する古墳時代の遺構として最古に属しており、土坑群の中でも特別な存在だったと考えられる。

土坑 S0357（図 40、写真図版 18 －３）

Ｉ－ｂ２区の北東部で検出した。掘立柱建物７の北東角に位置する。

大形の楕円形の土坑である。平面規模としては、今回検出した土坑中でも最大規模である。深さがさほどないため土坑としたが、井戸になる可能性も考えられる。

長径 3.1 m、短径 2.5 m、深さ 0.8 mをはかる。長軸は北西－南東方向に 45°に近い角度でふる。

断面は緩やかに下がる鉢形を呈する。底面はややオーバーハングしたように膨らむ箇所がある。埋土は細かく分層できるが、中心がたわみながら堆積する。

中層から下層で須恵器杯身や土師器皿が出土した（図 77 － 108 ～ 111、写真図版 43 － 1 ・ 2）。

須恵器の杯身は古墳時代中期末のもので、土師器皿は奈良時代後期のものである。出土遺物の年代にやや開きがある。

出土遺物から、土坑 S0357 は奈良時代中頃に廃絶した遺構と言える。掘立柱建物 7 の北東角柱穴が土坑 S0357 上に来るので、掘立柱建物 7 より古い遺構となる。

土坑 S0358（図 41、写真図版 17 － 3）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。井戸 S0376 の北東、土坑 S0357 の北西に位置する。落ち込み S0425 に北東部約 2 分の 1 がかかる。

東西にやや長い、いびつな円形土坑である。

直径 1.5 m、深さ 0.8 mをはかる。断面は逆向きの凸状を呈する。地表から 0.4 mまでは緩やかに落ち、断面は皿形をなすが、そこから下層は急激にすぼまり、直径 0.8 mの円柱形になるので、底面が突き出したような形となる。井戸 S0376 に似ており、素掘りの井戸となる可能性もある。

埋土は２層に分かれるが、中央がややたわみながらも堆積する。第２層の土が落ち込んだものである。上層、下層ともに破片ではあるが遺物を含む。

底部から土師器の杯や杯蓋、甕が出土している（図 77 － 112、116、117、写真図版 43 － 3 ～ 5）。奈良時代後期のもので、土坑 S0357 よりやや新しい。

土坑 S0540（図 42、写真図版 15 － 1）

Ⅰ－ｂ２区の南西部、X= － 156,107、Y= － 41,989 で検出した。南西部は比較的遺構が少なく、特に土坑が少なくなり、南北方向の平行する溝群が多くみられる場所だが、溝群の西端の溝 S0530 とそのすぐ東の溝 S0532 の間で検出した。

北側がやや突出するが、不整円形の土坑である。

埋土は数層に分かれる。各層に大きな

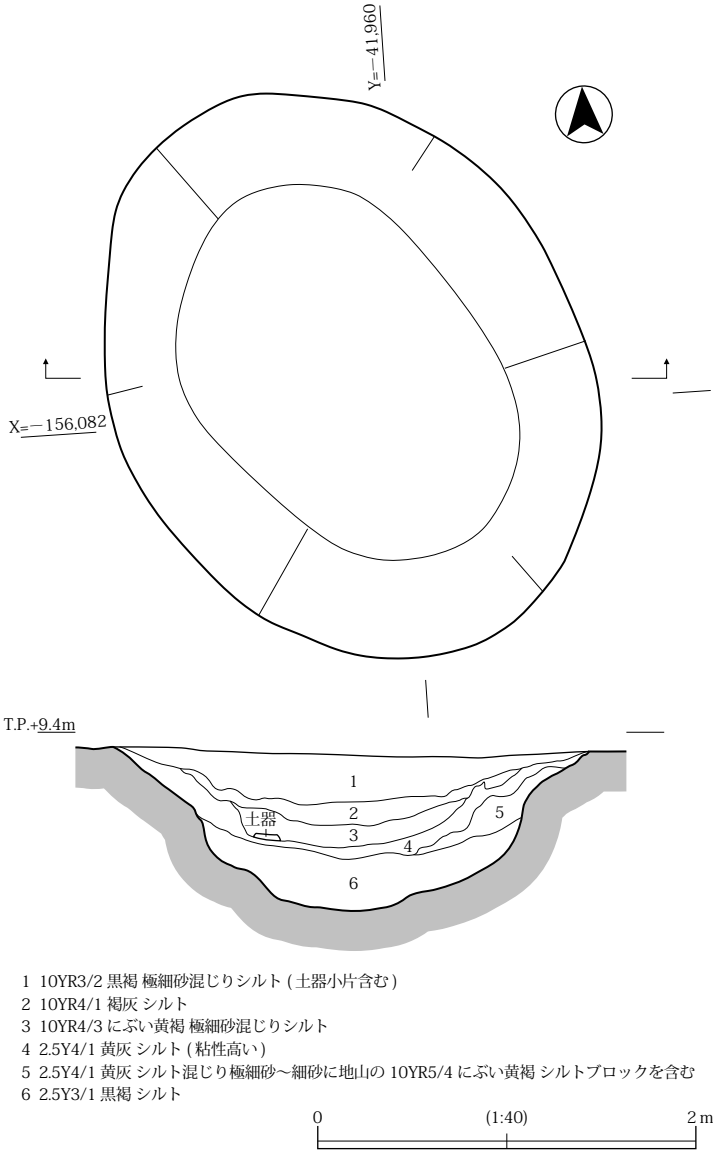


図 40　Ⅰ－ｂ２区 S0357 平・断面図

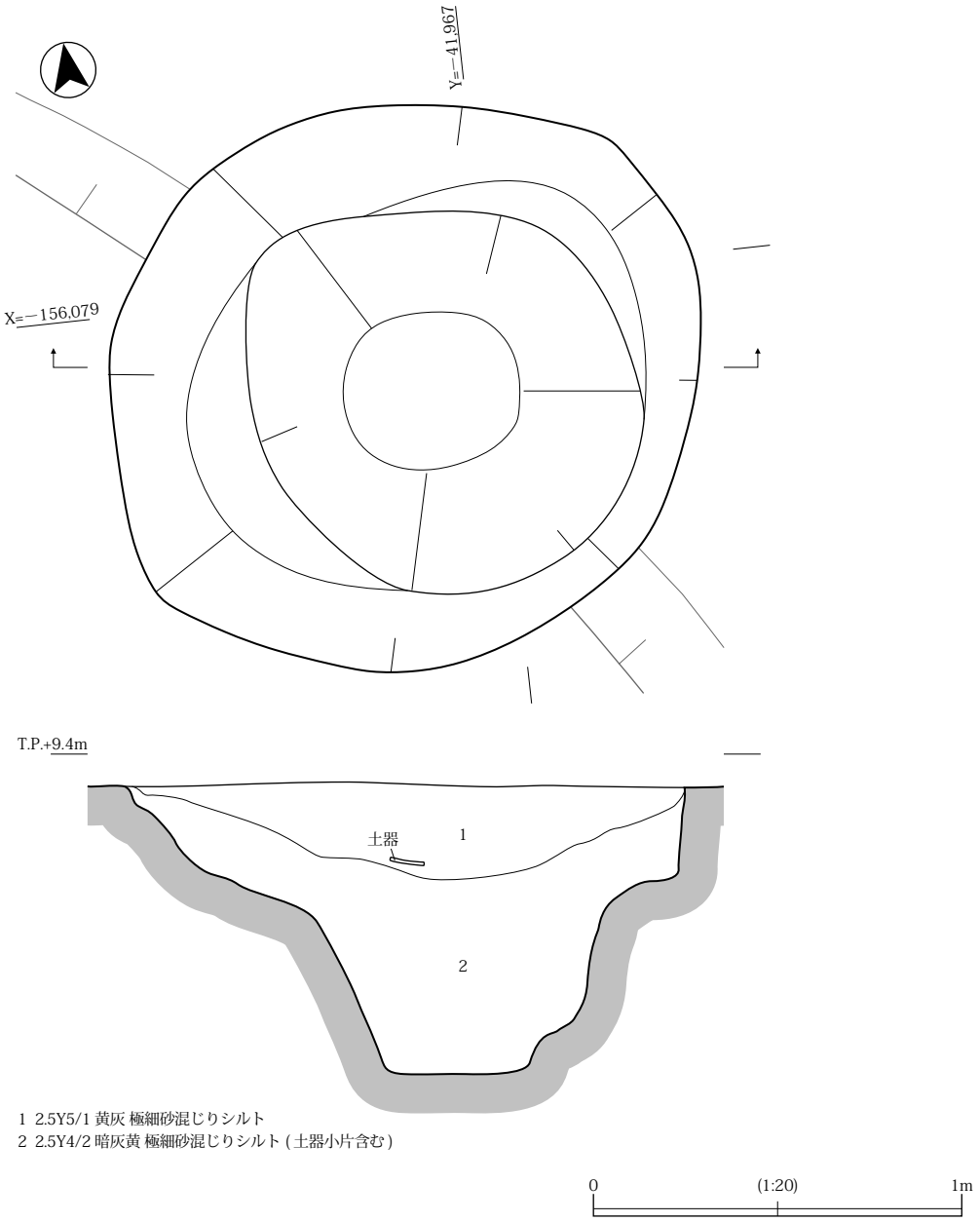


図 41　Ⅰ－ｂ２区 S0358 平・断面図

違いはないので、短期間で埋まった可能性が高い。下層はわずかにシルトのブロックを含む。

直径 1.0 m、深さ 0.95 mをはかる。断面はU字形を呈する。

最底部から、ほぼ完形の弥生土器が３点出土した。いずれも横転しており、本来の位置を保っていないと思われる。一番下層に台付鉢が上向きの状態で検出された。その上に壺が口縁を南西に向けて横向きに、その上に高杯の杯部が壺にかぶさるような状態で、内面を下に向けて検出された。壺を身とし、高杯を蓋として、壺にかぶせていたと考えられる。その場合、セットで土器棺だったとも考えられるが、壺内に骨などは確認できなかった。

いずれにせよ、意図的に土器が埋納された土坑であることは間違いない。

高杯は棒状の脚部で、壺は肩につまみのような凸部をもつ。いずれも弥生時代後期前葉のものである（図 78 － 130 ～ 132、写真図版 48 － 1 ～ 3）。

よって、土坑 S0540 は一括性がある、弥生時代後期前葉の遺構と言える。今回の調査中、遺構とし

て確認できたなかでは、最古に属する遺構である。

土坑 S0515（図 43、写真図版 15 － 2 ・ 3）

Ⅰ－ｂ２区の中央、土坑 S0468 の南で検出した。

円形の土坑である。直径 1.0 m、深さ 0.4 m をはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色のシルトに灰黄褐色のシルトが細かいブロック状に混じる。Ⅰ－ｂ２区で検出した土坑の多くは、このような堆積状況を示す。短期間で掘削、埋め戻しが行われたと考える。

中層で土師器壺が２点等出土した（図 79 － 133、135・136、写真図版 49 － 8 ・ 9）。

壺は２点とも口縁を南に向けて横転していたが、本来は口縁を上向きに直立していたと推測される。意図的に埋納したものであろう。

136 はほぼ完形で、135 も体部下半は欠損するが、器形を復元し得る。両方とも布留式新段階の土器である。

土坑 S0562（図 43、写真図版 16 － 2）

Ⅰ－ｂ２区の東側、中央で検出した。土坑 S0561 と隣接する。

円形の土坑である。直径 1.0 m、深さ 0.3 m をはかる。断面は皿形を呈する。断面を見ると、壁面や底面が平らでなく、粘土採掘坑のように凹凸が著しい。埋土は褐灰色のシルトに細かい灰黄褐色のシルトがブロック状に混じる。短期間で、掘削、埋め戻しが行われたと分かる。

中層で須恵器の杯身と蓋が３点出土した（図 79 － 145 ～ 147、写真図版 49 － 3 ～ 5）。掘削中に取りあがってしまったため、出土状況図では１点のみ図示している。いずれも完形に近く、内面を上に向けた状態で出土している。古墳時代後期の時期を示す一括性の高い資料で、土坑 S0562 は当該期の遺構と言える。

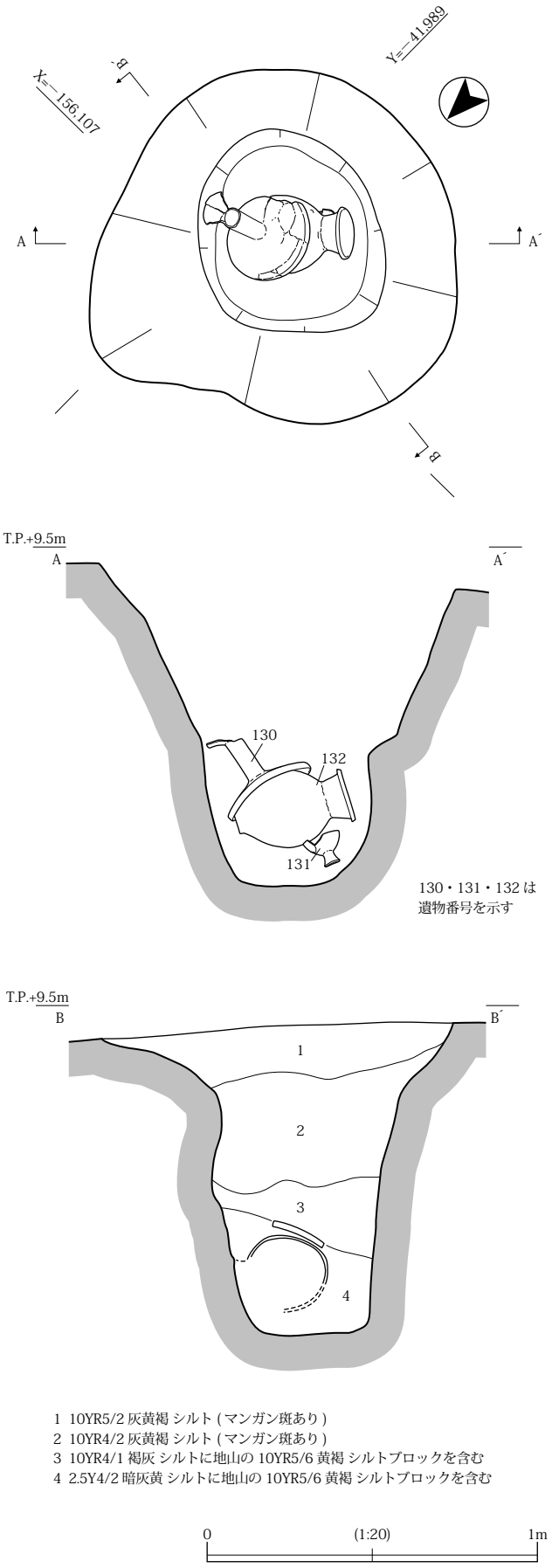


図 42　Ⅰ－ｂ２区 S0540 平・断面図

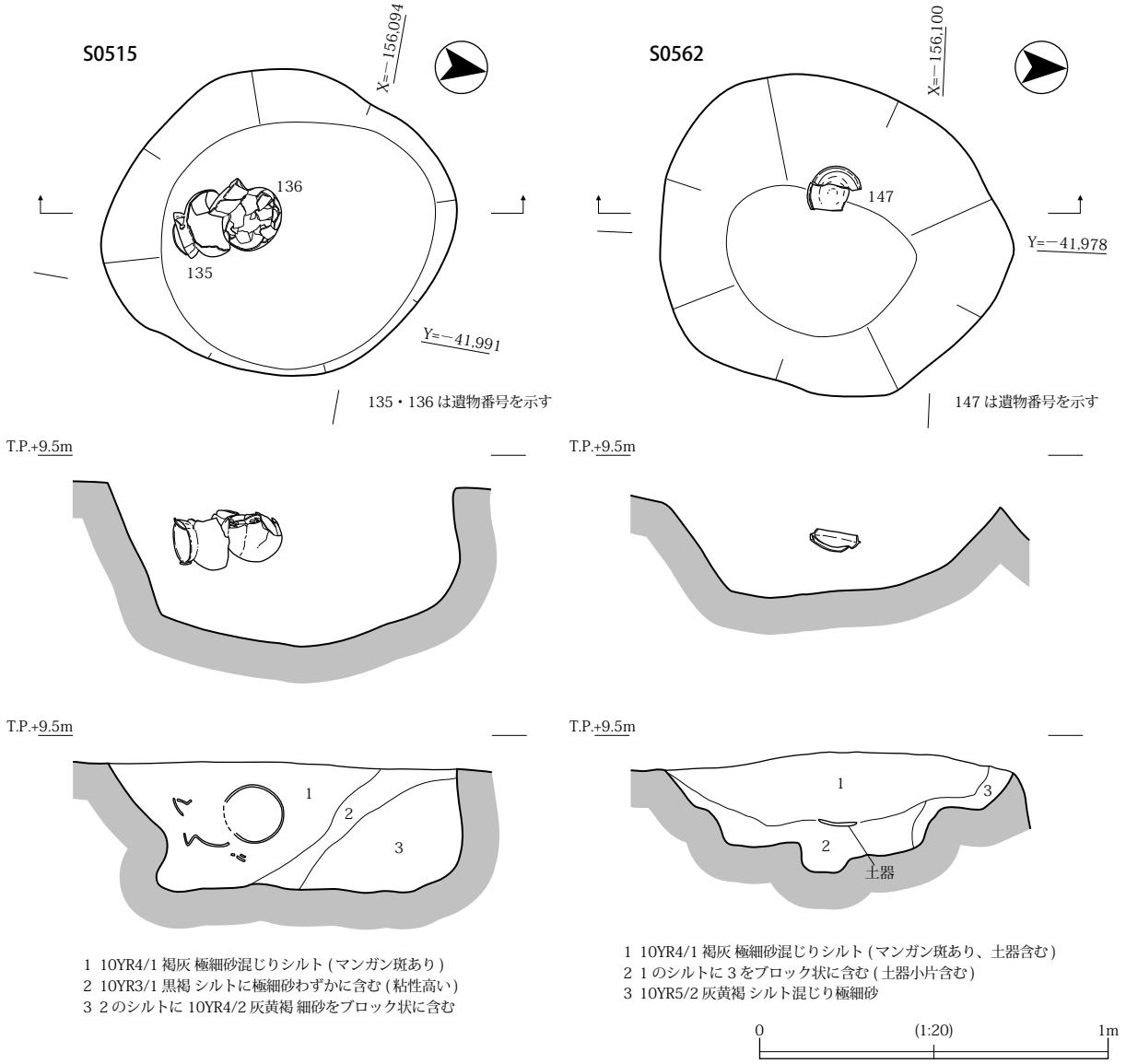


図 43　Ⅰ－ｂ２区 S0515・S0562 平・断面図

井戸 S0402（図 44、写真図版 16 － 1）

Ⅰ－ｂ２区の東側中央で検出した。溝 S0365 に切られる。

円形の土坑として検出したが、溝 S0365 完掘後掘り下げたところ深くなったため、井戸とした。

直径 0.8 m、深さ 1.2 mをはかる。上面からほぼ垂直に掘り込まれ、断面は深い逆台形を呈する。

土坑の上層から土師器椀が、下層からは弥生土器が出土した（図 80 － 153 ～ 156、写真図版 43 － 7・9・10）。上層の土師器椀は平安時代前期末から中期初めのものだが、溝 S0365 からの混入と考えられる。それ以外の遺物は弥生時代後期のもので、井戸 S0402 は弥生時代後期の遺構と考える。

土坑 S0414（図 44）

Ⅰ－ｂ２区の中央よりやや東南部で検出した。

円形の土坑である。

直径 1.2 m、深さ 0.75 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土は上層が細かく分層できるが、土坑の形状に沿ってたわみながら堆積する。

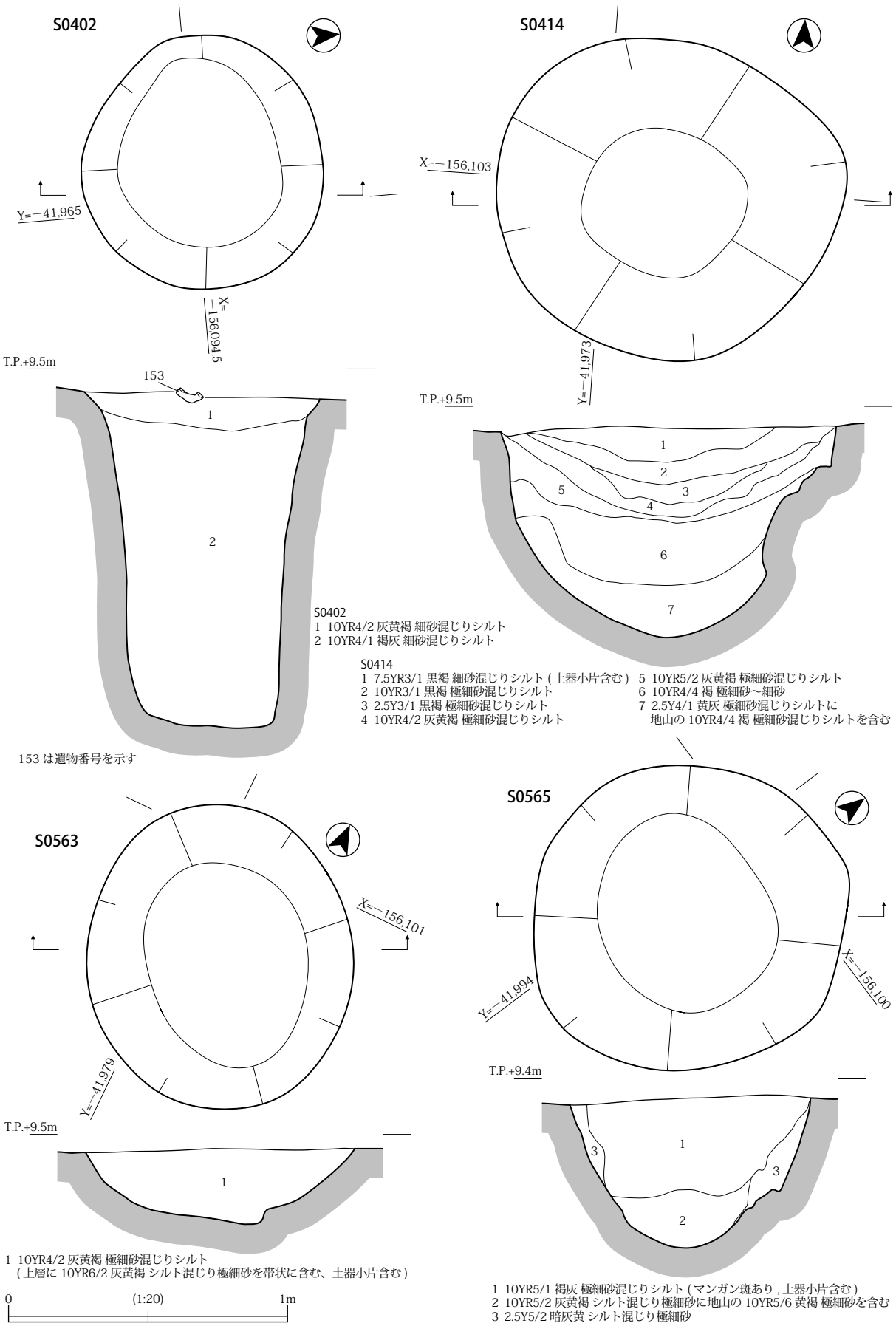


図 44　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（1）

土師器の壺が出土している（図 80 － 164、写真図版 47 － 6）。布留式と思われる。従って、古墳時代中期の遺構と考えられる。

土坑 S0563（図 44）

Ⅰ－ｂ２区の東側、中央よりやや南で検出した。土坑 S0562 の南西に位置し、溝 S0535 と隣接する。南北にやや長い長円形の土坑である。

長径 1.1 m、短径 0.9 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。

破片だが土師器皿が出土した（図 79 － 143）。平安時代前期のものか。

土坑 S0565（図 44、写真図版 18 － 8）

Ⅰ－ｂ２区の西側、中央よりやや南で検出した。土坑 S0566 の北に位置する。

円形の土坑である。

直径 1.1 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土はやや砂質が強いが、両脇に掘削時の崩壊土が残る。土器小片を含むが、時期は不明である。

土坑 S0466（図 45、写真図版 18 － 2）

Ⅰ－ｂ２区の北西部、北端近くで検出した。土坑 S0406 の北西にある。

円形の土坑である。

直径 1.0 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土は細かく分層できるが、砂質が強い。上層から中層に土器が混じる。

須恵器の杯身と壺蓋、直口壺が出土した（図 80 － 169 ～ 171、写真図版 47 － 10）。これらから、土坑 S0466 は古墳時代中期後半から末の遺構と言える。

土坑 S0406（図 45）

Ⅰ－ｂ２区の北西部、北端近くで検出した。土坑 S0466 の南東に位置する。ややいびつな円形の土坑である。

直径 1.1 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。

中層から土器が大量に出土した。須恵器の杯身や有蓋短頸壺の蓋、高杯である（図 80 － 157 ～ 160、写真図版 47 － 1 ～ 4）。一括性が高い資料である。これらから、土坑 S0406 は古墳時代後期の遺構と言える。

土坑 S0480（図 45、写真図版 16 － 3）

Ⅰ－ｂ２区の北西部で検出した。円形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。埋土は砂礫にシルトを含む。土坑 S0467、土坑 S0468 と同じく湧水が激しい砂礫層に立地していたため、坑底の層界は不明瞭であった。

上層から下層にわたって大量の土器が出土した。湧水による崩壊が著しいため、土器の検出状況も詳細に記録できなかった。しかし、土坑 S0467、土坑 S0468 と違って、土器がぎっしり入っていた状況から、一括投棄された廃棄土坑と考えられる。

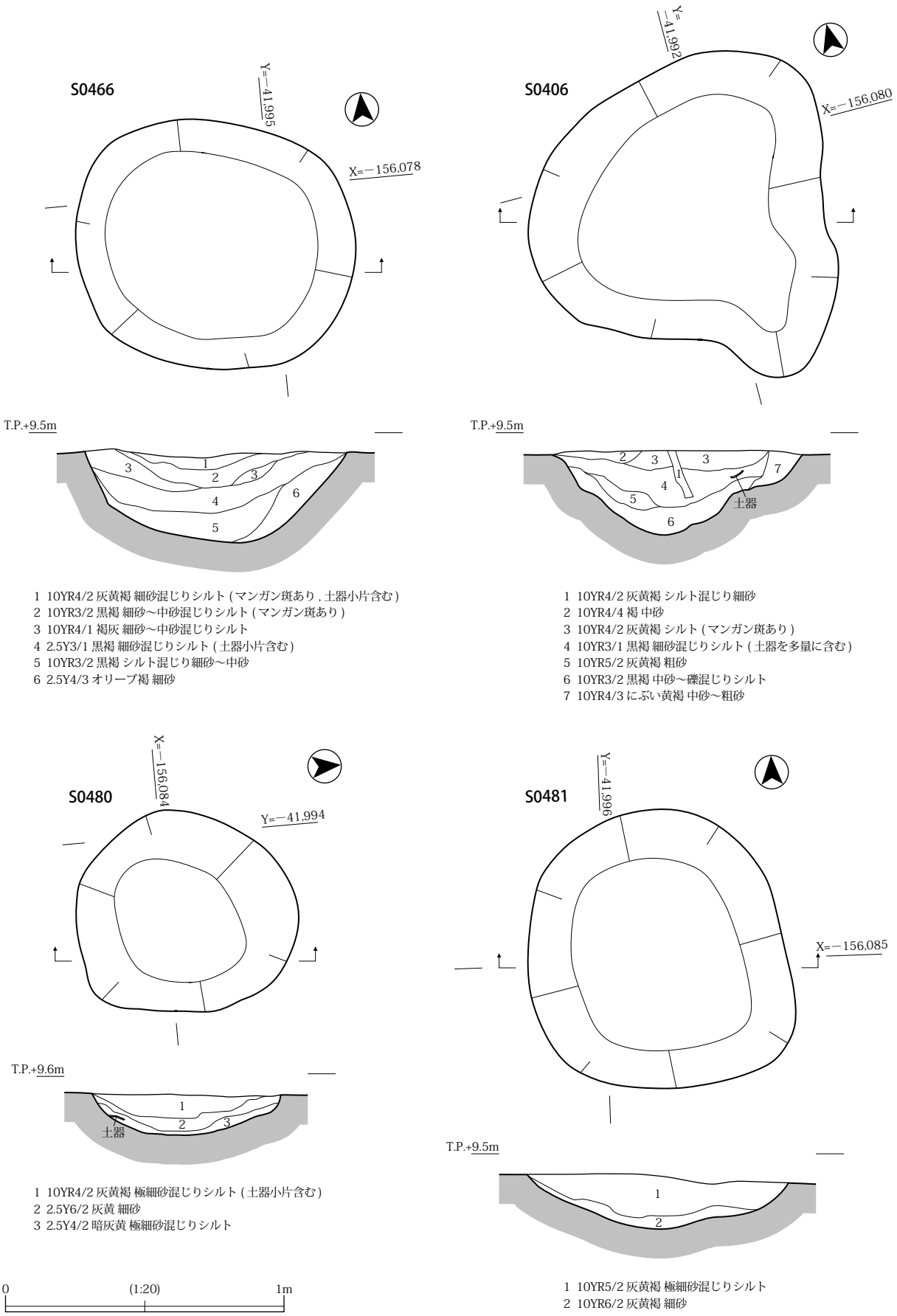


図 45　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（２）

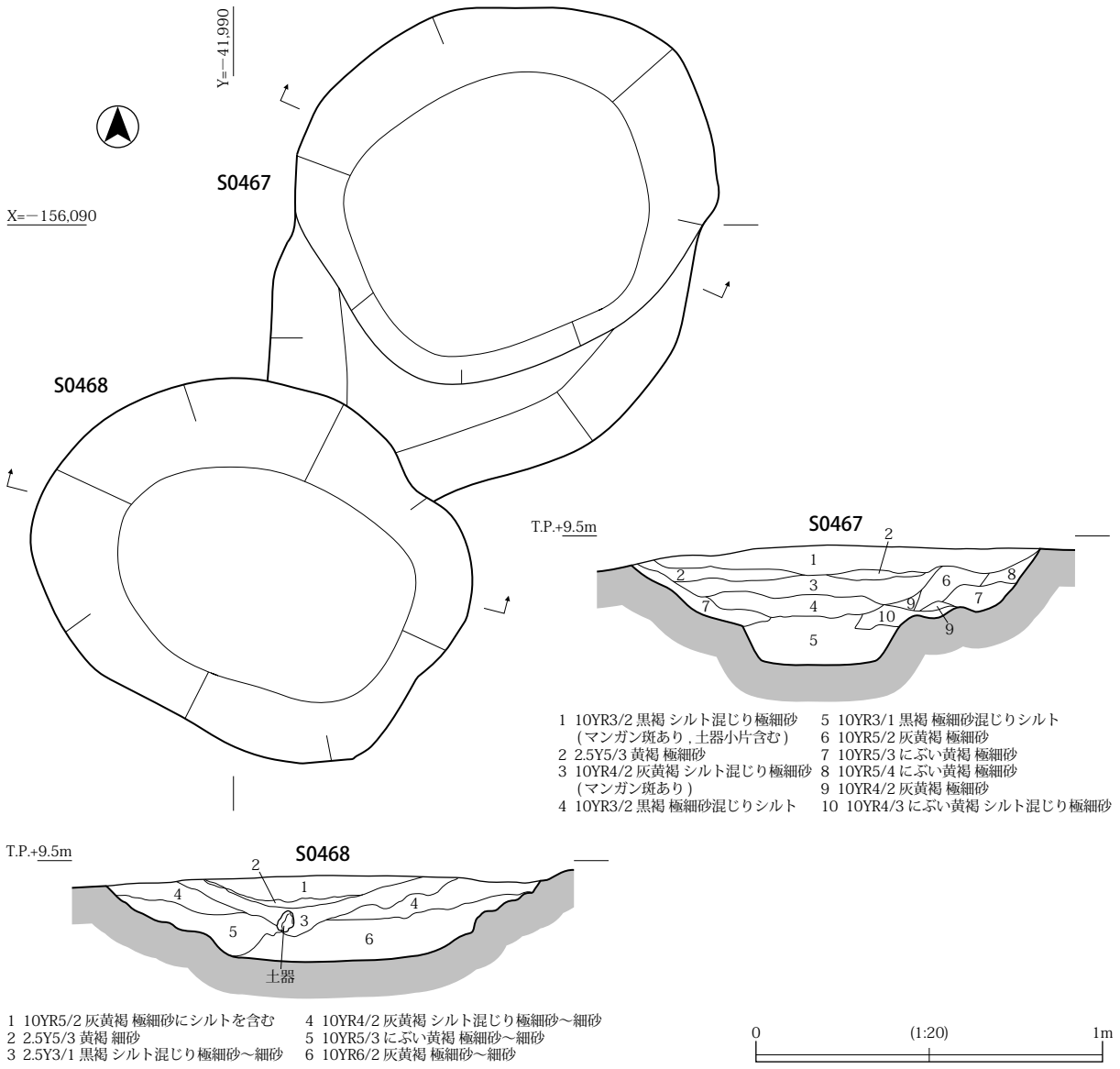


図 46　Ⅰ－ｂ２区遺構平・断面図（３）

出土遺物のほとんどが土師器で、高杯や小型丸底壺であった（図 81 － 176 〜 184、写真図版 46 － 1)。特に小型丸底壺が多く、図化したもの以外も含めると 12、13 個体あった。

一括性が高く、土坑 S0480 は古墳時代前期末から中期前半の遺構と言える。

土坑 S0481（図 45）

Ⅰ－ｂ２区の北西部、土坑 S0466 の南、土坑 S0406 の西で検出した。

円形の土坑である。直径 0.95 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

土師器杯が出土した（図 81 － 194)。体部内面に放射状暗文がみられることや口縁の形態から、土坑 S0357 から出土した遺物（図 77 － 110・111）と同じく、8 世紀中頃、奈良時代の遺物である。

土坑 S0467（図 46、写真図版 18 － 1 ）

Ⅰ－ｂ２区の北西部で検出した。土坑 S0468 の北にあり、南西部は土坑 S0468 によって切られる。

直径 1.2 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は逆向きの凸形を呈する。深さ 0.2 mまでは皿形を呈し、

下層はさらに直径 0.5 mで断面逆台形状になっている。埋土はシルトを含む極細砂である。

Ⅰ－ｂ２区の北西部は、地山の基盤層の砂質が強いため、湧水によって掘形がすぐに崩壊してしまった。実際の深さはもっとあったかもしれない。井戸であった可能性もある。

須恵器の杯身と杯蓋、土師器杯が出土した（図 81 － 186 ～ 188、写真図版 46 － 2）。

よって、土坑 S0467 は古墳時代中期後半の遺構と考えられる。

土坑 S0468（図 46、写真図版 18 － 1）

Ⅰ－ｂ２区の北西部で検出した。土坑 S0467 の南にある。

楕円形の土坑である。

長径 1.2 m、短径 1.0 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土はシルトを含む極細砂から細砂である。土坑 S0467 同様、本来の深さはもっとあったかもしれない。井戸であった可能性もある。中層から土器が出土している。

土師器の壺や高杯、甕が複数出土した（図 81 － 189 ～ 193、写真図版 46 － 4 ～ 6）。高杯はやや古いが、それ以外は土坑 S0467 と同じ年代を示す。

よって、土坑 S0468 は古墳時代前期後半の遺構と考えられる。

土坑 S0422（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東端、Ⅰ－ａ区西半との境界で検出した。落ち込み S0425 を切る。

楕円形の大形の土坑である。壁面が垂直に掘削されて上面と底面の面積がほぼ同じになっており、井戸であった可能性もある。

長径 1.8 m、短径 1.3 m、深さ 0.6 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

須恵器の杯蓋や土師器甕などが出土した（図 80 － 161 ～ 163、写真図版 47 － 10）。これらの遺物から、土坑 S0422 は古墳時代中期の遺構と思われる。

落ち込み S0425（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東端で検出した。

長さ 11.0 mにわたって、不整形な三角形状にだらだらと広がる落ち込みである。

土坑 S0358、土坑 S0357、土坑 S0422、土坑 S0429、溝 S0426 などに切られる。幅 6.0 m、深さ 0.15 mをはかる。Ⅰ－ｂ２区の北になるⅠ－ａ区の西半まで広がるようだが、続きは検出できなかった。

断面は浅い皿形を呈する。埋土は第２層の土が落ち込んだようで、落ち込み S0425 中からは大量の土器の破片が出土している。

須恵器の杯身や杯蓋、把手付椀などである（図 80 － 165 ～ 167、写真図版 47 － 7 ～ 9）。土坑 S0422 と同じく、古墳時代中期であろう。

土坑 S0429（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東端で検出した。落ち込み S0425 の中にあり、平面形が涙滴形の土坑 S0423 に南西側を切られる。落ち込み S0425 との境が明確でない。

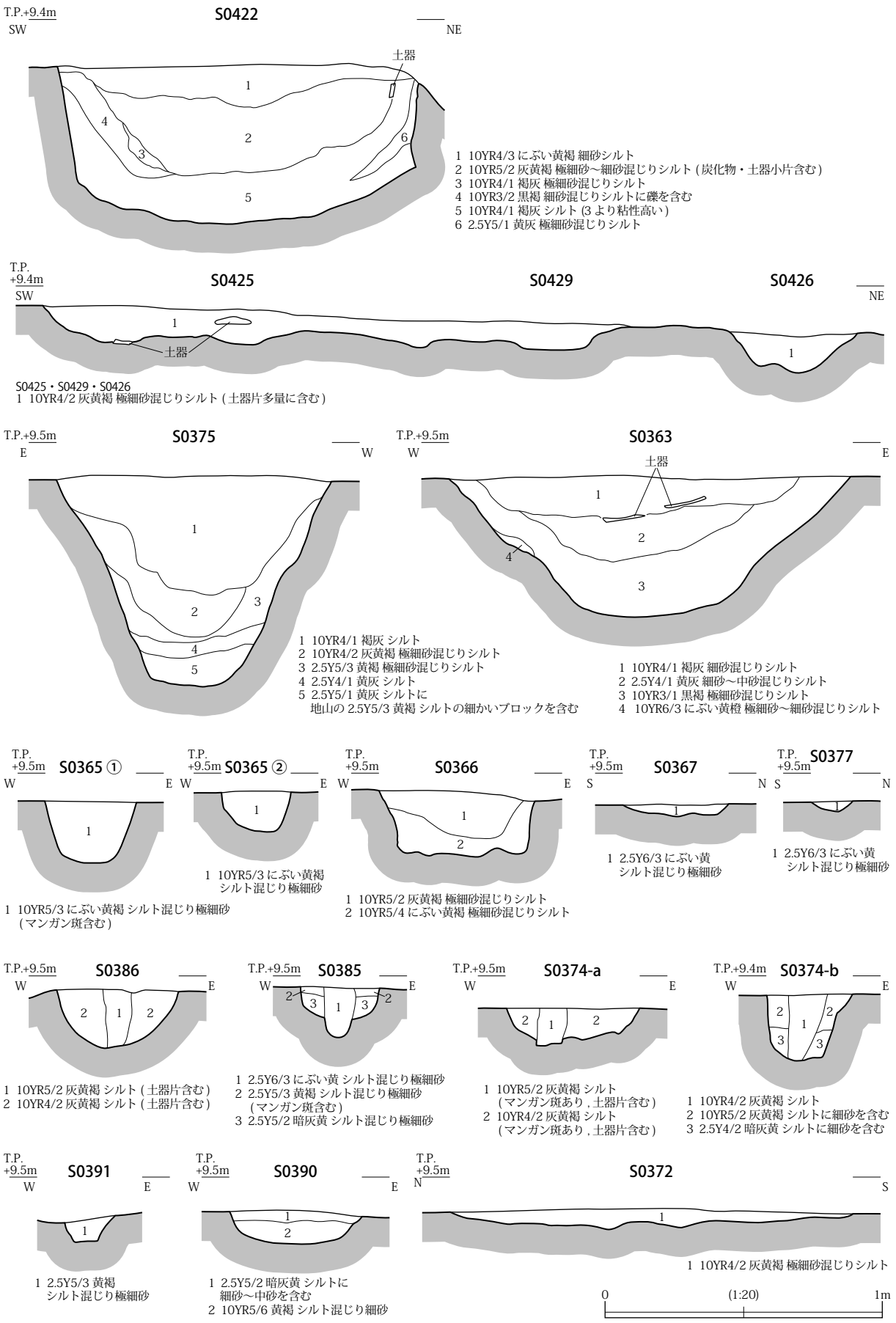


図 47　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（１）

小形の円形の土坑である。

直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形である。

土坑 S0429 内からは須恵器壺体部、滑石製の有孔円盤 3 点と滑石製臼玉 1 点が出土した（図 80 － 168、172 ～ 175、写真図版 47 － 5 、57 － 3）。有孔円盤や臼玉は祭祀に用いられるものであり、土坑 S0429 が何らかの祭祀遺構であった可能性を示唆するものである。

出土遺物から、この土坑 S0429 は古墳時代中期の遺構と考える。

溝 S0426（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東端で検出した。落ち込み S0425 を切る。

北西－南東に 45°の角度でのびる溝である。

長さ 8.5 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。

土坑 S0375（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。

大形の円形を呈する土坑である。土坑 S0374―ａに切られる。

直径 1.0 m、深さ 0.75 mをはかる。断面は逆台形である。埋土には地山の細かいシルトのブロックが混じり、短期間で埋め戻しが行われたと考えられる。

土坑 S0363（図 47、写真図版 18 － 4）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。

大形の円形の土坑である。

直径 1.4 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は逆台形である。埋土は地山の細かいシルトのブロックが混じり、短期間で埋め戻しが行われたと考えられる。

埋土の上層から土器が出土している。須恵器の鉢と土師器甕である（図 77 － 113・114、写真図版 43 － 8）。古墳時代後期から末の遺構である。

溝 S0365（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。井戸 S0402 を切る。

調査区北東端を南北に約 9 mのび（S0365 ②）、そこから緩やかに西に曲がり、南下する溝 S0366 とに分岐し、東西溝となる。西に 5 mのびたところで、再び西と南に分岐する。分岐後の西にのびる溝を溝 S0367 とし、南下する溝をそのまま溝 S0365 ①とした。

分岐後、溝 S0365 は南に約 26 mのびて、Ⅰ－ｂ２区南端に達するが、調査区外にさらにのびると思われる。

南にのびる溝 S0365 は溝 S0366 とほぼ平行であるが、長さは溝 S0365 の方が長く、幅は溝 S0366 の方が広い。南北、東西方向ともほぼ正方位を意識していると言える。

幅 0.25 ～ 0.3 m、深さ 0.15 ～ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

後述の溝 S0367 はさらに西の溝 S0438、溝 S0470 と同一になる可能性もあり、溝 S0365、溝 S0366、溝 S0367 ともなんらかの区画溝と考えられる。

切り合う土坑 S0402 の上層から土師器椀（図 80 － 153）が出土しており、これは溝 S0365 の遺物の可能性が高いことから、溝 S0365 は平安時代前期末から中期初めの遺構と考えられる。

溝 S0366（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。

溝 S0365 から南にのびる南北溝である。南端は正方位よりやや西にふる。調査区半ばで収束する。

長さ 10.0 m、幅 0.6 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

溝 S0365 とのつながりから、溝 S0366 は溝 S0365 と同じ平安時代前期末から中期初めの遺構と推測する。

溝 S0367（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。

溝 S0365 から分岐して西にのびる東西溝である。約 4 m西に溝 S0438 があり、いったん途切れるが同一の溝だった可能性もある。また、約 1 m北に平行にはしる溝 S0377 があり、溝 S0438 の北の同位置にも溝 S0439 があることからも、２本の平行する東西溝がずっと西までのびていたと考えられる。

長さ 3.5 m、幅 0.35 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0377（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。

溝 S0367 の北にあり、平行して走る東西溝である。

長さ 3.0 m、幅 0.15 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0386（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。溝 S0366 の中央西にある。

直径 0.45 m、深さ 0.2 mをはかり、掘形内に直径 0.1 mの柱痕がみられる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0385（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。溝 S0366 の南端東にある。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。柱痕は直径 0.15 m、深さ 0.2 mである。断面はＵ字形を呈する。

柱穴 S0374 － a（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部、掘立柱建物７の周辺で検出した。土坑 S0375 の南東にあり、土坑 S0375 を切る。柱根が残るので柱穴である。

掘形の平面形は円形を呈し、直径 0.5 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。掘形内には直径 0.1 mの柱痕がみられ、深さ 0.15 mをはかる。屋根の自重による沈下のためか、掘形底面より下方へ凹む。遺物は出土していない。

土坑 S0374 － b（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部、掘立柱建物７の中で検出した。溝 S0365 の東、調査区東端にある。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.3 m、深さ 0.25 mをはかる。柱痕は直径 0.15 m、深さ 0.25 mである。

断面はＵ字形を呈する。

土坑 S0391（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の東側中央で検出した。溝 S0366 の南、土坑 S0390 の東にある。円形の小さな土坑である。

直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0390（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の東側中央で検出した。溝 S0366 の南、土坑 S0391 の西にある。円形の土坑である。

直径 0.45 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0372（図 47）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。調査区東端にある。

長円形の土坑で、東側約２分の１は調査区外となる。

残存径 1.45 m、短径 1.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。

柱穴 S0380（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。溝 S0366 の中央東にある。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.35 m、深さ 0.2 mをはかる。柱痕は直径 0.15 m、深さ 0.2 mである。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0381（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の東端中央で検出した。

長円形の土坑だが、柱穴の可能性もある。

直径 0.25 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0384（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。円形の大形の土坑である。地山が砂礫層のため、埋土も砂礫を多く含む。

直径 1.25 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

土坑 S0382（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。調査区東端、土坑 S0381 の南にある。円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

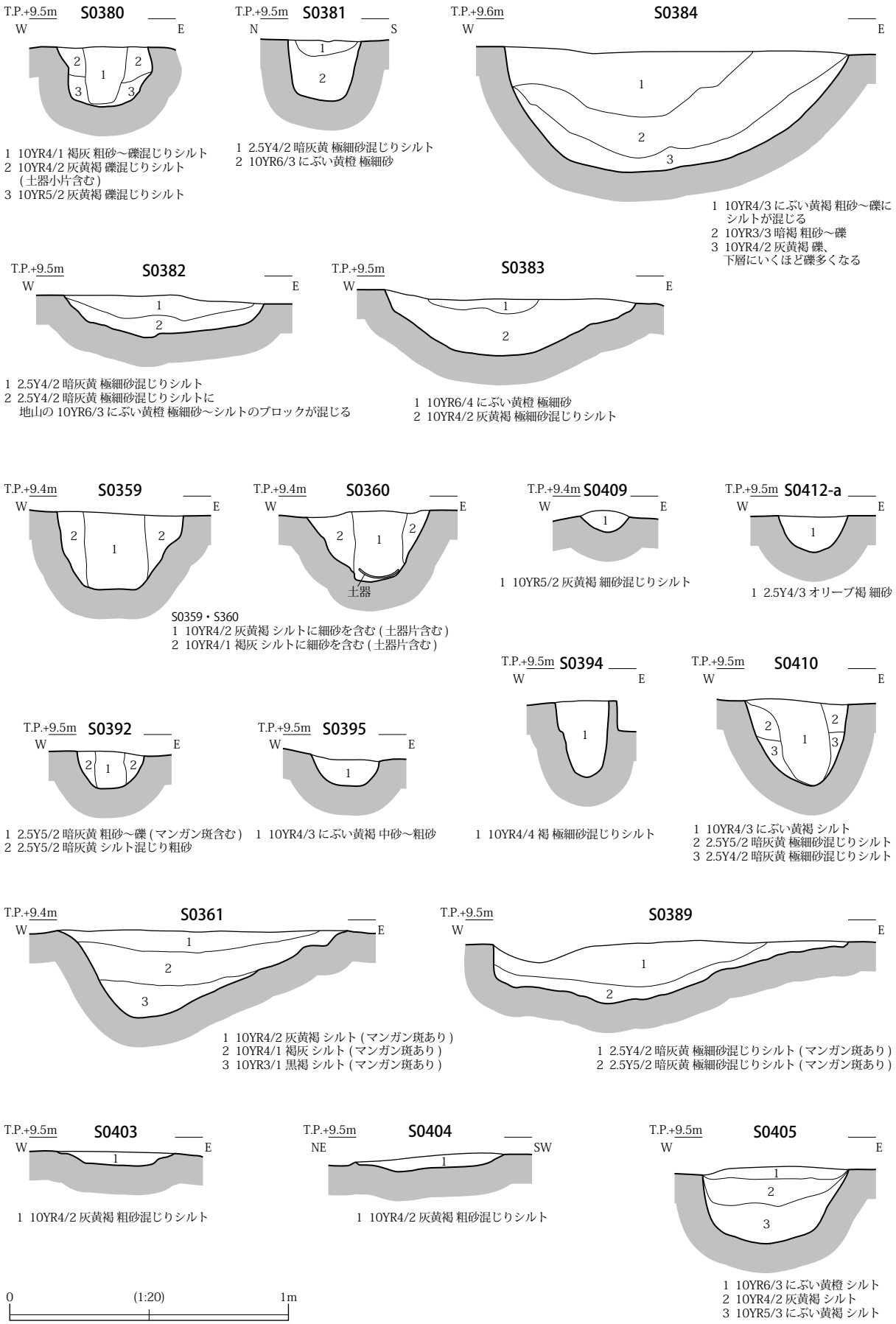


図 48　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（２）

土坑 S0383（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。調査区東端、土坑 S0382 の南にある。円形の土坑である。

直径 0.9 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

柱穴 S0359（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。土坑 S0357 の西にある。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.45 m、深さ 0.2 mをはかる。柱痕は直径 0.2 m、深さ 0.2 mである。断面はＵ字形を呈する。

柱穴 S0359 と、これから約 1 m離れた柱穴 S0360 から出土した遺物が接合した。土師器杯（図 77 － 115）で、奈良時代末から平安時代初めか。

柱穴 S0360（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。土坑 S0358 の南、柱穴 S0359 の約 1 m北西にある。柱痕が残るので柱穴である。柱穴 S0359 と同規模である。

直径 0.45 m、深さ 0.2 mをはかる。柱痕は直径 0.2 m、深さ 0.25 mである。断面はＵ字形を呈する。

柱痕の底部から約 4 分の 3 残った状態で土器が出土した。柱穴 S0359 出土資料とも接合し、土師器杯となった（図 77 － 115）。柱穴 S0359、柱穴 S0360 は切り合っていないが、関連性のある遺構と捉える。

土坑 S0409（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。小形の円形土坑である。

直径 0.15 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0412 － a（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の中央北側で検出した。小形の円形の土坑である。

直径 0.25 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0392（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の東部中央で検出した。溝 S0365 の東にある。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.25 m、深さ 0.15 mをはかる。柱痕は直径 0.1 m、深さ 0.15 mである。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0395（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。小形の円形の土坑である。土坑 S0394 の西にある。

直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0394（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。小形の円形土坑である。土坑 S0395 の東にある。

直径 0.2 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0410（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の中央北側で検出した。柱痕が残るので柱穴である。

直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。柱痕は直径 0.15 m、深さ 0.3 mである。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0361（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。土坑 S0357 の南、井戸 S0363 の東にある。不定形の土坑である。長さ 3.2 m、幅 1.0 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆三角形を呈する。

土坑 S0389（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部で検出した。不定形の土坑である。土坑 S0361 の南にあり、溝 S0365 に切られる。長さ 3.5 m、幅 1.3 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はいびつな皿形を呈する。

土坑 S0405（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の東部中央で検出した。円形の土坑である。直径 0.5 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0403（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の東部中央で検出した。不整形の溝である。井戸 S0402、土坑 S0404 と接する。

長さ 3.3 m、幅 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0404（図 48）

Ⅰ－ｂ２区の北東部中央で検出した。溝 S0403 と接する。いびつな円形の土坑である。

直径 0.5 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0579（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部南端で検出した。土坑 S0580 に切られる。いびつな円形の土坑である。

直径 1.5 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土には地山の大きなシルトのブロックが混じり、短期間で埋め戻しが行われたと推測できる。

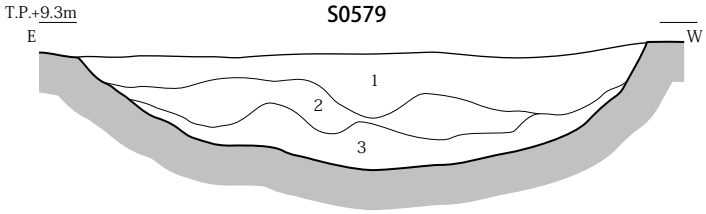
土坑 S0580（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南西部南端で検出した。土坑 S0579 を切り、土坑の約 4 分の 1 は調査区外にある。いびつな円形の土坑である。直径 1.75 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

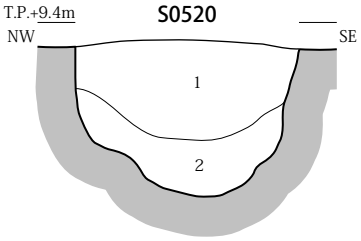
土坑 S0520（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の北西部やや中央で検出した。土坑 S0515 の西にある。円形の土坑である。

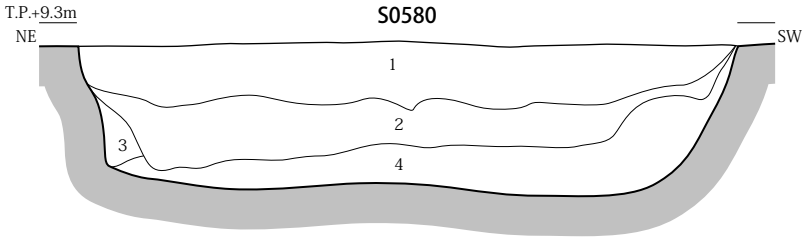
直径 0.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はU字形を呈する。埋土には、細砂のブロックが混じり、短



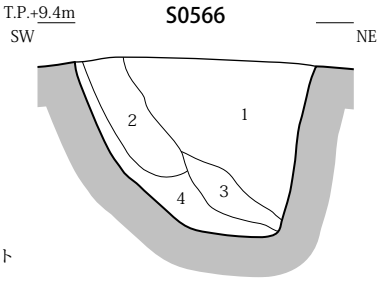
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルトに 10YR4/6 褐の細砂混じりシルトブロックを含む
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルトに 10YR4/2 灰黄褐のシルトブロックを含む
3 10YR6/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに 10YR5/3 にぶい黄褐のシルトブロック (径 20 ～ 30 ㎝) を含む



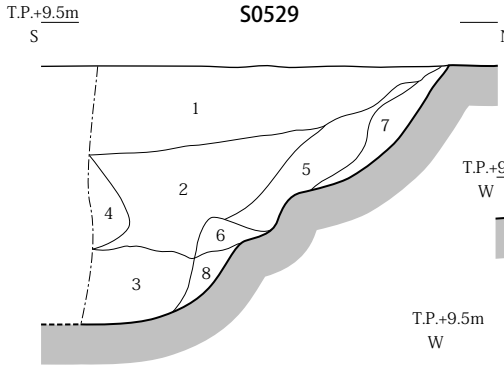
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
2 10YR4/1 褐灰 シルトに 10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂ブロック (径 0.5 ～ 5 ㎝) を含む



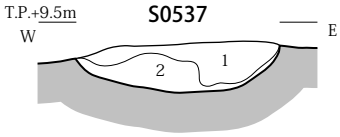
1 10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
3 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト (砂質強い)
4 2.5Y6/3 にぶい黄 シルト



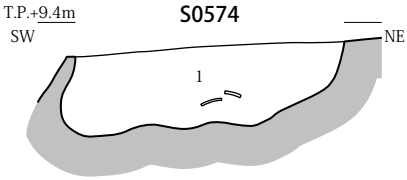
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト (マンガン斑あり)
2 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト
3 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
4 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルトに 3 を含む



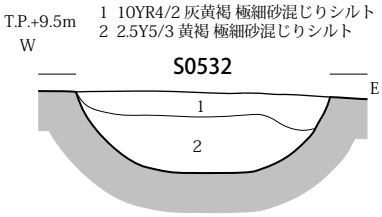
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR3/2 黒褐 極細砂混じりシルト (土器片含む)
3 10YR3/3 暗褐 シルト
4 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト
5 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト
6 2.5Y5/4 黄褐 極細砂
7 10YR5/1 褐灰 微細砂混じりシルト
8 10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり極細砂



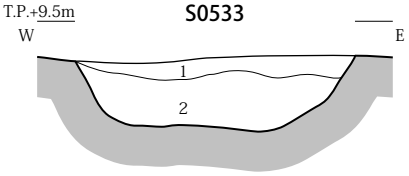
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト



1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり , 土器小片含む)

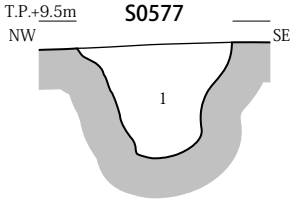


1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト

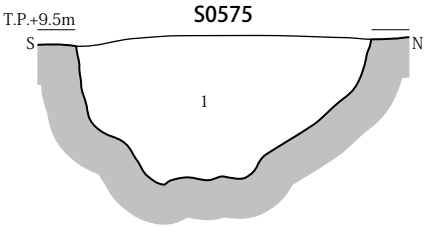


1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト

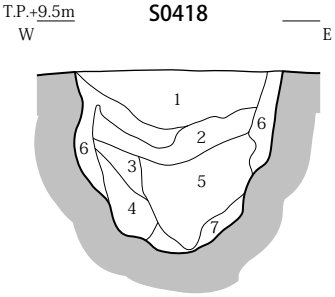
1 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト　1 のシルトブロックをわずかに含む
3 2.5Y5/4 黄褐 極細砂混じりシルト



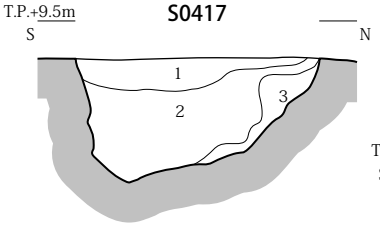
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト



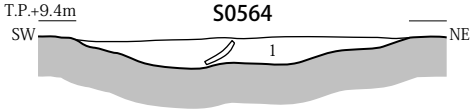
1 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルトに 地山の 10YR5/6 黄褐 極細砂混じりシルト、10YR3/3 暗褐 極細砂混じりシルトブロック (径 5 ～ 15 ㎝) を含む



1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR3/2 黒褐 極細砂混じりシルトに 6 が混じる
3 10YR3/2 黒褐 シルトに極細砂わずかに含む
4 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト混じり極細砂
5 10YR3/1 黒褐 極細砂～細砂混じりシルト
6 2.5Y5/3 黄褐 極細砂
7 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト



1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
2 10YR3/1 黒褐 極細砂混じりシルト
3 10YR5/4 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト



1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト

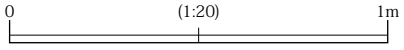


図 49　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（３）

期間で埋め戻しが行われたと推測できる。遺物は出土していない。

土坑 S0566（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南西部で検出した。土坑 S0565 の南にある。円形の土坑である。

直径 0.65 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0529（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南端で検出した。土坑の約 4 分の 1 は調査区外にある。いびつな長円形の大形の土坑である。

長径 4.4 m、短径 1.1 m、深さ 0.7 mをはかる。断面はU字形を呈すると思われる。

土坑 S0574（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南端で検出した。溝 S0532 南端と西を接する。円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はいびつな皿形を呈する。埋土は単層だが、土器を含む。

土師器高杯の杯部と弥生土器壺が出土した（図 79 － 151）。壺は弥生時代のもので、今回検出した遺物のなかでも古いものになる。北西には弥生土器が一括出土した土坑 S0540 等もあり、この周辺に弥生時代の土器を含む遺構が集中している。

溝 S0537（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南側で検出した。溝群のなかで最も東に位置する。土坑 S0539 に切られる。南端も土坑に切られる。

長さ 7.6 m、幅 0.55 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0532（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南側で検出した。南端は土坑 S0574 と接する。

南北に長い溝である。この溝S0530を西端として溝S0537まで、2 mの等間隔に 7 本の南北溝が並ぶ。

長さ 20.0 m、幅 0.65 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0533（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南側で検出した。溝 S0532 の東に位置する。

南北に長い溝である。南端は調査区南端から約２～３m離れる。南北の正方位からわずかに主軸を北東にふる。

長さ 19.0 m、幅 0.75 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

溝 S0532、溝 S0533、溝 S0534、溝 S0535、溝 S0536、溝 S0537 は、西から東にいくほど長さを減じるが、これは本来溝 S0532 程度の長さがあったものが、削平されたと考えられる。幅、深さがほぼ同規模であるので、同時に掘削された溝群と考えられる。用途としては、畝溝などの耕作溝と推測する。

溝 S0534 から須恵器壺の口縁部が、溝 S0535 からは須恵器杯蓋が出土している（図 79 － 139・140）。いずれも古墳時代中期末のもので、これから溝群は、遺物が出土していないものも含め、古墳

時代中期の遺構と考える。

土坑 S0539（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。溝 S0537 を切る。長方形の土坑である。

長さ 3.3 m、幅 1.0 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

土師器杯が出土した（図 79 － 137・138、写真図版 49 － 1 ・ 2）。これから、土坑 S0539 は平安時代前期の遺構と言える。

土坑 S0577（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。溝 S0537 と接する。長円形の土坑である。

長径 1.1 m、短径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0575（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。土坑 S0577 の北東にある。ほぼ円形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はいびつなＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0418（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。土坑 S0417 の南西にある。ほぼ円形の土坑である。

直径 0.55 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土は複雑に分かれるが、下層は埋め戻しによる堆積、上層は自然堆積と考えられる。遺物は出土していない。

土坑 S0417（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の南東部で検出した。土坑 S0418 の北東にある。長円形の土坑である。

長径 1.6 m、短径 0.65 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0564（図 49）

Ⅰ－ｂ２区の中央南で検出した。溝 S0535 の東に位置する。大形の円形の土坑である。

直径 0.9 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

須恵器壺が出土した（図 79 － 148）。体部のみであるが、古墳時代中期と考えられる。

落ち込み S0509（図 50）

Ⅰ－ｂ２区北西部で検出した。Y= － 41,955 から Y= － 42,000 に位置する。

弧を描くように北から南東に曲がる、大形の落ち込みである。南北溝 S0510 や東西溝 S0470、溝 S0493 に切られるなど複雑な状況を呈する。

長さ 11.0 m、幅 2.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。埋土は第２層の土が堆積した落ち込みとなっている。

破片ではあるが、一定量の土器が出土した。出土状況からは、破損した土器が辺りに散乱したものと考えられる。

このうち、須恵器高杯が切り合い関係にある溝 S0510 出土資料と接合した（図 79 － 149）。

また、縄蓆文を体部に巡らす、陶質土器甕が出土している（図 79 － 152、写真図版 49 － 10）。この落ち込み S0509 と切り合う、土坑 S0521 や溝 S0508、溝 S0470 などの複数遺構や包含層から出土した土器が接合して個体の３分の２以上が復元できた。ＴＫ 216 型式併行で、５世紀半ばから後半と考えられる。百済の栄山江流域からの搬入土器と考えられる。

落ち込み S0509 は古墳時代中期後半の遺構である。

溝 S0470（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部から中央で検出した。長い東西溝である。南北溝 S0510、落ち込み S0509 などを切る。

Ｉ－ｂ２区西端から始まり、X=－156,087 ラインをまっすぐ東にのびる。約 16 mで溝状の落ち込みに切られるが、断続して約 13 mのびる。再び３m途切れた所に、溝 S0438 がある。溝 S0470 と溝 S0438 は同一の遺構であった可能性が高い。ここまでの総長は 38 mである。ここから約４m東には溝 S0367 が存在し、これも同一の溝とみなすと 45 m近い長さの東西溝となる。

また、溝 S0367、溝 S0438 の約１m北には平行して溝 S0377、溝 S0439 があるように、溝 S0470 の北１mにも平行する東西溝 S0469 がある。

平行する２つの溝とも正方位にのること、40 m前後と長いことなどから、居住域を区画するなど何らかの区画溝と考えられる。

幅は 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。土師器皿が出土している（図 81―185、写真図版 46 －３）。平安時代前半の遺構と推測する。

土坑 S0472（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部やや中央寄りで検出した。円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑 S0493（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部やや中央寄りで検出した。落ち込み S0509 の北に位置し、落ち込み S0509 を切る。不定形の土坑である。長さ 4.3 m、幅 0.25 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はＵ字形である。

土坑 S0482（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部で検出した。溝 S0483 の東にある。南北方向の土坑である。

長さ 2.2 m、幅 0.45 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形である。

溝 S0483（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部で検出した。土坑 S0482 の西にある。南の溝 S0510 に続く可能性もある。ほぼ正方位にのる。南北方向の溝である。

長さ 7.5 m、幅 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形である。

この溝中からサヌカイトの石核が２点出土した（図 82 － 195・196、写真図版 56 －２）。２点は接

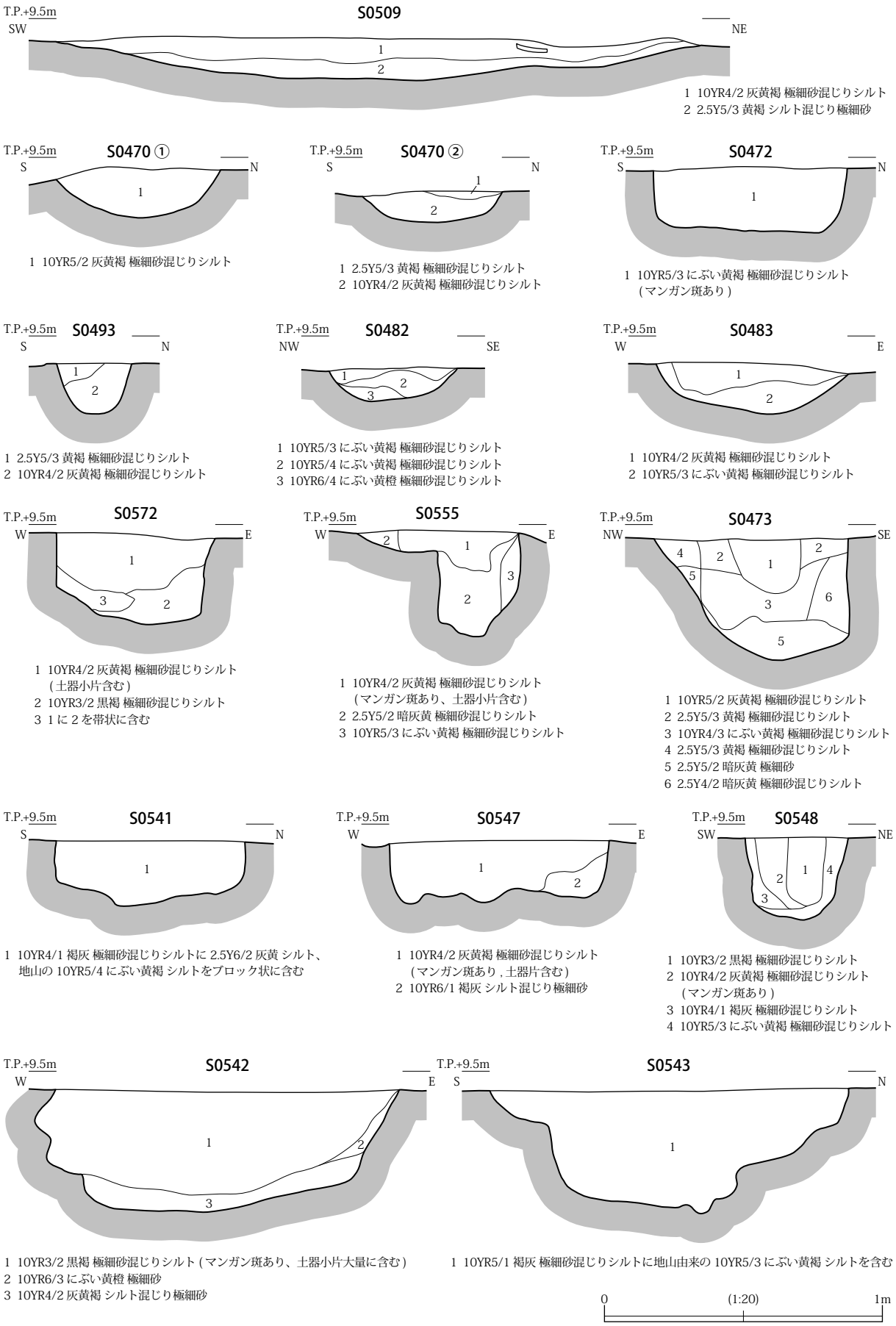


図 50　Ⅰ－ｂ２区遺構断面図（４）

合し、元来は１つの個体であると判明した。他に古墳時代の土器も出土している。溝 S0483 は弥生時代から古墳時代の遺構と考える。

土坑 S0572（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。円形の土坑である。

直径 0.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。上層から土器の小片が出土したが、時期は不明である。

土坑 S0555（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。円形の土坑である。

直径 0.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈し、東側のみ坑の深さが急激に深くなる。上層から土器の小片が出土したが、時期は不明である。

風倒木痕 S0473（図 50）

Ｉ－ｂ２区北西部やや中央寄りで検出した。土坑 S0472 の西にある。不定形で風倒木根の可能性が高い。

長さ 3.0 m、幅 0.7 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形である。

土坑 S0541（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。土坑 S0542 と隣接し、溝 S0533 を切る。円形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑 S0547（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。土坑 S0548 と隣接し、土坑 S0542 の北にある。円形のやや大形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は底部の凹凸が激しい逆台形を呈する。

柱穴 S0548（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。土坑 S0547 と隣接し、土坑 S0542 の北にある。円形の土坑である。中心に直径 0.15 mの柱痕跡が認められるので、柱穴である。

直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0542（図 50）

Ｉ－ｂ２区中央部で検出した。溝 S0533 と溝 S0534 の間に位置する。土坑 S0541 と隣接し、土坑 S0547 の南にある。円形の大形の土坑である。

直径 1.2 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。埋土に土器の破片を大量に含む。土師器高杯が出土している（図 79 － 141、写真図版 49 － 7）。

土坑 S0543（図 50）

Ⅰ－ｂ２区中央部よりやや南で検出した。土坑 S0541 の南にあり、溝 S0533 に切られる。円形の大形の土坑である。

直径 1.3 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は鉢形を呈する。

Ⅰ－ｂ２区では、調査区の南東端から北西部にかけて、45°の角度で斜行する幅６～７ｍの砂礫層を検出した。古い時代の自然流路の痕跡と思われる。自然流路は南東端からは直線的にのびるが、Y=－41,990 辺りから西へは蛇行しながらのびて、Ⅰ－ｄ２区へ入る。Ⅰ－ｂ２区やⅠ－ｃ区で部分的に掘削したのみだが、深さは 0.1 ～ 0.2 m程度であった。黄褐色の細砂から礫を埋土とし、この自然流路が基盤層（地山）となる箇所では、遺構埋土も影響を受けて砂質が強くなる。遺物は弥生土器もしくは古墳時代の土師器破片をわずかに含むので、古墳時代以前の自然流路と考えられる。

Ⅰ－ｂ２区で検出した遺構は、分布状況や時期から大きく２つに分かれる。

１つは調査区の主に北側で東西に広がって広範囲にみられる平安時代の遺構である。掘立柱建物や区画溝などで、時期は８世紀代の遺物も含むが、９世紀から 10 世紀を主体とする。

もう１つは、前述の自然流路を挟むように、北西から南東に帯状に広がる弥生時代後期と古墳時代前期から後期の土坑や井戸、溝である。

土坑は埋土がブロック状の埋戻し土で、短期間で掘削と埋め戻しが行われたと考えられる。土坑内に完形に近い土器が多く含まれるのが特徴である。埋納土坑とすると祭祀遺構と考えるべきかも知れない。

当時期の遺構が集中してみられるのは、ここが当時の微高地で、人が住むのに適していたためと考えられる。これらの遺構が居住域に伴うものとしても、今回の調査区内では弥生時代から古墳時代の建物などは明確になっていない。居住域はさらに南などにあるか、削平されたと考えられる。

（４）中央域西半の遺構（Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区）（図 51 ～ 60、写真図版 26 ～ 35）

中央域の西に位置し、東はⅠ－ｄ２区、Ⅰ－ｂ２区に接し、西端は用水路によって遮られる。調査区としてはⅠ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区が相当する。X=－156,015 ～ X=－156,117、Y=－42,008 ～ Y=－42,060 に位置する（図 51）。

中央域西半は、南北長約 100 m、東西幅約 50 mの範囲である。松原市教育委員会が実施した試掘調査の１、２トレンチがⅠ－ｃ区の東側、Y=－42,020 ～ Y=－42,022 ラインに南北に位置する。Ⅰ－ｃ区とⅠ－ｅ区を合わせて、南北に長い長方形の形となる。Ⅱ－ａ区とは用水路によって約５ｍの間隔があく。

Ⅰ－ｃ区は南北長 100 m、東西幅約 30 mの長方形の調査区である。面積は約 3270 ㎡である。

Ⅰ－ｅ区は南北長 100 m、東西幅約 20 mの長方形の調査区である。面積は約 1979 ㎡である。

Ⅰ－ｅ区の南側は現代の撹乱を受け、遺構面の残存状況が悪い。遺構面の標高は北端にあたる部分が T.P.9.1 ～ 9.2 m、中央が T.P.9.2 ～ 9.3 m、南壁際が T.P.9.4 mである。

掘立柱建物９（図 52、写真図版 29 －２、30 －１・２）

Ⅰ－ｃ区の北東部で検出した。X=－156,023 ～ X=－156,027、Y=－42,016 ～ Y=－42,022 に位置する。

図 51　中央域西半（Ⅰ－c 区、Ⅰ－e 区）平面図

東西を長軸とする梁行２間、桁行３間の側柱建物である。屋内柱列の柱穴が揃わないため側柱建物としたが、総柱建物の可能性もある。柱間は約 1.7 ～ 1.8 mである。ほぼ正方位にのっている。

柱穴は円形で、直径 0.2 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m程度のものが多い。掘立柱建物 11 と異なり、柱痕を確認できたのは柱穴 S0652 のみである。柱痕の直径は約 0.1 mである。掘立柱建物 11 と比較すると、柱穴の規模が小さい。柱穴が切り合う箇所もあり、少なくとも柱の建て替えが行われたと思われる。断面はＵ字形もしくは逆台形を呈する。

建物の規模や形状などから、平安時代前期末から中期の掘立柱建物と推測する。近接した位置に掘立柱建物 10、掘立柱建物 11 と３棟の建物が存在するが、規模からすると掘立柱建物９は副屋と考えられる。

掘立柱建物 10（図 53）

Ｉ－ｃ区の北東部で検出した。X= － 156,034、Y= － 42,025 を中心とする。掘立柱建物９の南西、掘立柱建物 11 の北東に位置する。

東西を長軸とする梁行２間、桁行４間の側柱もしくは総柱建物である。柱間は約 1.5 ～ 1.8 mである。ほぼ正方位にのっている。

柱穴は円形で、直径 0.3 m、深さ 0.2 ～ 0.4 m程度のものが多い。

北側柱列の北に平行するように並ぶ柱列（柱穴 S0706、柱穴 S0705、柱穴 S0712）を検出した。北西角に建物柱穴を検出できなかったことや、北側柱列との間隔が 1.5 mと他の柱間隔より狭かったことから、この列は建物に付随する柵列などとした。この列が庇部分などに相当し、掘立柱建物 10 に含まれると、３間 × ４間と掘立柱建物９～ 11 の中で最大規模となる。すると、掘立柱建物 10 が主屋と考えられる。

遺物はいくつかの柱穴から小片が出土しているが、時期を特定できなかった。しかし、建物の規模や形状などから、平安時代前期末から中期の遺構と推測する。

また、掘立柱建物９の南部と掘立柱建物 10 の東部、２つの建物の間の空閑地に轍７や轍８などが放射線状に集中してみられ、ここで途切れることから牛車の荷をここで積み下ろした可能性も考えられる。

ただし、掘立柱建物 10 の内部まで轍が観察され、切り合いからすると轍のほうが新しくなるので、同時期の遺構と捉えるのは無理があるかもしれない。

掘立柱建物 11（図 54、写真図版 29 － 1 、30 － 3 ～ 6 ）

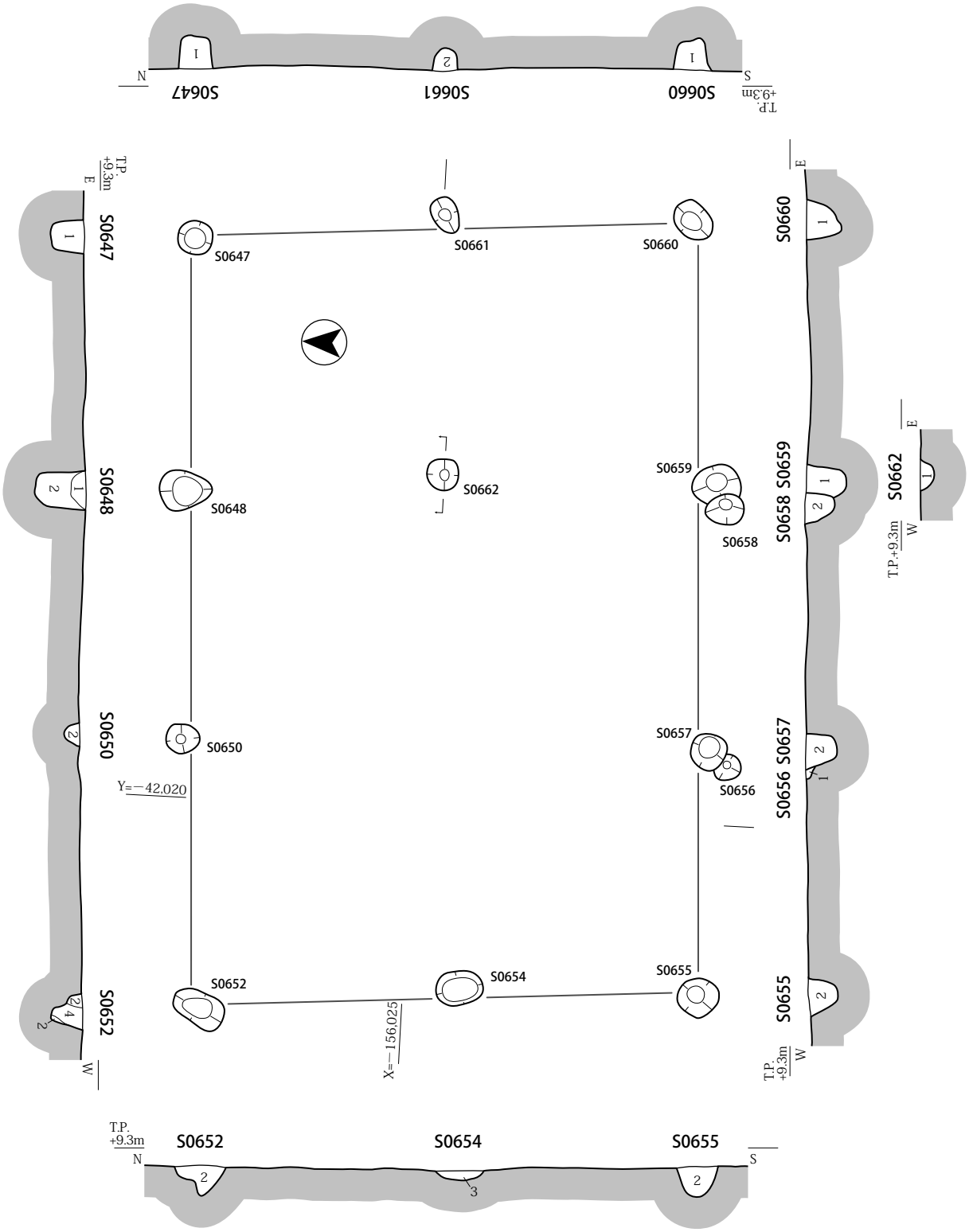
Ｉ－ｃ区の北部西側で検出した。X= － 156,035、Y= － 42,032 を中心とする。

南北を長軸とする梁行２間、桁行３間の側柱建物である。柱間は約 1.8 mである。ほぼ正方位にのっている。

柱穴は円形で、直径 0.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m程度のものが多い。柱穴 S0672 のみが平面形、深さとも大きく、直径 1.0 m、深さ 0.4 mをはかる。検出した 10 基の柱穴中、６基の柱穴で柱痕を確認できた。柱痕の直径は約 0.1 mである。断面はＵ字形もしくは逆台形を呈する。

埋土の第２層の土に細かい土師器などの土器小片を含むものが多かったが、時期が確定できるほど復元できる個体は出土していない。

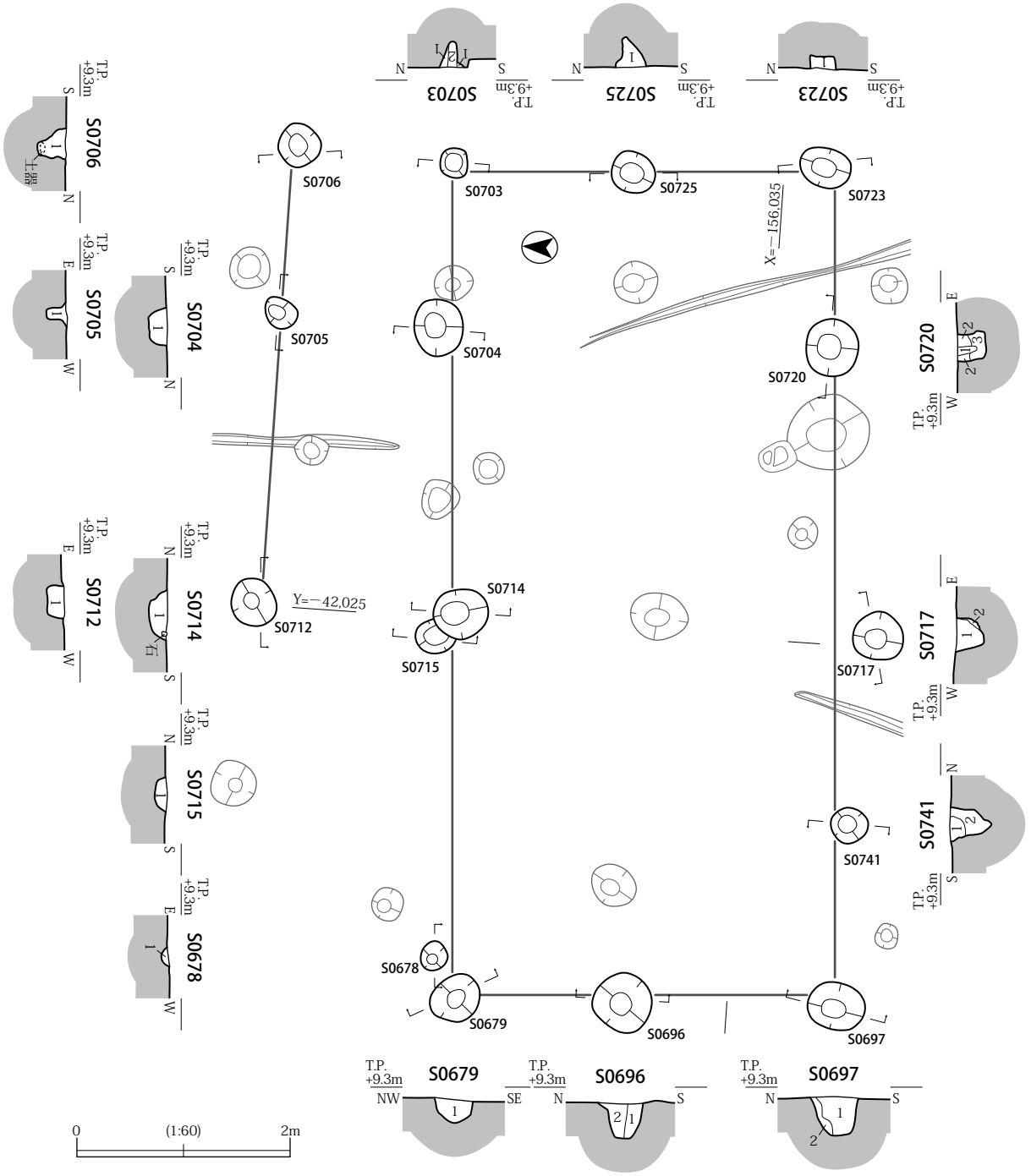
しかし、建物の規模や形状などから、他の掘立柱建物同様、平安時代前期末から中期の掘立柱建物と



1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
3 10YR4/2 灰黄褐 シルト混じり細砂
4 10Y5/2 オリーブ灰 シルト混じり細砂～中砂

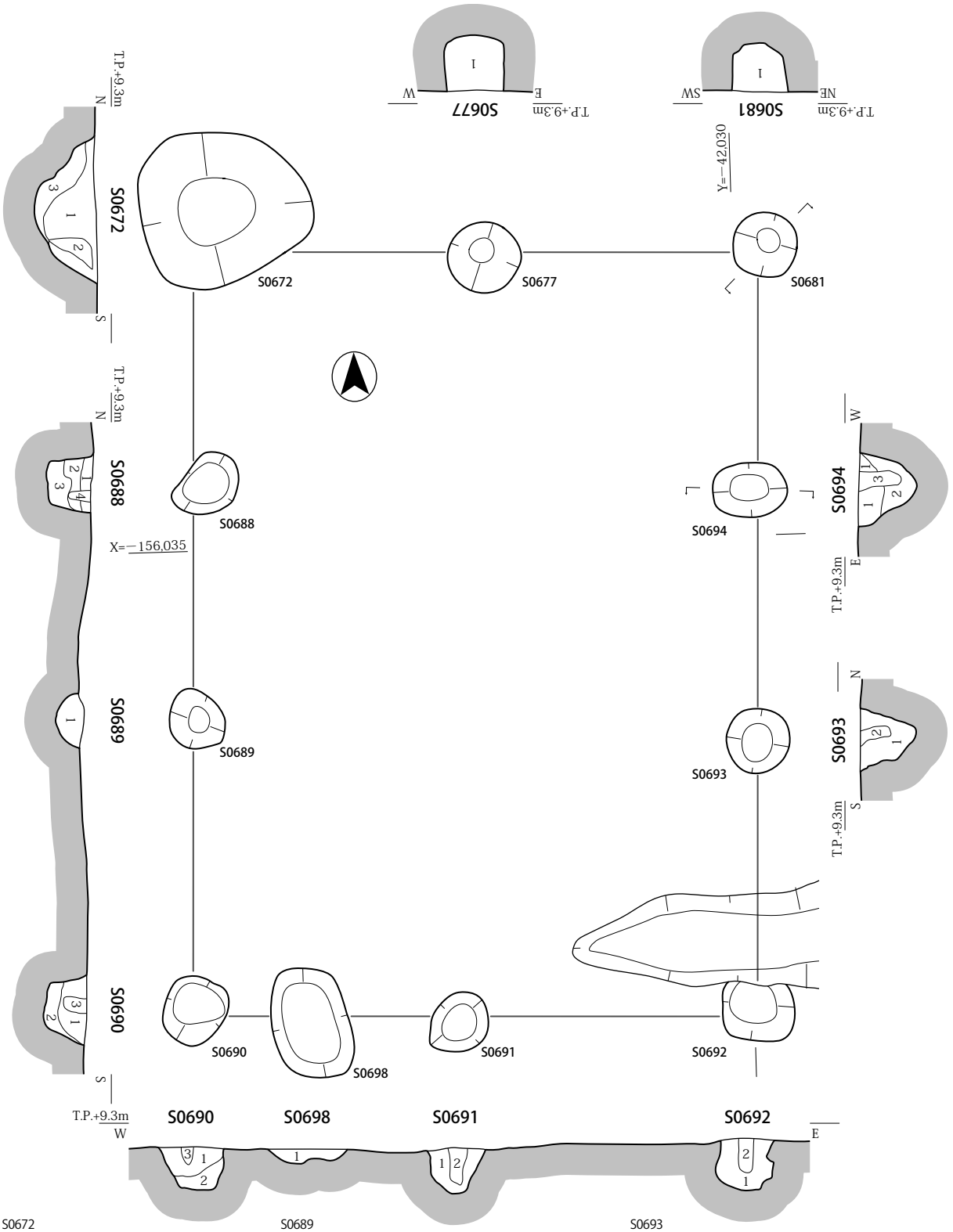
0 (1:40) 2m

図 52　Ⅰ－ｃ区掘立柱建物９平・断面図



S0678
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0679
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0696
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0697
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
2 2.5Y5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトと 10YR5/6 黄褐 極細砂混じりシルトが混じりあう
S0703
1 10YR5/6 黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0704
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに 2.5Y5/3 黄褐 極細砂を含む
S0705
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0706
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S0712
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0714
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S0715
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S0717
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルトに
地山の 10YR5/4 にぶい黄褐 シルトを含む (炭化物、土器小片含む)
2 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
S0720
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR5/4 黄褐 細砂混じりシルト
3 10YR3/2 黒褐 シルト
S0723
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0725
1 10YR5/3 にぶい黄褐 微細砂混じりシルトに
地山の 10YR5/6 黄褐 シルトをわずかに含む (遺物小片含む)
S0741
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト

図 53　Ⅰ－c 区掘立柱建物 10 平・断面図



S0672
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト混じり細砂〜中砂
3 10YR3/2 黒褐 細砂〜中砂混じりシルト
S0677
1 10YR5/1 褐灰 細砂混じりシルト
S0681
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0688
1 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 細砂〜礫混じりシルト
3 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂〜礫混じりシルト
4 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト

S0689
1 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト
S0690
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
2 2.5Y4/1 黄灰 細砂混じりシルト
3 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
S0691
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
2 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
0692
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルトに
地山の 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルトを含む
2 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト

S0693
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S0694
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (土器小片含む)
2 10YR5/1 褐灰 極細砂混じりシルト
3 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S0698
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト

0 (1:40) 2m

図 54　Ⅰ－c 区掘立柱建物 11 平・断面図

推測する。また、近辺の土坑 S0631 や溝 S0683 などからは、意図的に重ねて埋納したとみられる土師器皿が出土している（図 85 － 224 ～ 226、232・233 など）。Ⅰ－ｃ区で出土した土師器は法量が小さくなるなど、Ⅰ－ａ区やⅠ－ｄ１区で検出した掘立柱建物等の遺構よりやや新しいようである。

また、集落の南を区画すると思われる溝 S0687 からも土師器皿が出土しており（図 85 － 227）、この年代を勘案しても、やはり平安時代中期におさまる。

掘立柱建物９と掘立柱建物 10 が柱穴の規模などが似ており、掘立柱建物 11 がやや大きい。掘立柱建物９が副屋、掘立柱建物 10 が主屋として同時期に作られた建物で、掘立柱建物 11 はほぼ同時期か、それより新しい時期の建物となるかもしれない。

溝 S0772（図 55、写真図版 31）

Ⅰ－ｄ２区の西半で検出した南北方向を基本とする大溝 S0772 の続きをⅠ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区でも検出した。溝 S0772 全体の記述はⅠ－ｄ２区にあるので、そちらを参照されたい（第４章第１節（２）、図 28・29）。

Ⅰ－ｃ区の東端、X= － 156,055 辺りでⅠ－ｄ２区から延長してくる溝 S0772 は、そのまま斜行しなから 60 mの長さで南西に進み、Ⅰ－ｃ区を縦断する。X= － 156,110、Y= － 42,035 で西に曲がり東西方向の溝となり、さらにⅠ－ｅ区へのびていく。Ⅰ－ｅ区に入ってわずかに西に進んで、撹乱によって溝 S0772 は途切れる。

Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区で検出したのは、北東－南西にのびる部分が 60 m強、東西部分が約 10 mである。東西部分はⅡ－ａ区で検出した溝 S1370 につながる可能性が高い。東西部分は正方位にのる。

溝 S0772 の幅は北東部で広く、南西や西にいくほど狭まる傾向にある。北東端では分岐して二股に分かれた箇所があり、ここから土器が出土した。Ⅰ－ｃ区で出土した土器は、この地点以外は、わずかに上層からの混入とみられる破片のみである。Ⅰ－ｄ２区で完形に近い土器が複数個体近接した場所で出土したのとは異なる。地形から勘案すると、南西から北東に流れると思われるが、低くて澱んだところに完形に近い土器が集中して廃棄されたのであろうか。

幅は狭いところで 1.0 m、広いところで 2.8 mをはかる。深さは 0.4 mから 0.55 mで、断面は逆台形を呈する。埋土は３～５層にわたって堆積する。自然堆積によって埋没したと思われる。

Ⅰ－ｃ区の断面⑦付近で、土師器皿が１点出土した（図 74 － 81、写真図版 51 － ９）。それ以外の遺物は、Ⅰ－ｄ２区からの出土である。出土遺物から平安時代中期に廃絶した溝と考えられる。

土坑 S0673（図 56、写真図版 33 － １）

Ⅰ－ｃ区の北西部、X= － 156,033、Y= － 42,035 で検出した。周辺には柱穴 S0672、土坑 S0674、土坑 S0675 などの大形の土坑がいくつかあるが、その中でも最大規模をもつ。大形の長円形の土坑で、井戸の可能性も考えられる。

南北に長いが、正方位よりやや北東－南西にふる。

長径 2.6 m、短径 1.7 m、深さ 0.5 mをはかり、断面はＶ形を呈する。

埋土は数層に分層でき、たわんで堆積していた。全層にわたって遺物が含まれていた。砂質が強いため湧水が激しくて崩壊が進み、詳細な出土状況は把握できていないが、主に上層から中層からかたまって土器が出土した。

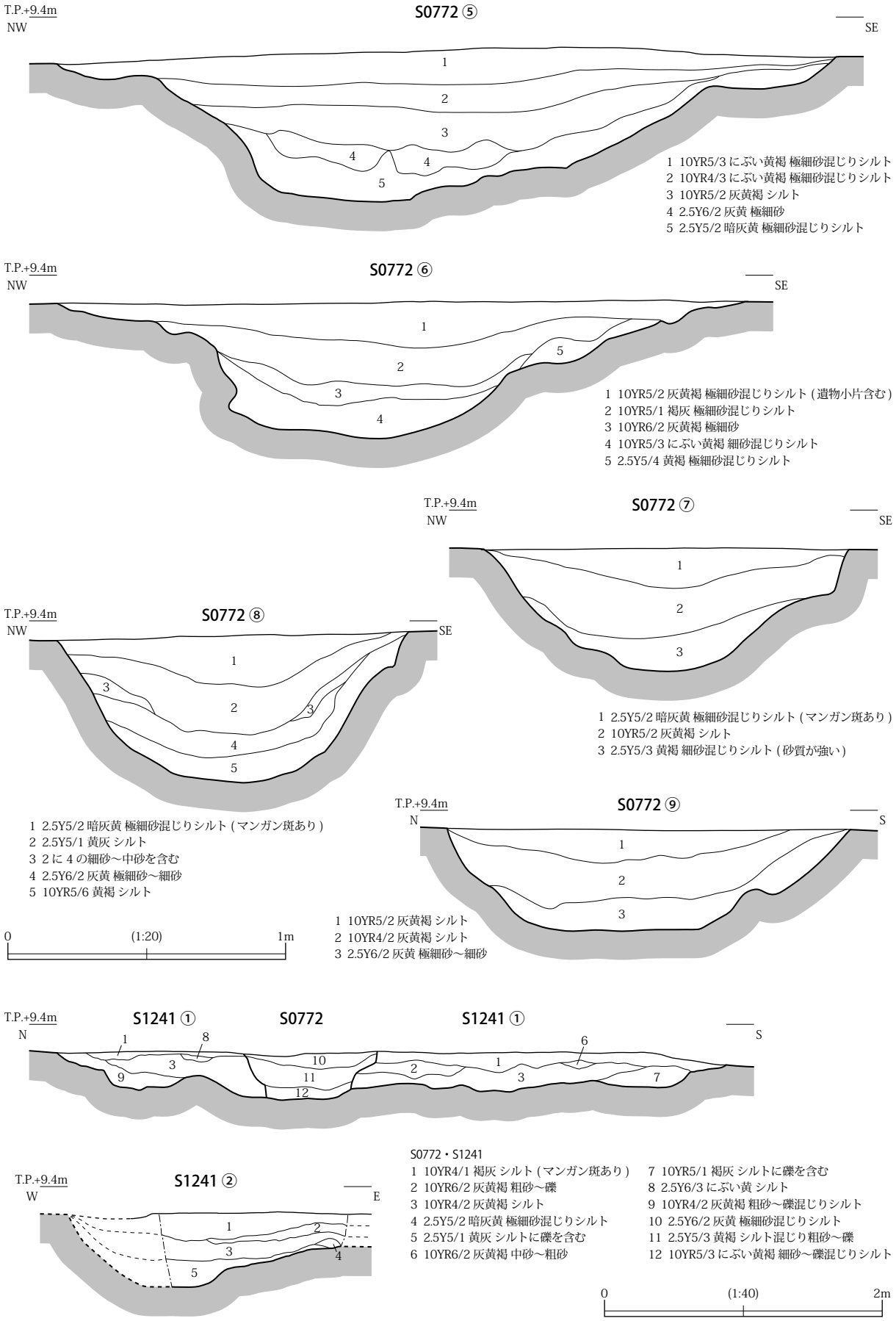


図 55　Ⅰ－c 区 S0772、Ⅰ－e 区 S0772・S1241 断面図

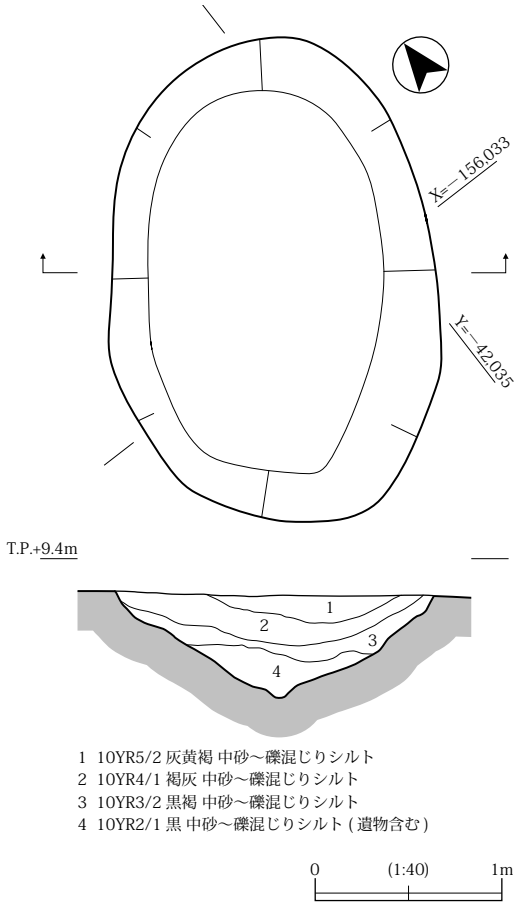


図 56　Ⅰ－c 区 S0673 平・断面図

土師器の複合口縁壺や甕、台付甕、杯などが出土した（図 84 － 205 ～ 213、写真図版 52）。いずれも古墳時代中期の良好な一括資料である。最近では、藤井寺市の津堂遺跡の流路等から、同様の土師器一括資料が出土している。

出土した土器を接合・復元したところ器形を復元できるものが多数個体あったので、土坑 S0673 内に壊れた土器の破片を廃棄したというより、完形の土器を埋納もしくは廃棄したと考えられる。土坑 S0673 は古墳時代中期の遺構と考えられる。

池内遺跡の東にある三宅西遺跡では、3009 流路等から土坑 S0673 より若干古い、須恵器出現期の須恵器、土師器、陶質土器がまとまって出土している。器種組成、時期なども土坑 S0673 出土遺物は三宅西遺跡の 3009 流路資料に類似する。

落ち込み S0608（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。北半は調査区の北にのび、南半の約 2 分の 1 しか検出できなかった。

浅く大きく広がる落ち込みである。

平面形は円形に広がる。幅 3.0 m以上、深さ 0.2 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

破片の状態であるが、多数の土器が含まれていた。土師器の小型丸底壺や高杯、壺などである（図 85 － 217・219 ～ 222、写真図版 53 － 3 ～ 6）。いずれも土坑 S0673 と同じ古墳時代中期の遺物である。

土坑 S0610（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部、落ち込み S0608 の南で検出した。

大形の土坑である。不定形に広がる。

直径 1.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は地山のシルトブロックを含む。

埋土の上層から中層に遺物を含む。蛸壺が 3 点出土した（図 86 － 261 ～ 263、写真図版 58 － 2）。完形に近いもので、底部が尖り気味で弥生時代末から古墳時代初めのものであろう。

蛸壺は土坑 S0610 以外では、Ⅰ－c 2 区の土坑 S0839 から 1 点（図 70 － 36、写真図版 58 － 2）と、図化していないがⅠ－c 区の包含層（第 2 層）から 1 点出土しているのみである。この土坑にのみかたまって、漁労用具である蛸壺が 3 点出土したことは、この土坑の性格を考えるうえで興味深い。先述の三宅西遺跡でも包含層（第 7 a 層）から、布留式の土器と共に、蛸壺が数点出土している。

土坑 S0596（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。土坑 S0610、落ち込み S0609 の南にあたる。楕円形の大形の土坑で

ある。

長径 1.5 m、短径 0.9 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑 S0601（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。

円形の大形の土坑である。直径 1.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

最底部から土師器小型丸底壺や高杯、甕、土製勾玉が出土した（図 85 － 214 ～ 216、86 － 259、写真図版 53 － 1 ・ 2 ・ 6 、58 － 1 ）。古墳時代中期の土坑である。

土坑 S0631（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。

円形のやや大形の土坑である。土坑 S0601 の南西にある。

直径 0.5 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

上層および中層から、土師器皿 2 枚が重なるようにして上向きの状態で出土した。出土状況から意図的に埋納されたと思われる。土師器皿の他に、黒色土器 A 類椀や土師器羽釜も出土している（図 85 － 230 ～ 233、写真図版 54 － 1 ・ 2 ）。いずれも 10 世紀前半のものである。よって、土坑 S0631 は平安時代前期後半から中期前半の遺構である。

土坑 S0636（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。土坑 S0637 の北東にある。

円形の土坑である。直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はU字形を呈する。

上層から、土坑 S0631 と同時期の土師器皿が出土している（図 85 － 223）。これより、平安時代前期後半の遺構と考える。

落ち込み S0602（図 57）

Ⅰ－c 区の北端中央で検出した。東西に長く広がる落ち込みである。西端は溝 S0604 に切られる。

長さ 5.5 m、幅 2.1 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。

上層から土師器壺口縁が出土している（図 85 － 218）。布留式新段階であるので、落ち込み S0602 は古墳時代中期の遺構である。

土坑 S0643（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。円形の土坑である。

直径 0.35 m、深さ 0.35 mをはかる。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0615（図 57）

Ⅰ－c 区の北東端で検出した。長円形の土坑で、北は調査区外にのびる。

長さ 7.5 m、幅 2.0 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆向きの凸状を呈する。

Ⅰ－b 2 区から続く自然流路がこの一帯を終点とするため、埋土は砂質が強い、砂混りのシルトであ

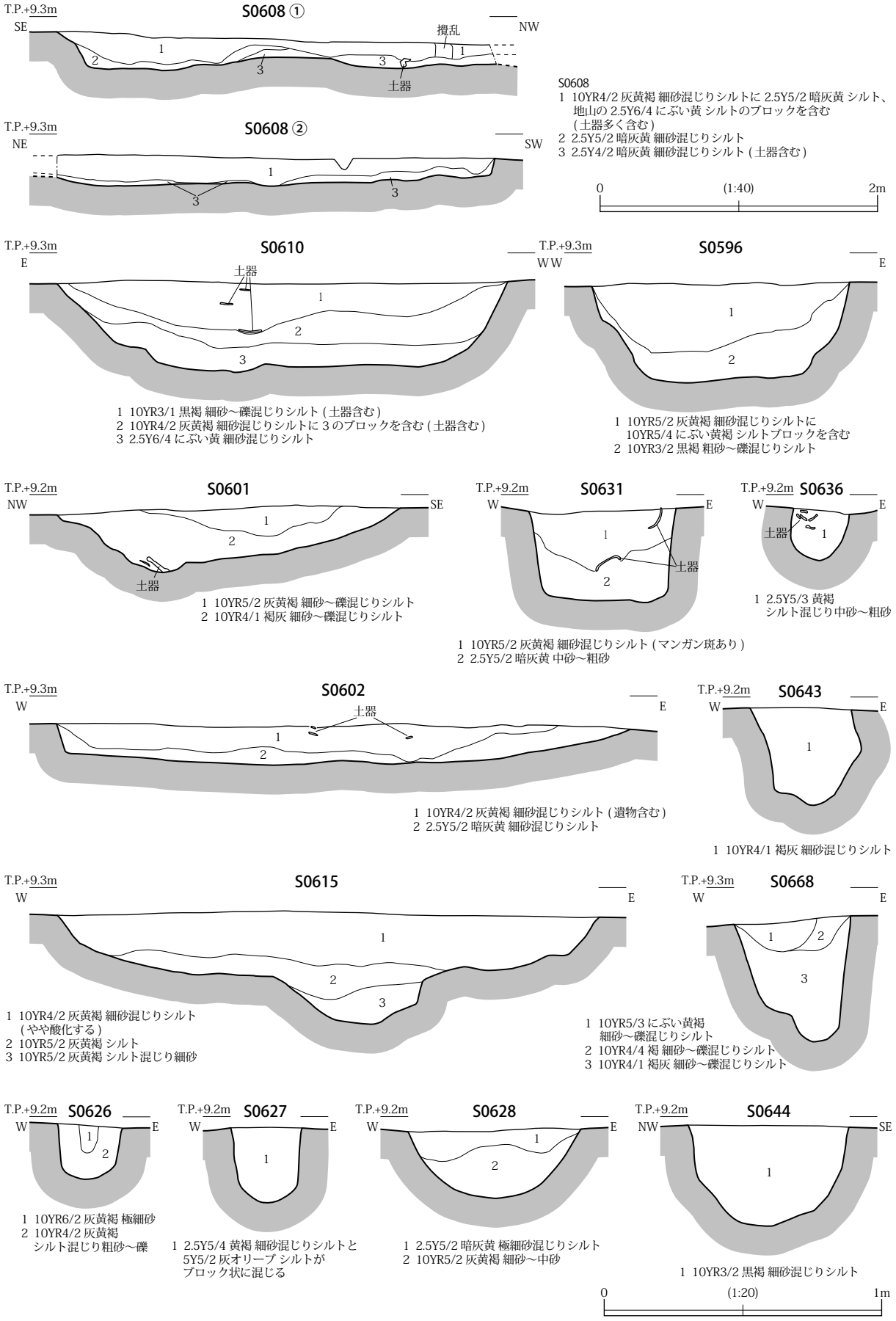


図 57　Ⅰ－c 区遺構断面図（1）

る。遺物は出土していない。

土坑 S0668（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。土坑 S0644、土坑 S0667、土坑 S0669 の間に位置する。

円形の土坑である。直径 0.4 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はU字形を呈する。

柱穴 S0626（図 57）

Ⅰ－c 区の北西隅で検出した。柱穴 S0627 の西にあり、対をなすと考えるが柱列などは復元できなかった。

平面形は円形を呈し、直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面はU字形を呈する。掘形内に直径 0.05 m、深さ 0.1 mの柱痕がみられる。遺物は出土していない。

柱穴 S0627（図 57）

Ⅰ－c 区の北西隅で検出した。柱穴 S0626 の東にあり、S0626 と対をなすことと断面形状から柱穴とした。

平面形は円形を呈し、直径 0.25 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈する。遺物は出土しているが、時期は不明である。

土坑 S0628（図 57）

Ⅰ－c 区の北西隅で検出した。柱穴 S0627 の東にある。

円形の土坑である。直径 0.6 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はU字形を呈する。

土坑 S0644（図 57）

Ⅰ－c 区の北西部やや中央寄りで検出した。土坑 S0643 の東にある。

円形の土坑である。直径 0.6 m、深さ 0.35 mをはかる。断面はU字形を呈する。

土坑 S0637（図 58）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。

円形の大形の土坑である。土坑 S0610、土坑 S0673 等と同じく井戸になる可能性もある。

直径 1.5 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は皿形を呈する。

須恵器杯蓋や土師器甕が出土した（図 85 － 234・237）。須恵器から判断すると、飛鳥時代の遺構である。

土坑 S0638（図 58）

Ⅰ－c 区の北西部で検出した。土坑 S0637 の南東、土坑 S0673 の北に位置する。

円形の大形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。黒色土器 A 類椀が出土した（図 85 － 228、写真図版 54 － 8）。

土坑 S0674（図 58、写真図版 32 － 1 ）

Ｉ－ｃ区の北西部で検出した。

円形の大形の土坑である。土坑 S0673 の西、土坑 S0675 の東に位置する。

直径 1.1 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆三角形を呈する。

土師器甕が出土した（図 85 － 242）。口縁部が「く」の字に外反する庄内式の甕で、古墳時代の遺構である。

土坑 S0675（図 58）

Ｉ－ｃ区の北西部で検出した。土坑 S0673、土坑 S0674 の西、溝 S0683 の東に位置する。

円形の大形の土坑である。

直径 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0640（図 58）

Ｉ－ｃ区の北西部で検出した。

柱痕があるので柱穴とした。柱穴 S0639 と対をなす。

直径 0.3 m、深さ 0.25 mをはかる。柱痕の直径は 0.1 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S0639（図 58）

Ｉ－ｃ区の北西部で検出した。

柱穴 S0640 と対をなすこと、柱穴 S0640 との距離が約２mであることから柱穴としたが、この２つ以外に建物や柱列を構成する柱穴は検出されていない。

直径 0.4 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0683（図 58）

Ｉ－ｃ区の北西部、西端で検出した。

調査区西端を南北にのびる溝で、南側は土坑 S0685、土坑 S0686 に切られ、西側は調査区外である。

長さ 9.0 m、幅 0.9 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土師器皿が３点出土している（図 85 － 224 ～ 226、写真図版 54 － 6 ）。いずれも平安時代前期後半から中期初めての字状口縁皿である。

よって、溝 S0683 は平安時代前期後半から中期初めの遺構であろう。溝 S0687 と対になる区画溝になるとも推測される。

土坑 S0684（図 58）

Ｉ－ｃ区の北西部、西端で検出した。

長円形の土坑で、西側は溝 S0683 に切られる。

長径 1.7 m、短径 0.75 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

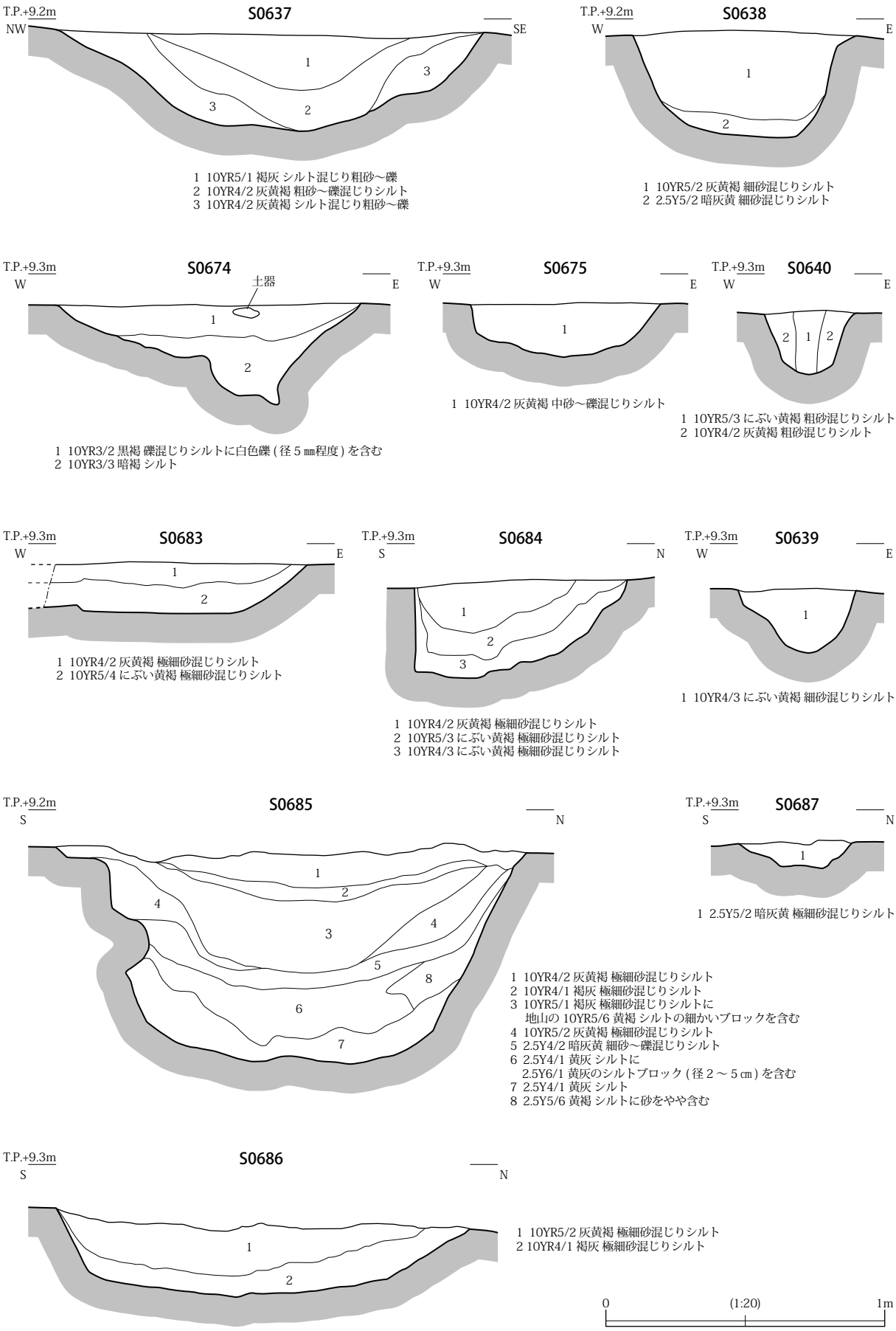


図 58　Ⅰ－ｃ区遺構断面図（２）

井戸 S0685（図 58、写真図版 33 － 2 ・ 3）

Ⅰ－ c 区の北西部、西端で検出した。

大形の円形の遺構で、深さと形状から井戸とした。溝S0683、土坑S0686に切られる。西端は調査区外、側溝内となる。

長径 1.7 m、短径 1.5 m、深さ 0.85 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は細かい単位で堆積し、下層にはシルトのブロックを含む。

中層から弥生土器壺が出土した（図85 － 238、写真図版54 － 7）。弥生時代後期、Ⅴ様式のものである。摩耗が激しいが、口縁から底部まで遺存し、意図的に入れられた可能性が高い。

よって、井戸 S0685 は弥生時代後期の遺構と言える。

土坑 S0686（図 58）

Ⅰ－ c 区の北西部、西端で検出した。溝 S0683、溝 S0687 に切られる。西半は調査区外にのびている。

大形の円形の土坑である。

長径 1.8 m、短径 1.5 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0687（図 58）

Ⅰ－ c 区の北西部、西端で検出した。東西方向にのび、土坑 S0686 を切る。西端から 4 m東にのびて、いったん途切れる。そこから断続的に東にのびていく。溝 S0687 は総長 26 mにもなり、正方位であること、掘立柱建物 9 の南に平行であることなどから、居住域の区画溝と考える。

幅 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土師器皿が出土している（図 85 － 227、写真図版 54 － 3）。溝 S0683 と同じく、平安時代中期の遺構になる可能性が高い。

溝 S0663（図 59）

Ⅰ－ c 区の北東端で検出した。

東西溝である。溝 S0687 と似た規模、形状なので区画的な役割を果たす溝かもしれない。

長さ 4.0 m、幅 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S0665（図 59）

Ⅰ－ c 区の北東端で検出した。

東からカーブしながら北西に進み、中央で途切れる溝である。この溝から南で轍痕が集中してみられるので、轍の 1 つともとれるが、他の轍は直線的で放射線状に 1 箇所に集中していることや、轍痕 S0709 に切られることなどから、轍とは別の溝と判断した。

長さ約 15.5 m、幅 0.15 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。

溝 S0742（図 59）

Ⅰ－ c 区の北東端で検出した。南北溝である。轍群を切る。

北の溝 S0616、南の溝 S0755 と幅が異なるので別の遺構番号を付与したが、同一の溝の可能性も考

えられる。また、溝 S0755 からさらに途切れて約８m南下した場所にある、溝 S0763 までを一つの溝と捉えることもできる。試掘１トレンチでも、溝S0616や溝S0742と平行になる南北溝を検出している。

約２m東には平行して南北溝 S0664 が走り、この溝 S0664 も南下して、溝 S0763 と平行に溝 S0764 がある。これらをすべて１つの溝とすると２m間隔で２本の 30 m超の南北溝が、東端にあったことになる。掘立柱建物群の東に位置し、東西溝同様に居住域の区画溝の機能をもっていたかもしれない。

幅 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。轍を切ることから、平安時代中期の遺構と考えられる。

轍７・８・９（S0710 他）（図 59）

Ⅰ－ｃ区の東部から中央、溝 S0772 の北西肩までの南北約 30 m、東西約 15 mにわたって、Ⅰ－ｄ２区から続く轍を多数検出した。いずれも正方位に約 45°の角度で北西に向かい、掘立柱建物９と掘立柱建物 10 の間の空閑地や、掘立柱建物 10 に一部重複して途切れる。

同じ場所を始点もしくは終点として轍が集中してみられるのは、この空閑地が何らかの物資の集積地であって、ここで荷物の上げ下ろしをしたことが推測できる。掘立柱建物は住居ではなく倉庫の可能性もある。

長さは最長では約 30 mにも及ぶ。幅は 0.15 ～ 0.2 m、深さは 0.1 mをはかる。断面は皿形もしくはＶ字形を呈する。鋭角的に断面逆三角形なものもあり、かなりの荷重で車輪が地表面に沈み込んだと推測される。

明らかに対になる轍も複数あり、その間隔は 1.5 mであった。一部にⅠ－ａ区でみられたような、轍に沿って進む足跡も検出できた。

轍 S0710 等から遺物は出土していないが、轍は掘立柱建物群に伴う遺構と考えるなら、同時期の遺構と考えられる。重複するのであれば、やや新しい時期となる。

土坑 S0762（図 59）

Ⅰ－ｃ区の東端とⅠ－ｄ２区にまたがって検出した。

楕円形の土坑である。長さ約４m、幅 1.0 m、深さ 0.35 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

上層からは土器の破片が多数出土した。弥生時代後期の鉢である（図 85 － 239、写真図版 54 －８）。

土坑 S0759（図 59）

Ⅰ－ｃ区東端北側、X= － 156,042 辺りで検出した。２本の轍によって切られる。

円形の大形の土坑である。直径 1.2 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は逆台形を呈する。上層に遺物を含むが、時期は特定できなかった。

土坑 S0731（図 59、写真図版 32 －２）

Ⅰ－ｃ区北側中央、X= － 156,040 辺りで検出した。溝 S0687 の北に位置する。

円形の土坑である。直径 0.55 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。図化しえなかったが、土師器高杯の脚部が出土している。古墳時代と思われる。

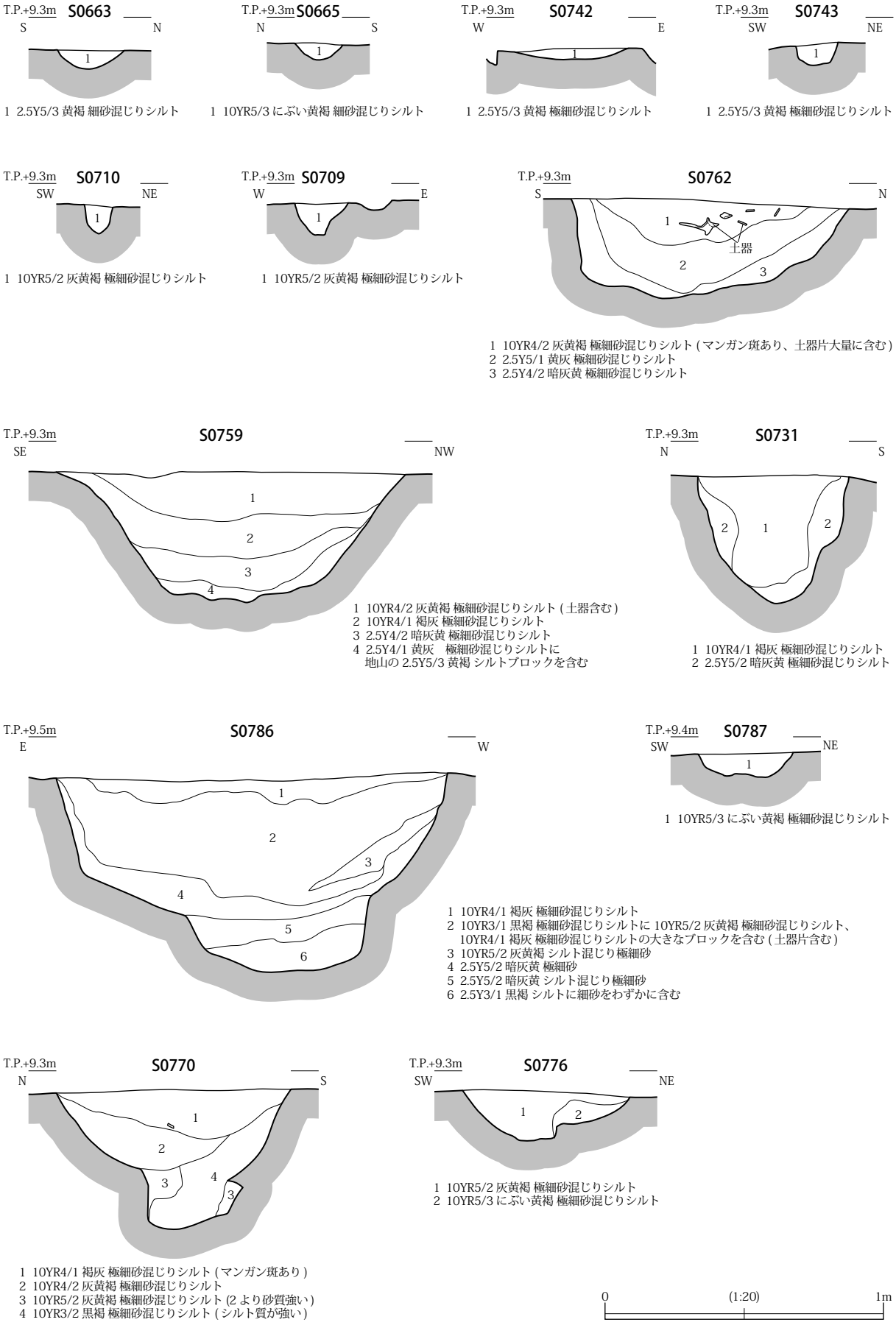


図 59　Ⅰ－c 区遺構断面図（3）

土坑 S0786（図 59、写真図版 32 －３）

Ｉ－ｃ区東端の中央よりやや南、X= － 156080、Y= － 42,010 で検出した。

円形の大形の土坑である。断面形から素掘りの井戸の可能性もある。

直径 1.4 m、深さ 0.7 mをはかる。断面は逆向きの凸形を呈する。深さ 0.4 mまでは椀形に掘られ、その下層は直径 0.6 mの円柱形にすぼまる。埋土には大きなシルトのブロックが含まれる。

弥生土器甕の口縁や土師器壺口縁が出土した（図 85 － 240・241）。弥生時代後期末から古墳時代初めのものなので、土坑 S0786 は古墳時代初頭の遺構と考える。

土坑 S0787（図 59）

Ｉ－ｃ区東端の中央よりやや南、土坑 S0786 の北で検出した。

楕円形の土坑である。長径 0.9 m、短径 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S0770（図 59）

Ｉ－ｃ区東端の中央、X= － 156,058、Y= － 42,015 で検出した。溝 S0772 の西肩にあたる。

円形の土坑である。直径 0.85 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

土坑 S0776（図 59）

Ｉ－ｃ区東端の中央、X= － 156,061、Y= － 42,017 で検出した。溝 S0772 の西肩、土坑 S0770 の南西にあたる。

円形の土坑である。直径 0.6 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1241（図 55）

Ｉ－ｅ区の南東端、X= － 156,110 周辺で検出した。

大きく広がる土坑で、溝 S0772 に切られる。

南北に長く、長さ 4.8 m、幅 2.0 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は皿形を呈する。

埋土は砂質が強く、崩落が激しいので壁面を十分検出できなかった。実際はもっと広かったと考えられる。

土坑 S0732（図 60）

Ｉ－ｅ区の東端中央、X= － 156,044 ～ X= － 156,049 の間で検出した。溝 S1188 に切られる。

Ｉ－ｃ区とＩ－ｅ区にまたがる土坑である。

長さ約 6.5 m、幅約 4.0 mの方形土坑の中に直径 1.6 mの円形の土坑が南東部に掘り込まれる形状を呈する。

深さは 0.4 ～ 0.6 mをはかる。断面は皿形もしくは、円形の土坑のある箇所は逆向きの凸状を呈する。

土坑 S1174（図 60、写真図版 35 －２）

Ｉ－ｅ区の東端北側、X= － 156,027 ～ X= － 156,030 の間で検出した。

不定形で溝S1170に切られる。東端は調査区外にのびる。本来は２つの土坑(S1174－a、S1174－b）であったものが重なり合って落ち込み状に広がり、南東部の土坑S1186をも包括するような形態になったものと考える。

全体の長さが2.8 mで、そのうち土坑S1174－aが直径1.7 m、土坑S1174－bが直径0.9 mである。土坑S1174－aは深さが0.6 mで、断面はU字形を呈する。土坑S1174－bは深さが0.4 mで、断面は逆台形を呈する。埋土にはシルトのブロックが含まれる。

土坑S1174－aの中から土師器皿が出土した（図86－254、写真図版55－２）。法量が小さいことから、平安時代中期の土師器皿であろう。

土坑S1186（図60）

Ⅰ－e区の東端北側、土坑S1174の落ち込み内で検出した。

不定形の土坑である。長さ0.7 m、幅0.45 m、深さ0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土にはシルトのブロックが含まれる。遺物は出土していない。

土坑S1245（図60）

Ⅰ－e区の北東部で検出した。

円形の土坑である。直径0.55 m、深さ0.3 mをはかる。断面はU字形である。

上層から壺か甕の体部下半から底部が出土したが、摩耗が激しく、図示できなかった。器形から古墳時代のものであろうか。

溝S1170（図60）

Ⅰ－e区の東側北部で検出した。

南北の溝である。Ⅰ－e区の北側、X=－156,025までみられる南北溝は鋤溝などの耕作溝であるが、溝S1170はこれらの溝とはやや離れており、長さも他より長いことから異なる機能の溝として区別した。長さ11.0 m、幅0.45 m、深さ0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。

なお、溝S1170は約５m離れて南に位置する、溝S1188につながり、長さが40 m以上もある長い溝であった可能性もある。

溝S1188（図60）

Ⅰ－e区の東側中央で検出した。

南北の溝である。北の溝S1170につながる可能性もある。

長さ16.0 m、幅0.5 m、深さ0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝S1235（図60、写真図版35－３）

Ⅰ－e区の西端中央で検出した。

南北の溝である。南端は撹乱によって不明であるが、現代の用水路のカーブに沿うように西側に曲がっていくようである。比較的新しい時期の遺構と思われる。

検出長14.0 m、幅0.9 m、深さ0.55～2.0 mをはかる。断面はU字形と思われる。

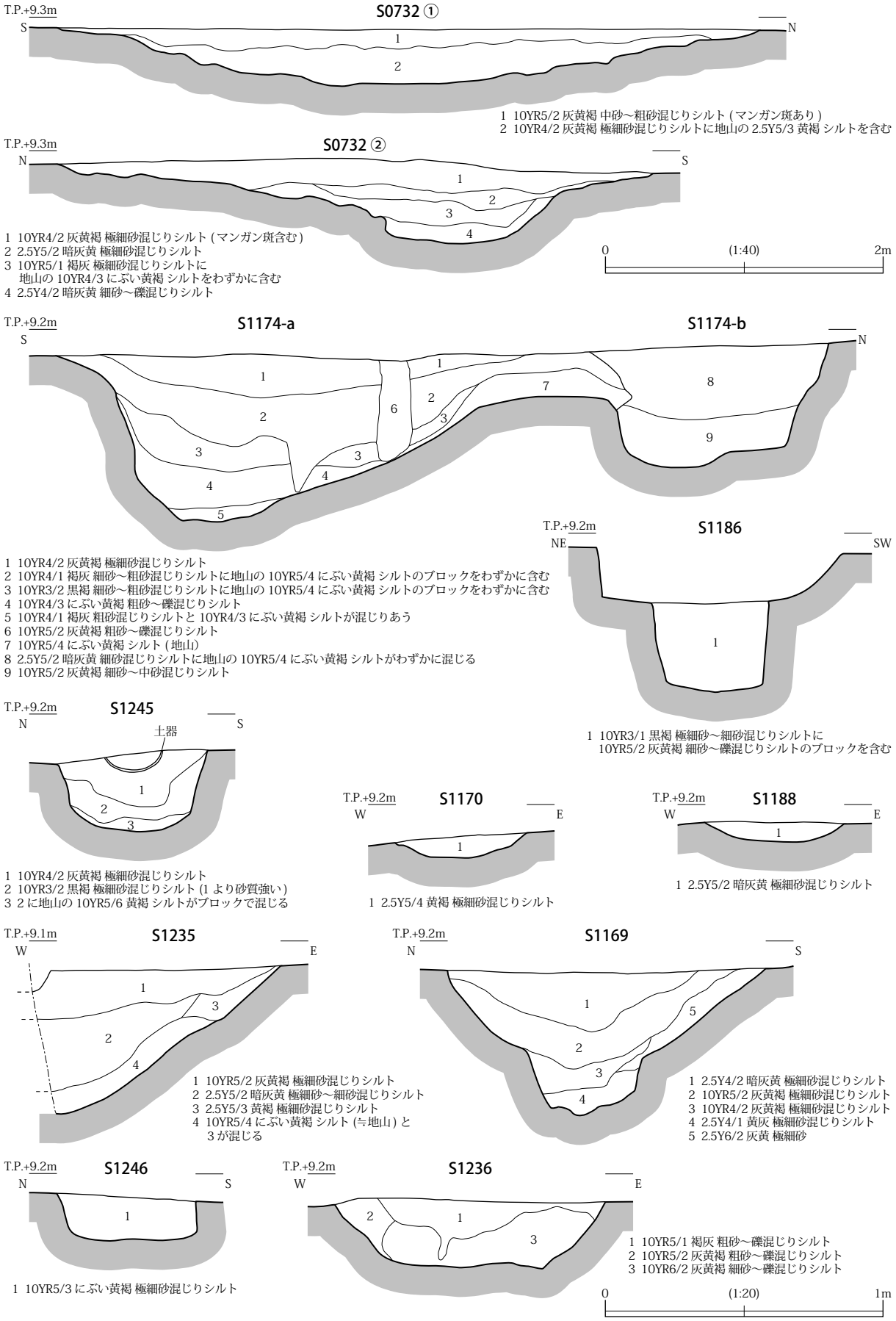


図 60　Ⅰ－e 区遺構断面図

土坑 S1169（図 60、写真図版 35 － 1 ）

Ⅰ－ｅ区の北東部で検出した。円形の土坑である。

直径 1.15 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は逆向きの凸形である。埋土は、Ⅰ－ｂ２区で多数検出した土坑でみられたような、第２層と第３層の土が細かいシルトのブロックが互層になるような堆積状況であった。

須恵器杯身が出土した（図 86 － 253、写真図版 55 － 2 ）。古墳時代中期のものである。

溝 S1246（図 60）

Ⅰ－ｅ区の西側中央で検出した。東西の溝である。

長さ 4.0 m、幅 0.5 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1236（図 60）

Ⅰ－ｅ区の南西部で検出した。円形の土坑である。

直径 1.0 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

中央部西半の遺構は、溝 S0772 や土坑 S0786 等を除いては、中央より北側に集中してみられる傾向がある。南半では撹乱が多かったこともあるが、中世以降の耕作溝以外は人為的な遺構は皆無と言ってもよい。Ⅰ－ｅ区は東端でしか遺構を検出できなかった。

遺構は、掘立柱建物などの平安時代前期後半から中期の遺構と、土坑 S0673 等を代表とする古墳時代の遺構が主で、これらに弥生時代の遺構が若干混じる。

古墳時代の土坑、井戸は、Ⅰ－ｂ２区で検出した土坑群と規模や、埋土が細かい第２層と地山のシルトのブロックで埋め戻されていること、出土遺物など、類似している。同時期に形成された、一連の遺構として間違いない。古代の遺構は、掘立柱建物数棟から構成される小規模な居住域を形成する点は他の調査区と変わらないが、時期がやや新しい。

また、Ⅰ－ａ区、Ⅰ－ｄ２区から連続した轍がここで途切れており、北にあたる大和川線調査区（05 － 1 区）では検出されていないことから、Ⅰ－ｃ区の北限が北の集落域との境界にあたるとも言える。

（５）西部域の遺構（Ⅱ－ａ区）（図 61 ～ 67、写真図版 36 ～ 39）

西側にある、南北の大きな用水路より西に位置する調査区を西部域と呼称する。

池内Ｃ２－４－２調査中では、最西の調査区となる。調査区としてはⅡ－ａ区が相当し、西端は以前に調査した、都市計画道路大阪河内長野線の調査区、09 － 2 区に隣接する。

X= － 156,015 ～ X= － 156,115、Y= － 42,063 ～ Y= － 42,100 に位置する（図 61）。南北長約 100 m、東西幅約 30 mの範囲であるが、北西部は斜めに隅が切られている。調査面積は 2398 ㎡である。

中央の X= － 156,060 ～ X= － 156,080 の約 20 m間は畑だったため、遺構の残存状況が良い。しかし、X= － 156,060 より北は、盛土の下層に近現代の廃棄土坑が複数存在し、遺構面を乱している。また、南半は宅地の基礎杭が遺構面まで達していたため、大きく撹乱を受けている。

遺構面の標高は、北側が T.P.9.0 m、南側が T.P.9.4 mと北から南に高くなっていく。北端の標高は全調査区中でも最も低い。東と西の比高はさほど顕著でなく、0.1 ～ 0.2 m程度である。

掘立柱建物３棟や柱穴、土坑、溝、耕作溝などを検出した。撹乱が多いため全体の把握が困難な部分もあり、弥生時代や古墳時代の遺構、遺物を少数検出したのみである。古代の遺構が多く、西側の 09 －２区に似た様相、時期を示すと言える。

掘立柱建物 12・柵列 1（図 62、写真図版 37・39 －１～６）

Ⅱ－ａ区の北部、X= － 156,040 ～ X= － 156,046、Y= － 42,075 ～ Y= － 42,087 間で検出した。

東西を長軸とする梁行２間、桁行６間の総柱建物とその北側の柵列である。平面規模でみると、掘立柱建物 12 は、今回調査した中で最も規模の大きい掘立柱建物となる。正方位よりわずかに北西にふる。

建物の北辺に平行する柱列をもつ。柵列１とした。柱穴の位置は北辺の柱穴のほぼ真北にくるので、北の柵列も建物の柱列に含めた方がいいのかもしれない。しかし、柱穴の直径が小さいことや、北柱列との間隔も 1.0 ｍと他の柱列の柱間より短いことから、建物の柱列ではなく、建物に付随する柵列などの別遺構と考えた。柵列１は７本の柱で構成されていたと思われるが、検出されたのは５本である。柵列柱穴の直径は 0.2 ｍ、深さは 0.1 ｍをはかる。断面は皿形を呈する。

掘立柱建物 12 は桁行の長さに比べると、梁行の長さが短かい。南の S1263、S1280、S1287、S1288 なども柱穴だが、建物の柱列として整然と並ばず、復元できなかった。柱間は 1.5 ～ 1.8 ｍである。

柱穴は直径 0.2 ～ 0.6 ｍ、深さ 0.1 ～ 0.4 ｍ、柱根は直径 0.2 ｍ、深さ 0.3 ｍ程度のものが多い。断面は皿形もしくはＵ字形を呈する。

柱穴 S1277、柱穴 S1262 から土師器皿や土師器椀などが出土した（図 87 － 264・265、写真図版 59 －２）。付近の柱穴からも黒色土器Ａ類椀などが出土している。よって、掘立柱建物 12 は平安時代前期末の遺構と考える。

掘立柱建物 12 の北側にもピットが存在するが、建物には復元できていない。また、南側は住宅の基礎などで大きく撹乱を受けているので、遺構を確認できていない。従って、掘立柱建物 12 は１棟の建物単独での検出となった。掘立柱建物 12 の周囲に他の建物でみられるような、区画溝の役割を果たす溝も検出していない。

掘立柱建物 13（図 63、写真図版 38 －３）

掘立柱建物 12 から約 40 ｍ南下した、Ⅱ－ａ区の南西部、X= － 156,084 ～ X= － 156,088、Y= － 42,094 ～ Y= － 42,097 間で検出した。

南北を長軸とする側柱建物である。梁行２間、桁行３間の建物として復元したが、西列は調査区西端ぎりぎりのところで検出したため、柱列はさらに西にのびて、梁行が３間以上の建物になる可能性もある。ほぼ正方位である。

柱穴は直径 0.3 ～ 0.5 ｍ、深さ 0.05 ～ 0.3 ｍをはかる。柱痕は直径 0.1 ｍ、深さ 0.15 ｍ程度のものが多い。断面は皿形もしくはＵ字形を呈する。遺物はほとんど出土していない。

掘立柱建物 13 は掘立柱建物 14 に隣接しており、この２棟の西側に居住域が展開していた可能性が考えられる。

掘立柱建物 14（図 64、写真図版 38 －３）

Ⅱ－ａ区の南西部、X= － 156,089 ～ X= － 156,094、Y= － 42,094 ～ Y= － 42,098 間で検出した。

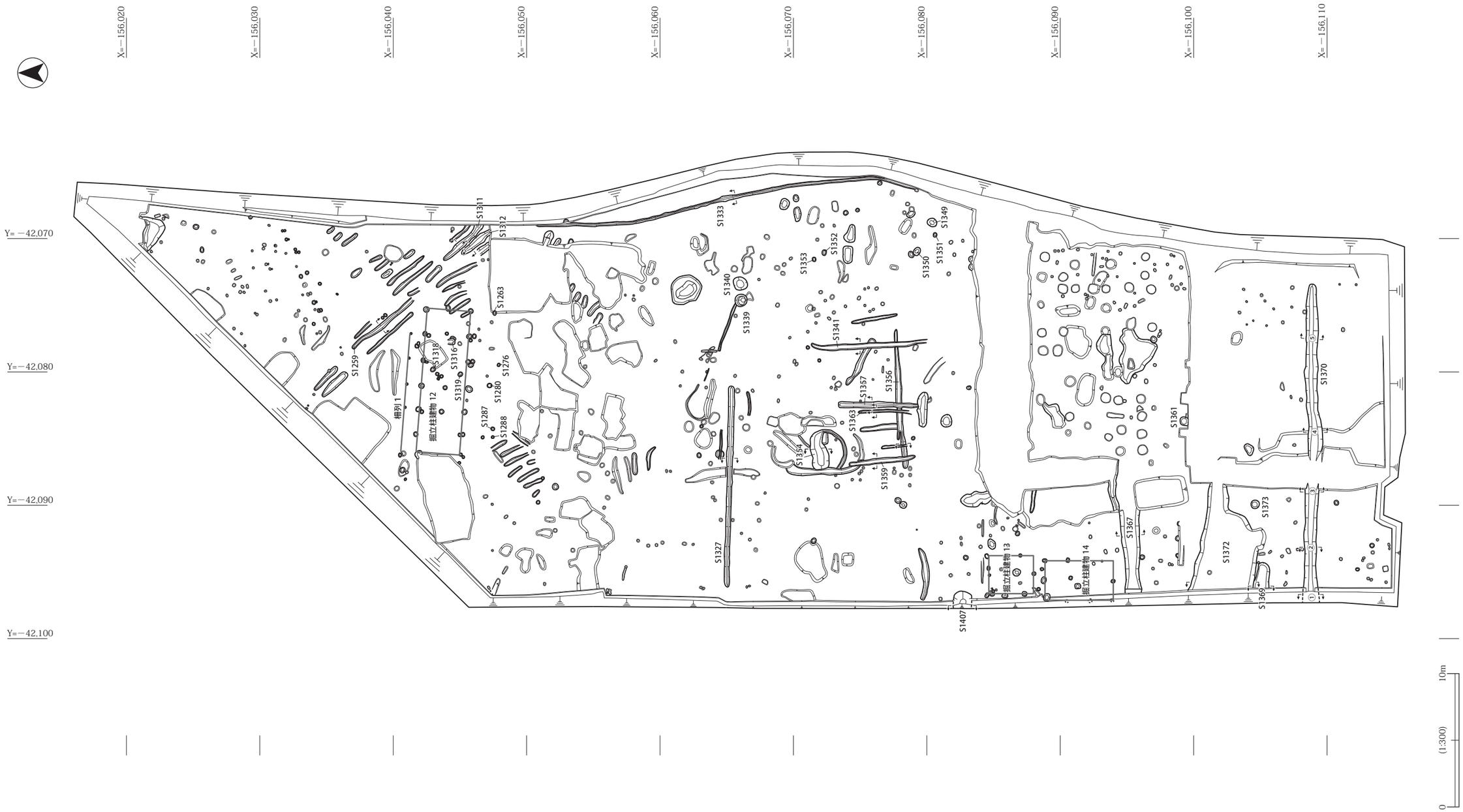
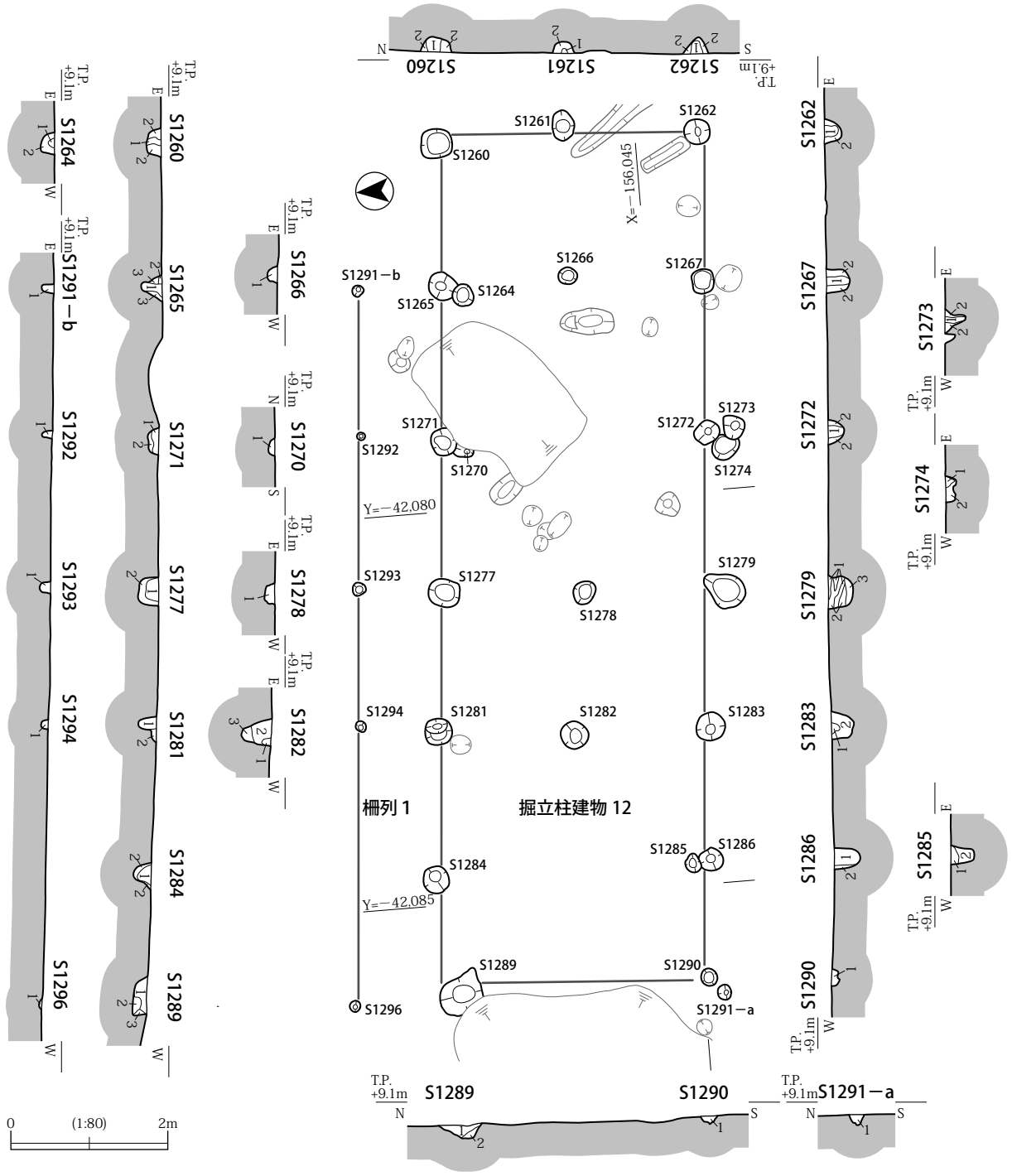
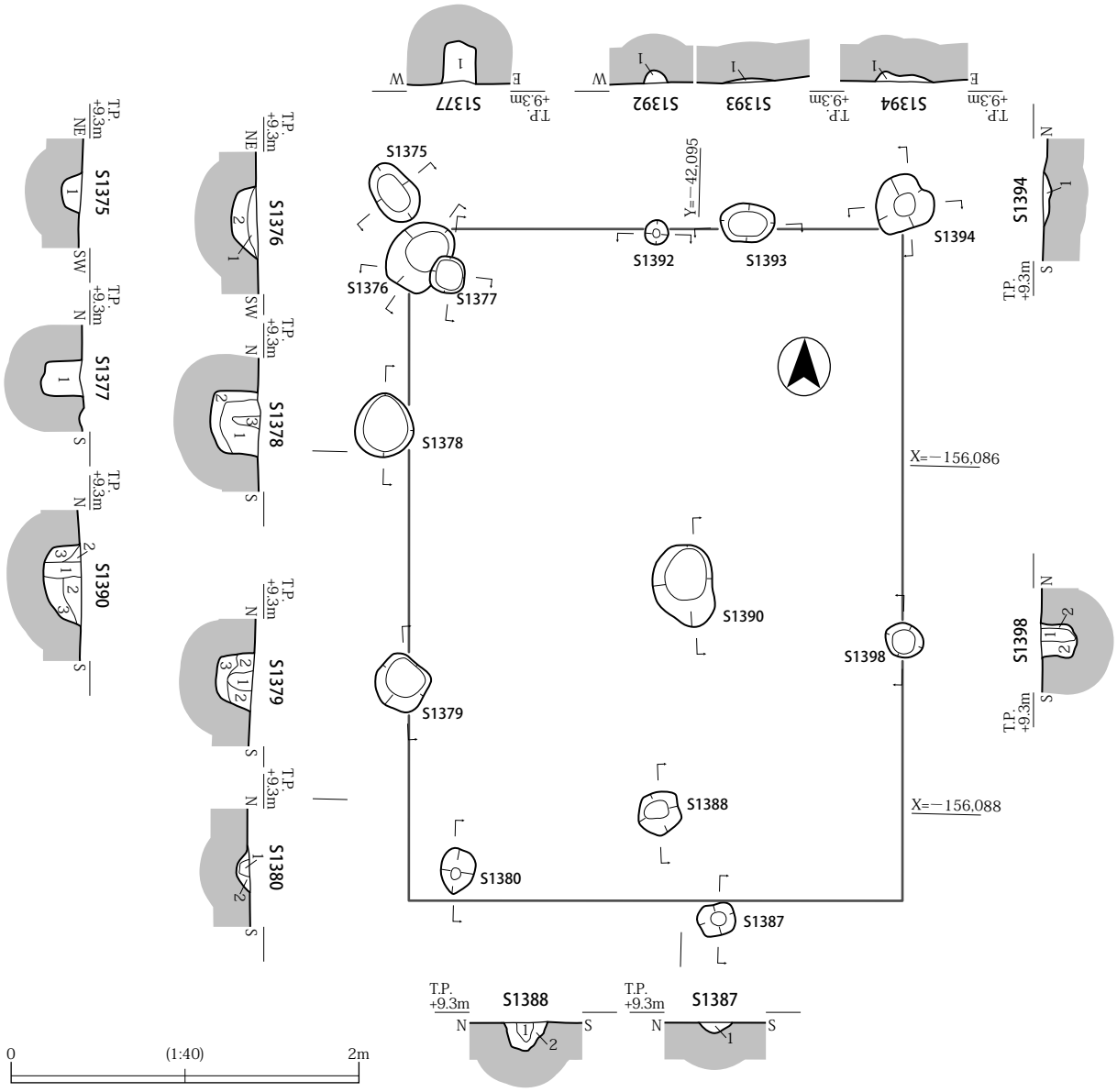


図 61　西部域 (Ⅱ－ a 区) 平面図



S1260
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
S1261
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに
1 の細かいブロック混じる
S1262
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに
1 の細かいブロック混じる
S1264
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
S1265
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
3 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂〜礫混じりシルト
S1266
1 2.5Y5/2 暗灰黄 シルト
S1267
1 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルト
2 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
S1270
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S1271
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト
S1272・S1273
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S1274
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 1 に 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルトが混じる
S1277
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
2.5Y5/1 黄灰 シルトをわずかに含む
2 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
S1278
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S1279
1 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト
3 2.5Y5/4 黄褐 極細砂〜細砂混じりシルト
S1281
1 2.5Y4/2 暗灰黄 細砂〜礫混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 細砂〜礫混じりシルト
S1282
1 5Y4/2 灰オリーブ 細砂〜礫混じりシルト
2 5Y5/2 灰オリーブ シルト
3 5Y5/1 灰 シルト
S1283
1 10YR5/2 灰黄褐 シルトと
10YR5/3 にぶい黄褐 シルトが混じりあう
2 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルト
S1284
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂〜礫混じりシルト
S1285
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 粗砂〜礫混じりシルト
S1286
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂〜礫混じりシルト
2 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂〜礫混じりシルト
S1289
1 2.5Y4/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルト
3 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
S1290
1 2.5Y5/1 黄灰 極細砂混じりシルト
S1291−a
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S1291−b・S1292・S1294・S1296
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S1293
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
（ややマンガン斑が混じる）

図 62　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 12・柵列 1 平・断面図



S1375
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～粗砂混じりシルト
S1376
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルト (マンガン斑あり)
2 10Y4/3 にぶい黄褐 シルト混じり粗砂～礫
S1377
1 10YR4/2 灰黄褐 細砂～礫混じりシルト
S1378
1 10YR4/2 灰黄褐 シルト (マンガン斑あり)
2 10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり粗砂～礫
3 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト

S1379
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混りシルト (マンガン斑あり)
3 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂～細砂
S1380
1 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト
S1387
1 10YR5/1 褐灰 極細砂混じりシルト (炭・遺物小片含む)
S1388
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR4/1 褐灰 極細砂混じりシルト

S1390
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
3 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト
S1392
1 10YR5/3 にぶい黄褐 細砂～粗砂
S1393
1 10YR5/4 にぶい黄褐 細砂～粗砂
S1394
1 10YR5/2 灰黄褐 シルト混じり細砂～粗砂
S1398
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト
2 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト

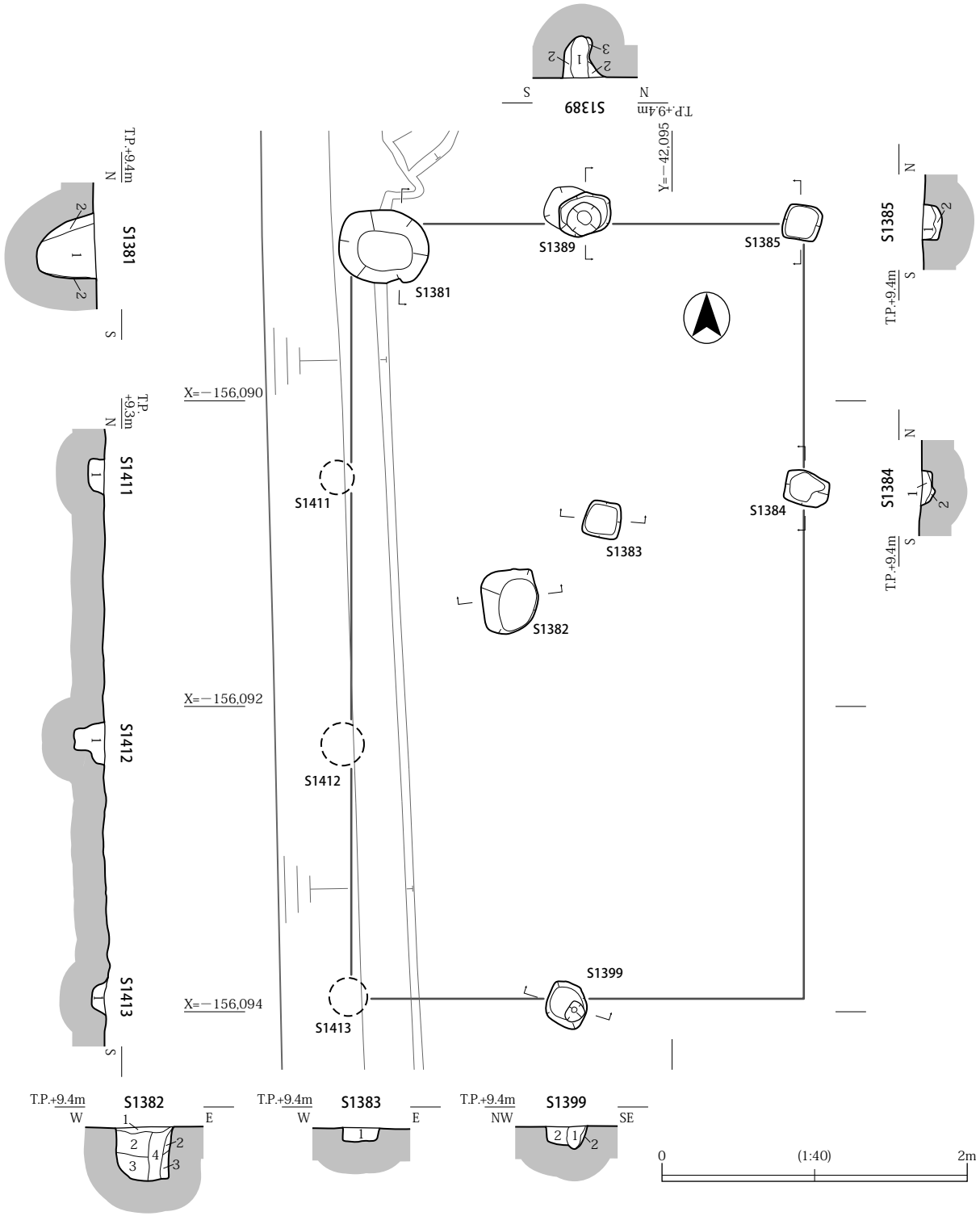
図 63　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 13 平・断面図

掘立柱建物 13 の南に位置する。

南北を長軸とする側柱建物である。梁行２間、桁行３間の建物として復元したが、西列は調査区西壁中にあり、断面の確認にとどまった。よって、柱列はさらに西にのびる可能性もある。正方位にのる。柱間は 1.5 ～ 1.7 mである。

柱穴は比較的大きく、平面形は隅丸方形とも言える。直径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.4 mをはかる。柱痕は直径 0.1 m、深さ 0.3 m程度のものが多い。断面はＵ字形を呈する。

柱穴 1381 から黒色土器Ａ類椀が出土している（図 87 － 269、写真図版 60 － 1）。平安時代前期末



S1381
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり , 遺物小片含む)
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S1382
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 5Y5/2 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
3 5Y6/2 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
4 5Y5/3 灰オリーブ 極細砂混じりシルト
S1383
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルトに
2.5Y5/3 黄褐 極細砂混じりシルトの小さなブロック混じる (マンガン斑あり)
S1384
1 2.5Y4/3 オリーブ褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 2.5Y6/4 にぶい黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S1385
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり) 1 より砂質強い
S1389
1 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり , 柱根)
2 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
3 2.5Y6/2 灰黄 極細砂混じりシルト (マンガン斑あり)
S1399
1 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混じりシルトに
2.5Y5/3 黄褐シルトの細かいブロック混じる (柱根)
2 2.5Y6/2 灰黄 極細砂混じりシルトに
2.5Y5/3 黄褐 シルトの細かいブロック混じる
S1411・S1412・S1413
1 2.5Y5/2 暗灰黄 極細砂混じりシルト

図 64　Ⅱ－ａ区掘立柱建物 14 平・断面図

のもので、掘立柱建物 13、掘立柱建物 14 はこの時期の遺構と考える。

柱穴 S1288（図 65）

掘立柱建物 12 の南西で検出した柱穴である。柱穴 S1288、柱穴 S1287、柱穴 S1280 もほぼ一直線上に並ぶので、掘立柱建物 12 の南列のさらに南に柱列があると捉えるべきかも知れない。

直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.2 mである。断面はＶ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S1287（図 65）

掘立柱建物 12 の南西、柱穴 S1288 の東で検出した。柱穴である。

直径 0.35 m、深さ 0.25 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.25 mである。

断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S1280（図 65）

掘立柱建物 12 の南中央で検出した柱穴である。

直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.1 mである。断面は浅い皿形を呈する。

黒色土器Ｂ類椀や土師器皿が出土している（図 87 － 267・268、写真図版 59 － 2）。平安時代前期～中期の遺物と思われる。

柱穴 S1276（図 65）

掘立柱建物 12 の南東部で検出した柱穴である。

直径 0.15 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S1263（図 65）

掘立柱建物 12 の南東部、柱穴 S1262 の南で検出した柱穴である。

直径 0.2 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。黒色土器が出土している（図 87 － 266、写真図版 59 － 2）。

柱穴 S1316（図 65）

掘立柱建物 12 の中で検出された。

長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.2 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.2 mである。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S1318（図 65）

掘立柱建物 12 の柱穴 S1271 と切り合いをもつ柱穴で、掘立柱建物 12 の柱穴と考えられる。

直径 0.3 m、深さ 0.15 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.15 mである。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

柱穴 S1319（図 65）

掘立柱建物 12 の身舎内で検出された柱穴である。掘立柱建物 12 と重複する掘立柱建物があったのかもしれないが、復元できなかった。掘形の平面形は楕円形を呈する。

長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.4 mをはかる。柱痕があり、直径は 0.1 m、深さ 0.2 mである。断面はU字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1259（図 65）

Ⅱ－ａ区の北東部で検出した。北西から南東へと斜方向に走る溝である。

S1259 から南東へ同規模の溝が約 1 m間隔で、多いところでは 10 数条平行に並ぶ。第 2 層上面からの遺構で、おそらく中世後半から近世の鋤溝などの耕作溝である。同様の斜め方向の溝はⅠ－ｃ区やⅠ－ｅ区の北側でも多数検出されている。

長さ 6.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。

溝 S1311（図 65、写真図版 39 －７）

Ⅱ－ａ区の北東部、東端で検出した。S1259 同様に、北西から南東へと斜方向に走る溝である。耕作溝であろう。

長さ 4.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はV字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1312（図 65、写真図版 39 －７）

Ⅱ－ａ区の北東部、東端で検出した。溝 S1311 の西に位置する。溝 S1311 同様に、北西から南東へと斜め方向である。長さ 3.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.15 mをはかる。断面はV字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1333（図 65）

X= － 156,051 辺りで調査区の東端から検出されて、やや東に振りながら南へとのび、再び調査区外の東へのびていく細い南北溝である。

長さ 28.0 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は深いU字形を呈する。断面形は轍にも似るが、1 本のみの検出であるため、断定できなかった。遺物は出土していない。

土坑 S1354（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央西側で検出した。逆Ｃ形の土坑である。北側が太く、南側は尻尾のように細い。風倒木痕の可能性がある。

長さ 6.0 m、最大幅 1.1 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1341（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。

南北溝である。西の溝 S1359 から等間隔に並ぶ溝の中で、最東端の溝である。北端が少し東に屈曲する。

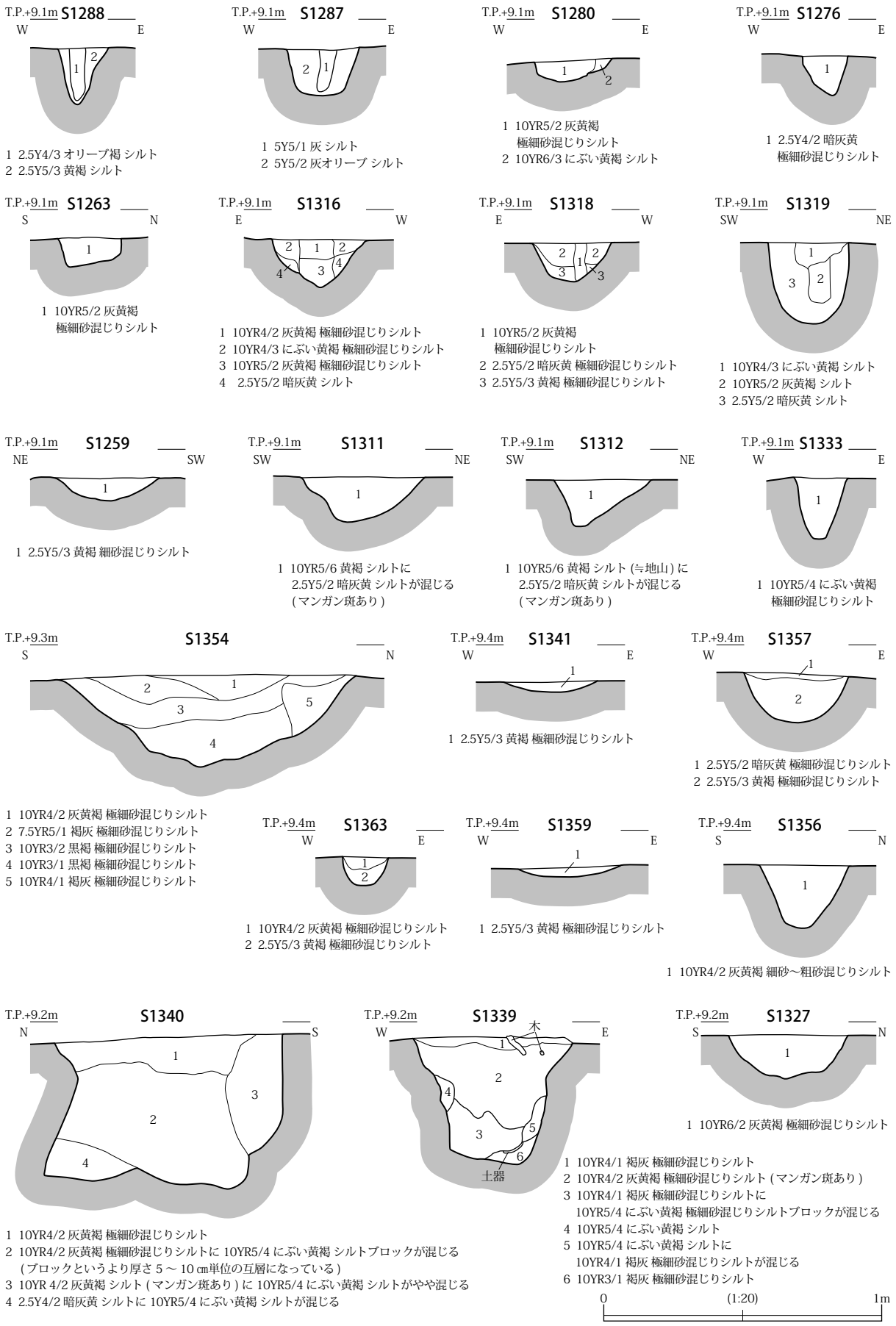


図 65　Ⅱ－ａ区遺構断面図（1）

長さ 8.5 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1357（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央で検出した。

南北溝である。西の溝 S1359 と東の溝 S1341 の間に位置する。

長さ 6.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1363（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央西側で検出した。

南北溝である。溝 S1357 の西に位置し、平行である。

長さ 4.0 m、幅 0.15 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1359（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央で検出した。

南北溝である。西の溝 S1359 から東の溝 S1341 まで 1.5 m間隔で南北溝が４条並ぶ。Ⅰ－ｂ２区南部で検出した溝群とも似る。浅く、途中で途切れるなど、残存状況は悪いが、畝溝などの耕作溝であろう。

長さ 5.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1356（図 65）

Ⅱ－ａ区の中央西側で検出した。

東西溝である。溝 S1359、溝 S1341 などの南北溝に切られる。調査区の西端で検出している東西溝が溝 S1356 の可能性が考えられる。

長さ 10.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1340（図 65、写真図版 38 －２）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1339 の東に位置する。円形の大形の土坑である。

直径 0.8 m、深さ 0.55 mをはかる。断面は台形を呈する。埋土は灰黄褐色と黄褐色の細かいシルトのブロックが互層のように堆積する。遺物は出土していない。

形状や埋土の堆積状況はⅠ－ｂ２区で多数検出した土坑と似る。したがって、古墳時代の遺構と推測する。

土坑 S1339（図 65、写真図版 39 －８）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1340 の西に位置する。円形の大形の土坑で土坑 S1340 と対をなす。

直径 0.6 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色と黄褐色の細かいシルトのブロックが互層に堆積する。

最深部から土器が出土したが、小片のため時期は不明である。土坑 1340 同様、古墳時代の遺構と推測する。

溝 S1327（図 65）

Ⅱ－ａ区のちょうど中央の西半、X= － 156,065 で検出した。

東西溝である。正方位にのることもあり、区画溝の役割を果たす溝と考えられる。

長さ 15.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

土坑 S1349（図 66）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1351 の東に位置する。

楕円形の土坑である。中心に柱痕のような土層の変化があり柱穴の可能性もあるが、付近に他に柱穴は検出できなかった。

長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1350（図 66）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1350 の西に位置する。

楕円形の土坑である。柱穴の可能性もあるが、付近に他の柱穴は検出できなかった。

長径 0.4 m、短径 0.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1351（図 66）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1349 の西に位置する。

円形の土坑である。

直径 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1353（図 66）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1352 の北に位置する。

円形の土坑である。

直径 0.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。中心に直径 0.1 m、長さ 0.25 mの柱痕と思われる痕跡が認められる。大きく東に屈曲するのは、柱が腐食した時点や抜き取りの際に傾いたものか。遺物は出土していない。

土坑 S1352（図 66）

Ⅱ－ａ区の中央東側で検出した。土坑 S1353 の南に位置する。

円形の土坑である。深さや断面形状から、柱穴になる可能性もある。

直径 0.3 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。遺物は出土していない。

溝 S1367（図 66）

Ⅱ－ａ区の南西部で検出した。東西方向の溝である。

西端は調査区外に、東端は撹乱によって失われている。掘立柱建物 13、掘立柱建物 14 の南に位置するので、居住域を区画する役割の溝と推測する。あるいは、溝 S1370 より約 12 ～ 13 m北に平行に位置するので、溝 S1370 と関連する遺構とも捉えられる。

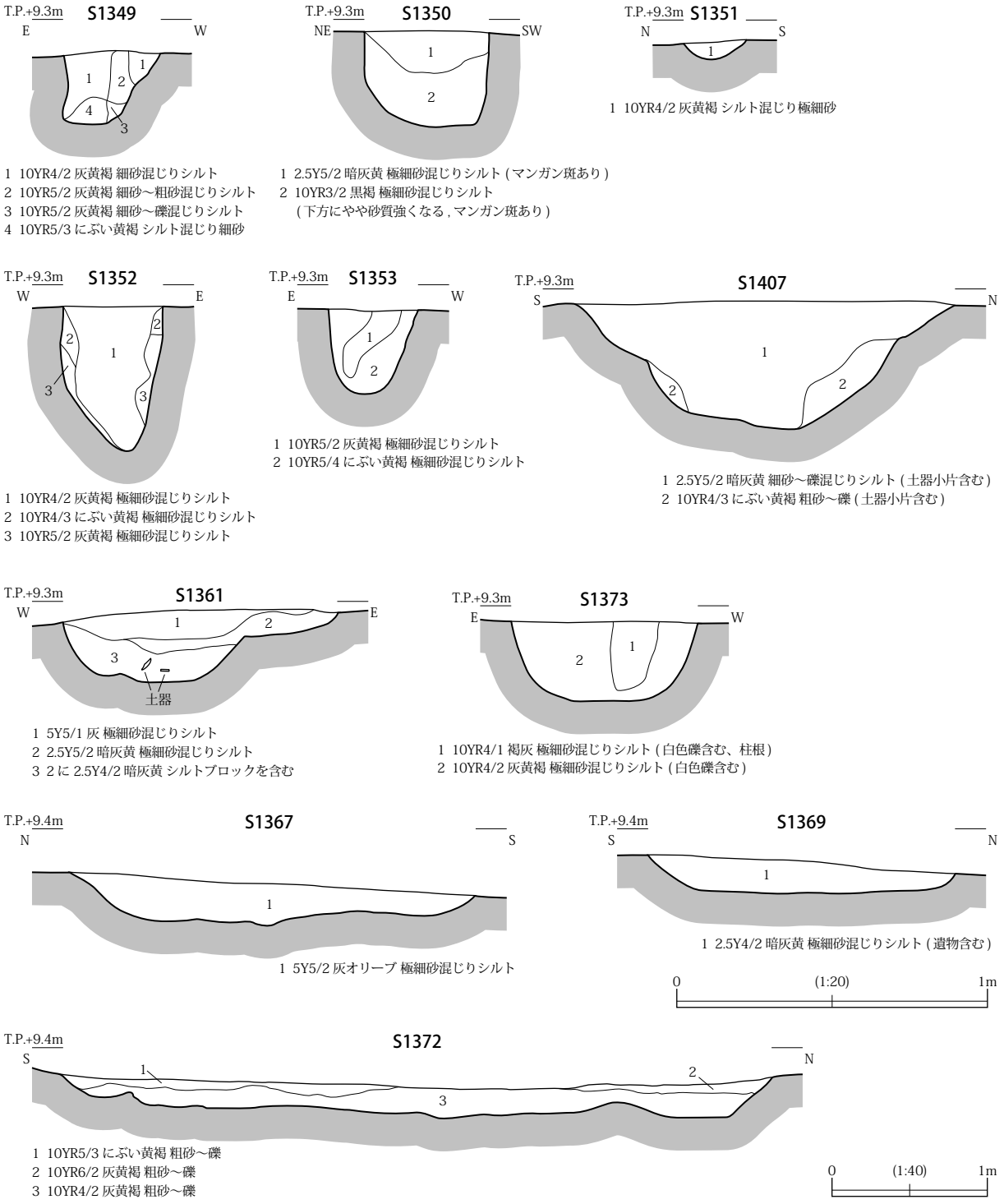


図 66　Ⅱ－ａ区遺構断面図（２）

長さ 6.0 m、幅 1.3 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。遺物は出土していない。

土坑 S1369（図 66）

Ⅱ－ａ区の南西部で検出した。溝 S1372 と隣接する。

東西を長軸とする土坑である。西端は調査区外にのびる。

長さ 1.7 m、幅 1.0 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

土師器甕が出土している（図 87 － 274、写真図版 60 － 1）。平安時代前期のものと思われ、本土

坑 S1369 も当該期の遺構とする。

溝 S1372（図 66）

Ⅱ－ａ区の南西部で検出した。土坑 S1369 と隣接する。

東西を長軸とする溝である。西端は調査区外にのび、調査区端から 6 mほど東で約 3 分の 1 の幅に急激に細くなる。

長さ 8.0 m、幅 4.5 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は浅い皿形を呈する。

遺物は出土していないが、隣接する土坑 1369 を平安時代前期とするなら、溝 1372 もこれに近い時期と考えられる。

土坑 S1407（図 66）

Ⅱ－ａ区の南西部で検出した。南西部の掘立柱建物 13 や掘立柱建物 14、柱穴が集中して検出された区域の北西に位置する。

西側約 3 分の 2 は調査区外にあるが、円形と思われる大形の土坑である。規模から井戸になる可能性もあり、掘立柱建物に伴う可能性がある。

直径 1.2 m、深さ 0.4 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。

埋土に土器小片を含むが、詳細な時期は不明である。井戸であるなら、掘立柱建物と同時期の平安時代前期から中期の遺構と考えられる。

土坑 S1361（図 66）

Ⅱ－ａ区の南部中央で検出した。他の遺構とは位置的に離れる。南半は撹乱によって切られ約 2 分の 1 の検出である。

円形の土坑である。直径 0.9 m、深さ 0.25 mをはかる。断面は逆向きの凸状を呈する。最下層に土器を含むが、詳細な時期は不明である。

柱穴 S1373（図 66）

Ⅱ－ａ区の南西部で検出した。溝 S1372 の南東に位置する。

掘形の平面形は円形で、直径 0.6 m、深さ 0.25 mをはかる。断面はＵ字形を呈する。中心より西寄りに、直径 0.15 m、深さ 0.2 mの柱痕を検出した。

溝 S1370（図 67、写真図版 38 －１）

Ⅱ－ａ区の南部、X= － 156,108 で検出した。

東西方向の溝で、撹乱を除いたⅡ－ａ区のほぼ全域で検出される。東西の正方位に合致する。

東端は途切れているが、位置的にＩ－ｅ区で検出した溝 S0772 の西端延長線上に合致するので、溝 S0772 の続きと思われる。溝 S1370 の西端も、既往の調査の池内 09 －２調査で検出した 460 溝と完全に合致する。従って、溝 S0772、溝 S1370、460 溝は異なる名称になっているが、本来は同一の溝である（第５章図 93 参照）。

溝 1370 としての長さは 23.0 m、幅 0.8 ～ 1.1 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

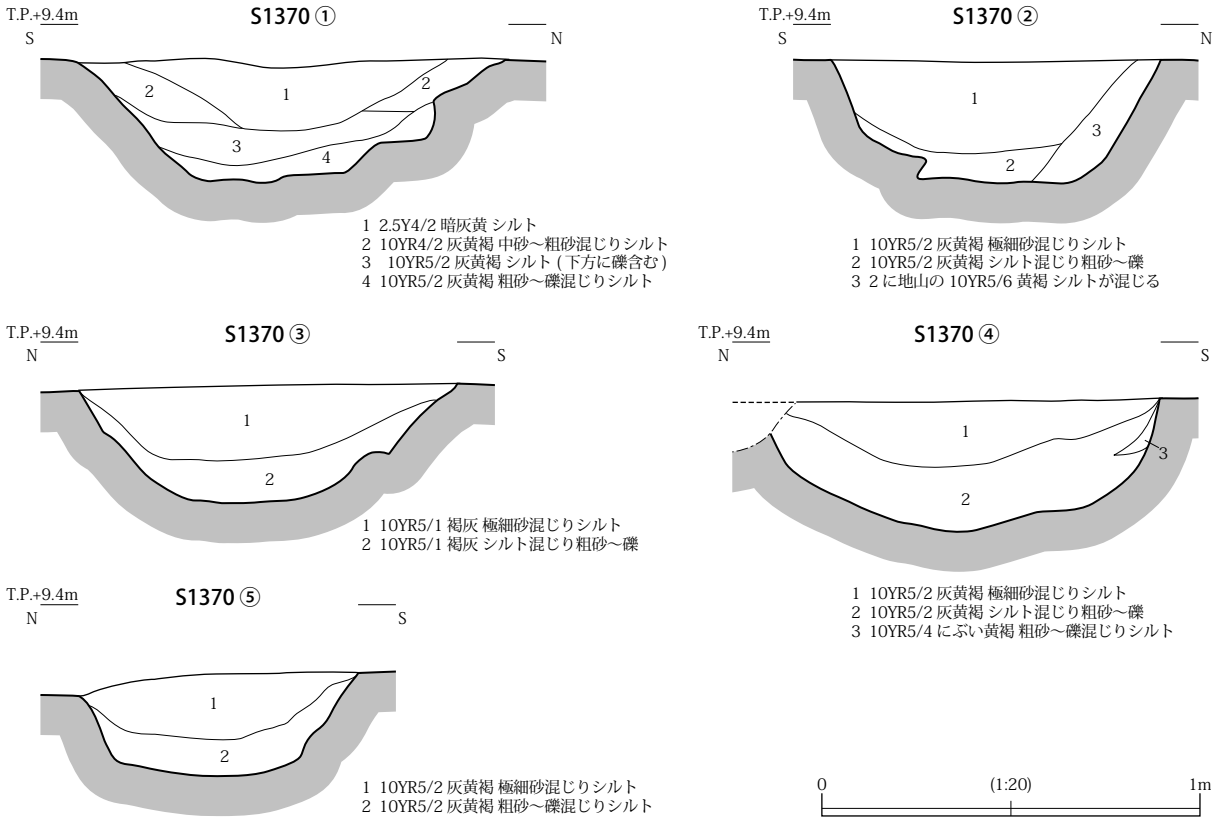


図 67　Ⅱ－ａ区 S1370 断面図

埋土は２層にわたって堆積する。溝 S0772 と比較すると深さはないが、遺構面上面がⅡ－ａ区の東ではかなり削平されており、本来の規模はⅠ－ｄ２区やⅠ－ｃ区で検出されたように、もっと大きかったと推測される（図 29、55 参照）。

溝 1370 の西側溝際で土師器皿や土師器甕、平瓦などが出土した（図 87 － 272・273、279、写真図版 59 － 1 ）。土器は平安時代中期のものである。

溝 S1370 は付近の掘立柱建物よりやや古いか同時期で、平安時代中期までは少なくとも機能していた溝であろう。これは、溝 S0772 から出土した遺物とも時期を同じくする（図 74、写真図版 51 参照）。

溝 S0772 から溝 S1370、460 溝が連続する同一の溝とするなら、その規模は東西・南北とも 100 mを超え、相当大きなものとなる。時期的には奈良時代から平安時代中期の遺構であるのは間違いないが、他の古代遺構が正方位を意識しているのに、この溝のみが斜行する部分をもつなど、不明な点もある。詳細な検討は第５章の総括で、今一度検討したい。

Ⅱ－ａ区では、包含層（第２層）から黒色土器Ａ類や土師器椀、須恵器、サヌカイトの石鏃などが出土している（図 87、写真図版 60 － 2 、56 － 1 ）。遺構の時期と大きくは異ならない、古代を中心とする遺物がほとんどである。

以上、遺構について概観してきたが、今回の調査では弥生時代は主に後期の遺構・遺物をわずかに検出した。調査区の南半では古墳時代中期前葉から後半の土坑などと、それに伴う須恵器や土師器を一定量検出した。古代については、奈良時代後半からの遺構を確認し、平安時代前期から中期を主とする掘立柱建物 14 棟などと、それに伴う遺物を検出、確認した。

池内遺跡では、これまでの調査から弥生時代前期の環濠集落や水田跡以降、時期的には空白期間があ

り、まとまった古墳時代の遺構については確認されていなかった。

一方、東に位置する三宅西遺跡では、今回検出した古墳時代の遺構、遺物と同時期の流路などや遺物がまとまって確認されている。本調査で、この時期の遺構、遺物を確認できたのは大きな調査成果と言える。

古墳時代後期以降、やや空白期間があるが、古代については、いくつかの小群で９世紀から 11 世紀の居住域が確認されており、今回の調査でも小規模ながら居住域を確認できたと言える。

遺構の時代ごとの変遷やその特徴については、第５章の総括で行うので、そちらを参照されたい。

＜参考・引用文献＞

江浦洋　1996 「轍と開発－新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討」『大阪文化財研究』第 10 号　財団法人大阪府文化財センター

永野仁編　2012 『池内遺跡３』 公益財団法人大阪府文化財センター

井上智博編　2008 「第５章第４節第６項　土坑状変形」『讃良郡条里遺跡Ⅵ』 財団法人大阪府文化財センター

第２節　遺物

（１）東部域（Ⅰ－ａ区東半、Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区）の遺物（図 68 ～ 70、写真図版 41、42、56、58）

図 68 －１・２はⅠ－ａ区東半の用水路際の土坑 S0056 から出土した（図 12）。

１は土師器皿である。

口径 10.0 ㎝、器高 1.9 ㎝、厚さ 0.6 ㎝をはかる。全体をナデで仕上げ、口縁部をつまみあげ、先端を丸くおさめる。器壁が厚く、ぼってりした印象を受ける。にぶい黄橙色から橙色を呈する。

２は土師器甕の口縁部である。

口径 16.2 ㎝、残存高 4.2 ㎝をはかる。外面は板ナデと指頭圧痕が、内面も横方向に板状の工具痕が残る。口縁端部はナデにより平らに仕上げられている。灰褐色を呈する。

１と２から、土坑 S0056 は平安時代前期の遺構と思われる。

図 68 －３・４はⅠ－ａ区東半の用水路近くで、一定間隔に連続して並ぶ南北溝の一つ、溝 S0058 から出土した（図 12）。

３は黒色土器Ａ類椀である。

口径 14.4 ㎝、残存高 4.65 ㎝をはかる。内面は口縁部に沈線が、また、体部下半までミガキが密に認められる。外面はヘラケズリのちナデである。口縁部と体部の境には指頭圧痕がみられる。

４は黒色土器Ｂ類の鉢である。

口縁部から体部上半が残り、体部は大きく外に膨らむことはなく、垂直もしくはすぼまり気味である。口径 15.0 ㎝、残存高 6.3 ㎝をはかる。外面は縦の、内面は横方向のミガキが入る。ミガキは幅 0.2 ㎝と太い。ミガキが密であることから、初現期の黒色土器Ｂ類であろうか。

３・４から、溝 S0058 は１、２より新しいが、平安時代前期後半から中期前半の遺構であろう。

図 68 －５から９はⅠ－ａ区の柱穴 S0092 とその周辺から出土した。柱穴 S0092 は掘立柱建物１の柱穴である（図 10）。

５・６は黒色土器Ａ類椀である。

５は口径 14.8 ㎝、残存高 3.6 ㎝をはかる。体部はやや浅く、口縁部は外反する。内外面には密だが、粗いミガキが認められる。内面はにぶい黄橙色、外面は暗灰色を呈する。

６は口径 16.0 ㎝、残存高 3.4 ㎝をはかる（写真図版 41 －５）。口縁端部は丸くつまみあげ、体部は内湾する。内外面には密だが、粗いミガキが認められる。内面はにぶい暗灰色、外面は灰白色を呈する。

７は土師器椀である（写真図版 41 －５）。

口径 14.0 ㎝、残存高 3.6 ㎝をはかる。椀より、鉢や杯に近い器形をとるが、底面に高台の接合痕が残る。復元底径は 9.0 ㎝前後と大きく、かなり外側に高台がついていたことになる。浅黄橙色からにぶい橙色を呈する。

８は黒色土器Ｂ類椀底部である（写真図版 41 －５）。

高台径 8.4 ㎝をはかる。内面見込みには密な横方向のミガキが、体部内面も見込みまでミガキが密に施される。初期段階の黒色土器Ｂ類である。

９は土師器皿である（写真図版 41 －５）。

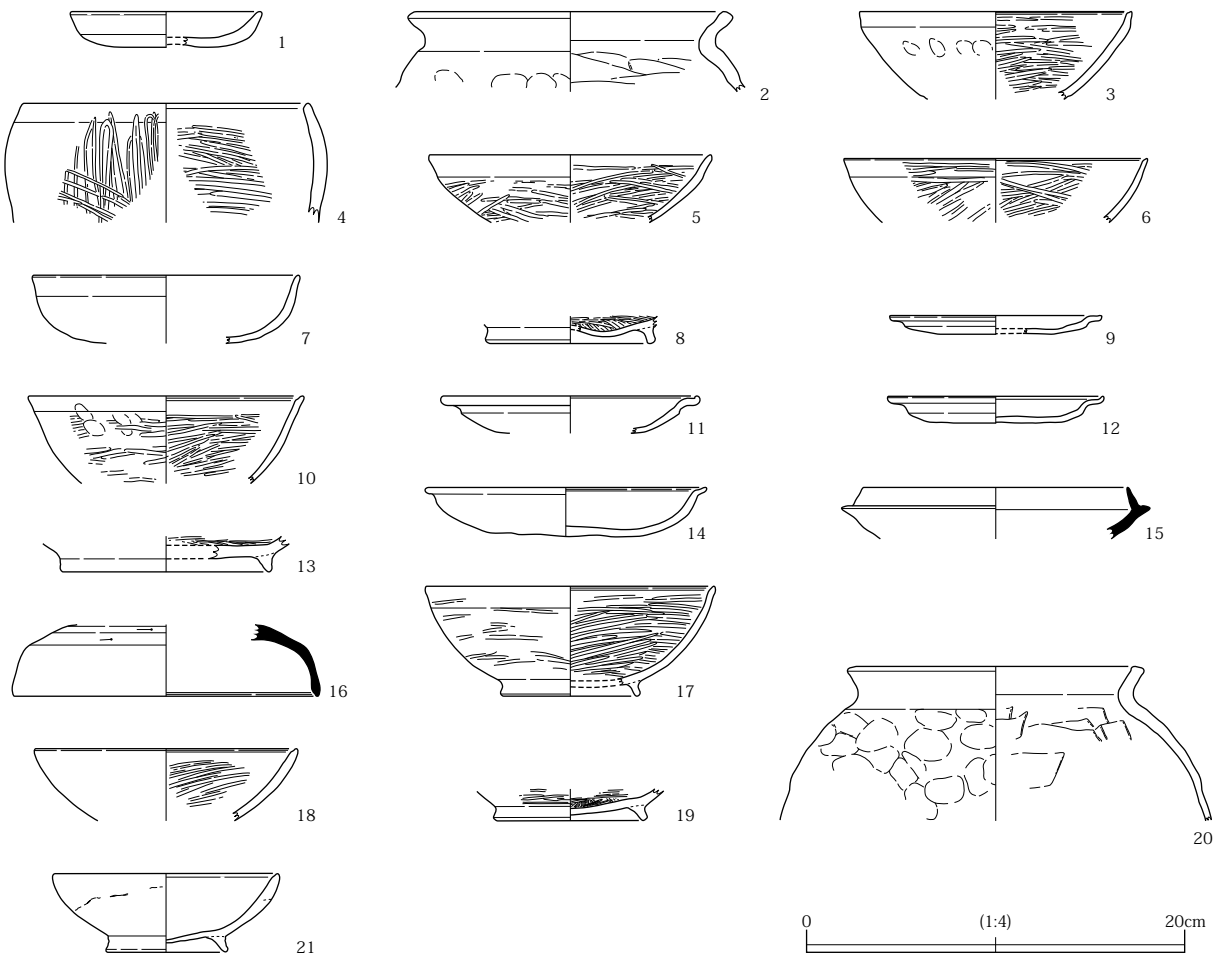


図 68　Ⅰ－ａ区東半遺構出土土器実測図

柱穴 S0092 付近の包含層から出土したが、おそらく柱穴 S0092 の遺物と思われる。口径 11.0 ㎝、器高 1.0 ㎝をはかる。ての字状口縁皿である。ナデで丁寧に仕上げられ、灰白色を呈する。

出土遺物から判断すると、９がやや新しい様相を示すが、柱穴 S0092 は平安時代中期の遺構と考えられる。

図 68 － 10・11 はⅠ－ａ区の柱穴 S0107 から出土した。柱穴 S0107 は柱穴 S0092 の西で検出された柱穴で、底部から礎板と思われる板状木製品も出土している（図 11）。

10 は黒色土器Ｂ類椀の口縁部から体部である（写真図版 41 － 5）。

口径 14.6 ㎝、残存高 4.6 ㎝をはかり、深い椀形をとる。口縁端部に沈線を施し、外面は摩滅のため不明瞭だが、内面は見込みまで粗いミガキが密に入る。

11 は土師器皿である（写真図版 41 － 5）。

口径 13.4 ㎝、器高 1.95 ㎝をはかる。いわゆるての字状口縁皿である。法量は大きいが、形態は柱穴 S0092 出土の９に似る。

柱穴 S0107 は平安時代中期の遺構であろう。

図 68 － 12 はⅠ－ａ区の柱穴 S0100 から出土した。柱穴 S0100 は柱穴 S0092 の北東に位置する、同じく掘立柱建物１の北辺の柱穴である（図 10）。

12 は土師器皿である（写真図版 41 － 5）。

口径 11.4 ㎝、器高 1.4 ㎝をはかる。ての字状口縁皿である。11 や、柱穴 S0092 出土の９に似ており、

同時期のものであろう。

図68－13､281はⅠ－a区の柱穴S0091から出土した。柱穴S0091は柱穴S0092の北に位置する、同じく掘立柱建物1の柱穴である（図10）。

13は黒色土器B類椀の底部である（写真図版41－5）。

高台径10.9㎝をはかり、かなり大形の椀と推測される。内面見込みにミガキが認められることと、法量から、平安時代中期のものと思われる。

281は写真でのみ掲載したが、同じく柱穴S091から出土した（写真図版41－5）。

土師器甕口縁部である。小片だが、13と時期を同じくする。

図68－14はⅠ－a区の柱穴S0301の底部から出土した。

柱穴S0301は掘立柱建物1より南に位置する小形の遺構だが、深さや、完形に近い土器が埋納された状況で出土したことから柱穴と考えられる（図11）。

14は土師器杯である（写真図版41－1）。

約4分の3が残存する。口径14.7㎝、器高2.6㎝をはかる。口縁部は外方につまみ出す。内外面とも橙色を呈する。平安時代中期と思われる。

図68－15・16はⅠ－a区東半の東部南端にある井戸S0142から出土した（図11）。

15は須恵器杯身である。

口径14.0㎝、残存高2.7㎝をはかる。たちあがりは短く内傾し、受部は水平にのびる。

16は須恵器杯蓋である。

口径11.8㎝、残存高3.8㎝をはかる。天井部とたちあがりの稜線は消滅し、口縁端部は丸い。

15と16は共に古墳時代後期後半である。

図68－17はⅠ－a区の土坑S0167から出土した。土坑S0167は掘立柱建物1や南北溝群と重複する南北方向の長方形の土坑である（図12）。

17は土師器椀である（写真図版41－5）。

口径15.2㎝、高台径7.0㎝、器高5.8㎝をはかる。口縁端部はつまみあげ、高台は外に張り出す。高台断面は長方形となる。深い椀形を呈する。外面は摩滅のため調整が不明瞭だが、ナデののちミガキを施す。内面は口縁部から見込みまでミガキを密に施す。

図68－18はⅠ－a区の溝S0138から出土した。溝S0138は掘立柱建物1の北を平行に走る東西溝である（図12）。

18は黒色土器A類椀の口縁部から体部である。やや浅い器形をとる。

口径13.8㎝、残存高3.8㎝をはかる。外面は摩滅のため調整が不明瞭だが、内面は体部にミガキを密に施す。

図68－19はⅠ－a区の土坑S0056のやや北に位置する東西溝S0065から出土した（図9）。

19は黒色土器B類椀の底部である。

高台径7.8㎝をはかる。高台は外に張り出し、断面は四角形を呈する。内外面の見込みに細かいミガキが認められる。

図68－20はⅠ－a区の土坑S0169から出土した。土坑S0169は土坑S0056からほぼ8m東に位置する大形の土坑である（図11）。

20は土師器甕口縁部から肩部である（写真図版41－3）。

口径 14.8 ㎝、残存高 8.2 ㎝をはかる。口縁端部は平らである。外面は指オサエのちナデで、指頭圧痕が大きく残る。内面はヘラケズリのちナデである。全体に煤が付着する。

図 68 － 21 はⅠ－ａ区の柱穴 S0144 から出土した。柱穴 S0144 はⅠ－ａ区の東半南側の溝群付近にある柱穴である（図９）。

21 は土師器椀である（写真図版 41 －２）。

約２分の１残存する。口径 11.8 ㎝、高台径 6.2 ㎝、残存高 4.2 ㎝をはかる。口縁端部が丸く膨らむが、底部は薄い。高台は大きく外に張り出す。外面には粘土紐の接合痕が残る。内外面とも橙色を呈する。

17 から 21 などⅠ－ａ区の東半で出土した遺物は、平安時代前期後半から中期初めにおさまる。

図 69 － 22・23 はⅠ－ｂ１区の井戸 S0337 から出土した遺物である。

井戸 S0337 はⅠ－ｂ１区の中央南端で検出した長円形の遺構で、深さがあるので井戸になると思われる（図 14）。

22 は井戸 S0337 の最下部から出土したが、土坑 S0412 から出土した破片に接合した。

22 は弥生土器壺である（写真図版 42 －１）。

全体の約３分の２が残る。口径 10.4 ㎝、底径 4.2 ㎝、器高 15.6 ㎝をはかる。長胴形の器形をとる。口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は丸くおさめる。外面はナデで仕上げられるが、底部と体部の境には成形の際の指頭圧痕が残る。内面は、粘土紐を積み上げケズリやナデで仕上げようとしたが、口径が小さいため手が入りきらなかったのか、粘土紐の接合痕や指頭圧痕が明瞭に残る。

内外面とも浅黄橙色を呈する。外面には黒斑がみられる。弥生時代後期新相の壺であろう。

23 は弥生土器甕の口縁部である。

口縁部が約２㎝と浅い。口径 26.6 ㎝、残存高 3.0 ㎝をはかる。小片で摩滅のため調整は不明である。黄灰色を呈する。弥生時代後期である。

従って、井戸 S0337 は弥生時代後期の遺構と考える。

図 69 － 24 はⅠ－ｂ１区の土坑状変形 S0321 から出土した。土坑状変形 S0321 はⅠ－ｂ１区東端中央に位置する長円形の土坑で、地震によって変形した土坑である（図 13）。

24 は弥生土器壺底部である（写真図版 42 －２）。

底径 7.2 ㎝、残存高 6.0 ㎝をはかる。全体に摩滅が著しく調整は不明である。橙色を呈する。弥生時代前期から中期のものである。

図 69 － 25 はⅠ－ｂ１区の第２層から出土した。

25 はサヌカイト製の有茎石鏃である（写真図版 56 －１）。

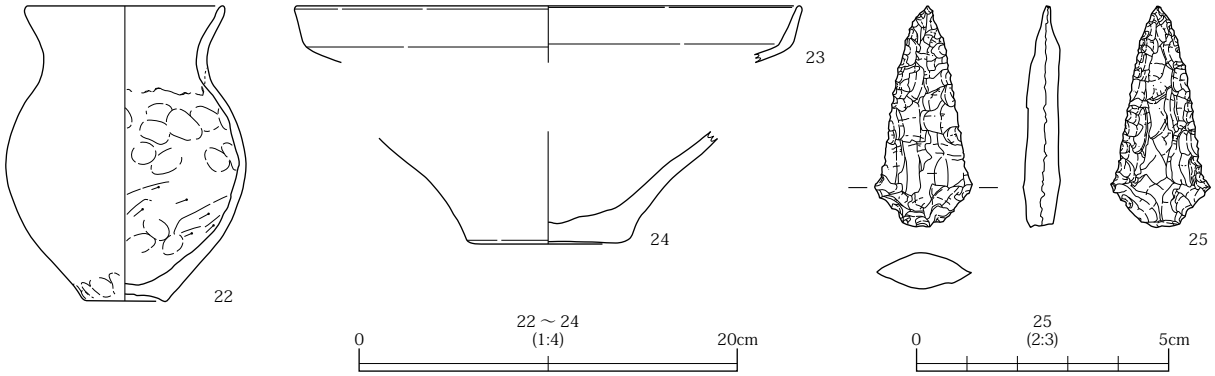


図 69　Ⅰ－ｂ１区遺構・第２層出土遺物実測図

長さ 4.35 ㎝、幅 2.0 ㎝、厚さ 0.7 ㎝、重さ 4.8 ｇをはかる。両側の刃部が非常に細かく調整されており、使用痕はほとんど認められない。弥生時代の石鏃であろう。

Ｉ－ｂ１区の遺構、包含層から出土した遺物は、弥生時代後期から古墳時代初めに限定される。

図 70 － 26 から 36 はＩ－ｃ２区の遺構から出土した遺物である。

26・27 はＩ－ｃ２区の土坑 S0325 から出土した。土坑 S0325 はＩ－ｃ２区の南東端にあり、Ｉ－ｂ１区にもまたがる（図 17）。風倒木痕である可能性が高い。

26 は弥生土器甕である（写真図版 42 － 4）。

口径 13.5 ㎝、底径 3.0 ㎝、器高 24.8 ㎝をはかる。口縁部は短く外反し、口縁端部は平らである。体部は最大径が上半にあり、体部下半から底部にかけて急激にすぼまる器形をとる。体部外面には斜め方向の平行タタキを施す。体部内面は横方向の板状ナデが認められる。口縁部、体部内外面ともに煤が付着し、使用痕跡が認められる。弥生時代後期の甕である。

27 は弥生土器甕の底部である。

底径 4.3 ㎝、残存高 4.6 ㎝をはかる。摩滅や剥離が著しいが、外面にわずかに平行タタキの痕跡が認められるので、26 と同器形の甕になるだろう。橙色からにぶい黄橙色を呈する。

図 70 － 28・29 はＩ－ｃ２区の土坑 S0825 から出土した。土坑 S0825 はＩ－ｃ２区の中央に位置する長方形で、浅い土坑である（図 15）。

28 は土師器杯である（写真図版 42 － 6）。

口径 11.8 ㎝、器高 4.0 ㎝をはかる。口径に比して器高が浅く、口縁部も短くわずかに外反する。ナデで仕上げられるが、やや粗く外面には粘土紐の接合痕や指頭圧痕が認められる。

29 は土坑 S0825 出土の須恵器高杯脚部である。

底径 8.6 ㎝、残存高 5.1 ㎝をはかる。杯部は欠損する。裾部は厚く折り返し、３方向に長方形の透かしをもつ。古墳時代中期の高杯である。

図 70 － 30 はＩ－ｃ２区の風倒木痕 S0837 から出土したが、土坑 S0825 から出土した破片とも接合した。風倒木痕 S0837 はＩ－ｃ２区の北側にある。（図 18）。

30 は土師器壺の体部で、口縁部と底部は欠損する（写真図版 42 － 5）。

体部最大径 20.9 ㎝、残存高 13.4 ㎝をはかる。体部下半に最大径をもつ下膨れの球形の器形である。外面はミガキ、内面はナデで仕上げられるが、内面には粘土紐の接合痕が数段にわたって認められる。浅黄橙色から黄灰色を呈する。外面の相対する箇所に黒斑が、また、内面全体も炭化物が付着する。布留式の壺であろうか。

図 70 － 31 はＩ－ｃ２区の土坑 S0822 から出土した。土坑 S0822 はＩ－ｃ２区の南西に位置する長円形の土坑である（図 19）。

31 は弥生土器高杯の脚部である。弥生時代後期である。

杯部と台部は欠損する。残存高 8.8 ㎝をはかる。

中空で外面はミガキで仕上げられる。脚部には上下２段にわたって、直径約 1.0 ㎝の穴が３方向に穿孔される。台部の上方にも１箇所穿孔が認められ、裾部にも３方向に孔があった可能性がある。灰白色を呈する。

図 70 － 32 は土坑 S0835 から出土した（図 16）。土坑 S0835 はＩ－ｃ２区の北西部、土坑 S0825 の北西に位置する円形の土坑である。

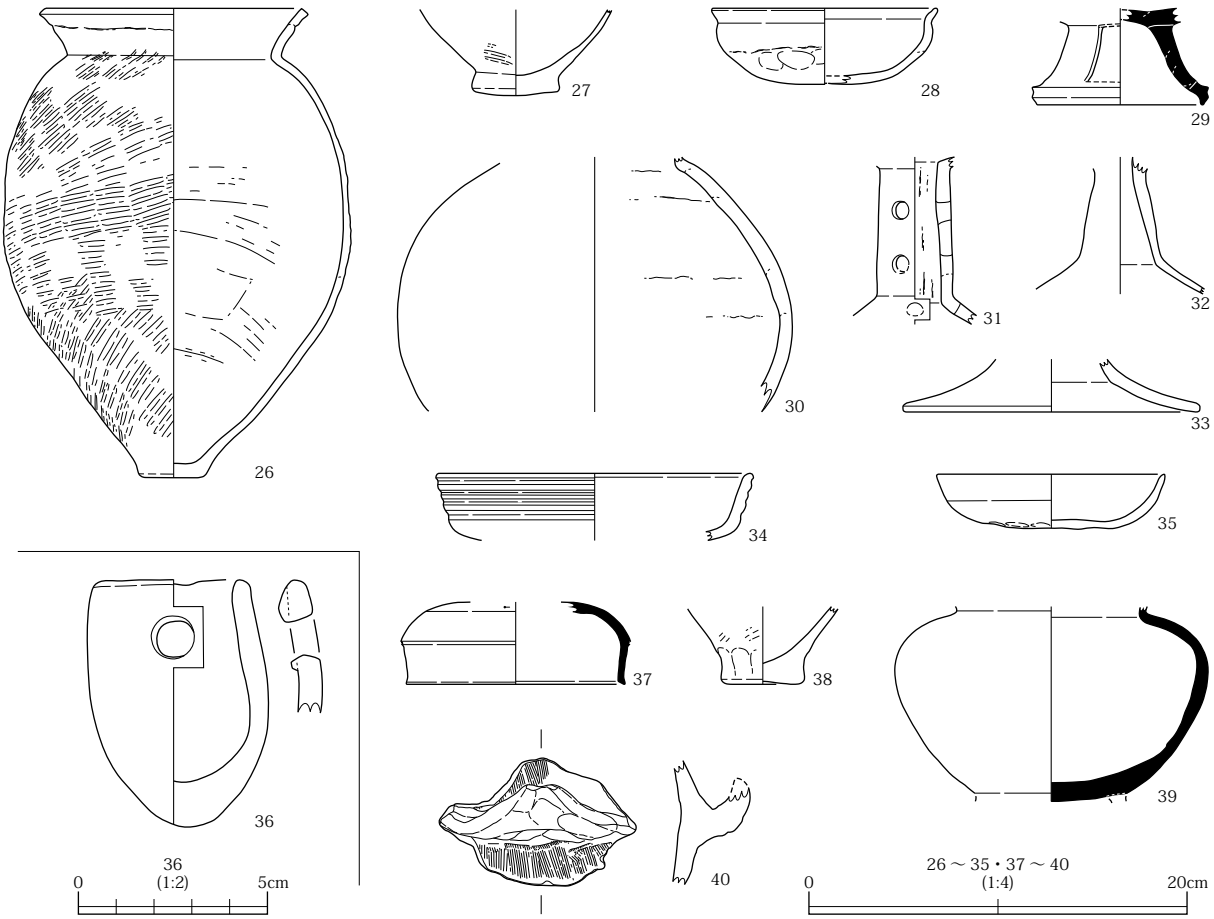


図 70　Ⅰ－ｃ２区遺構・第２層出土遺物実測図

32 は土師器高杯脚部である。

杯部と裾部は欠損する。残存高 7.3 ㎝をはかる。摩滅が著しく、調整は不明である。橙色を呈する。

図 70 － 33 は土坑 S0831 から出土した。土坑 S0831 はⅠ－ｃ２区の南西部に位置する大形の土坑である（図 19）。

33 は土師器高杯裾部である。

杯部と脚部は欠損する。底径 15.4 ㎝、残存高 2.8 ㎝をはかる。摩滅が著しく、調整は不明である。灰黄褐色からにぶい黄橙色を呈する。

31 から 33 は弥生時代後期から古墳時代初めの高杯であり、土坑 S0822、土坑 S0835、土坑 S0831 の順に古くなると考えられる。

図 70 － 34 は土坑 S0855 －ｂと土坑 S0823 から出土した遺物が接合した。土坑 S0855 －ｂ、土坑 S0823 はⅠ－ｃ２区の南西部に位置する土坑である（図 19）。

34 は弥生土器高杯杯部である。

口径 16.6 ㎝、残存高 3.5 ㎝をはかる。杯部は垂直よりわずかに外方に開き、外面は凹線を４条巡らす。焼成時の黒斑が認められる。

図 70 － 35 は土坑 S0841 から出土した。土坑 S0841 はⅠ－ｃ２区の北部に位置する土坑である（図 18）。

35 は土師器杯である（写真図版 42 －３）。

口径 12.0 ㎝、器高 2.9 ㎝をはかる。ほぼ完形である。口縁端部はつまみ上げ、全体をナデにより仕

上げる。橙色から浅黄色を呈する。

図 70 － 36 はＩ－ｃ２区の土坑 S0839 から出土した。土坑 S0839 はＩ－ｃ２区中央にある土坑で、溝 S0861 を切る（図 18）。

36 は蛸壺で、ほぼ完形である（写真図版 58 －２）。

口径 3.8 ㎝、高さ 6.5 ㎝、厚さ 0.5 ～ 1.3 ㎝をはかる。手づくねで成形された素焼きの製品で、大きさからみて飯蛸壺であろう。１方向に直径 1.0 ㎝の穴を穿つ。浅黄橙色を呈する。底部が丸い小型蛸壺Ｂに分類され、弥生時代中期末から後期初めのものだろう。

蛸壺は他にＩ－ｃ区の土坑 S0610 からも数点出土しており、東にある三宅西遺跡などでも出土が確認されている。漁労具が出土するのは興味深いが、当調査で製塩土器はみつかっていない。

図 70 － 37 から 40 はＩ－ｃ２区の第２層から出土した。

37 は須恵器杯蓋と思われる。

口径 11.6 ㎝、器高 4.3 ㎝をはかる。天井部と口縁部との稜線はわずかに残り、たちあがりはやや内側にすぼまる。口縁端部は内傾する。天井部は丸みを帯びる。焼成がやや不良で青灰色から紫灰色を呈し、天井部には還元焔のあたり方によるものなのか、黒くなっている。

38 は弥生土器甕底部である。

底径 3.6 ㎝、残存高 4.1 ㎝をはかる。摩滅や剥離が著しいが、外面にわずかにタタキの痕跡が認められる。

39 は須恵器短頸壺の体部であろう（写真図版 42 －７）。

体部最大径 15.4 ㎝、残存高 10.3 ㎝をはかる。口縁部及び高台を欠損する。器形がややいびつで、口縁部や底部と高台の境界が水平でなく、一方に傾く。壺Ｌで奈良時代前期のものと思われる。

40 は土師器鍋である（写真図版 42 －７）。

残存高 6.7 ㎝、取っ手部の厚み 1.5 ㎝をはかる。鍋の外面はタテハケを施し、内面はハケののちナデで仕上げられている。にぶい黄橙色から浅黄色を呈する。外面のタテハケなどから中河内から南河内でよくみられる、在地産の鍋の一部と思われる。

Ｉ－ｃ２区第２層の遺物は、弥生時代中期から奈良時代までの広い時期のものが含まれ、土師器、須恵器、土製品があるなど器種や種類も様々である。長期間にわたって人が生活していた地区と言えるだろう。

（２）中央域東半北部（Ｉ－ａ区西半、Ｉ－ｄ１区、Ｉ－ｄ２区）の遺物（図 71 ～ 76、写真図版 40、41、50、51、55 ～ 58）

図 71 － 41 から 43 は掘立柱建物２の柱穴 S0894 から出土した。柱穴 S0894 は掘立柱建物２の南東隅の柱穴である（図 21）。

41 は土師器椀である（写真図版 50 －１）。

口径 13.8 ㎝、高台径 7.4 ㎝、器高 4.4 ㎝をはかる。口径、器高に比して高台径が大きく、高台は大きく外に張り出し、口縁端部は丸みを帯びる。口縁部内面は沈線をもつ。全体をナデとヨコナデで仕上げる。浅黄橙色から灰白色を呈する。

42 は土師器皿である。

口径 10.8 ㎝、器高 1.9 ㎝をはかる。底部から口縁部が直線的にたちあがり、口縁端部は細くつまみ

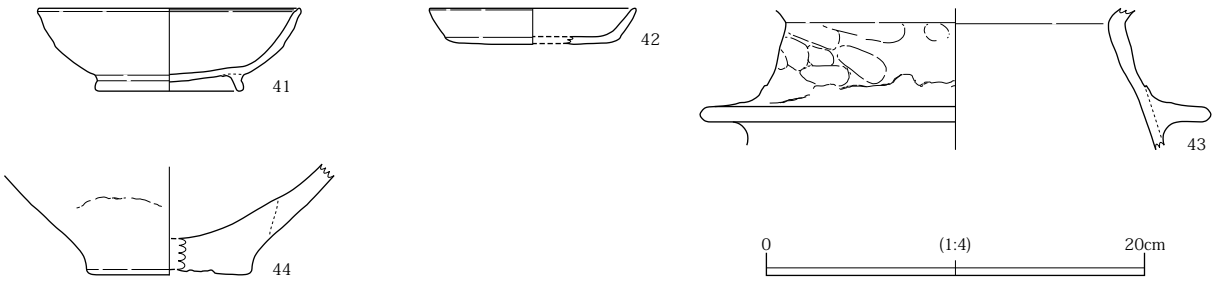


図 71　Ⅰ－ｄ１区遺構出土遺物実測図

あげる。橙色から灰白色を呈する。

43 は土師器羽釜である（写真図版 50 － 1 ）。

口縁部及び体部から底部は欠損する。鍔径 27.0 ㎝、残存高 7.5 ㎝をはかる。鍔の貼り付けにはヨコナデを施す。鍔より上には指頭圧痕が強く残る。鍔や内面には煤が付着し、日常使用されていた土器だったと推測される。赤橙色から明赤褐色を呈する。

柱穴 S0894 で出土した遺物から判断して、掘立柱建物２は平安時代前期後半から中期前半の遺構と考えられる。

図 71 － 44 は風倒木痕 S0911 から出土した。風倒木痕 S0911 はⅠ－ｄ１区の中央よりやや北寄りに位置する、大形の不定円形の地形で、風倒木痕と思われる（図 20）。

44 は弥生土器壺底部である（写真図版 50 － 1 ）。

底径 8.0 ㎝、残存高 5.9 ㎝をはかる。摩滅のため調整は不明だが、外面はナデの痕跡が認められる。赤橙色からにぶい黄橙色を呈する。

図 72 － 45 から 49 はⅠ－ａ区の西半にある土坑 S0205 から出土した。土坑 S0205 は楕円形の土坑で、中から多数の土器が散乱した状態で出土した（図 26）。

45 は土師器小型鉢である（写真図版 40 － 1 ）。

ほぼ完形である。口径 10.9 ㎝、器高 6.2 ㎝をはかる。摩滅や剥離が著しいが、外面にわずかにハケの痕跡が認められ、ハケのちナデで仕上げられている。器壁が 0.3 ㎝前後と薄く、内外面とも橙色から浅黄橙色を呈する。

46 は土師器小型器台である（写真図版 40 － 1 ）。

ほぼ完形である。口径 9.4 ㎝、底径 11.6 ㎝、器高 8.3 ㎝をはかる。摩滅や剥離が著しいが、内外面ともナデできれいに仕上げられている。脚部下半にハケ状の痕跡が認められる。脚部は３方向に透かしをもつ。内外面とも橙色から浅黄橙色を呈する。

47 は土師器小型器台である（写真図版 40 － 1 ）。口縁部は欠損する。

底径 8.4 ㎝、残存高 8.0 ㎝をはかる。46 に比べると、杯部が深く脚部が短い。外面はミガキののちナデで、内面はハケのちナデで仕上げられている。脚部は３方向に透かしをもつが、穿孔位置は不均等である。内外面ともにぶい橙色を呈する。

48 は土師器小型器台脚部である（写真図版 40 － 1 ）。杯部は脚部との接合部からはずれてしまっている。

底径 11.4 ㎝、残存高 7.05 ㎝をはかる。外面はタテ方向のミガキもしくはハケのちナデで、内面はナデで仕上げられている。脚部は３方向に透かしをもつ。内外面とも橙色からにぶい橙色を呈する。

45 から 48 は胎土も精良で、丁寧なつくりである。

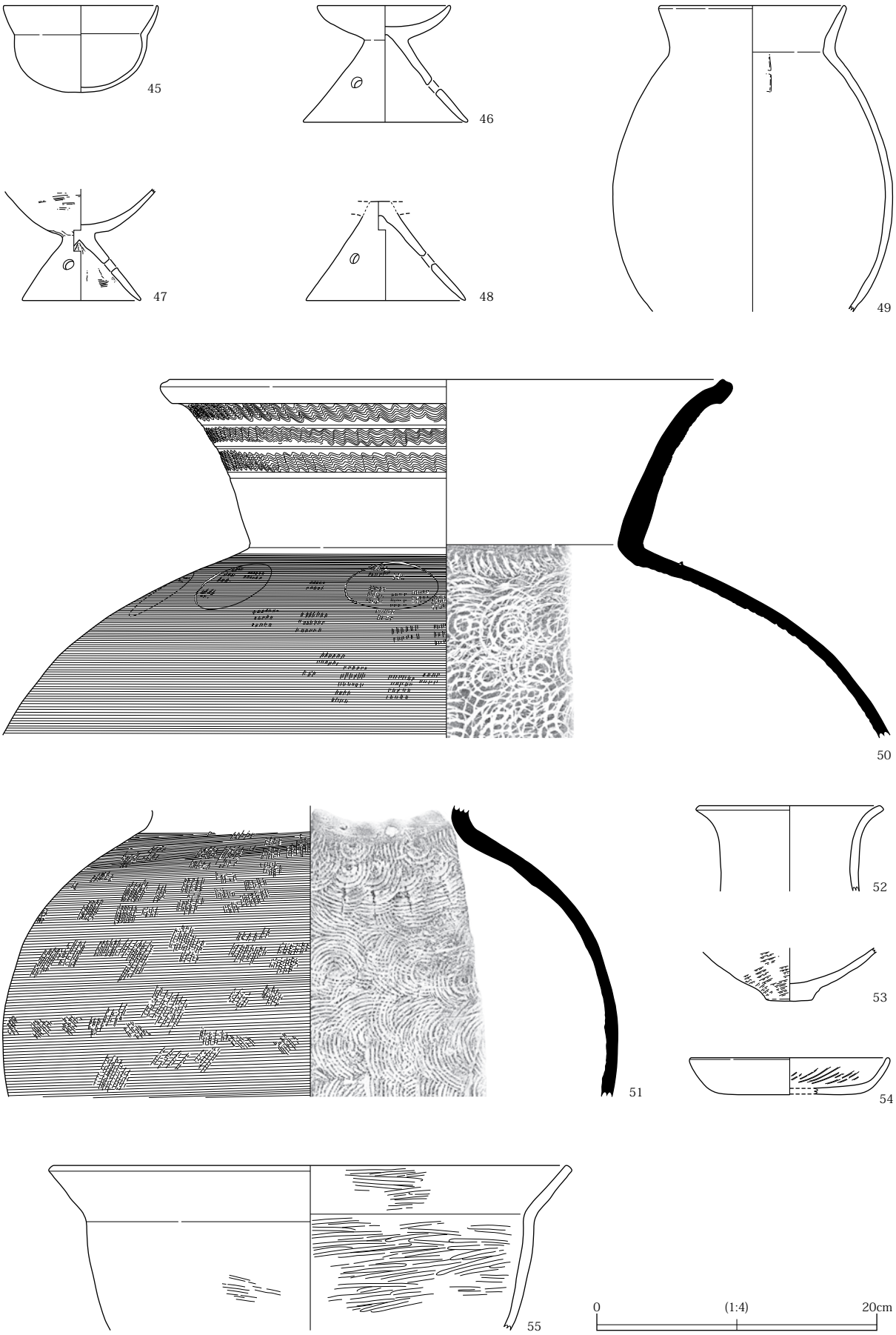


図 72　Ⅰ－a 区西半遺構出土土器実測図

49 は土師器甕である（写真図版 40 － 3）。

口径 13.2 ㎝、残存高 21.8 ㎝をはかる。口縁部はわずかに外反する。体部は長胴形の器形をなす。摩滅や剥離が著しいが、外面にわずかにケズリの痕跡が認められ、ナデで仕上げられている。内面は口縁部と体部の接合部に横方向のヘラ状痕跡が認められるが、全体はナデで仕上げられている。淡赤橙色から赤橙色を呈する。

土坑 S0205 から出土した土器は、いずれも古墳時代前期末から中期初めの様相を示す。古墳時代の資料としては、今回の調査区内では最古に属する。出土状況からも、一括性の高い資料といえる。

図 72 － 50・51 は Ⅰ － a 区の西半にある土坑 S0202 から出土した。土坑 S0202 は円形の大形の土坑で、中から須恵器の甕が破片の状態で出土した（図 26）。接合の結果、須恵器甕が少なくとも 3 個体以上あることが判明した。

50 は須恵器甕の口縁部から肩部である（写真図版 40 － 2）。

同一個体の体部片も一部出土しているが、全器形を復元できるものではない。

口径 39.6 ㎝、頸部径 28.0 ㎝、残存高 25.6 ㎝をはかる。胴部最大径は 65 ～ 70 ㎝になるか。灰白色の胎土だが、体部外面や口縁部など広い範囲に、焼成時に生じた自然釉がかかって淡緑色を呈する。焼成は良好で固く締まる。

口縁部は折り返すが、端部は肥厚せず、平らである。口縁部にはおよそ 2.0 ㎝間隔で沈線を 3 条巡らし、その間に 7 条 1 単位の波状文を施す。肩部外面は平行タタキののち、カキ目を施す。頸部には焼成時に他の土器もしくは当て具をおいたものか、大きな円形の溶着痕が 4 か所に残る。内面は同心円タタキを施す。

51 は須恵器甕の頸部から体部上半である。

頸部径 22.6 ㎝、胴部最大径 44.0 ㎝、残存高 20.8 ㎝をはかる。50 に比べると、口縁部の外反が緩やかで、体部はほぼ球形のやや小さい器形になると思われる。外面は格子状タタキののちカキ目を、内面は同心円タタキを施す。

50、51 以外に出土した須恵器も、体部のみであったため図化しなかったが、外面に格子状タタキ、内面に同心円タタキをもつ同時期の体部片であった。

土坑 S0202 は古墳時代後期の遺構と思われる。

図 72 － 52 は Ⅰ － a 区西半の不定形の風倒木痕 S0192 及び方形の土坑 S0187 から出土した土器が接合した（図 24・25）。

52 は弥生土器壺口縁部から頸部である（写真図版 41 － 4）。

口径 13.0 ㎝、残存高 6.1 ㎝をはかる。口縁部は大きく外反し、口縁端部は平らである。調整は摩滅のため不明である。内外面共にわずかに横方向のミガキが認められる。外面橙色、内面灰白色を呈する。

図 72 － 53 は Ⅰ － a 区西半の土坑 S0196 から出土した（図 20）。

53 は弥生土器甕底部である。

底径 3.0 ㎝、残存高 3.8 ㎝をはかる。外面に平行タタキを施す。弥生時代後期であろう。

図 72 － 54 は Ⅰ － a 区西半の土坑 S0206 と土坑 S0279 から出土した土器が接合した（図 20・25）。

54 は土師器皿である。

口径 14.0 ㎝、器高 2.7 ㎝をはかる。全体をナデで仕上げられている。体部内面には放射線状の暗文をもつ。橙色を呈する。平城宮出土土器編年の平城Ⅲ式である。

図 72 － 55 はＩ－ａ区西半の土坑 S0199 から出土した（図 24）。

55 は土師器鉢である（写真図版 40 － 4 ）。

口径 36.6 ㎝、残存高 11.7 ㎝をはかる。口縁端部は平らで、口縁は大きく外に開く。磨滅や剥離が著しいが、内外面に横方向のミガキがみられる。

Ｉ－ａ区の遺構から出土した遺物は、51 と 54 を除くと弥生時代後期末から古墳時代前期のものとなる。

図 73 － 56 から 72 はＩ－ａ区の第２層から出土した遺物である。

56 は須恵器杯身である。

Ｉ－ａ区東半の中央から出土した。口径 13.6 ㎝、残存高 3.6 ㎝をはかる。たちあがりは短く内傾し、口縁部は反り気味に細くつまみ上げる。

57 は須恵器杯身である。

Ｉ－ａ区西半の北東隅から出土した。口径 10.6 ㎝、残存高 3.1 ㎝をはかる。56 同様、たちあがりは内傾気味だが、受部は水平にのびる。口縁端部は丸い。

58 は須恵器杯蓋である（写真図版 55 － 1 ）。

Ｉ－ａ区東半の南西隅から出土した。口径 14.8 ㎝、残存高 3.65 ㎝をはかる。天井部とたちあがりの稜線は消滅し、高さのない扁平な外形である。口縁端部は細いが、天井部は厚みがある。

56 から 58 の土器は、出土地点は異なるが、いずれも古墳時代後期の須恵器である。

59 は須恵器高杯脚部である（写真図版 55 － 1 ）。

Ｉ－ａ区西半の東中央から出土した。杯部は欠損する。底径 11.2 ㎝、残存高 7.3 ㎝、脚底径 11.6 ㎝をはかる。脚部は短く、２か所しか確認できないが本来は３方向にあると思われる、三角形の透かしが入る。端部は厚く折り返す。

60 は須恵器壺体部である。57 と同じ地区から出土した。

体部最大径 18.5 ㎝、残存高 10.8 ㎝をはかる。口縁部から頸部は欠損する。

外面は回転ヘラケズリののち、体部上半にはカキ目を施す。内面は回転ナデで仕上げられる。やや横長な器形をとる。詳細な時期は不明である。

61 は須恵器壺口縁部である（写真図版 55 － 1 ）。

Ｉ－ａ区西半の南西から出土した。口径 14.6 ㎝、残存高 5.2 ㎝をはかる。口縁部は厚く折り返す。頸部は 1.7 ㎝間隔に凸帯を巡らし､その間に７条１対の波状文を巡らす。その下にはカキ目がみられる。

62 は須恵器甕の口縁部で、小片である。

Ｉ－ａ区東半の西中央から出土した。口縁部を大きく外に開き、端部は垂直気味に折り返す。

63 は弥生土器壺の底部である。弥生時代後期である。

Ｉ－ａ区西半の東中央隅から出土した。底径 5.0 ㎝、残存高 2.7 ㎝をはかる。かなりいびつで、底面には成形時の工具痕が残る。

64 は白磁碗口縁部である。

Ｉ－ａ区東半の東中央隅から出土した。口径 15.4 ㎝、残存高 2.9 ㎝をはかる。口縁部は玉縁で、丸く折り返す。

65 は黒色土器Ａ類椀である。

Ｉ－ａ区東半の西中央隅から出土した。口径 11.4 ㎝、残存高 3.4 ㎝をはかる。小形の椀である。外

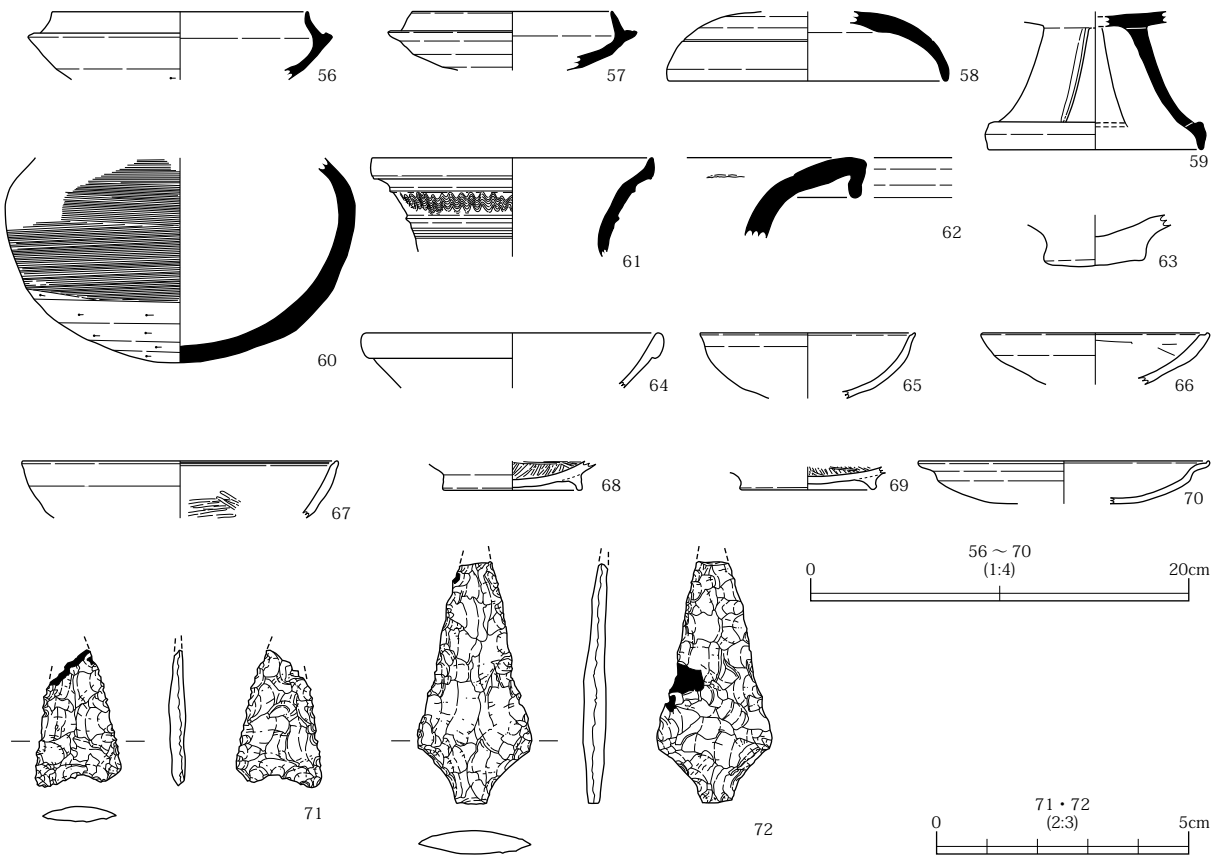


図 73　Ⅰ－a 区第２層出土遺物実測図

面に指頭圧痕が残る。ミガキなどの調整は不明である。

66 は土師器椀である（写真図版 55 － 1 ）。Ⅰ－ a 区東半の西中央隅から出土した。

口径 12.0 ㎝、残存高 2.7 ㎝をはかる。小形の椀であるが、65 に比べると浅い。内面には板やヘラ状の工具による痕が残る。煤が付着する。65 と 66 は法量が小さい。

67 は黒色土器 A 類椀である。65 や 66 と同じくⅠ－ a 区東半の西中央隅から出土した。

口径 16.6 ㎝、残存高 3.0 ㎝をはかる。口縁端部に沈線をもち、内面はミガキがわずかに認められる。

68 は黒色土器 A 類椀の底部である（写真図版 55 － 1 ）。

Ⅰ－ a 区東半の西中央隅から出土した。底径 7.2 ㎝、残存高 1.5 ㎝をはかる。高台は断面三角形で、底面見込みにまで密にミガキが施されている。

69 は黒色土器 B 類椀の底部である（写真図版 55 － 1 ）。

Ⅰ－ a 区東半の西中央隅から出土した。底径 7.0 ㎝、残存高 1.2 ㎝をはかる。高台は断面三角形で、底面見込みにまで密にミガキが施されている。

70 は土師器皿である。

Ⅰ－ a 区東半の西中央隅から出土した。口径 15.4 ㎝、残存高 2.2 ㎝をはかる。口縁端部は内側に巻き込み、段をなす、いわゆるての字状口縁皿である。

71 はサヌカイト製の凹基式無茎石鏃である（写真図版 56 － 1 ）。Ⅰ－ a 区東半の南東から出土した。先端部を欠損する。長さ 2.7 ㎝、幅 1.8 ㎝、厚さ 0.35 ㎝、重さ 1.3 g をはかる。

72 はサヌカイト製の凸基式有茎石鏃である（写真図版 56 － 1 ）。Ⅰ－ a 区東半の中央から出土した。先端部と側面の一部を欠損する。

現存長 4.6 ㎝、幅 2.35 ㎝、厚さ 0.5 ㎝、重さ 4.9 ｇをはかる。刃部にも茎部にも細かい打面調整がなされる。71 と 72 は弥生時代の遺物である。

Ｉ－ａ区の第２層から出土した遺物は、地区が広いこともあるが、弥生時代、古墳時代中期から後期、平安時代の遺物が混在している。

図 74 － 73 から 82 は溝 S0772 から出土した。

溝 S0772 はＩ－ｄ２区、Ｉ－ｃ区、Ｉ－ｅ区にまたがって検出された大溝である。Ｉ－ｄ２区の半ばまでは南北の正方位に流れ、それから南西に斜行してＩ－ｃ区を通り、Ｉ－ｃ区の西端からＩ－ｅ区にかけては東西方向の溝となる。遺物はＩ－ｃ区の一部を除いては、Ｉ－ｄ２区の南北方向から斜行して流れを変える部分に集中して出土した（図 28・29・55）。73 ～ 75、77 ～ 80、82 は近接して出土した。

73 は須恵器杯である（写真図版 51 －１・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X= － 156,040 から X= － 156,050 の間から出土した。

口径 11.9 ㎝、底径 6.0 ㎝、器高 4.5 ㎝をはかる。ほぼ完形である。成形、乾燥時に生じた歪みで、口縁部はかなりいびつである。平らな底面から、口縁部は緩やかな曲線を描いてたちあがる。底部には回転糸切り痕が観察される。灰色を呈する。杯Ａである。

74 は須恵器小形壺の体部下半から底部である（写真図版 51 －４・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X= － 156,040 から X= － 156,050 の間 から出土した。

上半は欠損する。底径 3.9 ㎝、残存高 3.8 ㎝をはかる。体部は回転ヘラケズリとナデ、底部は回転糸切り痕が観察される。青灰色から灰色を呈する。壺Ｌである。

75 は須恵器長頸壺の頸部から体部である（写真図版 51 －３・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X= － 156,040 から X= － 156,050 の間から出土した。

口縁部と底部は欠損する。体部最大径 16.0 ㎝、残存高 18.3 ㎝をはかる。頸部は口縁部に近づくにつれ、外方に開く。頸部上方に２条の凹線をもつ。肩部は丸みをもつが、体部は肩との接合部から逆くの字に

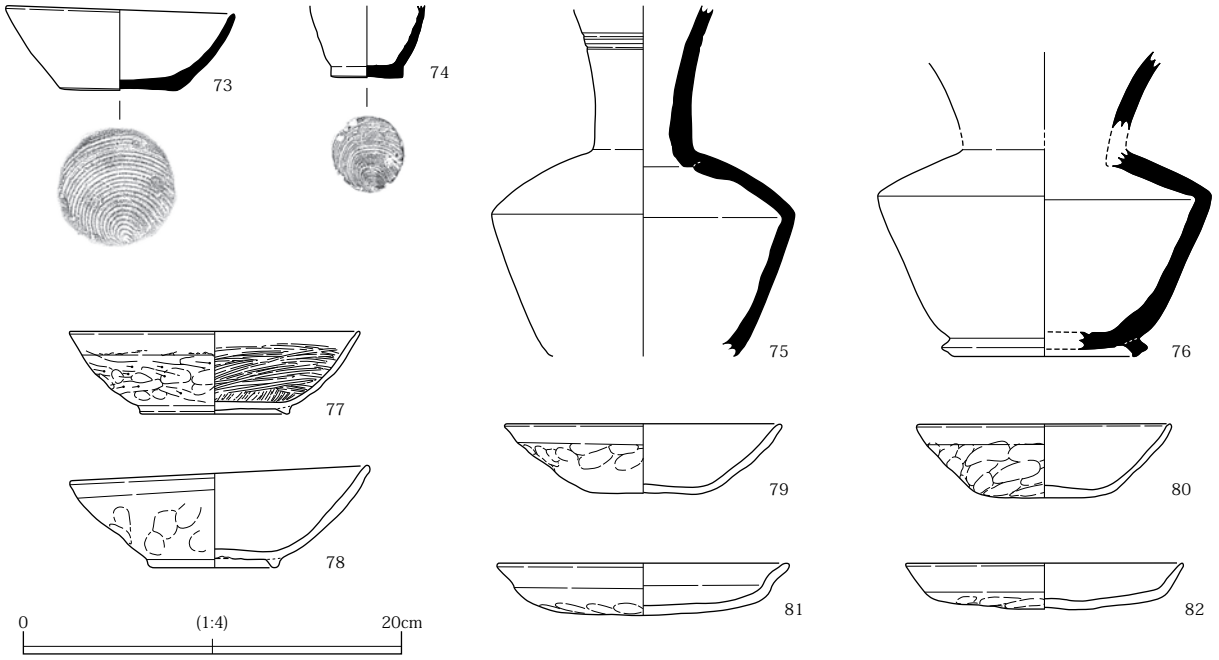


図 74　Ｉ－ｃ区、Ｉ－ｄ２区 S0772 出土土器実測図

すぼまる。頸部から肩部には自然釉がかかり、灰色から青灰色を呈する。壺Ｌである。

76 は須恵器広口壺である（写真図版 51 －２）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 の北端から出土した。

体部最大径 17.6 ㎝、高台径 9.4 ㎝、残存高 16.1 ㎝をはかる。壺Ｈである。また、肩部も丸みを帯びず直線的で、体部と約 80 度の角度で接合する。高台は断面四角形で、外に大きく張りだす。75 よりも胎土が緻密で精良、色調もオリーブがかった灰白色である。外面全体に薄く自然釉がかかる。

77 は黒色土器Ａ類椀である（写真図版 51 －７・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X=－ 156,040 から X=－ 156,050 の間から出土した。

口径 15.2 ㎝、高台径 7.6 ㎝、器高 4.4 ㎝をはかる。口縁部は細くつまみあげ、端部は丸くおさめる。高台は断面三角形をなす。高台径が大きい。体部外面はナデとケズリを、内面はミガキを施す。外面はにぶい黄橙色、内面は黒褐色を呈する。ミガキが体部内面及び見込みに密に入る。

78 は土師器椀である（写真図版 51 －５・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する地点から出土した（図 28）。

全体の４分の３以上残存する。口径 15.7 ㎝、高台径 6.6 ㎝、器高 5.4 ㎝をはかる。体部の深さが均等でなく、ややいびつである。全体にナデで仕上げられるが、体部外面には指頭圧痕が残る。高台は断面三角形である。にぶい赤褐色から明赤褐色を呈する。

77 よりやや深い椀形をとるが、ほぼ同時期と考えられる。

79 は土師器杯である（写真図版 51 －６・９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X=－ 156,040 から X=－ 156,050 の間から出土した。

約３分の２残存する。口径 14.6 ㎝、器高 3.7 ㎝をはかる。深い椀形をとる。全体にナデで仕上げられるが、体部外面には指頭圧痕が残り、調整が粗雑である。にぶい黄橙色からにぶい橙色を呈する。深い椀形をなす。

80 は土師器杯である（写真図版 51 －９）。

Ｉ－ｄ２区で溝 S0772 が屈曲する X=－ 156,040 から X=－ 156,050 の間から出土した。

約２分の１残存する。口径 13.4 ㎝、器高 3.9 ㎝をはかる。深い椀形をとる。全体にナデで仕上げられるが、体部外面下半には指頭圧痕が残る。底部が厚い。にぶい黄橙色から灰黄色を呈する。79 に近い器形をとる。

81 は土師器皿である（写真図版 51 －９）。

Ｉ－ｃ区で溝 S0772 の X=－ 156,080 から X=－ 156,090 の間から出土した。

約４分の３残存する。口径 15.2 ㎝、器高 2.75 ㎝をはかる。口縁部は段をなして外に開くが、端部は中に巻き込まない。全体がナデ調整であるが、底部外面には指頭圧痕が残る。明赤褐色から灰黄色を呈する。外面はにぶい黄橙色、内面は黒褐色を呈する。

82 は土師器皿である（写真図版 51 －８・９）。

Ｉ－ｄ２区の流れの向きを変える地点、X=－ 156,040 から X=－ 156,050 の間から出土した。

ほぼ完形である。口径 14.6 ㎝、器高 2.5 ㎝をはかる。口縁部は垂直気味に外に開くが、端部は細くつまみあげる。全体がナデ調整であるが、底部外面には指頭圧痕が残る。全体に煤が付着するが、にぶい黄橙色から灰黄色を呈する。

溝 S0772 から出土する土器は、奈良時代、８世紀後半から平安時代、10 世紀半ばとやや時期幅があ

る遺物が出土するが、最も多いのは９世紀代の遺物である。溝 S0772 は奈良時代に開削され、平安時代中期初めまで連続して機能し、廃絶した遺構と言えるだろう。

図 75 － 83・84 はＩ－ｄ２区の土坑 S0917 から出土した。土坑 S0917 はＩ－ｄ２区の南中央に位置する大形の浅く広がる土坑である（図 20）。

83 は土師器高杯杯部である。

脚部から下は欠損する。口径 11.8 ㎝、残存高 4.9 ㎝をはかる。口径が小さく、深い椀形をなす。摩滅や剥離のため調整は不明である。にぶい橙色を呈する。

84 は土師器甕口縁部である（写真図版 50 － 5）。

口径 15.8 ㎝、残存高 5.0 ㎝をはかる。口縁部は鋭くくの字に外反し、口縁部はやや内側に巻き込む。体部外面には細かい平行タタキが、内面にはヘラケズリが認められる。全体に煤が付着する。にぶい黄褐色を呈する。生駒西麓産の胎土である。庄内式期である。

図 75 － 85・97 はＩ－ｄ２区の土坑 S1070 から出土した。土坑 S1070 はＩ－ｄ２区の北西に位置する長方形の土坑で、中から一定量の土器が出土したが、破片のため図化できたのは１点のみである（図 34）。

85 は土師器高杯杯部である（写真図版 50 － 5）。

脚部から下は欠損する。口径 20.8 ㎝、残存高 7.3 ㎝をはかる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。杯部は深く底にかけて急激にすぼまる。摩滅や剥離のため調整は不明である。にぶい黄橙色から灰黄色を呈する。図化できなかったが、他にも同じ時期の土師器高杯が出土している。

97 は土製品の土玉である（写真図版 58 － 1）。

長径 3.1 ㎝、短径 2.9 ㎝、厚さ 3.1 ㎝をはかる。ほぼ球形で、中心に直径 0.4 ㎝の孔が貫通する。焼成前の穿孔である。橙色を呈する。

土坑 S1070 は古墳時代中期の遺構であろう。東に位置する三宅西遺跡でも、古墳時代の遺構面包含層から布留式Ⅲ段階の土器や蛸壺と共に土錘が出土している。

図 75 － 86 はＩ－ｄ２区の土坑 S0931 から出土した。土坑 S0931 はＩ－ｄ２区の南西隅に位置する楕円形の土坑である（図 20）。

86 は土師器小形丸底壺である。

いびつな器形をとる。口径 9.2 ㎝、器高 8.8 ㎝をはかる。口縁部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめる。杯部は深く底にかけて急激にすぼまる。摩滅や剥離のため調整は不明である。にぶい黄橙色からにぶい橙色を呈する。

図 75 － 87 はＩ－ｄ２区の土坑 S0932 から出土した。土坑 S0932 は、Ｉ－ｄ２区の南西隅に位置する土坑 S0924 の中にある小形の円形の土坑である（図 20）。

87 は土師器杯もしくは高杯杯部であろう（写真図版 50 － 5）。

底部を欠損する。口径 12.8 ㎝、残存高 3.8 ㎝をはかる。器壁が厚く、口縁部は細くつまみあげる。摩滅のため調整は不明だが、体部外面にはヘラケズリのような痕跡が残る。そのあと全体をナデで仕上げるか。にぶい黄橙色を呈する。古墳時代中期のものである。

図 75 － 88 はＩ－ｄ２区の土坑 S1094 から出土した。土坑 S1094 はＩ－ｄ２区の西側中央、溝 S0772 の西に位置する小形の円形の土坑である（図 20）。

88 は須恵器壺口縁部である（写真図版 50 － 5）。

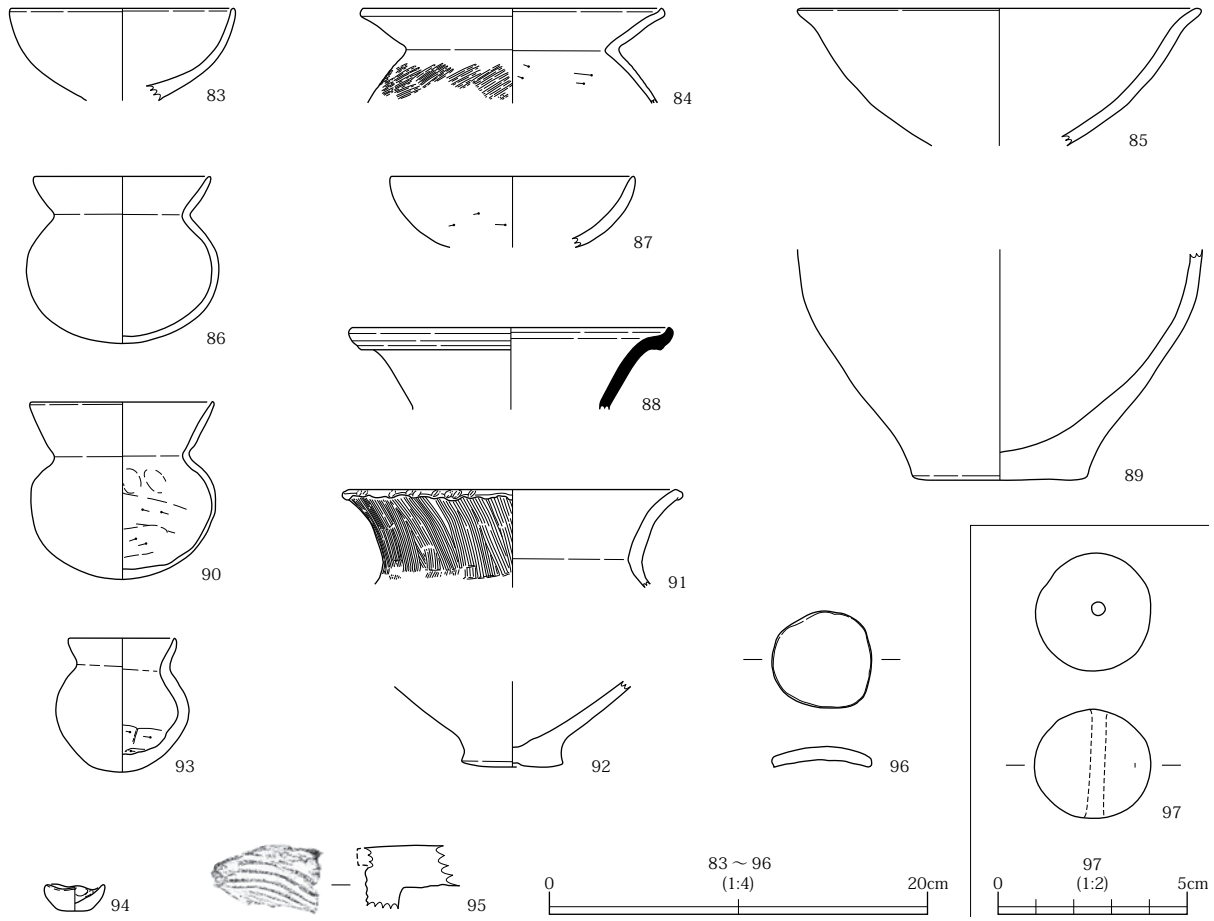


図 75　Ⅰ－ｄ２区遺構出土遺物実測図

肩部から下を欠損する。口径 16.8 ㎝、残存高 4.3 ㎝をはかる。口縁部は外に折り返して厚みをもち、中は段をなす。灰色を呈する。

図 75 － 89 はⅠ－ｄ２区の風倒木痕 S1113 から出土した。風倒木痕 S1113 はⅠ－ｄ２区の北東部に位置する（図 20）。

89 は弥生土器壺底部である（写真図版 50 － 5）。

口縁部から体部上半を欠損する。底径 9.2 ㎝、残存高 12.2 ㎝をはかる。摩滅のため調整は不明である。底部近くに焼成時の黒斑をもつが、全体は浅黄橙色からにぶい黄橙色を呈する。

図 75 － 90・93・94 はⅠ－ｄ２区の南東端に位置する、井戸 S0977 中層から出土した。井戸 S0977 は大形の円形を呈し、深さも約 1 mある。中層から複数の土器が出土した（図 30）。

90 は土師器小型丸底壺である（写真図版 50 － 2）。

ほぼ完形である。口径 9.6 ㎝、器高 9.4 ㎝をはかる。全体に摩滅のため調整は不明瞭だが、外面はナデ、体部内面はヘラケズリののちナデを施しているようである。胎土も精良で器壁も薄く仕上げられている。内面はにぶい橙色、外面は灰白色を呈する。

93 は土師器小型丸底壺である（写真図版 50 － 4）。

ほぼ完形である。口径 5.6 ㎝、器高 7.1 ㎝をはかる。口径や器高の法量に対して、器壁に厚みがあるのが特徴的である。調整も外面はナデ、内面は横方向のヘラケズリののちナデで、丁寧に仕上げられている。内外面とも黄灰色を呈する。

口縁部が体部に対して短いなど、90 よりは若干新しくなるかもしれない。

94 は土師器のミニチュア土器である（写真図版 50 － 3）。

口径 3.0 ㎝、底径 1.5 ㎝、器高 1.4 ㎝をはかる。皿、もしくは蓋であると考えられ、ほぼ完形である。手づくねで成形されており、内面には指頭圧痕が残る。外面はナデで仕上げられている。内外面とも灰黄色で、底部には一部黒斑が認められる。

出土土器の時期から、井戸 S0977 は古墳時代中期の遺構であろう。

図 75 － 91・92 は Ⅰ － d ２区の土坑 S0941 から出土した。土坑 S0941 は Ⅰ － d ２区の南東に位置する不定形の土坑である（図 20）。

91 は弥生土器壺口縁部である（写真図版 50 － 5）。

体部から下を欠損する。口径 17.2 ㎝、残存高 5.2 ㎝をはかる。口縁部にはキザミ目をもち、外面はタテハケを施す。内面は不明瞭だが、おそらくタテヘラケズリののちヨコハケと思われる。にぶい黄橙色を呈する。

92 は弥生土器壺の底部である。

口縁部と体部は欠損する。底径 5.3 ㎝、残存高 4.5 ㎝をはかる。底部から体部は大きく球形に広がるようである。摩滅や剥離が著しく、調整は不明である。にぶい橙色を呈する。

土坑 S0941 は、弥生時代後期の遺構の可能性が高い。

図 75 － 95 は Ⅰ － d ２区の井戸 S0985 から出土した。井戸 S0985 は Ⅰ － d ２区の南西端に位置する（図 32）。

95 は軒平瓦である（写真図版 57 － 4）。

瓦当部がわずかに残るのみである。残存長 5.0 ㎝、残存幅 5.7 ㎝、瓦当部の厚さ 2.0 ㎝をはかる。瓦当部には曲線が７、８本みられ、水波文と推測される。灰色から灰白色を呈する。

井戸 S0985 は中世後半以降の比較的新しい遺構と思われる。

図 75 － 96 は Ⅰ － d ２区の土坑 S0937 から出土した。土坑 S0937 は Ⅰ － d ２区の南西部に位置する土坑である（図 32）。

96 は土製品の土製円盤である（写真図 58 － 1）。

長径 5.3 ㎝、短径 5.1 ㎝、厚さ 0.7 ㎝をはかる。ほぼ円形で、土師質の甕や壺の体部片を転用して製作された円盤と思われる。橙色を呈する。

97 は土坑 S1070 からの出土であり、前述した（153 頁）。

図 75 に掲載した Ⅰ － d ２区の遺構は、95 以外は弥生時代から古墳時代中期のものである。比較的古い時期のものが多い。

図 76 － 98 から 107 は Ⅰ － d １区、Ⅰ － d ２区の第２層から出土した。

98 は Ⅰ － d ２区の北西端から出土した。

土師器杯である。口径 14.0 ㎝、器高 3.4 ㎝をはかる。底部が若干内側に盛り上がる。口縁端部は沈線をもつ。器壁は厚い。内外面とも黄橙色を呈する。

99 は Ⅰ － d ２区の南端中央から出土した。

土師器甕の口縁部から肩部である。口径 14.0 ㎝、残存高 6.0 ㎝をはかる。口縁部はくの字に外反し、口縁端部は平らである。体部外面は細い平行タタキ、内面は横方向のヘラケズリを施す。庄内式併行期の甕である。

100 は Ⅰ － d ２区の南東部から出土した。

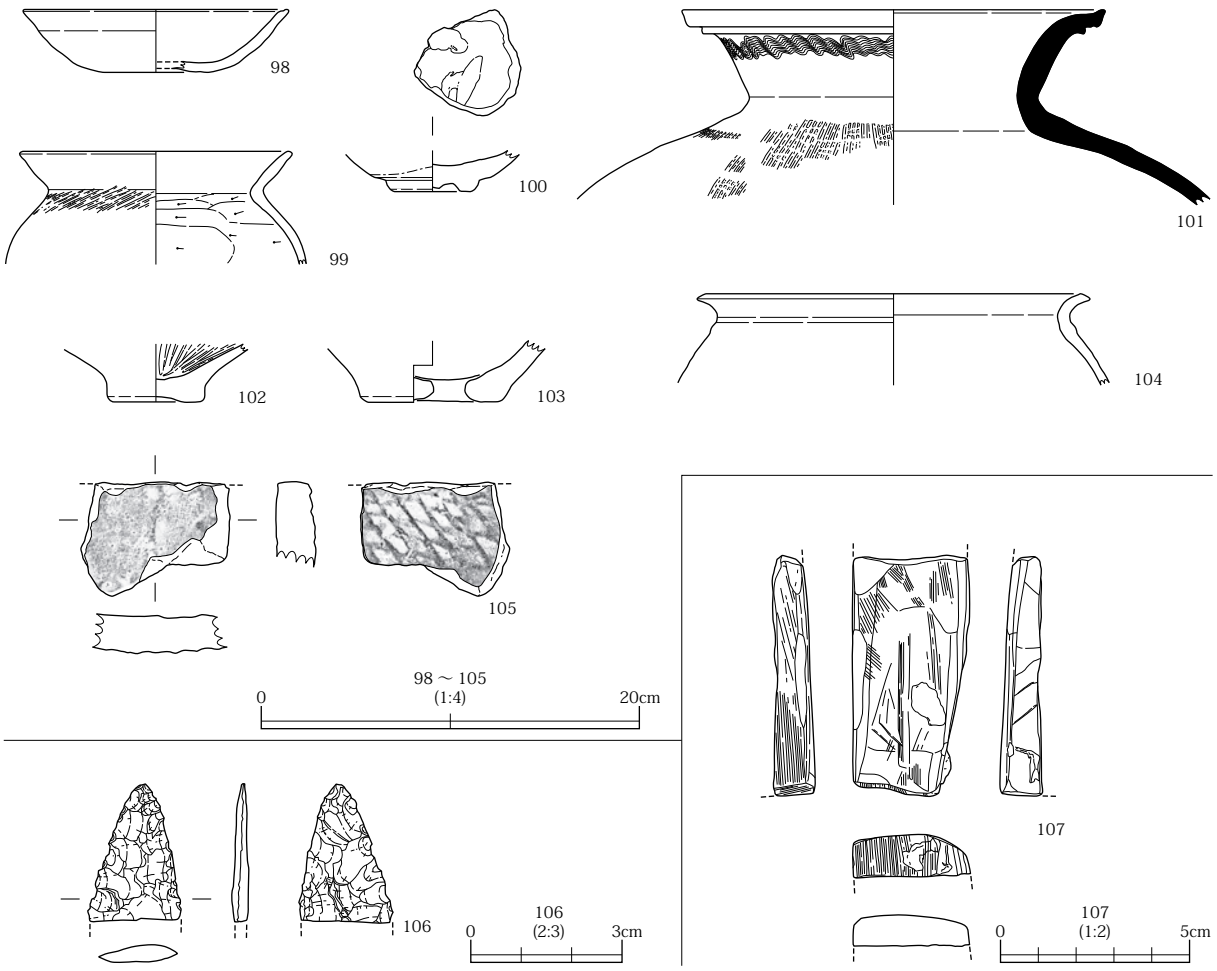


図 76　Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区第２層出土遺物実測図

陶器碗の底部である。唐津焼である。

底径 4.1 ㎝、残存高 2.2 ㎝をはかる。全体を回転ヘラケズリで成形されている。高台は削り出し高台で、断面逆台形を呈する。外面底部は回転ヘラケズリが離れたため、兜巾状となる。内外面とも施釉されているが、内面見込みには重ね焼きの砂目痕が残る。新しい時期のもので、混入であろう。

101 はⅠ－ｄ２区の中央部、遺構密度が最も疎らな地域から出土した。

須恵器甕の口縁部から肩部である。

口径 22.2 ㎝、残存高 10.3 ㎝をはかる。口縁部は肩部から直角に近い角度でたちあがり、端部は２段に外に折り返す。頸部の口縁部に最も近い箇所に、10 条１対の波状文を巡らす。肩部外面は平行タタキを施す。内面は回転ナデやナデで仕上げられる。外面は全体に自然釉がかかり、オリーブ黒色を呈する。内面は灰色を呈する。

102 はⅠ－ｄ２区の南東部から出土した。

弥生土器鉢の底部である。

底径 4.8 ㎝、残存高 3.1 ㎝をはかる。外面は剥離のため調整は不明だが、内面にはタテヘラミガキがみられる。にぶい黄橙色を呈する。体部に比して底部径が小さく絞り込んでいる。

103 はⅠ－ｄ１区の北端から出土した。

弥生土器壺の底部である。

底径 7.0 ㎝、残存高 3.3 ㎝をはかる。内外面とも摩滅や剥離のため調整は不明だが、外面には黒斑が

みられる。内面は全体に煤が付着する。また、底部中心に焼成後の穿孔をもつ。

104 はⅠ－ｄ２区の北西部から出土した。

土師器甕の口縁部である。

口径 19.8 ㎝、残存高 4.7 ㎝をはかる。口縁部は短く外に折り返す。口縁端部は平らである。磨滅が著しいが、体部はケズリののちナデを施しているようである。

105 はⅠ－ｄ２区の北東部から出土した。

平瓦である（写真図版 57 －２）。

１辺が残るのみで、残りは欠損する。残存長 6.0 ㎝、残存幅 7.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝をはかる。外面は斜め格子目タタキ、内面は布目が残る。焼成は良好だが、燻し焼が十分でないため、全体が素地の色調であるにぶい橙色や淡黄色を呈する。古代の平瓦である。

106 はⅠ－ｄ２区の南西隅から出土した。

サヌカイト製の石鏃である（写真図版 56 －１）。

長さ 2.7 ㎝、幅 1.85 ㎝、厚さ 0.35 ㎝、重さ 1.5 ｇをはかる。基部は欠損している。全体にかなり風化しており、細かい刃部調整は不明である。弥生時代の石鏃であろう。

107 はⅠ－ｄ２区の南西部から出土した。

砥石である（写真図版 57 －５）。

残存長 6.4 ㎝、幅 3.1 ㎝、厚さ 1.1 ㎝をはかる。長辺の上下は欠損する。表面にも側面にも細かい擦痕がみられる。一部に鉄分が付着する。砂岩製で目が細かいため、仕上げ用の砥石と考えられる。

Ⅰ－ｄ２区の第２層から出土した遺物は、弥生時代後期、古墳時代、平安時代など時期も種類も多種多様な遺物が出土している。他の調査区に比べると、わずかだが弥生時代など古い時期の遺物の量が多いようである。

（３）中央域東半南部（Ⅰ－ｂ２区）の遺物（図 77 ～ 83、写真図版 43 ～ 49、56、57）

図 77 － 108 から 111 はⅠ－ｂ２区の北東部に位置する大形の土坑 S0357 から出土した（図 40）。

108 は須恵器杯身である。

口径 11.8 ㎝、器高 4.9 ㎝をはかる。たちあがりはやや内傾し、口縁端部は段をなす。受部は水平にのびる。内外面とも灰白色を呈する。

109 は須恵器杯身である（写真図版 43 －１）。

口径 10.6 ㎝、器高 4.7 ㎝をはかる。たちあがりは緩やかに内傾し、口縁端部は段をなす。受部は水平にのびる。受部には重ね焼きの痕跡が認められる。また、底面には３から４本の線からなるヘラ記号がみられる。焼成がやや甘く、内外面とも灰色から明紫灰色を呈する。108 と 109 は法量にやや差があるものの、同型式の杯身である。

110 は土師器杯である。約２分の１残存する。

口径 17.1 ㎝、器高 2.85 ㎝をはかる。体部と底部の角度は鋭角的でなく、口縁部は内側に折込み肥厚する。体部外面にはヨコミガキが、内面には放射線状の暗文が認められる。見込みにも暗文があるようだが、全体に摩滅が著しく不明瞭である。にぶい黄橙色を呈する。

111 は土師器杯である（写真図版 43 －２）。

約３分の２残存する。口径 18.8 ㎝、器高 4.1 ㎝をはかる。口縁部はわずかに内側に折込み、端部は

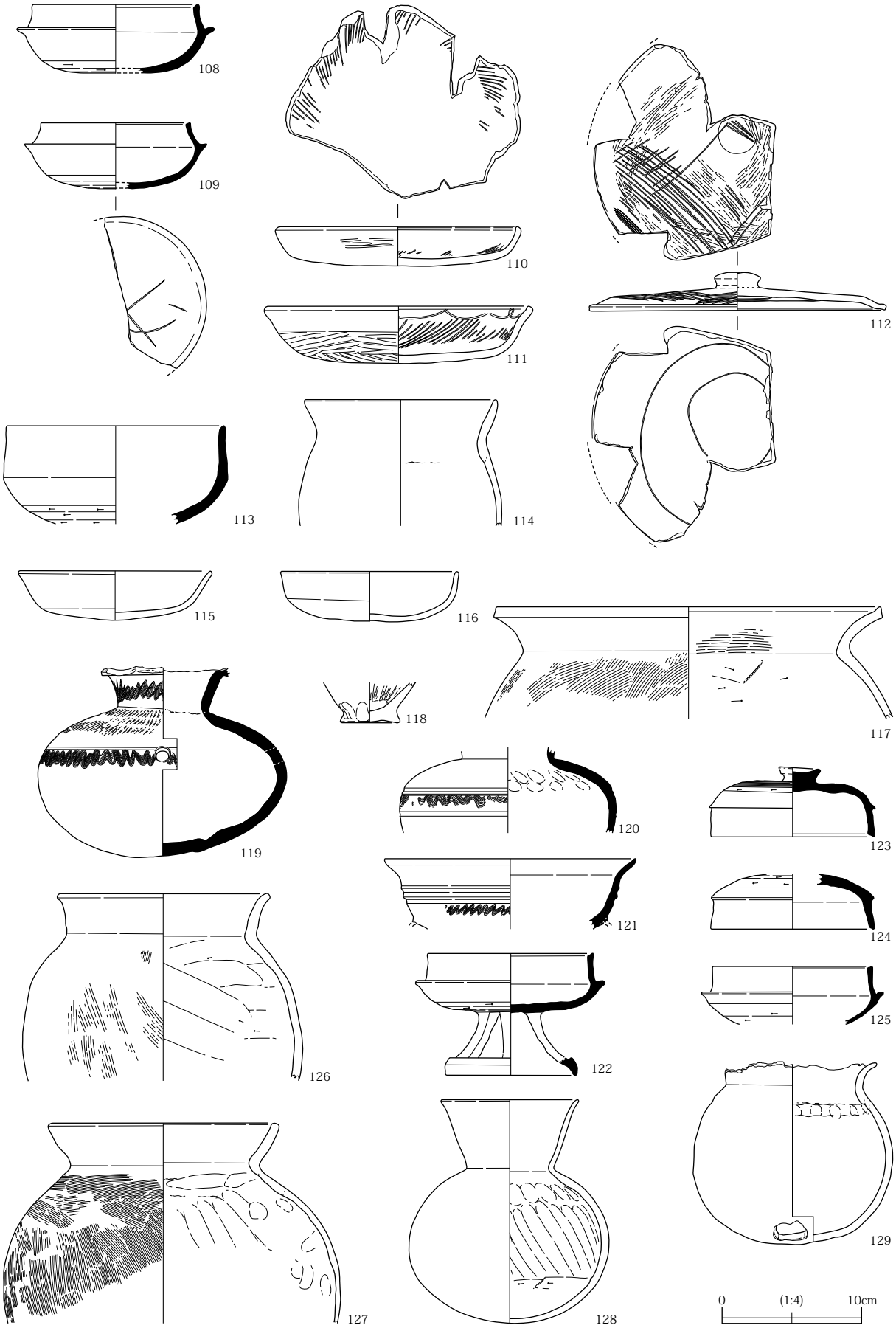


図 77　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（1）

丸く仕上げる。体部外面下半には粗いケズリが施され、底部外面全体に黒斑がみられる。口縁部および杯部外面はナデのちミガキが施される。内面見込みにはらせん状の、杯部には放射線状の、口縁部付近は連弧状の暗文が入る。にぶい黄橙色を呈する。

土坑 S0357 からは、古墳時代中期末から後期初頭の須恵器と奈良時代後期の土師器、時期の異なる遺物が出土している。

図 77 － 112・116・117 は土坑 S0358 からの出土である。土坑 S0358 はⅠ－ｂ２区の北東部に位置する大形の円形土坑で、井戸の可能性がある（図 41）。

112 は土師器杯蓋である（写真図版 43 － 4）。

約 4 分の 1 残存する。口径 22.2 ㎝、器高 2.05 ㎝をはかる。円の中心に直径約 3.0 ㎝のつまみをもつ。中心から直径約 18 ㎝まではほぼ水平にのびるが、そこから先はやや下方に落ちる。外面はつまみを挟んで交差する井桁状の粗いヘラミガキを施す。内面にもナデののち、らせん状の暗文が入る。杯Ｂ類の蓋である。

116 は土師器杯である（写真図版 43 － 5）。

ほぼ完形である。口径 12.6 ㎝、器高 3.6 ㎝をはかる。底部から体部まで内湾し、丸くて浅い椀形をなす。口縁端部も丸くおさめる。橙色からにぶい黄橙色を呈する。

117 は土師器甕の口縁部から肩部である（写真図版 43 － 3）。

落ち込み S0425 から出土した破片とも接合した。口径 27.4 ㎝、残存高 8.0 ㎝をはかる。口縁部は鋭く、「く」の字形に外反し、口縁端部は面をなす。外面はハケを、内面はヘラケズリを、口縁部はヨコハケののちヨコナデを施す。

土坑 S0358 の遺物は、土坑 S0357 同様、古墳時代後期前半と奈良時代後半のものが混在する。

図 77 － 113、114 は土坑 S0363 からの出土である。土坑 S0363 はⅠ－ｂ２区の北東部、土坑 S0357 の南に位置する（図 47）。

113 は須恵器鉢である（写真図版 43 － 8）。

口径 15.6 ㎝、残存高 7.0 ㎝をはかる。稜線はほとんど認められず、たちあがりはほぼ垂直にのびる。法量が大きく、大形の鉢である。

114 は土師器甕である。

口径 13.6 ㎝、残存高 9.0 ㎝をはかる。口縁部はつまみあげ、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデで仕上げられている。

土坑 S0363 も須恵器、土師器とも 6 世紀末のものである。

図 77 － 115 は柱穴 S0359、柱穴 S0360 からの出土である。柱穴 S0359、柱穴 S0360 はⅠ－ｂ２区の北東部に位置する柱穴である（図 48）。

115 は土師器杯である（写真図版 43 － 6）。

約 4 分の 3 残存する。口径 13.8 ㎝、器高 3.55 ㎝をはかる。底部から体部、口縁部は緩やかにたちあがる。摩滅のため調整は不明だが、おそらくナデで仕上げられている。にぶい橙色から浅黄橙色を呈する。

図 77 － 118 は柱穴 S0373 から出土した。柱穴 S0373 はⅠ－ｂ２区の北東端に位置する、掘立柱建物 7 の柱穴である（図 38）。

118 は弥生土器壺底部である。

底径 4.0 ㎝、残存高 2.9 ㎝をはかる。内面には板ナデの痕跡が、外面はナデで、体部と底部の境には

ユビオサエの痕跡が残る。にぶい黄橙色から橙色を呈する。時期は不明である。

図 77 － 119 から 129、282 は、Ⅰ－ｂ２区の北東部に位置する井戸 S0376 から出土した。井戸 S0376 は直径 1.5 m、深さ 1.1 mの大形の井戸で、多数の遺物が出土した（図 39）。

119 は須恵器瓶である（写真図版 44 －３、45 －１）。

頸部径 6.5 ㎝、体部最大径 18.0 ㎝、器高 13.7 ㎝をはかる。口縁部以外はほぼ残存する。口縁部を欠損するが、これは意図的に打ち欠いていると思われる。

頸部は短く外反し、体部は高さに比べ、横に大きく張る扁平な器形をとる。体部中心に直径 1.0 ㎝の穴を１箇所穿つ。全体を回転ヘラケズリのちナデで成形されたのち、頸部には 11 条１対の波状文を巡らす。肩部は剥離が著しいが、平行タタキが認められる。体部上半には１条の凹線とその下に 11 条１対の波状文を巡らす。体部上半には自然釉がかかる。

120 は須恵器壺の肩部から体部上半である（写真図版 45 －２）。

頸部径 6.6 ㎝、体部最大径 15.6 ㎝、残存高 5.2 ㎝を測る。体部外面には約 1.5 ㎝幅に上下に凹線をもち、その間に波状文を巡らす。肩部分には自然釉がかかる。

121 は須恵器の無蓋高杯杯部である（写真図版 45 －２）。

口径 18.2 ㎝、残存高 5.0 ㎝をはかる。口縁部は体部からわずかに外反する。体部は２条の凸帯とその下に６条１対の波状文を巡らす。体部下半には、ほとんど欠損しているが、把手の痕跡が認められる。

122 は須恵器有蓋高杯である（写真図版 44 －２、45 －１）。

口径 11.8 ㎝、底径 9.2 ㎝、器高 8.7 ㎝をはかる。たちあがりはほぼ直立し、口縁端部は段をなす。脚部は短く３方向に長方形の透かしをもつ。脚部は厚く外側に折り返す。

123 は須恵器有蓋高杯蓋である（写真図版 44 －１、45 －１）。

口径 11.6 ㎝、つまみ径 3.0 ㎝、器高 5.0 ㎝をはかる。ほぼ完形である。口径に比してつまみが大きく、稜線も明確に残る。天井部にはカキ目を施す。口縁端部は段をなす。119 や 122 よりやや新しい。

124 は須恵器杯蓋である（写真図版 45 －２）。

口径 11.6 ㎝、器高 3.9 ㎝をはかる。稜線をもち、受部は外に開き気味である。

125 は須恵器杯身もしくは有蓋高坏である（写真図版 45 －２）。

口径 11.4 ㎝、器高 4.1 ㎝をはかる。口縁部はほぼ直立し、口縁端部は段をなす。受部は水平にのびる。

119 から 125 の須恵器はほとんどがＴＫ 208 型式、５世紀半ばの年代が与えられる。

126 は土師器甕である（写真図版 44 －６、45 －１）。

口径 14.8 ㎝、残存高 13.4 ㎝をはかる。体部下半から底部は欠損する。

口縁部は直立気味にたちあがり、口縁端部は丸くおさめる。体部外面はタテハケののちナデを、内面は横方向のヘラケズリののちナデを施す。内外面に煤が付着するが、特に外面は著しく実際に使用されたものが投棄されたと考えられる。

127 は土師器甕である（写真図版 44 －７、45 －１）。

体部下半から底部は欠損する。口径 16.0 ㎝、残存高 14.4 ㎝をはかる。口縁部はくの字に外反し、口縁端部は平らである。体部は球形に大きく膨らむ。外面肩部は横方向の、体部は縦方向のハケを施す。内面はユビオサエの痕が顕著に残る。内外面とも浅黄色を呈する。

128 は土師器直口壺である（写真図版 44 －５、45 －１）。

口縁部を一部欠損する。口径 9.8 ㎝、体部最大径 14.4 ㎝、器高 16.0 ㎝をはかる。

口縁部、頸部は大きくラッパ状に開き、体部は球形をなす。摩滅や剥離が著しいが、外面はナデで仕上げられていると思われる。内面底部にはヘラケズリの痕跡が、体部から肩部にかけては斜め方向のユビオサエが顕著に残り、その後ナデで仕上げる。内外面とも橙色を呈する。布留式新段階のものである。

129 は土師器短頸壺である（写真図版 44 － 4 、45 － 1 ）。

体部最大径 13.8 ㎝、残存高 13.0 ㎝をはかる。口縁部を一部欠損するが、これは意図的に打ち欠いたものである。また、底部近くに 1 箇所穿孔がみられるが、これも焼成後の穿孔と考えられる。口縁部から頸部は短く、短頸壺とみられる。摩滅や剥離が著しいが、内外面ともナデで仕上げられていると思われる。頸部と体部の接合部には、接合痕や指で押さえた指頭圧痕が残る。内外面とも橙色を呈するが、内外面に煤が付着する。

また、写真のみ掲載したが、282 は土師器甑の破片と思われる（写真図版 45 － 2 ）。

１つは口縁部片で、タテハケが施される。もう 1 片は底部で、焼成前に穿孔された孔をもつ。ハケが施されている。

以上、井戸 S0376 の遺物は須恵器の年代から、５世紀半ばの年代が与えられる。一括性が高い遺構といえる。須恵器と土師器が供伴し、各々が一定量出土している点でも資料的価値が高い。また、119 や 129 は口縁部や体部に打ち欠きをもつなど、意図的に使用に耐えないようにしたとみられる資料があり、井戸での祭祀を示唆する資料ともいえる。

図 78 － 130 から 132 はＩ－ｂ２区の土坑 S0540 から出土した。土坑 S0540 はＩ－ｂ２区の南西部に位置する円形の土坑で、その底部から完形に近い土器が３点出土した。深さがある土坑である（図 42）。

130 は弥生土器高杯である（写真図版 48 － 1 ）。

4 分の３以上が残存する。口径 29.0 ㎝、脚裾部径 14.2 ㎝、器高 24.1 ㎝をはかる。132 の壺に 130 の高坏の杯部を蓋をかぶせるような、倒置の状態で出土した。

杯部は口径に比して深さが浅く、浅い皿形を呈する。口縁部がほぼ垂直にたちあがる。口縁端部は平らで、端面は水平な面をなす。脚部は直径が 5.6 ㎝と杯部に対して太く、杯部との接合箇所から台部との接合箇所までほぼ太さが変わらない円筒形を呈する。杯部と脚部の接合箇所、杯の底面は円板充填されている。脚裾部は杯や脚の大きさ、太さに比べると径が小さく、安定が悪い印象を受ける。裾の端部は 1 ㎝幅で折り返し、その近くに 8 方向の透かし孔がみられる。

全体をタテのヘラミガキで仕上げる。裾部分はハケののちミガキを施す。表面の剥離が著しい。胎土は浅黄色を呈する。

131 は弥生土器小形台付鉢である（写真図版 48 － 2 ）。

4 分の３以上が残存する。口径 10.8 ㎝、脚部径 5.0 ㎝、器高 9.2 ㎝をはかる。土坑 S0540 の最も底部、130 と 132 を取り除いた下層から出土した。

鉢部は深い椀形を呈する。口縁部は少し開き気味で、口縁端部は平らである。鉢部に円錐形の太く短い脚部がつく。裾は 0.5 ㎝の幅で折り返す。杯部と脚部の境には３、４条の沈線が入る。裾には均一な間隔でないが、４つの透かし孔が入る。

杯部外面はハケののちタテヘラミガキ、杯部内面はタテヘラミガキ、脚部はタテヘラミガキを施す。灰白色を呈する。

132 は弥生土器壺である（写真図版 48 － 3 ）。

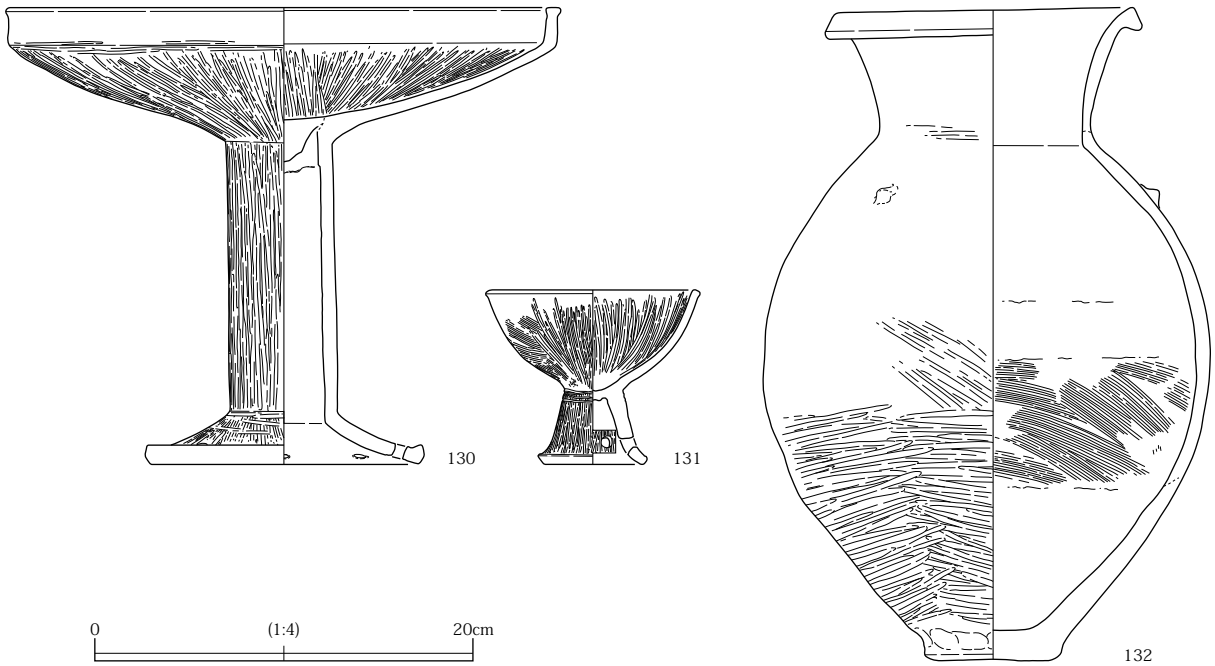


図 78　Ⅰ－ｂ２区遺構出土土器実測図（２）

ほぼ完形である。口径 15.5 ㎝、底径 5.8 ㎝、器高 34.5 ㎝をはかる。口縁部は外反し、裾は 1.5 ㎝と厚く折り返す。頸部は短く、長胴形の体部をもち、底部にかけてすぼまる。肩部に乳頭状の突起を 1 つもつ。この乳頭状の突起が何のためにあるか不明であり、他にあまり例をみない。高松市上天神遺跡出土の下川津Ｂ類に分類される壺に、つまみの様な突起がある例がある。弥生時代後期の土器である。

外面はナデで、その上からヨコミガキで仕上げる。体部下半には焼成時の黒斑がみられる。内面はハケののちナデを施す。内面には所々に粘土紐の接合痕が残る。表面の剥離が著しい。胎土は浅黄橙色を呈する。

弥生時代後期前葉の土器であろう。

132 を身とし、130 を蓋とする状態で出土したことからも、意図的に埋納された遺物の可能性が高い。しかし、壺内から骨などの遺物は出土しておらず、土器棺など、その用途は不明である。

130 から 132 のいずれの土器も弥生時代後期前葉の時期を示すため、一括埋納された遺物といえる。弥生時代後期で、明らかに遺構と言えるのはⅠ－ｂ１区の井戸 S0337 と、この土坑 S0540 ぐらいである。

図 79 － 133・135・136 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0515 から出土した（図 43）。

土坑 S0515 はⅠ－ｂ２区の中央に位置する円形の土坑で、上層から 135、136 がまとまって出土した。それ以外は 133 が破片で出土したのみで、他に遺物はみられない。

133 は、土師器壺口縁部である。

口径 23.4 ㎝、残存高 4.8 ㎝をはかり、大形の広口壺と思われる。口縁は大きく外に開き、口縁端部は外に折り返す。口縁端部は丸みを帯びる。摩滅や剥離が著しいが、外面はタテハケののちミガキを、内面はミガキと思われる。にぶい黄橙色から灰白色を呈する。

135 は、土師器甕である（写真図版 49 － 9）。

口縁部から体部上半で、底部は欠損するが、ほぼ球形の体部と推測される。136 と対のように土坑埋土の中層から出土した。

口径 13.0 ㎝、残存高 12.9 ㎝をはかる。口縁部は短く、くの字に外反し、口縁端部は内側に巻き込む。

体部外面はタテハケのちヨコハケ、その後ナデで仕上げる。内面は横方向のヘラケズリが認められる。浅黄橙色を呈する。器壁が 0.4 ㎝と薄い。

136 は、土師器直口壺である（写真図版 49 － 8）。

ほぼ完形で、短い口縁部と球形の体部をもつ。135 と対のように土坑埋土の中層から出土した。

口径 11.8 ㎝、残存高 19.4 ㎝をはかる。口縁部が直立気味である。口縁端部は丸くおさめる。体部外面上半は斜め方向のハケ、下半はケズリののちナデを施す。体部内面はヘラケズリののちナデで仕上げている。全体に摩滅している。浅黄橙色を呈する。器壁が 0.3 ～ 0.4 ㎝と薄い。

135、136 とも布留式新段階のものである。

図 79 － 134 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0499 から出土した。土坑 S0499 はⅠ－ｂ２区の北西部に位置する円形の小土坑である（図 35）。

134 は、弥生土器壺底部である。

底径 5.0 ㎝、残存高 5.0 ㎝をはかる。摩滅のため調整は不明だが、底部近くに黒斑がある。橙色から黄灰色を呈する。

図 79 － 137・138 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0539 から出土した。土坑 S0539 はⅠ－ｂ２区の南東部にある長円形の土坑である（図 49）。

137 は土師器杯である（写真図版 49 － 1）。

ほぼ完形である。口径 13.8 ㎝、器高 4.5 ㎝をはかる。深い椀形をなすが、高台はつかない。全体に摩滅・剥離が著しいため調整が不明瞭だが、ナデ及びヨコナデと思われる。橙色を呈する。

138 は土師器杯である（写真図版 49 － 2）。

4 分の 3 残存する。口径 13.4 ㎝、器高 3.3 ㎝をはかる。底面が平らで、口縁部は緩やかに立ち上がり、端部は丸みを帯びる。摩滅・剥離が著しいため調整が不明瞭だが、ナデ及びヨコナデと思われる。橙色を呈する。

土坑 S0539 は平安時代前期の遺構であろう。

図 79 － 139 はⅠ－ｂ２区の溝 S0535 から出土した。溝 S0535 はⅠ－ｂ２区の中央南側で等間隔に並ぶ溝の一つで、西に溝 S0534 がある（図 35）。

139 は須恵器杯蓋である。

口径 13.0 ㎝、残存高 4.4 ㎝をはかる。稜線がわずかに残り、たちあがりはわずかに外に開く。天井部には自然釉がかかる。灰色から紫灰色を呈する。

図 79 － 140 はⅠ－ｂ２区の溝 S0534 から出土した。溝 S0534 はⅠ－ｂ２区の中央部南側で等間隔に並ぶ溝の一つで、東に溝 S0535 がある（図 35）。

140 は須恵器壺口縁部である（写真図版 49 － 6）。

口径 18.8 ㎝、残存高 7.2 ㎝をはかる。体部は欠損する。口縁部は折り返し、約 2.0 ㎝幅の凸帯の間に、12 条 1 対の波状文が入る。灰色を呈する。

図 79 － 141 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0542 から出土した。土坑 S0542 はⅠ－ｂ２区の中央に位置する、大形の円形土坑である（図 50）。

141 は土師器高杯の脚部から裾部である（写真図版 49 － 7）。

裾部径 13.8 ㎝、残存高 6.3 ㎝をはかる。裾部は欠損する。裾部外面にはタテミガキ、内面はヨコハケ、脚部内面はヘラケズリが認められる。にぶい黄橙色から灰黄色を呈する。

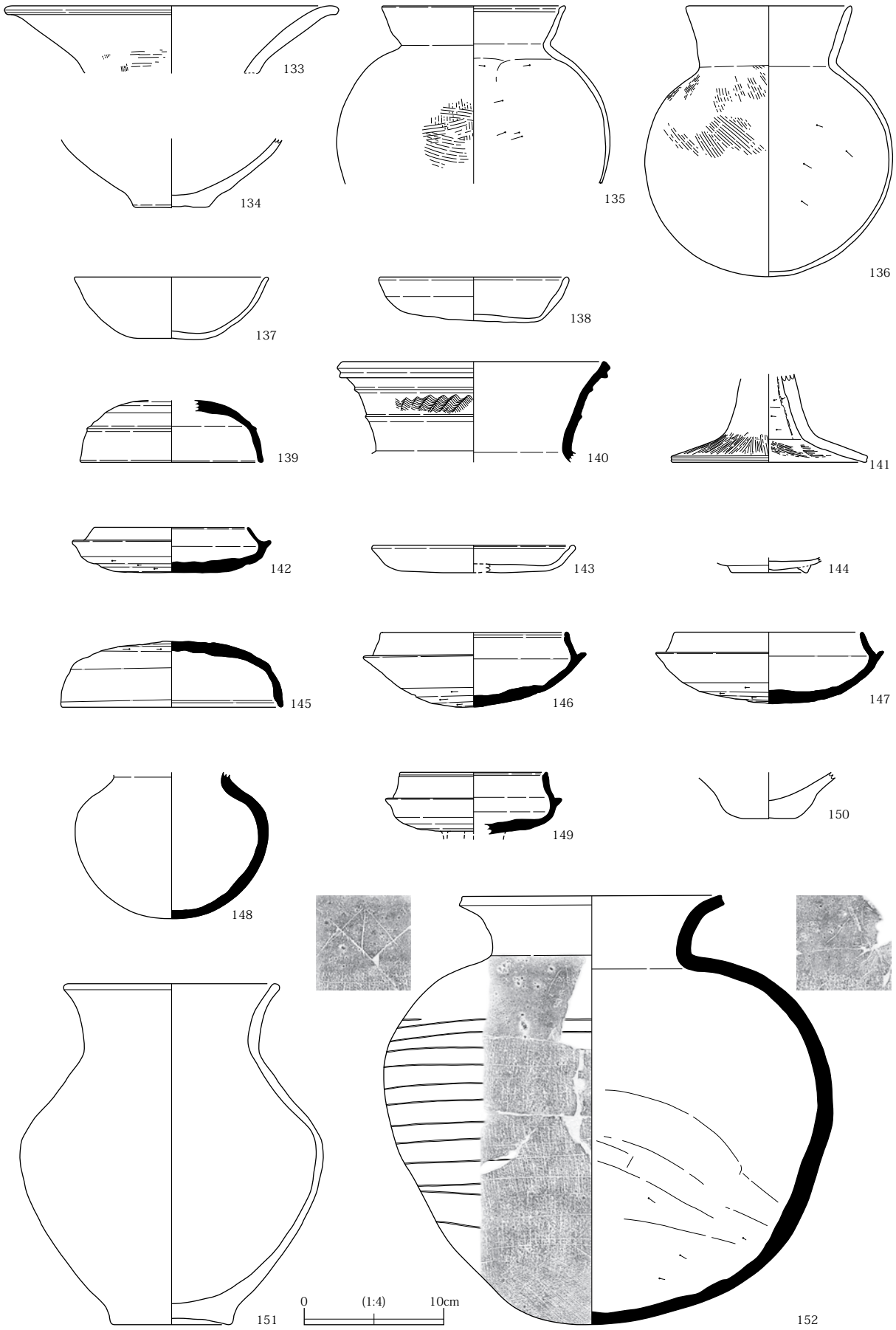


図 79　Ⅰ－ｂ２区遺構出土遺物実測図（３）

図 79 － 142 はＩ－ｂ２区の土坑 S0560 から出土した。土坑 S0560 はＩ－ｂ２区の中央東寄りに位置する、大形の円形土坑である（図 35）。

142 は須恵器杯身である。

口径 11.0 ㎝、器高 3.3 ㎝をはかる。たちあがりは内傾し、ごく薄い。受部はほぼ水平である。焼成が不良のため、橙色を呈する。

142 は 139 と同型式で、古墳時代後期と、出土した杯の中では新しいものである。

図 79 － 143 はＩ－ｂ２区の土坑 S0563 から出土した。土坑 S0563 はＩ－ｂ２区の中央に位置する円形の土坑である。北には土坑 S0561、土坑 S0562 がある（図 44）。

143 は土師器皿である。

口径 14.2 ㎝、器高 1.9 ㎝をはかる。底部から屈曲して口縁部へと続き、口縁端部は丸みをもつ。口縁部はヨコナデ、底面外部は板ナデを施す。橙色を呈する。

図 79 － 144 はＩ－ｂ２区の土坑 S0561 から出土した。土坑 S0561 は調査区の中央に位置する円形の土坑である（図 35）。

144 は土師器椀である。

底部のみが残る。高台径 3.3 ㎝、残存高 1.1 ㎝をはかる。高台は断面三角形を呈する。外面は橙色を、内面は灰白色を呈する。平安時代前期末から後期初めであろう。

図 79 － 145 から 147 はＩ－ｂ２区の土坑 S0562 からの出土である。土坑 S0562 は調査区の中央に位置する円形の土坑である（図 43）。土坑 S0561 や土坑 S0563 と隣接する。土坑 S0562 からは須恵器の杯身と蓋、あわせて３点が出土した。

145 は須恵器杯蓋である（写真図版 49 － 3）。

口径 15.7 ㎝、器高 4.7 ㎝をはかる。稜線はほとんど消滅し、天井部と連続した、全体に丸みを帯びた器形となる。端部は凹線が入る。黄灰色を呈する。法量も大きくなる、古墳時代後期のものである。

146 は須恵器杯身である（写真図版 49 － 4）。

口径 13.3 ㎝、器高 5.4 ㎝をはかる。たちあがりは内傾し、受部は上を向く。口縁端部は凹線状を呈する。底部内面にはユビオサエの痕跡が残る。また、底部外面は成形時の圧力により、ひずみを生じている。底部外面には輪状の痕跡が認められるが、これは 146 をうつぶせにして、同法量の須恵器杯身を重ね焼きした痕跡と考えられる。内外面とも灰色を呈する。

145、147 同様、古墳時代後期の遺物である。

147 は須恵器杯身である（写真図版 49 － 5）。

口径 13.4 ㎝、器高 5.1 ㎝をはかる。底部が約 1.0 ㎝と厚くなる。たちあがりは内傾し、受部は上を向く。端部は丸みを帯びる。灰色を呈する。

145 同様、法量が大きくなり大形化することから、古墳時代後期に位置づけられる。

図 79 － 148 はＩ－ｂ２区の土坑 S0564 からの出土である。土坑 S0564 はＩ－ｂ２区の中央南に位置する円形の土坑で、等間隔で南北溝が並ぶ箇所にある（図 49）。

148 は須恵器壺である。

口縁部を欠損する。体部最大径 13.8 ㎝、残存高 10.5 ㎝をはかる。体部の中心よりやや上方に最大径をもつ。回転ナデとナデ、肩部は回転ナデで仕上げられている。灰色から灰白色を呈する。

図 79 － 149 はＩ－ｂ２区の落ち込み S0509 から出土し、溝 S0510 から出土した破片と接合した。

落ち込み S0509 は北西部に位置する大きく広がる落ち込みである（図 50）。また、後述する 152 の陶質土器も同遺構から出土している。

149 は須恵器高杯である。

149 は切りあう溝 S0510 出土資料とも接合した。脚部から下を欠損する。

口径 10.4 ㎝、残存高 4.4 ㎝をはかる。たちあがりはやや内傾し、口縁端部は凹線をもつ。受部は水平である。底部は厚く、わずかに残る痕跡から脚部には３方向に長方形の透かしがあったと分かる。灰色から灰白色を呈する。

150 はＩ－ｂ２区の土坑 S0556 からの出土である。土坑 S0556 はＩ－ｂ２区中央に位置する（図 35）。

150 は土師器もしくは弥生土器壺底部である。

底径 3.6 ㎝、残存高 3.3 ㎝をはかる。摩滅や剥離のため調整は不明である。橙色から黄灰色を呈する。

図 79 － 151 はＩ－ｂ２区の土坑 S0574 からの出土である。土坑 S0574 はＩ－ｂ２区の中央南端に位置する土坑である（図 49）。

151 は弥生土器壺である。

口径 14.8 ㎝、底径 8.2 ㎝、器高 24.4 ㎝をはかる。摩滅や剥離が著しいため、調整は不明である。体部外面下半には黒斑をもつ。橙色から浅黄橙色を呈する。弥生時代の壺と考えられる。

図 79 － 152 はＩ－ｂ２区の落ち込み S0509 や溝 S0508、溝 S0470、およびこれらの遺構付近の第２層からの出土資料が接合して、器形の４分の３を復元しうる個体となった資料である。従って、土坑に一個体で埋納されたのではなく、ばらばらに割れた状態で投棄されたと考える。

落ち込み S0509 は北西部に位置し、溝 S0508 や溝 S0510、溝 S0470 に切られるなど、遺構の切り合いが複雑な状況を呈する（図 35）。

152 は陶質土器甕である（写真図版 49 － 10）。縄蓆文土器である。

口径 18.4 ㎝、体部最大径 32.0 ㎝、器高 30.7 ㎝をはかる。口縁部は短く、鋭く屈曲する。口縁端部は面をもつ。肩部には３方向にヘラ記号で上向きの矢印、「↑」が刻まれる。

体部は横方向に張り出す器形であるが、下半に大きな凹みをもつ。外面は細かい縄蓆文タタキののち、約 1.2 ㎝間隔で 13 条の沈線を巡らす。沈線は極めて細く、内面には横から斜め方向のケズリや板ナデを施す。

須恵器に比べるとより黒みが強い灰色を呈し、胎土、焼成も硬質である。

朴天秀氏の教示によると、５世紀半ばから後半のＴＫ 216 型式の須恵器に併行する陶質土器である。韓国、なかでも百済、栄山江流域を産地とする韓国からの搬入土器の可能性が高い。これと似た土器は北河内の木間池北方遺跡や讃良郡条里遺跡などで散見される。最近では、和泉市マイ山古墳の墳丘から同じ器形の陶質土器甕が出土している。

図 80 － 153 から 156 はＩ－ｂ２区の井戸 S0402 から出土した。井戸 S0402 はＩ－ｂ２区の東側中央に位置する井戸で、溝 S0365 によって切られる（図 44）。上層から 153 が出土した。

153 は黒色土器Ｂ類椀である。炭素が十分に吸着しなかったものとも考えられる。

口径 14.4 ㎝、残存高 4.4 ㎝をはかる。底部を欠損する。内外面ともナデとミガキで仕上げられているが、ミガキの幅が太く疎らである。黒褐色から黒色を呈する。平安時代前期末から中期初めのものである。153 については、上層の溝 S0365 の遺物としたほうが妥当であろう。

154 は弥生土器甕口縁部から肩部である（写真図版 43 － 9）。

口径 13.8 ㎝、残存高 6.8 ㎝をはかる。口縁部は鋭く「く」の字に外反し、口縁端部は丸い。体部外面はタタキを、内面にはヨコハケを施す。外面には煤が付着する。灰黄褐色からにぶい黄橙色を呈する。

155 は弥生土器高杯である（写真図版 43 － 10）。

裾部を欠損する。口径 16.0 ㎝、残存高 11.1 ㎝をはかる。杯部と口縁部は稜線によって段をなし、緩やかに外反する。杯部に対して脚部は太く、短い。

内外面ともミガキで、脚部内面は板ナデが残る。脚部には 3 方向の穿孔が認められる。にぶい黄褐色を呈し、生駒西麓産の胎土とみられる。

154、155 は弥生時代後期の遺物である。

156 は土師器壺である（写真図版 43 － 7）。

約 2 分の 1 残存する。口縁部を欠損する。

体部最大径 15.3 ㎝、底径 4.6 ㎝、残存高 13.6 ㎝をはかる。下すぼまりの器形をとり、底部はいびつで据わりが悪い。体部外面下半はヘラケズリされ、上半はナデで、内面は頸部から体には横方向、体部下半から底部には縦方向の板ナデがみられる。橙色から浅黄橙色だが、外面下半には焼成時の黒斑が大きく残る。

井戸 S0402 は 154 と 155 から弥生時代後期の遺構で、埋没後に 153 のような後世の遺物が混入したと考えられる。

図 80 － 157 から 160 は Ⅰ － b 2 区の土坑 S0406 から出土した。土坑 S0406 は Ⅰ － b 2 区の北西部に位置する大形の土坑である（図 45）。

157 は須恵器杯身である（写真図版 47 － 2）。

口径 13.9 ㎝、器高 5.1 ㎝をはかる。たちあがりは内傾し、受部は水平にのびる。ロクロ成形で回転ナデと回転ヘラケズリの痕跡が残る。底部に一直線のヘラ記号が入る。灰色を呈する。

158 は須恵器有蓋短頸壺蓋である（写真図版 47 － 1）。

口径 9.9 ㎝、器高 3.3 ㎝をはかる。稜線は消滅し、法量も小さい。灰色を呈する。

159 は須恵器高杯杯部である（写真図版 47 － 3）。

口径 13.0 ㎝、残存高 5.7 ㎝をはかる。脚部から下は欠損する。土坑 S0481 から出土した資料とも接合した。口縁端部は凹線をもち、口縁部は垂直にのびる。杯部はわずかに外に開く。脚部は短く太い。

160 は須恵器高杯脚部である（写真図版 47 － 4）。

脚部は比較的短く、杯部は欠損する。裾部径 10.4 ㎝、残存高 5.5 ㎝をはかる。裾は 2、3 段に折り返す。脚部に透かしが等間隔に 4 方向に入る。

土坑 S0406 は古墳時代後期の遺構と考えられる。

図 80 － 161 から 163 は Ⅰ － b 2 区の土坑 S0422 から出土した。土坑 S0422 は Ⅰ － b 2 区の北東端に位置する大形の円形の土坑である。この周辺から最も大量の土器が出土した（図 47）。

161 は須恵器杯蓋である。

口径 13.6 ㎝、残存高 4.3 ㎝をはかる。稜線はわずかに認められ、たちあがりはほぼ垂直にのびる。灰色を呈する。

162 は土師器甕口縁部である。

口径 15.5 ㎝、残存高 4.6 ㎝をはかる。口縁部は鋭く外反し、端部は若干内側に巻き込む。摩滅や剥

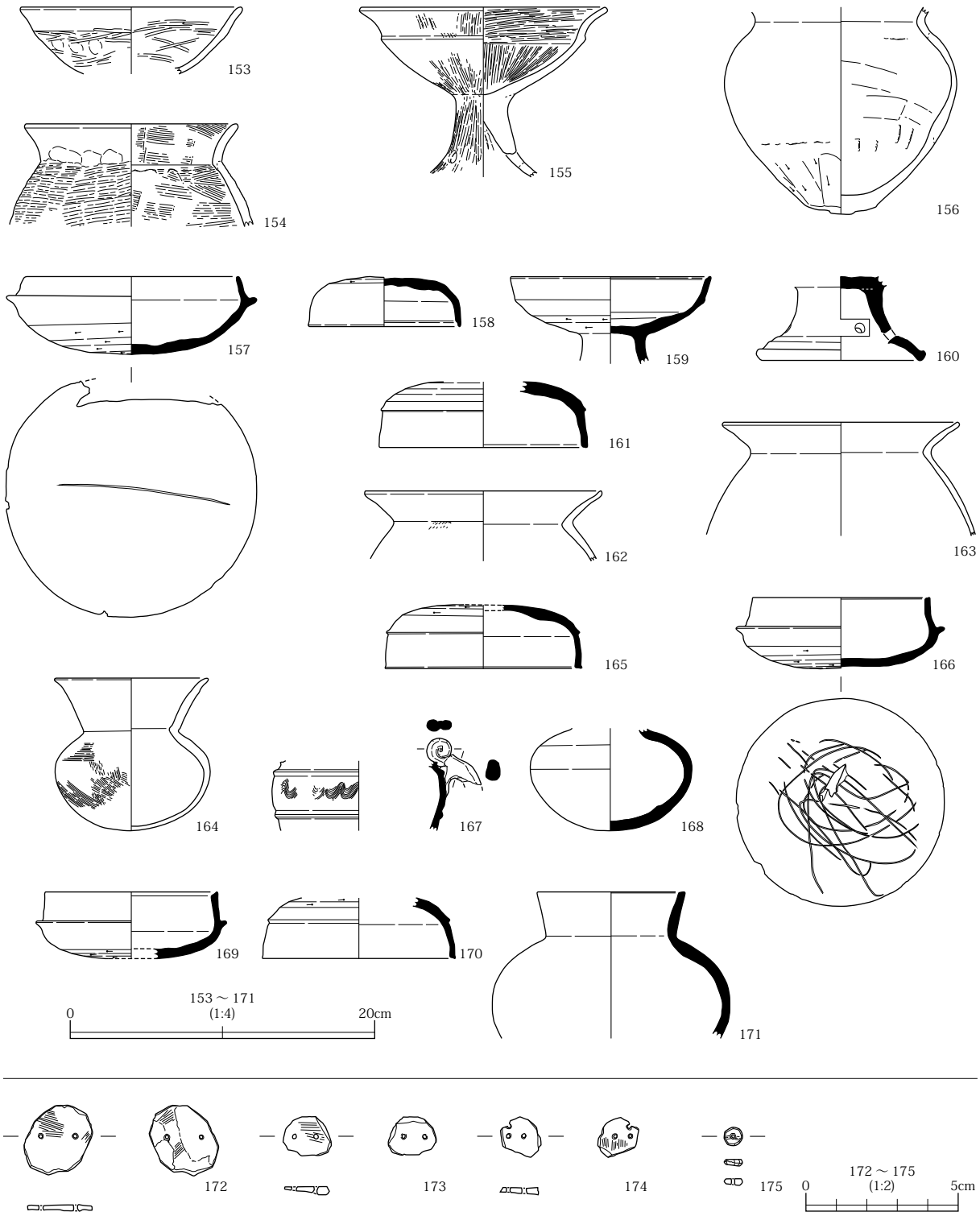


図 80　Ⅰ－ｂ２区遺構出土遺物実測図（４）

離が著しいが、外面にわずかにハケ、内面にヘラケズリの痕跡が残る。にぶい褐色を呈し、生駒西麓産の胎土である。庄内式の甕である。

163 は土師器甕口縁部から肩部である（写真図版 47 － 10）。

口径 15.4 ㎝、残存高 7.4 ㎝をはかる。口縁部は鋭く外反し、口縁端部は平らである。摩滅や剥離が著しいが、外面にわずかにタテハケ、内面にヘラケズリの痕跡が残る。にぶい褐色を呈し、生駒西麓産の胎土である。162 と同じく庄内式の甕である。

土坑 S0422 は古墳時代中期の遺構と考えられる。

図 80 － 164 はＩ－ｂ２区の土坑 S0414 から出土した。土坑 S0414 はＩ－ｂ２区の南東部に位置する円形の土坑である（図 44）。

164 は土師器小型丸底壺である（写真図版 47 － 6）。

口径 10.0 ㎝、器高 10.0 ㎝をはかる。ほぼ完形である。外面はハケののちナデで、内面はナデで仕上げられている。口縁部から頸部は大きく外に開く。淡橙色を呈する。

図 80 の 165 から 167 はＩ－ｂ２区の北東端にある、落ち込み S0425 から出土した（図 47）。

165 は須恵器杯蓋である（写真図版 47 － 8）。

落ち込み S0425 と土坑 S0429 から出土した資料が接合した。口径 12.8 ㎝、器高 4.2 ㎝をはかる。稜線はわずかに認められ、たちあがりはほぼ垂直にのびる。口縁端部は平らで、端部には焼成時の溶着痕が残る。外面全体に灰がかかる。灰白色から灰色を呈する。

166 は須恵器杯身である（写真図版 47 － 7）。

口径 11.6 ㎝、器高 4.7 ㎝をはかる。たちあがりはいったん内傾したのち垂直にのびる。口縁端部は凹状になる。底面に多数の焼成前のヘラ記号（線刻）がみられる。灰色から灰褐色を呈する。

167 は須恵器の把手付椀である（写真図版 47 － 9）。

体部最大径 11.4 ㎝、残存高 6.1 ㎝をはかる。体部のみの小片であるが、中心に約 2.0 ㎝間隔で２条の凸帯を施し、その間に８条１対の波状文を巡らす。上向きに蕨手状に巻きあがる飾りが付いたつまみが１箇所認められる。灰色を呈する。

落ち込み S0425 は古墳時代中期の遺構と考えられる。

図 80 の 168、172 から 175 は、Ｉ－ｂ２区の土坑 S0429 から出土した。

土坑 S0429 はＩ－ｂ２区の北東隅に位置する小土坑である。だらだらと広がる落ち込み S0425 の中にあり、大形の土坑 S0358、土坑 S0357 の間に位置する（図 47）。

168 は須恵器小形壺である（写真図版 47 － 5）。

頸径 4.9 ㎝、体部最大径 10.6 ㎝、残存高 6.7 ㎝をはかる。口縁部と頸部は欠損するが、体部はほぼ完存する。内外面とも回転ナデで仕上げられ、肩には自然釉がかかる。体部径が小さく、底部がやや尖り気味である。灰色を呈する。

172 から 174 は滑石製の有孔円盤である（写真図版 57 － 3）。

172 は３つの中で最も大きく、厚さ 0.2 ㎝の板の周囲を 10 箇所打ち欠き、長径 2.3 ㎝、短径 2.2 ㎝の長円形に仕上げる。約 1.0 ㎝間隔を開けて、短径に平行に直径 0.1 ㎝の孔を２つ穿つ。表裏面には細かい研磨痕がみられる。

173 は長径 1.5 ㎝、短径 1.3 ㎝、厚さ 0.1 ～ 0.3 ㎝をはかり、長円形を呈する。長径に合わせた位置に、0.7 ㎝間隔で直径 0.1 ㎝の孔を２つ穿つ。

174 は長さ 1.3 ㎝、幅 1.35 ㎝、厚さ 0.2 ㎝をはかる。

元来は円形だったものを欠けた後再利用しようとしたのか、円弧を描く１辺と、角をもった３辺が存在する。また、平行に 0.5 ㎝間隔で穿たれた２つの孔の上にもう１つの孔が穿たれているが、この孔は端にかかっているため一部が欠けている。

175 は滑石製の臼玉である（写真図版 57 － 3）。直径 0.6 ㎝、厚さ 0.2 ㎝をはかる。中心に直径 0.1 ㎝の孔を穿つ。

土坑 S0429 は落ち込み S0425 と同じく、古墳時代中期の遺構と考えられる。この土坑から有孔円盤や臼玉などは祭祀的要素をもつ遺物であり、これらが複数出土したことは、この土坑が何らかの祭祀行為を行った痕跡とも考えられる。

図 80 － 169 から 171 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0466 から出土した。土坑 S0466 はⅠ－ｂ２区の北西部に位置する大形の土坑である（図 45）。

169 は須恵器杯身である。

口径 11.2 ㎝、器高 4.4 ㎝をはかる。たちあがりはほぼ垂直にのび、口縁端部は内傾する段をもつ。受部は水平にのびる。たちあがりと受部から下の境界が明確である。灰色を呈する。

170 は須恵器杯蓋である。

口径 12.6 ㎝、残存高 4.0 ㎝をはかる。口縁部はほぼ垂直に下にのび、口縁端部は内傾する平面である。稜線は明確である。灰色を呈する。

171 は須恵器直口壺である（写真図版 47 － 10）。

口径 9.6 ㎝、残存高 9.6 ㎝をはかる。体部下半から底部は欠損する。口縁部は短く開き、口縁端部は丸くつまみあげる。横長の体部をもつ。灰色を呈する。

土坑 S0466 の須恵器は、いずれも古墳時代中期後葉から末の年代を示す。

図 81 － 176 から 184 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0480 から出土した。土坑 S0480 はⅠ－ｂ２区の北西部に位置する大形の土坑で、多数の土器がかたまって出土した（図 45）。

176 は土師器高杯の杯部である（写真図版 46 － 1 ）。杯部はほぼ完形だが、脚部から下は欠損する。土坑の壁面に貼り付いた状態で出土した。

口径 17.4 ㎝、残存高 5.1 ㎝をはかる。口縁部は緩やかに外反する。外面は摩滅や剥離が著しいが、わずかにハケが残り、ハケののちナデを施したと思われる。焼成時の黒斑が残る。内面は横方向のハケのちナデである。浅黄橙色からにぶい橙色を呈する。

177 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1 ）。

口径 8.2 ㎝、器高 7.2 ㎝をはかる。口縁部と体部の比が 1 ： 2 で、体部の最大径は体部中心より上にある。体部内面はケズリをほどこし、器壁は薄く仕上げられている。外面はハケのちナデである。橙色を呈する。

178 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1 ）。

口縁部を欠損する。体部最大径 9.9 ㎝、残存高 7.2 ㎝をはかる。体部の最大径は体部のほぼ中心にある。体部外面にはわずかにハケの痕跡が認められる。体部内面下半には縦方向のケズリが、上半はナデだが粘土紐の接合痕や指頭圧痕が残る。にぶい橙色を呈する。布留式Ⅳ段階のものである。

179 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1 ）。

口径 8.6 ㎝、器高 10.0 ㎝をはかる。口縁部は 177 よりは直立気味にたちあがる。口縁部から体部上半はかなり薄く、精巧につくられている。口縁部はヨコナデ、体部外面上半はタテハケののちナデを、体部外面下半はハケを施す。体部内面はナデだが、口縁部と体部の境には粘土紐の接合痕が残る。

口縁部の約 2 分の 1 は煤が付着し、体部内面も全体に煤が付着する。にぶい橙色を呈する。

180 は土師器高杯である（写真図版 46 － 1 ）。

口径 13.5 ㎝、底径 8.2 ㎝、器高 8.4 ㎝をはかる。断面三角形状の杯部に、太くて短い脚部がつく。摩滅のため調整は不明瞭だが、ナデで仕上げられている。橙色を呈する。

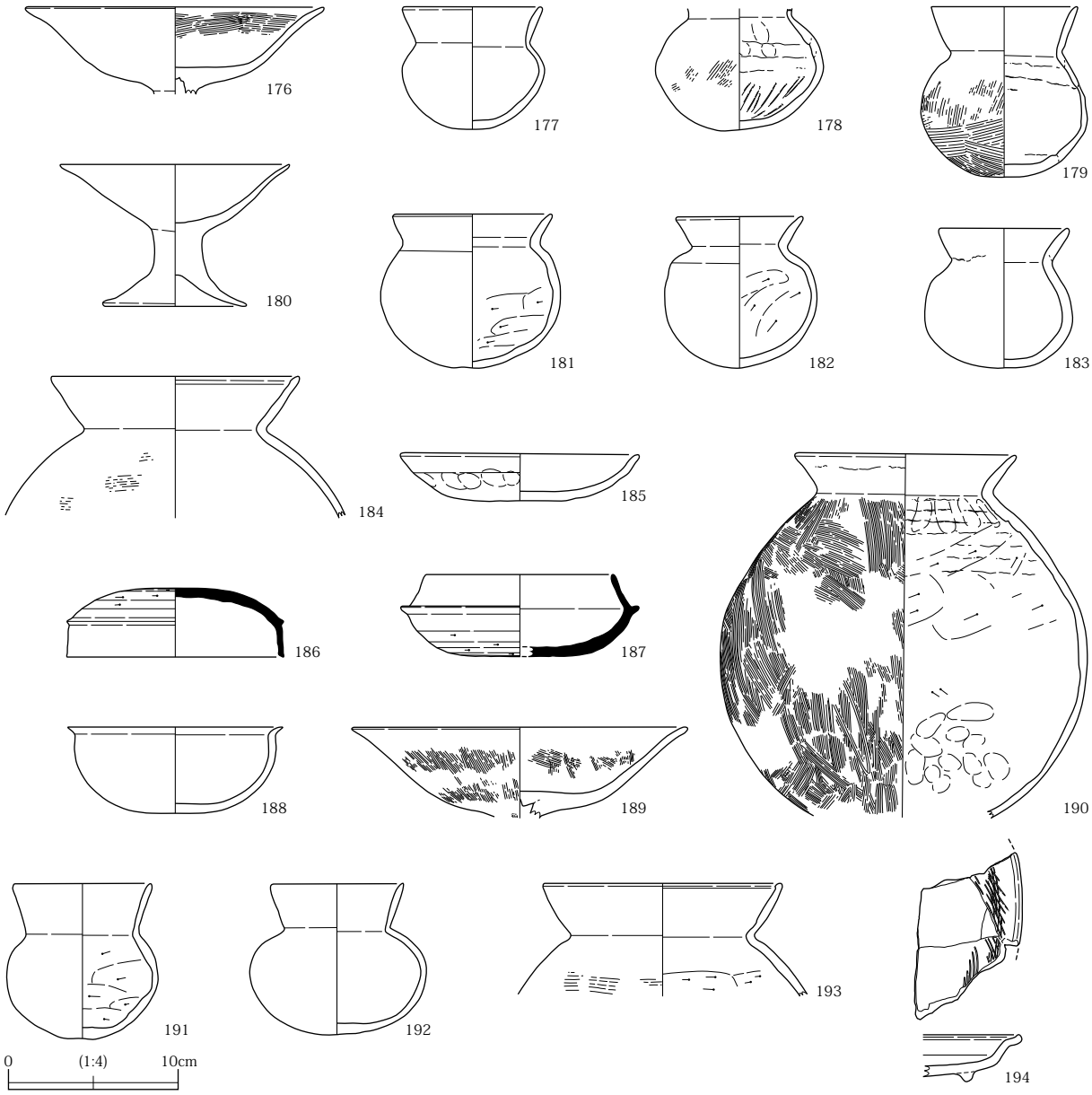


図 81　Ⅰ－ｂ２区 遺構出土土器実測図（５）

181 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1）。

口径 9.2 ㎝、器高 9.1 ㎝をはかる。約 4 分の 3 が残存する。口縁部が短く、体部は大きく膨らむ球形である。体部外面はナデで仕上げられ、肩辺りまで全体に煤が付着する。体部内面は横方向のケズリののちナデである。にぶい橙色を呈する。

182 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1）。

口径 7.4 ㎝、器高 8.9 ㎝をはかる。ほぼ完形である。体部外面はナデで仕上げられ、体部内面はケズリが認められる。にぶい橙色を呈する。

183 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 1）。

口径 7.6 ㎝、器高 8.2 ㎝をはかる。ほぼ完形である。土坑 S0480 出土の他の個体に比べると、厚みがあってつくりが粗雑である。口縁部のつまみあげが粗雑なため口縁の高さが不均一で、外面には粘土紐の接合痕がのこる。体部外面はナデ、内面はケズリのちナデである。内外面とも体部から底部にかけて煤が付着する。にぶい橙色を呈する。

184 は土師器甕口縁から肩部である。

口径 14.4 ㎝、残存高 8.4 ㎝をはかる。口縁部は鋭く外反し、くの字を呈する。口縁端部は丸みを帯びる。摩滅のため調整は不明だが、体部外面はハケののちナデ、内面と口縁部はナデのようである。橙色を呈する。

土坑 S0480 出土の土器は一括性が高く、ほぼすべてが古墳時代前期末から中期前半の年代を示す、良好な資料である。

図 81 － 185 はⅠ－ｂ２区の溝 S0470 から出土した。溝 S0470 はⅠ－ｂ２区の中央から西を東西に走る区画溝である（図 50）。

185 は土師器皿である（写真図版 46 －３）。

口径 14.0 ㎝、器高 2.8 ㎝をはかる。全体をナデで仕上げるが、口縁部はつまみあげ丸くおさめる。内面はところどころに黒斑もしくは煤の付着が認められる。体部外面は指頭圧根が残る。灰黄褐色を呈する。

図 81 － 186 から 188 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0467 から出土した。土坑 S0467 はⅠ－ｂ２区の北西部に位置し、土坑 S0468 と隣接する大形の土坑である（図 46）。

186 は須恵器杯蓋である（写真図版 46 －２）。

口径 12.7 ㎝、器高 4.1 ㎝をはかる。稜線は明確に残り、たちあがりは長く、垂直に下にのびる。口縁端部は段をなす。回転ヘラケズリ及びナデである。法量が大きい。黄灰色から灰色を呈する。

187 は須恵器杯身である。

口径 11.0 ㎝、器高 4.8 ㎝をはかる。受部は水平にのび、たちあがりは内傾する。口縁端部は丸みを帯びる。回転ヘラケズリ及びナデ調整である。186 同様、法量が大きい。灰色を呈する。

188 は土師器杯である。

口径 12.6 ㎝、器高 5.1 ㎝をはかる。深い椀形の器形をとり、口縁端部は外方に反る。摩滅や剥離が著しいため、調整は不明であるがミガキはないようである。底面が丸みを帯びる。橙色を呈する。

土坑 S0467 は古墳時代中期後半の遺構であろう。

図 81 － 189 から 193 はⅠ－ｂ２区の土坑 S0468 から出土した。土坑 S0468 はⅠ－ｂ２区の北西部に位置し、土坑 S0467 と隣接する大形の土坑である（図 46）。

189 は土師器高杯の杯部である（写真図版 46 －５）。

口径 19.6 ㎝、残存高 5.3 ㎝をはかる。脚部から下は欠損する。杯部は緩やかに開き、底面は平らである。外面にはタテハケののちヨコナデを、内面もハケののちナデを施す。にぶい黄橙色を呈し、黒斑をもつ。

190 は土師器甕である（写真図版 46 －４）。

口径 12.7 ㎝、残存高 21.3 ㎝をはかる。底部は欠損する。口縁部はくの字に外反し、口縁端部は丸くつまみあげる。体部は下方が重心をもつように大きく膨らむ。

体部外面にはタテハケを施す。内面はヘラケズリで器壁を薄く仕上げているが、ナデが不十分か、体部下半に指頭圧痕が、また、口縁部と頸部の境には粘土紐の接合痕や指頭圧痕が残る。外面上半には焼成時の黒斑がある。内外面とも下半には広く煤が付着する。にぶい黄橙色を呈する。

191 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 －６）。

口径 8.0 ㎝、器高 9.1 ㎝をはかる。体部外面はナデで仕上げられ、焼成時の黒斑が残る。内面は横方向のヘラケズリが認められる。浅黄橙色を呈する。

192 は土師器小型丸底壺である（写真図版 46 － 6）。

口径 7.8 ㎝、器高 8.9 ㎝をはかる。4 分の 3 以上が残存する。口縁部が短く、体部は横に広がる器形をとる。摩滅のため調整は不明瞭だが、ナデで仕上げられている。灰白色を呈する。

193 は土師器甕口縁部である。

口径 13.8 ㎝、残存高 6.7 ㎝をはかる。口縁部は「く」の字に外反し、口縁端部は丸く内側に巻き込む。体部外面はヨコハケ、内面はケズリが認められる。外面全体に煤が付着する。にぶい橙色からにぶい黄橙色を呈する。

土坑 S0468 は古墳時代前期後半の遺構であろう。

図 81 － 194 は Ⅰ － b ２区の土坑 S0481 から出土した。土坑 S0481 は Ⅰ － b ２区の北西部で検出された大形の土坑である（図 45）。

194 は土師器皿である。

高台径は約 24.0 ㎝、残存高 2.8 ㎝をはかる。口縁部は平らで、ての字状に折り返し段をなす。、高台は断面三角形で外方に張り出す。内外面とも剥離しているが、底部から体部のたちあがりにミガキが認められる。内面に暗文があり、橙色から浅黄橙色を呈する。平城Ⅲ～Ⅳ式の土師器皿であろう。

図 82 － 195・196 は Ⅰ － b ２区の溝 S0483 からの出土である。溝 S0483 は Ⅰ － b ２区の北西部にあって、南北に走る溝である（図 50）。

195 は、サヌカイトの石核である（写真図版 56 － 2）。

長辺 9.1 ㎝、幅 6.1 ㎝、厚さ 3.0 ㎝、重さ 234.6 g をはかる。風化面の 1 点に大きな打点があり、そこから大きな剥片をとったと思われる。もう片側の側面には細かい打ち欠きがみられ、この石核自体を製品にする途中過程のものとも考えられる。195 と 196 は接合資料である。

196 は、サヌカイトの石核である（写真図版 56 － 2）。

長辺 10.8 ㎝、幅 8.0 ㎝、厚さ 3.4 ㎝、重さ 437.0 g をはかる。片面の 1 側面には列状に打ち欠いた痕がみられるが、もう 1 側面は風化面を残す。1 側面も風化面をそのまま残す。195 と 196 が接合した。製作途中の石核がこの溝中に廃棄されたものか。

溝 S0483 の中からのみ、石核がまとまって出土し、他では製品や剥片はあっても石核が全くみられないことは興味深い。

図 83 － 197 から 204 は Ⅰ － b ２区の第２層から出土した。

197 は Ⅰ － b ２区の西中央部の溝 S0510 など等間隔に南北溝が並ぶ周辺から出土した。

須恵器杯身である（写真図版 48 － 4）。

口径 12.8 ㎝、器高 5.0 ㎝をはかる。たちあがりは内傾し、端部は丸みを帯びる。受部は水平である。体部は深さがあり、底部は平らで接地面が大きい。灰色を呈する。

198 は Ⅰ － b ２区の中央部から出土した。

白磁碗の小片である。口縁が玉縁の白磁碗Ⅳ類である。灰白色を呈する。

199 は Ⅰ － b ２区の中央北端から出土した。

白磁碗底部である。

高台径 4.8 ㎝、残存高 1.7 ㎝をはかる。高台は断面形が三角形をなし、外に張り出す。内面のほか高台、底部外面も施釉され、灰白色を呈する。

200 は Ⅰ － b ２区の中央北側から出土した。

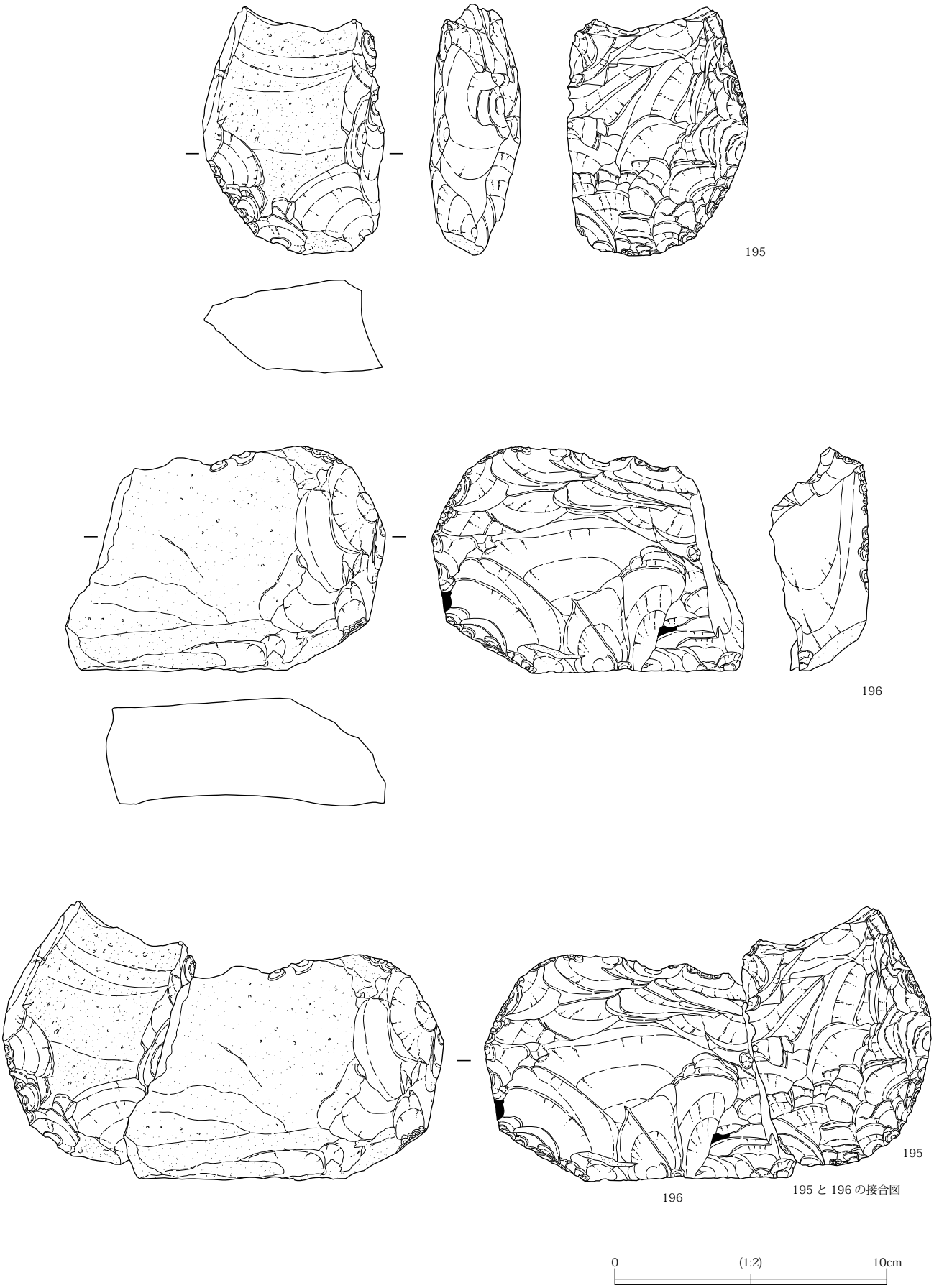


図 82　Ⅰ－ｂ２区遺構出土石器実測図

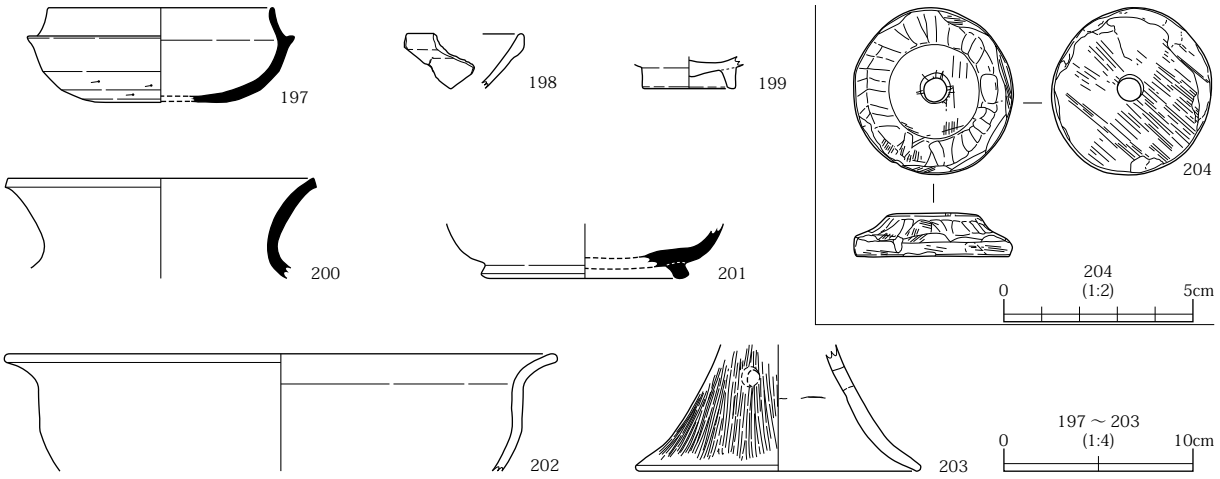


図 83　Ⅰ－ｂ２区第２層出土遺物実測図

須恵器壺口縁部である（写真図版 48 － 4）。

口径 16.2 ㎝、残存高 5.3 ㎝をはかる。口縁部は緩やかに外反し、口縁部を折り返す。口縁端部は平らである。内外面とも灰色を呈する。

201 はⅠ－ｂ２区の中央北端から出土した。

須恵器杯の底部である（写真図版 48 － 4）。

高台径 10.6 ㎝、残存高 2.9 ㎝をはかる。高台の接地面は平らでなく丸みを帯び、底部も横に広がり丸みをもつ。灰白色を呈する。

202 はⅠ－ｂ２区の北東隅から出土した。

土師器鉢である（写真図版 48 － 4）。

202 は口径 28.8 ㎝、残存高 6.2 ㎝をはかる。口縁部は直角に近い角度で外に折り曲がる。体部はやや外に膨らむようである。内外面とも摩滅のため調整は不明である。橙色を呈する。

203 はⅠ－ｂ２区の北西隅から出土した。

弥生土器高杯裾部である。

底径 14.6 ㎝、残存高 6.7 ㎝をはかる。脚部の上半と杯部は欠損する。台部の裾は丸みを帯びる。透かしが１つみられる。３、４方向に開いていたと推測される。外面はタテミガキ、内面はナデで仕上げられている。にぶい黄橙色を呈する。弥生時代後期である。

204 はⅠ－ｂ２区の北西部から出土した。

滑石製の紡錘車である（写真図版 57 － 1）。

上面と下面の径が異なる円盤形である。上面径 2.4 ㎝、下面径 4.4 ㎝、高さ 1.2 ㎝をはかる。表面は細かく切削され、裏面にも研磨した際の擦痕が残る。やや欠けた部分があり、使用していた痕と考えられる。

Ⅰ－ｂ２区の第２層から出土した遺物は、出土地点が広い範囲ということもあるが、時期的にも弥生時代後期から古墳時代初め、古墳時代中期、古代のものが含まれている。Ⅰ－ａ区と異なるのは、古代の遺物の中に奈良時代のものが少量含まれることと、古墳時代に遺物の占める割合が多いことであろうか。

（４）中央域西半（Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｅ区）の遺物（図 84 ～ 86、写真図版 52 ～ 55、58）

図 84 － 205 から 213 はⅠ－ｃ区の土坑 S0673 から出土した。

土坑 S0673 はⅠ－c 区の北西部に位置する大形の長円形土坑で、中から土器が多数出土した。深さもあり、井戸とも考えられる（図 56）。ただし、砂層堆積で崩れやすかったため、土層の観察や土器の出土状況把握が十分に行えなかった。

205 は土師器杯である（写真図版 52 － 3）。

口径 12.4 ㎝、器高 5.9 ㎝をはかる。約 4 分の 3 残存する。口縁部は短く外反する。体部は横に広がり、深さが浅い器形をとる。摩滅のため調整は不明だが、外面はハケの痕跡が残り、内面はナデのようである。内外面ともにぶい橙色を呈する。土坑 S0467 出土の 188 と似る。

206 は土師器甕である（写真図版 52 － 4）。

口径 14.0 ㎝、残存高 9.2 ㎝をはかる。口縁部から体部上半で、体部下半から底部を欠損する。縦方向の長胴形の体部から短い口縁部が外反してのびる。口縁端部は丸い。

体部外面はハケのちナデか、わずかに工具痕が残る。体部内面には横方向のヘラケズリが認められる。口縁部内面は板ナデが、外面はヨコナデがみられる。内外面とも橙色を呈する。

207 は土師器壺である（写真図版 52 － 1）。

複合口縁壺であるが、底部を欠損する。約 4 分の 3 残存する。口径 10.5 ㎝、残存高 16.2 ㎝をはかる。

口縁部は肩部から緩やかに「く」の字を描いて外反してから、再び直立気味にたちあがり、わずかに開く。口縁端部は丸くおさめる。体部はやや横広がりの球形で、底部にかけて尖り気味にすぼまる。

剥離や摩滅のため調整は不明瞭だが、外面頸部や体部下半は縦の、体部は横のミガキが認められる。体部内面や口縁部はナデで仕上げられている。内外面とも浅黄橙色から灰白色で、ところどころに黒斑が認められる。

208 は土師器甕である（写真図版 52 － 4）。

口径 17.4 ㎝、残存高 12.3 ㎝をはかる。口縁部から体部上半で、体部下半から底部を欠損する。口縁部は「く」の字を描いて鋭く屈曲し、口縁端部は平らである。体部は球形を呈する。

体部外面はハケ、内面はナデだが、斜め方向の指頭圧痕が残る。口縁部はヨコナデである。橙色からにぶい黄橙色を呈する。

209 は土師器甕である（写真図版 52 － 6）。

口径 16.0 ㎝、体部最大径 22.6 ㎝、器高 24.9 ㎝をはかる。約 4 分の 3 残存する。口縁部は体部からの屈曲がゆるやかで、少し外反する程度である。口縁端部は太く短く上方につまみあげる。

体部外面は全面タテハケ、口縁部外面はタテハケののちナデ、口縁部内面はヨコハケののちナデ、体部内面上半は横方向、下半は縦方向のヘラケズリを施す。内外面ともにぶい黄橙色で、体部外面には黒斑が認められる。

210 は土師器壺体部である（写真図版 52 － 7）。

体部最大径 17.0 ㎝、残存高 11.7 ㎝をはかる。口縁部と最底部は欠損する。やや横に広がる球形を呈する。摩滅や剥離が著しいが、外面はタテハケののちナデ、内面はナデのようである。内外面とも橙色で、下半には煤が付着する。

211 は土師器台付甕である（写真図版 52 － 2）。

体部下半が残存する。底径 8.2 ㎝、残存高 16.4 ㎝をはかる。球形の体部に円錐形の台部をナデで接合する。台部には指頭圧痕が強く残る。

体部外面は粗いタテハケを施す。体部内面はタテハケののちナデだが、粘土紐の接合単位がわずかに

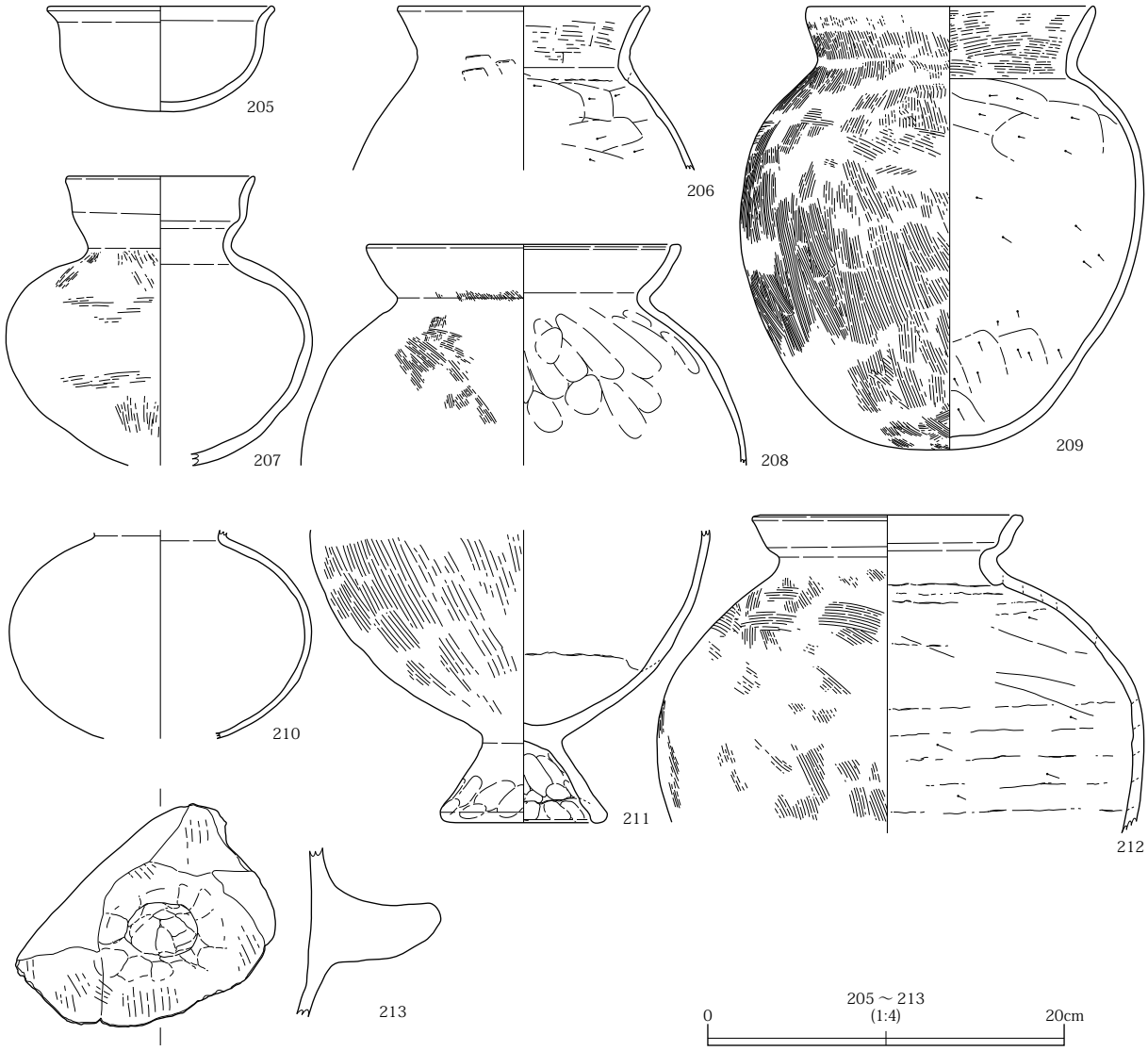


図 84　Ⅰ－c 区遺構出土土器実測図（1）

残る。器形と調整から、東海系の宇田型甕の影響を受けた可能性がある。にぶい黄褐色からにぶい褐色を呈する。内外面ともに煤が付着する。

212 は土師器壺である（写真図版 52 － 5）。

口径 14.3 ㎝、体部最大径 27.3 ㎝、残存高 17.8 ㎝をはかる。複合口縁壺で、口縁部から体部上半が残存する。口縁部は頸部から短くたちあがり、いったん段をもって受け口状を呈する。口縁端部は丸みを帯びる。

体部外面はヨコハケののちナデで、焼成時の黒斑がみられ、下方には煤が厚く付着する。内面はヘラケズリののちナデだが、ナデが粗いためヘラケズリや粘土紐の接合痕が明瞭に残る。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。津堂遺跡でも同形の複合口縁壺が出土している。

213 は土師器甑である（写真図版 52 － 8）。

取っ手と体部の一部が残存する。取っ手の最大径 4.1 ㎝、残存高 12.5 ㎝をはかる。体部外面は粗いハケを施す。体部内面はナデ、取っ手はナデで体部に接合しているため、指頭圧痕が残る。内外面とも浅黄橙色を呈する。

土坑 SO673 出土の土器は、いずれも土師器に限定される、一括性の高い資料である。古墳時代中期、

須恵器ならＴＫ 208 型式併行の時期と考えられる。

図 85―214 から 216 と後述する図 86 － 259 はＩ－ｃ区の土坑 S0601 から出土した。土坑 S0601 は北西端に位置する大形の円形の土坑である（図 57）。

214 は土師器小型丸底壺である（写真図版 53 －１）。

口径 8.6 ㎝、器高 8.3 ㎝をはかる。約 4 分の 3 残存する。摩滅や剥離が著しいため調整は不明だが、外面底部にわずかにハケが残る。内面はナデか。全体に薄く仕上げられ、全体に煤が付着する。外面はにぶい橙色、内面は灰色を呈する。

215 は土師器高杯の杯部である（写真図版 53 －２）。

口径 15.3 ㎝、残存高 5.3 ㎝をはかる。約 2 分の 1 残存する。脚部から下は欠損する。杯部は底部が平らで、深い椀形をなす。全体に摩滅のため調整は不明である。にぶい黄橙色から赤橙色を呈し、一部に黒斑が認められる。

216 は土師器甕の口縁部である（写真図版 53 －６）。

口径 16.0 ㎝、残存高 8.4 ㎝をはかる。体部から下は欠損する。口縁部は鋭くくの字に外反する。口縁部は内側に折込むが、端部は平らである。体部外面はヨコハケのち縦方向のナデと思われる。内面はケズリのちナデである。にぶい黄橙色を呈する。器壁が薄い、布留式新段階である。

土坑 S0601 は古墳時代中期の遺構である。

図 85 の 217 と 219 から 222 はＩ－ｃ区の落ち込み S0608 から出土した。落ち込み S0608 は北西隅に位置する、浅く大きく広がる土坑である（図 57）。

217 は土師器小型丸底壺である。

口径 9.2 ㎝、残存高 7.7 ㎝をはかる。底部は欠損する。口縁部が大きく外に開く。体部に対して口縁部が大きいのが特徴である。全体に摩滅のため調整は不明であるが、ケズリのちナデと思われる。浅黄橙色を呈する。

219 は土師器高杯の杯部である（写真図版 53 －３）。

口径 15.6 ㎝、残存高 5.3 ㎝をはかる。約 2 分の 1 残存する。脚部から下は欠損する。底部から体部が直線的にたちあがる。口縁部は細くつまみあげる。全体に摩滅のため調整は不明である。内外面とも橙色を呈する。口縁付近の一部と内面の約 4 分の 1 は焼成時の黒斑がみられる。

220 は土師器高杯の脚部である（写真図版 53 －５）。

底径 11.9 ㎝、残存高 7.0 ㎝をはかる。杯部は欠損する。全体に摩滅のため調整は不明であるが、ナデで仕上げられているようである。内外面とも橙色を呈する。

221 は土師器高杯の脚部である（写真図版 53 －４）。

底径 10.8 ㎝、残存高 8.4 ㎝をはかる。杯部は欠損する。全体に摩滅のため調整は不明であるが、外面にハケの痕跡が残る。脚部内面は調整が粗雑で、粘土紐の接合痕やしぼり目痕が残る。外面はにぶい黄橙色、内面は灰白色を呈する。裾の一部に黒斑が認められる。

222 は土師器壺である（写真図版 53 －６）。

口径 15.2 ㎝、体部最大径 21.4 ㎝、残存高 17.7 ㎝をはかる。底部は欠損する。口縁部は「く」の字に外反し、体部は球形を呈する。体部下半はハケを施す。外面は煤が付着する。体部内面はヘラケズリか。全体に薄く仕上げられている。にぶい褐色からにぶい黄橙色を呈する。

落ち込み S0608 の出土遺物は一括性が高い。古墳時代中期の遺構である。

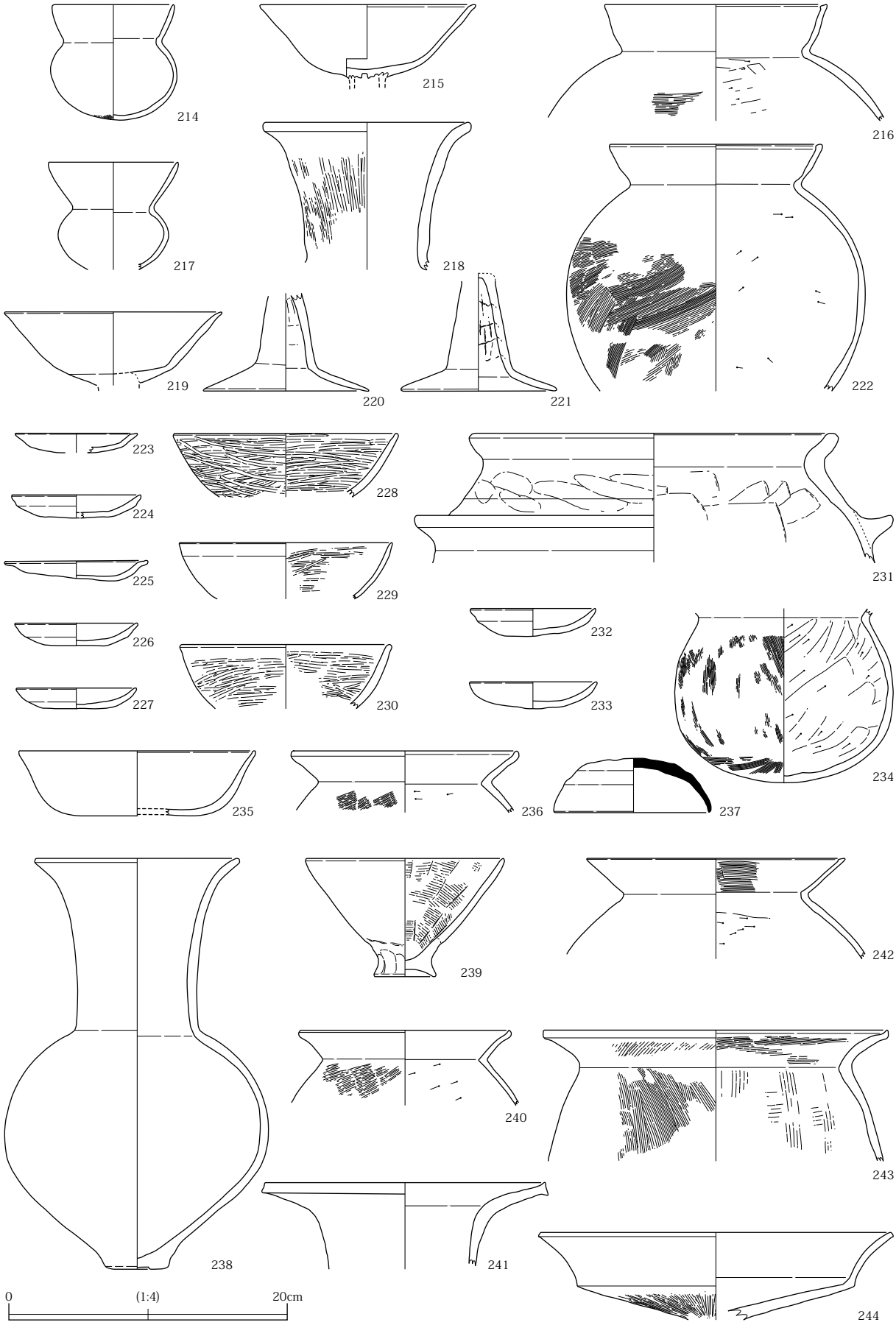


図 85　Ⅰ－c 区遺構出土土器実測図（2）

図 85 － 218 はⅠ－ c 区の落ち込み S0602 から出土した。落ち込み S0602 はⅠ－ c 区の中央北端に位置する大形の土坑である（図 57）。

218 は弥生土器壺口縁部である（写真図版 53 － 6）。

口径 14.4 ㎝、残存高 10.6 ㎝をはかる。体部は欠損する。外面には縦方向のミガキ、内面はナデが認められる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。弥生時代後期である。

図 85 － 223 はⅠ－ c 区の土坑 S0636 から出土した。土坑 S0636 はⅠ－ c 区の北西部に位置する小土坑である（図 57）。

223 は土師器皿である。口径 8.8 ㎝、器高 1.4 ㎝をはかる。口縁部はつまみあげ、全体をナデで仕上げる。小形の土師器皿である。にぶい褐色からにぶい黄橙色を呈する。平安時代前期後半か。

図 85 － 224 から 226 はⅠ－ c 区の溝 S0683 から出土した。溝 S0683 はⅠ－ c 区の北側、西端を南北に走る大きな溝で、井戸 S0685、土坑 S0686 に切られる（図 58）。

224 は土師器皿である（写真図版 54 － 6）。

口径 9.3 ㎝、器高 1.7 ㎝をはかる。約 2 分の 1 残存する。口縁部はつまみあげ、端部は丸い。全体をナデとヨコナデで仕上げる。にぶい橙色からにぶい黄橙色を呈する。

225 は土師器皿である（写真図版 54 － 6）。

口径 10.3 ㎝、器高 1.5 ㎝をはかる。約 2 分の 1 残存する。底部は薄く、口縁部は「て」の字状で、端部は内側に巻き込む。全体をナデとヨコナデで仕上げる。橙色を呈する。

226 は土師器皿である（写真図版 54 － 6）。

口径 8.8 ㎝、器高 1.6 ㎝をはかる。約 3 分の 2 残存する。口縁部はつまみあげ、端部は細い。全体をナデで仕上げる。にぶい褐色からにぶい黄橙色を呈する。

224 から 226 はいずれも同時期の遺物で、溝 S0683 は平安時代前期後半から中期初めの遺構である。

図 85 － 227 はⅠ－ c 区の溝 S0687 から出土した。溝 S0687 はⅠ－ c 区の北側、西端に位置する東西溝で、土坑 S0686 を切る（図 58）。227 は土坑 S0686 掘削中に検出したが、溝 S0687 の遺物と判断した。

227 は土師器皿である（写真図版 54 － 3）。

口径 8.6 ㎝、器高 1.5 ㎝をはかる。ほぼ完形である。小形の土師器皿で全体をナデで仕上げる。橙色からにぶい橙色を呈する。223 から 226 と同じ時期のものである。

図 85 － 228 はⅠ－ c 区の土坑 S0638 から出土した。土坑 S0638 はⅠ－ c 区の北西部に位置する円形の土坑で、南には土坑 S0673 が、北西には土坑 S0637 が位置する（図 58）。

228 は黒色土器Ａ類椀である（写真図版 54 － 8）。

口径 16.0 ㎝、残存高 4.6 ㎝をはかる。底部を欠損する。内外面とも底部見込みまで密にみがかれ、古い段階の椀と考えられる。外面はにぶい黄褐色、内面は黒褐色を呈する。

図 85 － 229 はⅠ－ c 区の土坑 S0716 から出土した。土坑 S0716 はⅠ－ c 区の北側中央に位置する。建物柱穴の可能性がある（図 51）。

229 は黒色土器Ａ類の椀である。口径 15.2 ㎝、残存高 4.2 ㎝をはかる。底部を欠損する。摩滅のため特に外面の調整は不明だが、内面はミガキである。外面はにぶい橙色、内面は黒色を呈する。228 よりミガキの幅が細く、疎らであるのでやや新しい時期のものと言える。

図 85 － 230 から 233 はⅠ－ c 区の土坑 S0631 から出土した。土坑 S0631 はⅠ－ c 区の北西部に

位置する円形の土坑で、土坑 S0601 と隣接する。232 と 233 の土師器皿が重なった状態で出土した。

230 は黒色土器 A 類の椀である。口径 15.0 ㎝、残存高 4.6 ㎝をはかる。底部を欠損する。深い椀形をなし、内外面とも底部近くまでミガキが密に入る。ミガキの幅は太い。外面は褐灰色、内面は黒褐色を呈する。

231 は土師器羽釜である。口径 26.0 ㎝、鍔径 34.0 ㎝、残存高 9.3 ㎝をはかる。鍔部から下を欠損する。口縁部は短く折り返す。内面は板ナデが残り、煤の痕もみられる。外面には鍔を貼りつけた際の指頭圧痕が残る。にぶい黄橙色から橙色を呈する。

232 は土師器皿である（写真図版 54 － 2）。

口径 8.9 ㎝、器高 2.0 ㎝をはかる。完形である。全体に厚く、口縁部をつまみあげる。にぶい橙色からにぶい橙色を呈する。

233 は土師器皿である（写真図版 54 － 1）。

口径 9.0 ㎝、器高 1.9 ㎝をはかる。ほぼ完形である。全体に厚く、深い皿形をとる。橙色を呈する。

土坑 S0631 は平安時代前期後半から中期前半の遺構と言える。

図 85 － 234・237 は Ⅰ － c 区の土坑 S0637 から出土した。土坑 S0637 は Ⅰ － c 区の北西部に位置する円形の大形の土坑である（図 58）。土坑 S0638、土坑 S0673、土坑 S0674、土坑 S0675 などの大形土坑がこの周辺に集中してみられる。

234 は土師器甕である。頸径 12.3 ㎝、体部最大径 15.7 ㎝、残存高 12.5 ㎝をはかる。口縁部を欠損する。約 2 分の 1 残存する。体部は中心が下方にあるやや下膨れの球形をとる。体部外面は細かいハケ、内面はケズリが認められる。にぶい黄橙色を呈する。7 世紀前半である。

237 は須恵器杯蓋である（写真図版 54 － 4）。

口径 11.0 ㎝、器高 3.9 ㎝をはかる。稜線は消滅している。比較的法量が小さい。7 世紀前半である。

図 85 － 235 は Ⅰ － c 区の土坑 S0668 から出土した。土坑 S0668 は Ⅰ － c 区の北側中央に位置する円形の土坑である（図 57）。

土師器杯である。口径 17.0 ㎝、器高 4.7 ㎝をはかる。底部を欠損する。全体に摩滅や剥離が著しい。大形の杯である。外面は上から下まで 1.7 ㎝の間に幅 1 mm 程度の細いミガキが 12 本と密に入るが、ごく部分的にしか確認できない。内面はナデと思われる。浅黄色を呈する。

図 85 － 236 は Ⅰ － c 区の土坑 S0680 から出土した。土坑 S0680 は Ⅰ － c 区の北側西寄り、掘立柱建物 11 の北東に位置する（図 51）。

土師器甕口縁部である。口径 16.0 ㎝、残存高 4.4 ㎝をはかる。体部と底部を欠損する。口縁部は鋭く「く」の字に外反し、口縁端部は内側に巻き込む。肩部外面は細かい平行タタキがみられ、煤が付着する。内面はヘラケズリで、口縁部はナデで仕上げる。内外面ともにぶい黄褐色で、生駒西麓産胎土と思われる。庄内式で、古墳時代前期初頭である。

図 85 － 238 は Ⅰ － c 区の井戸 S0685 から出土した。井戸 S0685 は Ⅰ － c 区の北側、西端に位置する井戸で Ⅰ － e 区にもまたがる。溝 S0683 を土坑 S0686 と共に切る。上層や中層から複数の土器が出土した（図 58）。

弥生土器壺である（写真図版 54 － 7）。

土坑 S0687 出土遺物と接合した。口径 14.4 ㎝、体部最大径 18.9 ㎝、底径 4.0 ㎝、器高 29.5 ㎝をはかる。長頸壺である。口縁部はわずかに外に開きラッパ状である。口縁端部は平らである。摩滅や剥離が著し

く調整は不明である。頸部から肩部の一部に黒斑が認められる。にぶい黄橙色から黄灰色を呈する。弥生時代後期である。

図 85 － 239 はⅠ－ c 区の土坑 S0762 から出土した（図 59）。

弥生土器鉢である（写真図版 54 － 8）。

口径 14.2 ㎝、底径 4.2 ㎝、器高 8.5 ㎝をはかる。断面逆円錐形の体部に小さな底部がつく。体部の外面はナデ、内面はハケで仕上げる。体部と底部を接合した際になでつけた指頭圧痕が残る。にぶい黄橙色から灰黄色を呈する。弥生時代後期と思われる。

図 85 － 240・241 はⅠ－ c 区の土坑 S0786 から出土した（図 59）。

240 は土師器甕口縁部である。口径 15.0 ㎝、残存高 5.4 ㎝をはかる。体部から下は欠損する。口縁部は鋭く「く」の字に外反し、端部は内側に入る。体部外面には細かい平行タタキが、内面はヘラケズリが認められる。にぶい黄褐色から黄褐色を呈する。生駒西麓産胎土で、庄内式のものである。

241 は土師器器壺口縁部から頸部である（写真図版 54 － 5）。

口径 20.0 ㎝、残存高 6.2 ㎝をはかる。口縁部は大きく外に開き、端部は平らである。広口壺口縁部であろう。摩滅のため調整は不明だが、ミガキと思われる。橙色を呈する。古墳時代前期である。胎土に緑泥片岩を含み、阿波産の土器である。

図 85 － 242 はⅠ－ c 区の土坑 S0674 から出土した。土坑 S0674 はⅠ－ c 区の北西部に位置する大形の円形土坑で、土坑 S0673 の西に位置する（図 58）。

土師器甕の口縁部から肩部である。口径 18.5 ㎝、残存高 7.2 ㎝をはかる。体部、底部は欠損する。口縁部は鋭く「く」の字に外反し、口縁端部は内側に巻き込む。口縁内部は 1.0 ㎝原体幅に 10 本のハケで、ヨコハケを施す。肩部外面はハケののちナデのようだが、不明瞭である。内面はヘラケズリで、器壁は 0.3 ～ 0.4mm と薄く仕上げられている。布留式の甕である。にぶい黄橙色を呈する。

図 85 － 243 はⅠ－ c 区の土坑 S0670 から出土した。土坑 S0670 はⅠ－ c 区の北西部に位置する小形の円形土坑である（図 51）。

土師器甕の口縁部から体部上半である（写真図版 54 － 8）。

口径 24.6 ㎝、残存高 9.4 ㎝をはかる。体部、底部は欠損する。口縁部は緩やかにたちあがり、口縁端部は内側に巻き込む。口縁部内面はヨコハケ、口縁部外面は斜め方向のハケののちナデ、体部外面はタテハケ、体部内面は粗いタテハケを施す。にぶい黄橙色から橙色を呈する。奈良時代である。

図 85 － 244 はⅠ－ c 区の土坑 S0702 から出土した（図 51）。

弥生土器高杯杯部である。

近辺の轍 S0665 から出土した資料とも接合した。口径 25.2 ㎝、残存高 6.3 ㎝をはかる。脚部は欠損する。底部から口縁部は段をつけて外側に開く。口縁端部は平らである。杯部外面下半には放射線状のミガキがみられる。口縁部や杯部内面は摩滅や剥離のため調整は不明だが、ミガキと推測される。外面には焼成時の黒斑がみられる。にぶい黄橙色からにぶい橙色を呈する。弥生時代後期末から庄内式初めのものである。

図 86 － 245 から 252、260 はⅠ－ c 区の第 2 層から出土した。

245 はⅠ－ c 区の北西部から出土した。

須恵器杯身である（写真図版 55 － 2）。

口径 12.8 ㎝、残存高 3.8 ㎝をはかる。たちあがりは内傾し、口縁端部は丸みを帯びる。比較的法量

が大きい。灰色から灰白色を呈する。

246 はⅠ－ｂ２区の北東部から出土した。

須恵器壺である。

底径 4.2 ㎝、残存高 3.0 ㎝をはかる。底部から体部下半のみで、上半を欠損するが、小形の壺Ｌである。底面も一部しか確認できないが、糸切り底である。体部は回転ナデで仕上げられている。灰色から灰白色を呈する。

247 はⅠ－ｃ区の北西部から出土した。

土師器甕である。

口径 18.6 ㎝、残存高 6.7 ㎝をはかる。鍔から下は欠損する。口縁部は短くつまみあげ、端部は平らである。内外面ともナデで仕上げられ、外面には指頭圧痕が強く残る。口縁部付近には煤が付着する。橙色からにぶい黄橙色を呈する。

248 はⅠ－ｃ区の北西部から出土した。掘立柱建物 11 や土坑 S0673 の周辺である。

須恵器平瓶である（写真図版 55 －２）。残存状況等の都合上、頸部を右にした状態で図化した。

体部最大径 18.8 ㎝、残存高 4.5 ㎝をはかる。頸部から上と体部下半、底部は欠損する。頸部と肩部の境には粘土紐の接合痕が残る。肩部は天井にかけて丸みをもつが、体部との接合部は直線的である。回転ナデやヘラケズリが施され、外面には自然釉がかる。灰色から灰白色を呈する。

249 はⅠ－ｃ区の北西部から出土した。

土師器皿である（写真図版 55 －２）。

約３分の２残存する。口径 9.1 ㎝、残存高 1.7 ㎝をはかる。全体をナデで仕上げる。外面はにぶい黄橙色、内面は橙色からにぶい褐色を呈する。

250 はⅠ－ｃ区の北西部から出土した。

土師器皿である。

底部を欠損する。口径 9.5 ㎝、残存高 1.2 ㎝をはかる。器高が浅く、底部から口縁部はつまみあげて、ナデを施す。にぶい黄橙色からにぶい橙色を呈する。

251 はⅠ－ｃ区の中央東側から出土した。

土師器二重口縁壺の口縁部である（写真図版 55 －２）。

口縁部以外は欠損する。口径 19.6 ㎝、残存高 4.7 ㎝をはかる。口縁部は受け口状にいったん平らに横にのび､その後上方に緩やかに開く。口縁端部は丸みを帯びる。摩滅や剥離のため調整は不明である。外面は明黄褐色、内面はにぶい橙色を呈する。阿波産の土器の可能性がある。

252 はⅠ－ｃ区の中央西側から出土した。

弥生土器把手付鉢である（写真図版 55 －２）。

口径 37.6 ㎝、残存高 9.6 ㎝をはかる。体部下半は欠損する。大きく外に開く口縁部と深い椀形の体部をもつ。体部には取っ手が外れているが、接合痕が１箇所認められ、取っ手が対向する２箇所についていたと推測できる。全体がナデ調整である。にぶい橙色を呈する。生駒西麓産の胎土である。

Ⅰ－ｃ区の第２層出土遺物は、弥生時代、古墳時代、平安時代中期の遺物が出土している。この周辺の土地利用は、小規模な断絶があった後、再利用があったと考えられる。

図 86 － 253・254 はⅠ－ｅ区の遺構から出土した。

253 は土坑 S1169 から出土した。土坑 S1169 はⅠ－ｅ区の北東部にある大形の円形の土坑である（図

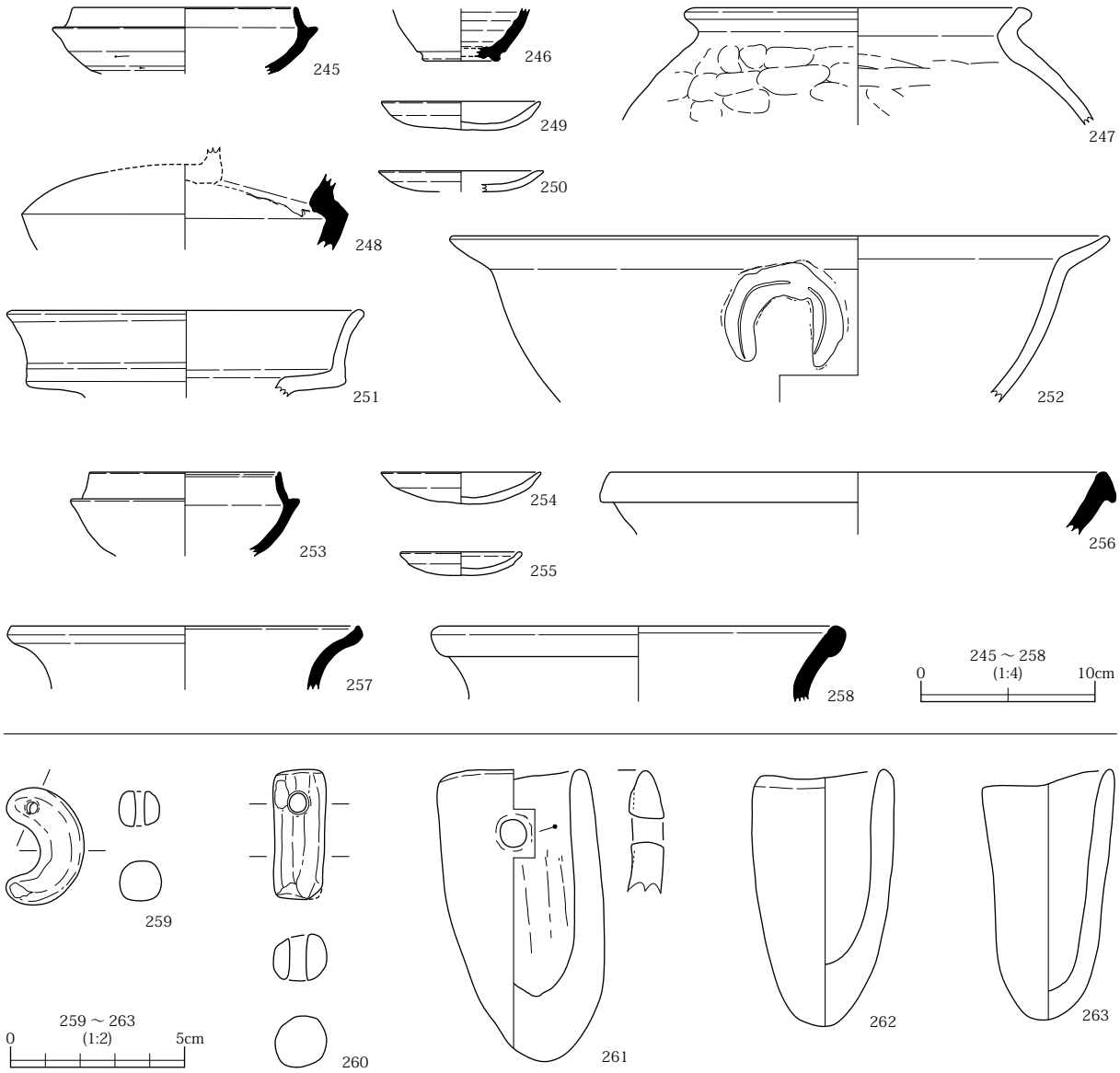


図 86　Ⅰ－ｃ区遺構・第２層、Ⅰ－ｅ区遺構・第２層出土遺物実測図

60)。

須恵器杯身である（写真図版 55 － 2）。

口径 10.8 ㎝、残存高 4.9 ㎝をはかる。底部を欠損する。たちあがりは内傾し、口縁端部は凹線をもつ。受部は水平にのび、上面はややふくらみをもつ。杯部は深い椀形をなす。内外面とも灰色を呈する。

254 は土坑 S1174 から出土した。土坑 S1174 はⅠ－ｅ区の北東部にある大形の円形の土坑である（図 60)。

土師器皿である（写真図版 55 － 2）。

約 3 分の 2 残存する。口径 9.2 ㎝、残存高 1.8 ㎝をはかる。口縁部から体部までナデで仕上げられている。端部は細くつまみあげる。内外面とも橙色を呈する。

図 86 － 255 から 258 はⅠ－ｅ区の第 2 層から出土した。この辺りは、耕作溝の他は人為的な遺構はほとんど検出できなかった。

255・256 はⅠ－ｅ区の中央東側から出土した。

255 は土師器皿である（写真図版 55 － 2）。

約２分の１残存する。口径 6.8 ㎝、器高 1.4 ㎝と法量が小さい。底部から口縁部までナデで仕上げられている。口縁部をつまみあげ、口縁部と体部の境には段がつく。内外面とも橙色を呈する。

256 は東播系須恵器こね鉢の口縁部である。口径 28.0 ㎝、残存高 3.6 ㎝をはかる。体部から下を欠損する。口縁部を外に折り返すが、あまり肥厚せず、断面三角形を呈する。灰色を呈する。12 世紀代であろうか。東播系須恵器はこの１点しか確認していない。

257 はＩ－ｅ区の北東部から出土した。

須恵器壺口縁部である。口径 20.0 ㎝、残存高 3.6 ㎝をはかる。口縁部は緩やかに外反して、外に折り返す。内外面とも灰白色を呈する。

258 はＩ－ｅ区の中央西側から出土した。

須恵器壺口縁部である（写真図版 55 －２）。

口径 22.8 ㎝、残存高 4.3 ㎝をはかる。口縁部は外反して、端部は丸く肥厚する。内外面とも灰白色を呈する。

図 86 － 259 から 263 は、Ｉ－ｃ区、Ｉ－ｅ区から出土した土製品である。

259 はＩ－ｃ区の土坑 S0601 から出土した。土坑 S0601 はＩ－ｃ区の北西端にある大形の土坑である（図 57）。

土製勾玉である（写真図版 58 －１）。

長さ 3.35 ㎝、幅 1.2 ㎝、厚さ 1.15 ㎝をはかる。上方の太い部分に直径 0.3 ㎝の孔を穿つ。土師質で、褐灰色を呈する。古墳時代の遺物であろう。

260 はＩ－ｃ区の中央東側、第２層から出土した。

土錘である（写真図版 58 －１）。

長さ 3.7 ㎝、幅 1.5 ㎝、厚さ 1.4 ㎝をはかる。円柱形を呈し、上方に直径 0.5 ㎝の孔が貫通する。全体をナデで仕上げる。にぶい橙色から黄灰色を呈するが、全体に黒斑がかかり、瓦質焼成されているようにもみえる。

図 86 － 261 から 263 は、Ｉ－ｃ区の土坑 S0610 からまとまって出土した。土坑 S0610 はＩ－ｃ区の北西部に位置する大形の不定形の土坑である（図 57）。

261 は蛸壺である（写真図版 58 －２）。

口径 3.8 ㎝、高さ 8.4 ㎝、厚さ 0.8 ～ 1.9 ㎝をはかる。完形である。手づくねで作られており、外面はナデ調整を施すが、内面はケズリや胎土をしぼったような痕跡が残る。上方に直径 0.7 ㎝の紐通しのための孔を穿つ。浅黄橙色を呈する。

262 は蛸壺である（写真図版 58 －２）。

口径 3.5 ㎝、高さ 7.4 ㎝、厚さ 0.7 ～ 1.8 ㎝をはかる。口縁部はいびつで中心にむかってたわむ。261 と違い、紐通しの孔はみられない。浅黄橙色を呈し、外面下半には黒斑がみられる。

263 は蛸壺である（写真図版 58 －２）。

約３分の２残存する。口径 3.7 ㎝、高さ 7.2 ㎝、厚さ 0.5 ～ 0.8 ㎝をはかる。口縁部はいびつで中心にむかってたわむ。262 と同様、紐通しの孔はみられない。浅黄橙色を呈する。

261 から 263 は古墳時代庄内期の蛸壺と考えられる。蛸壺は、当調査で他に１、２点出土するが、土坑 S0610 でまとまって３点出土したことは、この土坑の性格を規定する重要な要素となる。

（５）西部域（Ⅱ－ａ区）の遺物（図 87、写真図版 56、59、60）

図 87 － 264 から 269 は、Ⅱ－ａ区の北部で検出した掘立柱建物 12 や、その周辺の柱穴から出土した遺物である（図 62）。

264 は掘立柱建物 12 の柱穴 S1277 から出土した。

土師器皿である（写真図版 59 －２）。

口径 10.2 ㎝、器高 2.2 ㎝をはかる。　口縁端部は丸くつまみあげて上にたちあがり、全体をナデで仕上げる。厚さは薄い。内外面とも橙色からにぶい燈色を呈する。

265 は掘立柱建物 12 の柱穴 S1262 から出土した。

土師器椀である（写真図版 59 －２）。

法量が小さく、口径 10.0 ㎝、残存高 3.3 ㎝をはかる。底部は欠損する。口縁端部は細くつまみあげ、体部外面には指頭圧痕が残る。橙色から浅黄橙色を呈する。

264・265 から掘立柱建物 12 は平安時代前期末の遺構と思われる。

266 は柱穴 S1263 から出土した。柱穴 1263 は掘立柱建物 12 の南東に位置する（図 65）。

黒色土器Ａ類椀である（写真図版 59 －２）。

高台径 6.7 ㎝、残存高 1.2 ㎝をはかる。底部のみ残る。底部径が大きく、高台が断面四角形で外に張り出すこと、底部内面に細いミガキが密に入る。外面は浅黄橙色、内面は黒色を呈する。

267 は柱穴 S1280 から出土した。柱穴 1280 は掘立柱建物 12 の南に位置する（図 65）。

黒色土器Ｂ類椀である（写真図版 59 －２）。口径 13.0 ㎝、残存高 3.1 ㎝をはかる。底部が欠損する。口縁部は内側に巻き込み、凹線が入る。内外面とも炭素が吸着し、黒色を呈する。内面には幅２㎜程度のミガキが認められる。外面はオリーブ黒色、内面はオリーブ黒色からにぶい黄橙色を呈する。

268 は 267 と同じく、柱穴 S1280 から出土した。

土師器皿である（写真図版 59 －２）。

口径 11.0 ㎝、残存高 2.4 ㎝をはかる。底部が欠損する。口縁端部は丸くつまみあげ、底部から体部は垂直気味にたちあがる。灰白色からにぶい燈色を呈する。

柱穴 1263 や柱穴 1280 も掘立柱建物 12 と同じく、平安時代前期末の遺構と思われる。

図 87 － 269 はⅡ－ａ区の南西部で検出した、掘立柱建物 14 の柱穴 S1381 から出土した（図 64）。

269 は黒色土器Ａ類椀である（写真図版 60 －１）。

口径 13.6 ㎝、底径 5.6 ㎝、器高 4.3 ㎝をはかる。

高台は形骸化し、わずかに痕跡が残る。口縁端部は細く上方につまみあげる。体部内面には、幅１㎜の細いミガキが底部間際まで密に入る。外面はミガキが認められない。外面はにぶい燈色、内面は黒色を呈する。

掘立柱建物 14 も平安時代前期末の遺構と思われる。

図 87 － 270・271 はⅡ－ａ区の南西部の柱穴 S1390 から出土した。柱穴 S1390 は掘立柱建物 13 の中にある柱穴である（図 63）。

270 は須恵器壺の底部である（写真図版 60 －１）。

底径 8.8 ㎝、残存高 2.1 ㎝をはかる。底部は糸切り底である。黄灰色から灰白色を呈する。

271 は黒色土器Ａ類椀である（写真図版 60 －１）。

口径 14.8 ㎝、残存高 3.8 ㎝をはかる。底部は欠損する。口縁部は細くつまみあげ、内側に巻き込ん

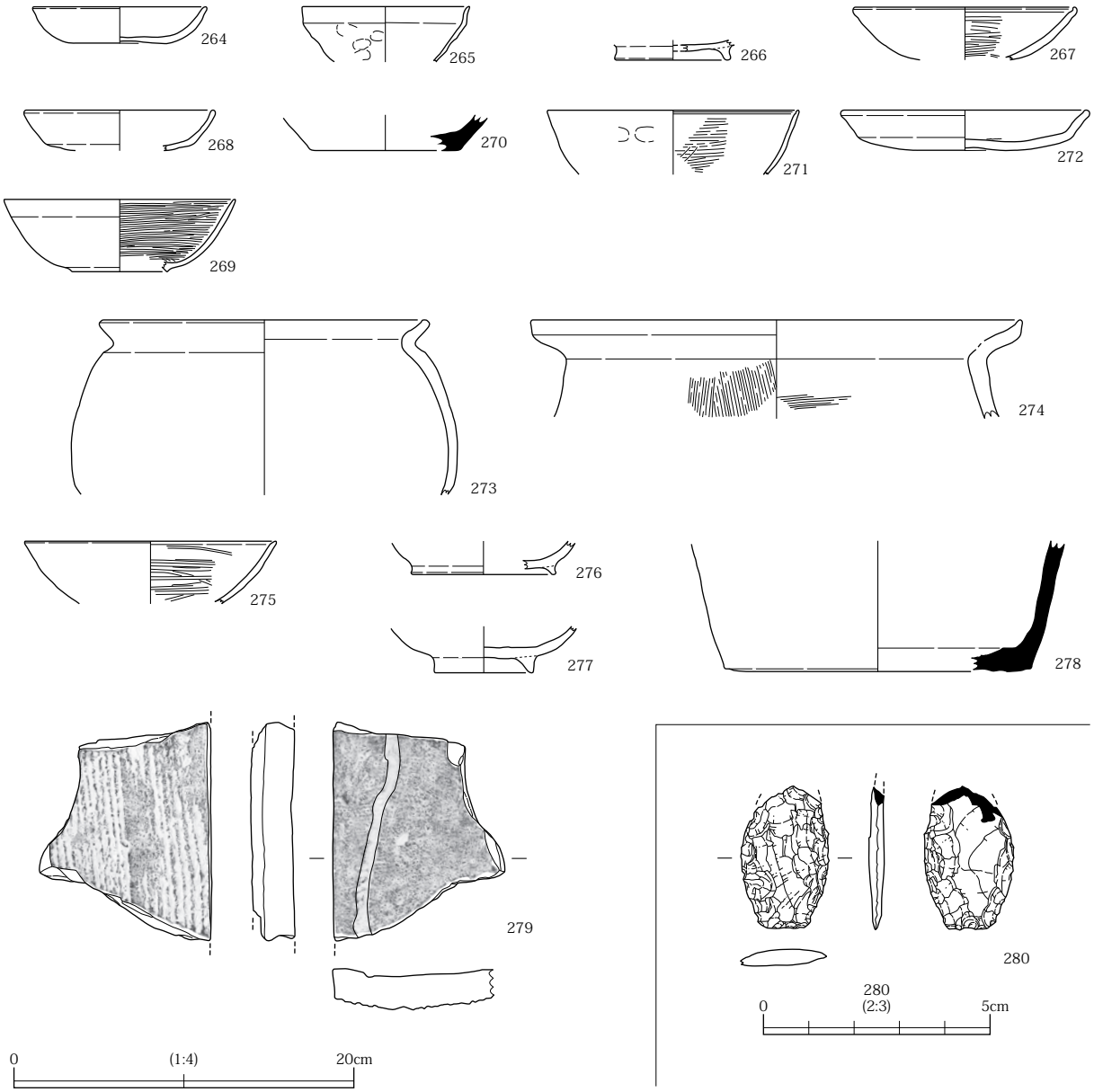


図 87　Ⅱ－ａ区遺構・第２層出土遺物実測図

で沈線をなす。かなり摩耗しているが、体部内面は下半まで幅２㎜のミガキが入り、一部にはその上から暗文のようなミガキが認められる。体部外面には指頭圧痕が残る。外面はにぶい橙色、内面は黒色を呈する。270・271 から、掘立柱建物 14 も平安時代前期末の遺構と思われる。

図 87 － 272･273 と 279 は、Ⅱ－ａ区の南西部に位置する東西の溝 S1370 の西端から出土した（図 67）。

272 は土師器皿である（写真図版 59 － 1）。

約３分の１残存する。口径 14.6 ㎝、器高 2.4 ㎝をはかる。口縁端部は丸くつまみあげ、緩やかに外反する。器壁の厚さが約 0.5 ㎝と厚い。全体をナデ及びヨコナデで仕上げる。内面は薄くではあるが一面に煤状のものの付着が認められる。にぶい黄橙色から灰黄褐色を呈する。

273 は土師器甕である（写真図版 59 － 1）。

口径 19.2 ㎝、残存高 10.3 ㎝をはかる。口縁部から体部上半が残存する。口縁部は短くつまみあげ、くの字に外反する。体部は球形を呈する。全体をナデで仕上げるが、体部にはハケ状の工具痕跡が残る

ので、ハケを施したのちナデで仕上げたと思われる。平安時代前期、南河内でよくみられる球形甕と思われる。

279 は平瓦である（写真図版 59 － 1 ）。

残存長 12.9 ㎝、最大幅 9.5 ㎝、厚さ 2.0 ㎝をはかる。上端、下端とも欠損し、側面も片方は欠損する。凸面には縄目タタキを施す。凹面には布目が残る。凹面には布を重ね合わせたか、もしくは粘土の継ぎ目の痕跡が残り、段をなす。須恵質の瓦であるがやや焼成不良で、内面は橙色を、外面は灰白色を呈する。

溝 S1370 はⅠ－ c 区、Ⅰ－ｄ２区、Ⅰ－ｅ区で検出した溝 S0772 と同一になると思われる溝である。溝 S0772 からは、奈良時代から平安時代中期の遺物が出土しており、溝 S1370 の出土遺物もこれと大きく時期を異にしない。

図 87 － 274 はⅡ－ａ区の南西部の溝 S1370 に接する、溝 S1369 から出土した（図 66）。

土師器甕である（写真図版 60 － 1 ）。

長胴形の甕の口縁部か。口縁部から肩部が残存する。口径 28.8 ㎝、残存高 5.8 ㎝をはかる。口縁端部は平らで、口縁部はするどく外反する。体部外面はタテハケ、体部内面はヨコハケを施す。にぶい黄橙色を呈する。平安時代前期か。

図 87 － 275 から 278、280 はⅡ－ａ区の第２層から出土した。275 は北東部、276 から 278 は北西部、280 は中央西側からの出土である。

275 は黒色土器Ａ類椀である（写真図版 60 － 2 ）。

口径 14.8 ㎝、残存高 3.7 ㎝をはかる。底部を欠損する。口縁部はつまみあげ、端部は丸い。体部内面には幅 1.5 ㎜のミガキが疎らに入る。外面は灰白色、内面は黒色を呈する。

276 は黒色土器Ａ類椀の底部である（写真図版 60 － 2 ）。

高台径 8.4 ㎝、残存高 1.9 ㎝をはかる。口縁部から体部は欠損し、底部のみが残存する。高台の断面は四角で底面は平らで、外に張り出す。外面は橙色、内面は黒色を呈する。底径の大きさからすると、平安時代前期の黒色土器となる。

277 は土師器椀の底部である（写真図版 60 － 2 ）。

高台径 5.8 ㎝、残存高 2.7 ㎝をはかる。口縁部から体部は欠損し、底部のみが残存する。高台は断面三角形で、底部に垂直に貼りつく。高台径が大きく、体部も深い椀形を呈する。にぶい黄橙色から橙色を呈する。

278 は須恵器壺の底部である（写真図版 60 － 2 ）。

底径 18.0 ㎝、残存高 7.7 ㎝をはかる。底部から体部は垂直にたちあがる。底部は糸切り底である。ただし、底部は内外面ともに未調整の部分が残り、凹凸が激しい。また、外面底部と体部との境目は布状のものでナデられているか、回転ナデと別の縦方向のナデが残る。

280 はサヌカイト製の有茎石鏃である（写真図版 56 － 1 ）。

長さ 3.15 ㎝、幅 1.95 ㎝、厚さ 0.35 ㎝、重さ 2.7 ｇをはかる。両端には細かい打ち欠きがみられる。先端は一部欠損する。弥生時代の石鏃か。

Ⅱ－ａ区の遺構、第２層からの出土遺物は、280 の石鏃を除いては平安時代前期のものであることから、この周辺は主に平安時代前期に土地利用されていたと言えるだろう。

今回の調査で出土した遺物を概観する。分布状況からみると、遺構と同じく北側に多く、南はⅠ－ｂ２区などを除いては少ない。東西では中央に集中し、東や西の端では少ないようである。

また、遺物の時期であるが、旧石器時代、縄文時代のものは皆無である。弥生時代は前期、中期のものはわずかで、後期になると出土量が増加し、一定量みられる。その後、庄内式、布留式土器と続く。土師器でみると、布留式新段階で飛躍的に増加する。

古墳時代の須恵器は、５世紀中葉のもの、６世紀初めから前半のものに分かれるようである。

その後も７世紀代のものはほとんどないが、８世紀後半から 10 世紀、11 世紀初めまでは連続してみられる。このことからも、古墳時代前期末から後期と、平安時代前期末から中期にかけて主に生活していたとうかがえる。

＜参考・引用文献＞（50 音順）

和泉市史編さん委員会　2016 「和泉市箕形町所在　マイ山古墳和泉丘陵Ａ８地点遺跡」『和泉市紀要　第 22 集　和泉市考古学調査報告書Ⅰ』

財団法人大阪府文化財センター　2006 『池内遺跡の発掘調査－平成 17 年度都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線（一般府道住吉八尾線）建設に伴う発掘調査－　現地説明会資料Ⅰ』

古代の土器研究会編　1992 『古代の土器１　都城の土器集成』 真陽社

古代の土器研究会編　1996 『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』 真陽社

大庭重信他編　2005 『大阪市平野区　長原遺跡発掘調査報告Ⅻ』 財団法人大阪市文化財協会

大久保徹也他編　　1995 『上天神遺跡』 香川県埋蔵文化財センター

笹栗拓編　2016 『津堂遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター

笹栗拓　2017 「津堂遺跡における古墳時代中期の土器編年－古市古墳群周辺集落の土器様相とその特質－」『大阪文化財研究』第 50 号　公益財団法人大阪府文化財センター

杉本厚典　2006 「河内地域」『古式土師器の年代学』 財団法人大阪府文化財センター

中世土器研究会編　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

辻美紀　2002 「河内地域における古墳時代中期の土師器」『長原遺跡発掘調査報告Ⅸ』 財団法人大阪市文化財協会

永野仁編　2012 『池内遺跡３』 公益財団法人大阪府文化財センター

中村淳磯他編　2009 『三宅西遺跡』 財団法人大阪府文化財センター

朴天秀　2005 「日本列島における６世紀代の栄山江流域産の土器が提起する諸問題」『待兼山考古学論集』 大阪大学考古学教室

松原市教育委員会　1985 『松原市史』 第１巻

森屋美佐子他編　2010 『池内遺跡』 財団法人大阪府文化財センター

第５章　総括

第１節　遺構の変遷

第４章では、遺構、遺物について個々に説明や検討を加えてきた。しかし、調査区が多岐にわたっていることや、１遺構面で複数の時代の遺構をまとめて検出しているため、遺構の把握が複雑になっているのは否めない。

そこで、この章で遺構を時代毎に整理し、いくつかの視点からみることで、さらなる把握に努めたい。いくつかの視点とは、遺構数、遺物量、遺構の分布状況等の時代による変遷である。

まず、表３に今回の調査で検出した主要な遺構を一覧にした。分類項目としては、所在する調査区以外は、遺構の種類（土坑、建物など）、遺構の時代区分、出土遺物などをあげた。

表３の遺構の時代区分をもとに、全体平面図から遺構を弥生時代、古墳時代、古代に区別し、各々を抽出した平面図を作成した（図 88 ～ 90）。弥生時代以前については、遺構、遺物とも皆無であり、弥生時代前期、中期も遺構に伴うものが少数なため除外した。また、中世以降についても、わずかに中世後半期や近世の遺構、遺物が認められるが、きわめて少数であるため、検討からは除外した。

図 88 から図 90 には、今回の調査区である池内Ｃ２－４－２区の北側に位置する、都市計画道路大和川線の調査区、05 －１－３区の平面図も加えて作成した。これは、調査区北端で途切れる遺構の続きが 05 －１－３区で検出できるためである。また、Ｃ２－４－２区の西側にある、都市計画道路大阪河内長野線の調査区、09 －２区については、西に続く溝 S1370 との関係を説明するため、図 93 であわせて表現することとした。以下に時代毎の特徴を概観する。

（１）弥生時代（図 88）

弥生時代の遺構･遺物の検出、出土はさほど多くない。調査区全体で井戸や土坑が十数基程度である。弥生時代前期から中期、後期まで遺物は出土するが、出土量は新しくなるほど増え、後期が多くなる。

検出遺構の中でも明確に人為的な遺構といえるのは、土坑 S0540 と井戸 S0337、井戸 S0402 等であろう。これらの遺構は壁が垂直に掘られていて、掘形が明確である。遺物も完形に近い土器が出土している。

それ以外は、平面形が不定形で、自然のたわみや風倒木痕からの出土が多い。遺物の残存状況からみても、弥生時代前期などは壺もしくは甕の底部のみがほとんどである。風倒木痕 S0325 からは、弥生時代後期の甕が器形を復元できる状態で出土したが、それ以外は破片である。

土器以外では、サヌカイト製の石器が広範囲から一定量出土しているが、包含層中からの出土が多い。

これらのことから、弥生時代は前期から後期まで連続して、周辺で人が生活する環境であったといえよう。しかし、当時の遺構面は、後世に土壌層が削平されて消滅し、遺物は巻き上げられて包含層中に埋没したか、風倒木痕などの深い窪みに落ちた遺物だけが残ったと考えられる。

また、遺構の分布状況を見ると、調査区の中央を北西から南東に斜めに蛇行しながら走る、Ｉ－ｃ区、Ｉ－ｄ２区、Ｉ－ｂ２区で検出された自然流路を挟むように立地する。検出した状況では確認できないが、自然流路の氾濫堆積物などによって、自然流路の周辺に微高地が形成され、人が住むのに適した環

表３　池内遺跡主要遺構

	時代区分	区　名	遺構名称	遺構種類	出　土　遺　物	遺　構		遺　物	
	小時期区分					挿図番号	写真図版番　号	挿図番号	写真図版番号
弥生	後期	Ⅰ－ｂ１	S0337	井戸	壺、甕	14	8－5	69－22・23	42－22
	後期	Ⅰ－ｃ２	S0325	土坑	甕	17	11－3	70－26・27	42－26
	後期	Ⅰ－ｂ２	S0540	土坑	高杯、小形台付鉢、壺	42	15－1	78－130～132	(巻頭)3－1 48－130～132
	後期	Ⅰ－ｂ２	S0402	井戸	甕、高杯	44	16－1	80－154・155	43－154・155
古墳	前期末	Ⅰ－a 西半	S0205	土坑	土師器（小型鉢、小型器台、甕）	26	6－1	72－45～49	(巻頭)4－2 40－45～49
	前期後半	Ⅰ－ｂ２	S0468	土坑	土師器（高杯、壺、小型丸底壺、甕）	46	18－1	81－189～193	46－189～192
	前期末～中期前半	Ⅰ－ｂ２	S0480	土坑	土師器（高杯、甕、小型丸底壺）	45	16－3	81－176～184	(巻頭)4－2 46－176～183
	中期	Ⅰ－ｃ	S0673	土坑	土師器（複合口縁壺、壺、台付甕、甑、杯、甕）	56	33－1	84－205～213	(巻頭)3－2 52－205～213
	中期	Ⅰ－ｃ	S0608	落ち込み	土師器（高杯、甕、小型丸底壺、壺）	57	－	85－217 ・219～222	53－219～222
	中期	Ⅰ－ｂ２	S0515	土坑	土師器（壺）	43	15－2・3	79－133・135 ・136	(巻頭)3－2 49－135・136
	中期	Ⅰ－ｃ	S0601	土坑	土師器（小型丸底壺、高杯、甕）、土製品（勾玉）	57	－	85－214～216、 86－259	53－214～216 58－259
	中期	Ⅰ－ｂ２	S0376	井戸	須恵器（杯身、杯蓋、無蓋高杯、有蓋高杯蓋、　瓶） 土師器（壺、直口壺、短頸壺、甕、甑）	39	17－2	77－119～129	(巻頭)3－2 44－119・122・123 ・126～129 45－119～129・282
	中期	Ⅰ－ｂ２	S0509	落ち込み	須恵器（高杯） 陶質土器（甕）	50	－	79－149・152	(巻頭)3－2 49－152
	中期	Ⅰ－ｂ２	S0429	土坑	須恵器（壺） 有孔円盤、臼玉	47	－	80－168 ・172～175	47－168 57－172～175
	中期	Ⅰ－ｂ２	S0425	落ち込み	須恵器（杯身、杯蓋、把手付椀）	47	－	80－165～167	47－165～167
	中期後葉～末	Ⅰ－ｂ２	S0466	土坑	須恵器（杯身、杯蓋、壺）	45	18－2	80－169～171	47－171
	中期後半	Ⅰ－ｂ２	S0467	土坑	須恵器（杯身、杯蓋） 土師器（杯）	46	18－1	81－186～188	46－186
	後期	Ⅰ－ｂ２	S0562	土坑	須恵器（杯身、杯蓋）	43	16－2	79－145～147	(巻頭)3－2 49－145～147
	後期	Ⅰ－ｂ２	S0406	土坑	須恵器(杯身、有蓋短頸壺蓋、高杯)	45	－	80－157～160	47－157～160
	後期	Ⅰ－a 西半	S0202	土坑	須恵器（甕）	26	6－3	72－50・51	40－50
古代	奈良時代後期	Ⅰ－ｂ２	S0357	土坑	須恵器（杯身） 土師器（皿）	40	18－3	77－108～111	43－109・111
	奈良時代後期	Ⅰ－ｂ２	S0358	土坑	土師器（杯、杯蓋、甕）	41	17－3	77－112・116 ・117	43－112・116 ・117
	奈良時代 ～平安時代中期	Ⅰ－ｂ２ Ⅰ－ｄ２ Ⅰ－ｃ Ⅱ－ａ	S0772、 S1370	溝	須恵器（杯、壺） 土師器（椀、杯、皿、甕） 黒色土器（椀） 瓦	(S0772) 28・29・55 (S1370) 67	(S0772) 23－1～3 31－1～3 (S1370) 38－1	(S0772) 74－73～82 (S1370) 87－272・273 ・279	(S0772) (巻頭)4－1 51－73～82 (S1370) 59－272・273 ・279
	奈良時代後期 ～平安時代前期	Ⅰ－ｂ２	S0539	土坑	土師器（杯）	49	17－1	79－137・138	49－137・138
	平安時代前期～中期	Ⅰ－a Ⅰ－ｄ１ Ⅰ－ｃ Ⅱ－ａ等	掘立柱建物 １、２、 ９～１２等	掘立柱建物	土師器（椀、皿、羽釜） 黒色土器（椀）	(建物1) 10 (建物2) 21 (建物9) 52 (建物10) 53 (建物11) 54 (建物12) 62	(建物1) 5－2、7－3 (建物2) 20－1～7 (建物9) 29－2 30－1・2 (建物11) 29－1 30－3～6 (建物12) 37－1・2 39－1～6	(建物1) 68－5～9・12・13 (建物2) 71－41～43 (建物12) 87－264・265 ・267・268	(建物1) 41－6～9・12・13 (建物2) 50－41・43 (建物12) 59－264・265 ・267・268
	平安時代前期後半 ～中期前半	Ⅰ－ｃ	S0631	土坑	土師器（皿、羽釜） 黒色土器（椀）	57	－	85－230～233	54－232・233
	平安時代前期後半 ～中期初め	Ⅰ－ｃ	S0683	溝	土師器（皿）	58	－	85－224～226	54－224～226

図 88　弥生時代遺構の分布状況

境だったため、人が集まり居住域を形成していたのではないかと推測する。弥生時代前期、中期、後期といった時期差と分布状況には相関性はないようである。

特筆すべきはこの自然流路である。当調査区内では、Ⅰ－ｂ２区から西に蛇行してⅠ－ｄ２区へと北上し、Ⅰ－ｃ区の北端で二股に分かれるように東西に広がり、調査区外の北にのびていく。自然流路は今回の調査で部分的に掘削したにすぎず、時期を特定できなかった。

しかし、この自然流路の延長と思われるのが、05 － 1 － 3 区の第 6 面で検出された 3 条の溝である。いずれも幅約 6.0 ～ 10.0 m、深さ 1.0 ～ 1.2 mある大規模な溝である。不整形に広がり、蛇行しながら北西から南東へと調査区外にのびていく。05 － 1 － 3 区の第 6 面では、この 3 条の溝が検出されるのみだが、上層の第 5 面で弥生時代前期や後期の土坑などが報告されている。

第 5 ・ 6 面を形成する層を弥生時代前期以前の土壌化層であると担当者が報告している。373 溝が弥生時代前期、2337 溝と 2207 溝は縄文時代晩期と考えられる。

よって、C2 － 4 － 2 区で検出した自然流路は、弥生時代前期かそれ以前と考えられる。自然流路の恵みを生かしてこの周辺で人々が生活していたが、流路の氾濫や廃絶などの何らかの要因によって、生活が困難になり移動していったと考えられる。この生活痕跡の名残が図 88 で表現した遺構や、随所で出土した遺物だと言える。

図 89　古墳時代遺構の分布状況

（2）古墳時代（図 89）

古墳時代になると、遺構、遺物とも飛躍的に増加する。

また、その立地は弥生時代と同じく、中央にある旧自然流路を挟む箇所に比較的多く分布する。中央域東半南部のＩ－ｂ２区で最も多く検出したが、これはＩ－ｂ２区が後世の削平を余り受けていないためと考えられる。Ｉ－ｂ２区以外では、多少の空閑地があったＩ－ｃ区の北西部でも、やや集中して認められる。

古墳時代前期、中期、後期といった小時期差と立地には、相関性はないようである。

遺構の種類としては、土坑、井戸、溝等がある。井戸はすべて素掘りの井戸で、土坑と報告したものも上層が削平されたとすると本来はもっと深く、井戸であったものもあると思われる。井戸と土坑は深さや、意図的な遺物埋納があるか否かで分類したが、その区別は明確でない。土坑が井戸でなく、墓になる可能性も皆無ではないが、墓と断定できる遺構はなかった。

土坑や井戸が多数検出されたことから、古墳時代にこの周辺に人が生活していたのは明白である。しかし、建物などは検出できていない。これは居住域が今回の調査区外、例えば比較的遺構の集中している中央域のさらに南にあったと考えるか、あるいは、弥生時代同様、中央の微高地上に形成されていた建物等は浅いため削平され、深さのある遺構だけが残ったと考えるかである。おそらく後者であろう。

遺構の時期は、古墳時代前期末の土坑 S0205 が最も古い。土坑 S0205 に続くのが古墳時代前期後半の土坑 S0468 となる。

古墳時代前期末から中期初めの代表的な遺構としては、土坑 S0673 がある。土師器のみで構成される、一括資料である。土坑 S0673 の特徴としては、器種構成が多様であることがあげられる。杯、壺、複合口縁壺、台付甕、甑などが出土している。

その後、古墳時代中期になると、圧倒的に遺構、遺物量が増える。土坑 S0608、土坑 S0480、土坑 S0515 などである。出土遺物は小型丸底壺や小型器台、高杯で構成される。出土状況が不明なものが多いが、一括埋納もしくは投棄されたもので、遺構内での土器の時期幅はほとんどない。土師器以外の遺物として、土坑 S0601 から土製勾玉が出土している。

古墳時代中期前半では、須恵器と土師器が供伴する、あるいは須恵器のみで構成される遺構が多くなる。その最古段階はＴＫ 208 型式で、代表的な遺構は井戸 S0376 である。この遺構では土師器は壺や甕、須恵器は杯身、杯蓋、高杯、高杯蓋、壺、甕など多種多様な土器が出土している。同時期の遺構としては、土坑 S0466 や、落ち込み S0425、落ち込み S0509 等がある。落ち込み S0509 からは、陶質土器甕も出土している。土坑 S0467、土坑 S0406 など、杯身、杯蓋、高杯などの須恵器で構成される。

古墳時代後期前半になると、土坑 S0562 などの遺構があげられる。古墳時代後期後半では、土坑 S0202 があげられる。遺構ごとの出土遺物の変遷を図 91、92 に示した。

小時期差はあるものの、連続して同規模、同質の遺構が確認できる。遺構の性格付けに不明な点はあるものの、古墳時代前期から後期にかけて継続的に人が居住し、継続的な土地利用がなされていたことを証明した。

池内遺跡 05 － 1 － 3 区の第 5 面でもごく少数ではあるが、古墳時代前期と中期の遺構や遺物を検出している。しかしながら、それ以外ではこれまで古墳時代のまとまった遺構を検出していなかった。主に西側で発見された、弥生時代前期の水田や集落以後は、中央から東にかけては古代から中世の集落を検出し、その間はわずかに古墳時代や奈良時代の遺構、遺物が確認されるのみである。

今回の調査で、古墳時代においても、継続して活発な人の活動が確認できたことは、大きな調査成果といえよう。

なお、池内遺跡の東に位置する三宅西遺跡では、古墳時代中期の土器が複数の自然流路から多数出土している。時期的にも池内遺跡出土資料と一致するが、数百m離れた距離にあるので、池内遺跡と三宅西遺跡を同じ生活圏やグループとみなすかは検討の余地がある。

（3）古代（図 90）

古墳時代、6 世紀後半以降、7 世紀は遺構、遺物がほとんど確認できない。何らかの要因による断絶があったようである。

池内遺跡Ｃ 2 － 4 － 2 調査区で再び遺構や遺物が確認できるのは、8 世紀後半以降である。以後、9 世紀から 10 世紀前半を主体として、11 世紀を過ぎるとその後は廃絶する。その後も検出遺構面の上面（第 2 面上面）で南北や東西の鋤溝、畝溝は確認されているが、これは中世後半以降のもので、断絶がある。耕作地として再利用されるようである。

古代の主要な遺構は、掘立柱建物 10 数棟、井戸、溝、柱穴、轍等の居住を示す遺構である。広範囲で確認できるが、東端や南西部などに遺構の希薄な部分がある。遺構密度としては北半に多く、南側や東端、北西端などは耕作溝のみ確認した。これまでと違った東西に広がる分布状況は、古墳時代から平安時代のある時期に、地形を平坦にする大規模な土地開発が行われたことを物語っている。

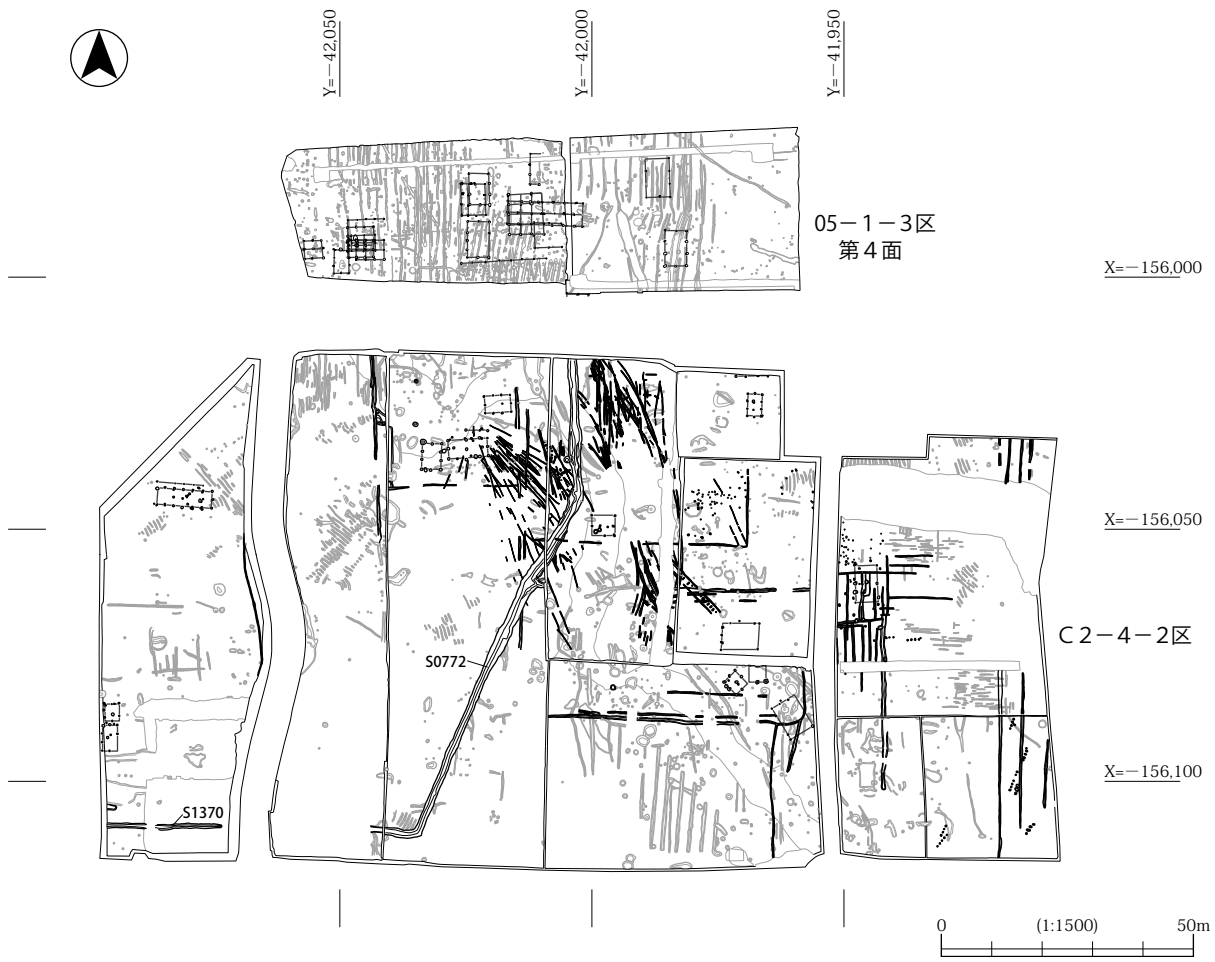


図 90　古代遺構の分布状況

掘立柱建物は２、３棟ずつの小群で存在する。区画溝を巡らす群もあるが、溝も小規模である。大半の掘立柱建物は９世紀後半から 10 世紀前葉の時期を示すが、Ｉ－ｃ区など北西部の掘立柱建物や遺構などはそれよりも若干新しくなる。

05 － 1 － 3 区や西側の 09 － 2 区でも居住域が確認されている（図 90、93）。09 － 2 区などでは９、10 世紀代の集落を、北の 05 － 1 区や 11 － 1 区では 11 ～ 12 世紀代の屋敷地ともいえる集落を確認しているので、北にいくほど新しい居住域が展開する傾向にあるのではないだろうか。

今回の調査区では建物の規模はさほど大きくなく、庇をもつ建物なども確認されなかった。出土遺物も土師器や黒色土器など在地の土器ばかりで、希少性の高い緑釉陶器や灰釉陶器、輸入陶磁器などの出土はほぼなかった。これらのことから、今回確認した古代の居住域は、当時の一般的な集落形態を示していると考える。

建物や溝は現在の方位にほぼ合致しており、方位を意識した土地利用がなされていたのは、明白である。しかし、轍と調査区中央から西にのびていく溝（S0772・S1370）については、時期幅もあり、方位も異なるなど掘立柱建物と必ずしも一致しない。また、轍は中央北部に集中してみられるが、それより北では、05 － 1 区より離れた 11 － 1 区まで検出されないのは、何か理由があるのだろうか。次節で、古代の遺構について、今一度検討を加えたい。

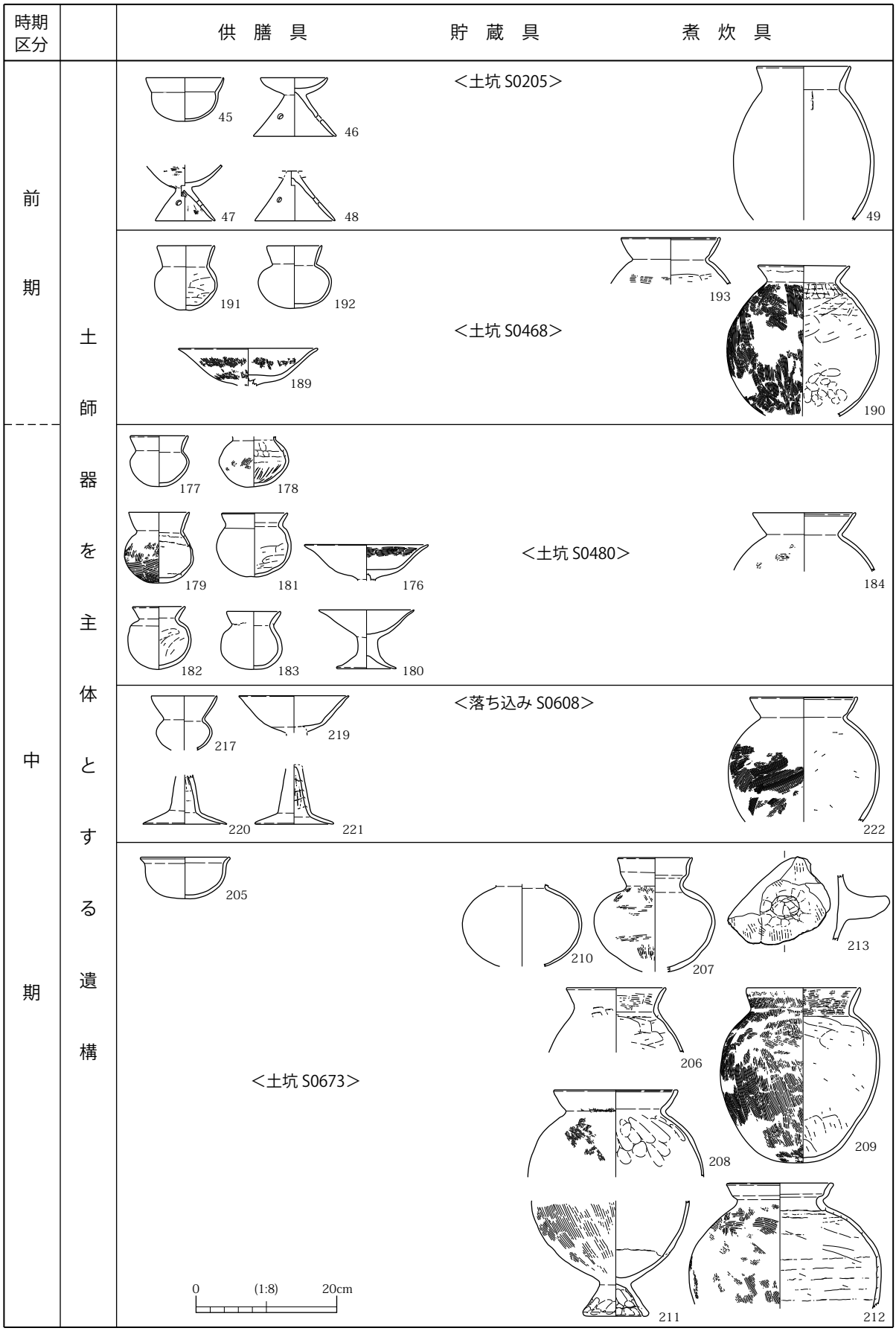


図 91　古墳時代主要遺構出土土器（1）

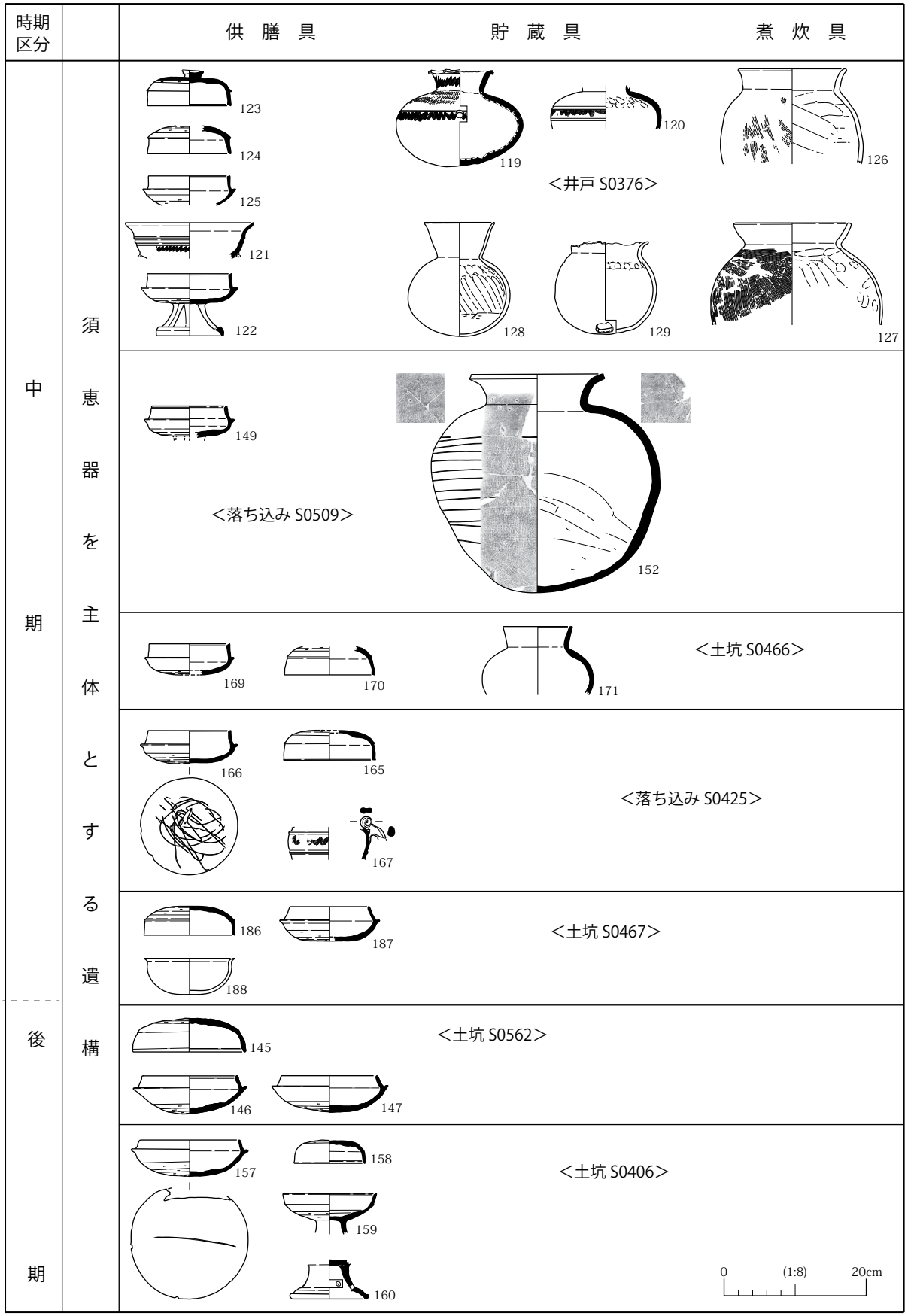


図 92　古墳時代主要遺構出土土器（2）

第２節　古代の遺構

（１）掘立柱建物、轍、大溝

池内Ｃ２－４－２区の全体平面図に、西側に隣接する池内 09 －２区の平面図もあわせて図示した（図 93)。また、この図には現在の方位を示すＸ、Ｙ座標値の他に、これまでの調査成果や文献資料に基づいて復元された条里地割も表現した。現在の座標値からは復元条里は、西及び北にややずれている。

これによると、池内Ｃ２－４－２区は丹北郡条里北三条の十九ノ坪、二十ノ坪、二十一ノ坪におさまる。調査区の南北の長さが約 100 ｍで、条境と条境の間にすっぽりと入っており、境にあたるのはちょうど現在の府道や市道といった道路である。東西は、２つの里境を挟んで３つの坪内に存在するのだが、里境には現行の用水路が存在する。従って、今回の調査では、明白な条里遺構は検出できなかった。

現在の道路や水路が里境、坪境に位置していることは、古代に施行された条里地割を意識した土地区割が、連綿と踏襲されている証拠に他ならない。

掘立柱建物は列を復元したのみのものも含めてだが、14 棟を検出した。規模や向きなど、特徴を表す項目をまとめて表２に示した（第４章第１節（１）参照)。

掘立柱建物は、Ｉ－ｂ１、Ｉ－ｃ２区、Ｉ－ｅ区を除いた広範囲な調査区でみられる。古墳時代までの遺構が調査区の中央、南北方向に集中してみられるのに対し、古代の遺構は南に少なく北半の東西に広がってみられる。これは、古墳時代から古代のある段階で、土地開発によって自然地形を改変し、平坦化する行為によって , 東西の広い範囲で土地利用されるようになったためと推測する。

例外はあるが、梁行２間、桁行３間程度の小規模な建物が２、３棟ずつかたまって検出された。

周囲に柵列をもつような建物もあるが、ほとんどはもたない。09 －２区で検出した掘立柱建物１や掘立柱建物２のような庇付きの大形建物や、05 －１区で検出したような堀で区画される居館や、屋敷墓をもつ屋敷地は検出されていない。

また、建物の向きは、掘立柱建物５と掘立柱建物７は正方位からは 45°斜めになるようだが、それ以外の建物は、主軸が東西もしくは南北のどちらかに揃っている。Ｉ－ａ区やＩ－ｃ区では、建物群を囲むように、南北と東西が直交するＬ字形の溝なども検出されている。幅、深さとも小さいが、これを区画溝とするなら、やはり方位を意識した土地利用がなされていると言える。掘立柱建物の周辺に井戸とみなされる土坑は少数ながら検出できるが、土壙墓などは検出されていない。

掘立柱建物の時期は、平安時代前期、９世紀後半から 10 世紀前半におさまるものが多い。Ｉ－ｃ区で検出された掘立柱建物や土坑などは、これより若干時期が新しくなるようである。

池内遺跡のこれまでの調査でも、９世紀から 12 世紀までの数時期の集落が検出されている。今回の調査区で検出した建物は、その中で比較的古い時期のものと言えよう。池内遺跡全体の古代集落をみたとき、11 世紀代の集落は 05 －１区や 11 －３区など北西に多くみられる傾向がある。集落の主体が南東から北西へと移動していったと考えられる。

小規模な建物数棟で構成される単位はムラではなく、あくまでも家長の住む母屋とそれに付随する副屋という群であろう。また、第１節でも述べたが、出土遺物に希少性があるものがほとんどないことからも、今回検出した建物群は当時の一般的な農村集落だったと考える。

掘立柱建物と切り合うように調査区の中央でみられたのが多数の轍である。轍は特にＩ－ａ区西半、

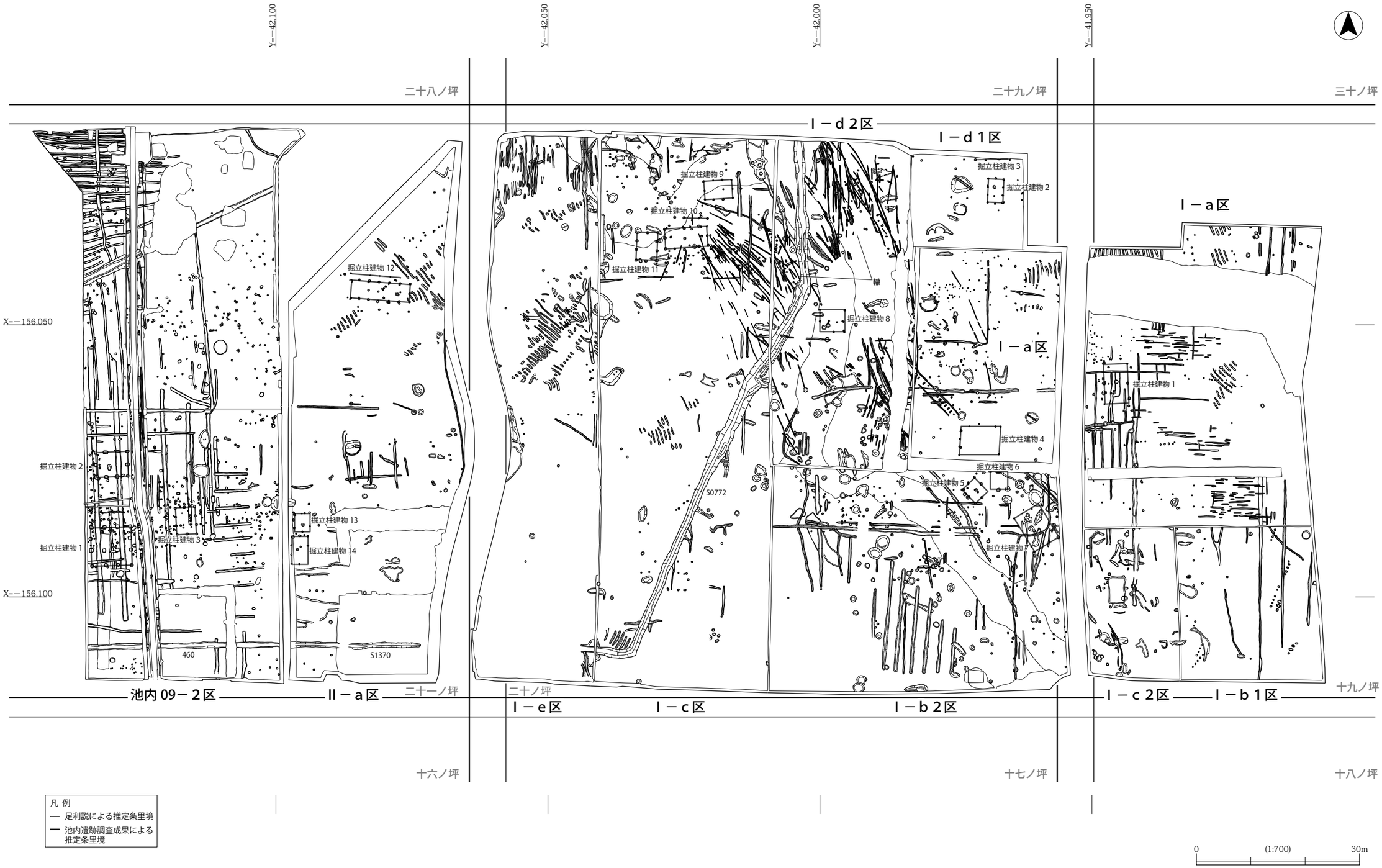

Y=−42,100
Y=−42,050
Y=−42,000
Y=−41,950
二十八ノ坪
二十九ノ坪
三十ノ坪
Ⅰ－d２区
Ⅰ－d１区
Ⅰ－a区
Ⅰ－a区
X=−156,050
X=−156,100
掘立柱建物 12
掘立柱建物 9
掘立柱建物 10
掘立柱建物 11
掘立柱建物 8
掘立柱建物 3
掘立柱建物 2
掘立柱建物 1
掘立柱建物 4
掘立柱建物 6
掘立柱建物 5
掘立柱建物 7
掘立柱建物 13
掘立柱建物 14
掘立柱建物 3
掘立柱建物 2
掘立柱建物 1
轍
S0772
460
S1370
池内 09－２区
Ⅱ－a区
二十一ノ坪
二十ノ坪
Ⅰ－e区
Ⅰ－c区
Ⅰ－b２区
Ⅰ－c２区
Ⅰ－b１区
十九ノ坪
十六ノ坪
十七ノ坪
十八ノ坪
凡 例
足利説による推定条里境
池内遺跡調査成果による推定条里境
0
(1:700)
30m

図 93　全体平面図

Ｉ－ｄ２区全域、Ｉ－ｃ区北西部などに集中してみられる。幅 1.5 mの間隔で、長いものは約 50 mの長さにわたって進行状況がたどれる。

轍は北西から南東という、正方位に対して斜め 45°の角度に進行するように検出される。大きくは２か所、Ｉ－ｄ２区の北端とＩ－ｃ区の北側を要として、そこに収束されるように、扇状に広がる。その最大幅は約 20 mにわたる。轍の進行状況を見る限り、定まった規格の、それも東西や南北に則って道があったとは考え難い。道のないところを通ったと考えるのが自然である。

他の古代遺構との新旧、及びその機能、用途に着眼する。

轍の中に遺物が含まれるものがごく少数だったため、正確な時期が不明である。しかし、掘立柱建物群と同時期か否かを考察する際、その向きが大きな検討課題となる。というのは、掘立柱建物とその周辺の遺構のほとんどが正方位を意識して構築されているのに対し、斜めの方向をとるからである。掘立柱建物 10 の内部まで轍が見られる箇所もあり、検出状況では轍が建物を切る、つまり、轍が建物より新しいようである。掘立柱建物の時期は９世紀後半から 10 世紀前半とみているので、それ以降となる。

轍と溝 S0772 の新旧についても言及する必要があろう。調査時の所見では、溝 S0772 の埋土上にも轍が見受けられた。すると、溝 S0772 の埋没後に轍が形成されたことになる。溝 S0772 の遺物の時期は、８世紀後半から 10 世紀前半のものを含むが、９世紀代のものが最も多く、10 世紀前半を廃絶時期と考えている。溝 S0772 は掘立柱建物群より古くから存在し、同じ頃に廃絶したと考えられる。

轍は第３層上面の遺構であることは間違いなく、古代では溝 S0772、掘立柱建物群、轍の順に新しくなると考えられる。ただ、時期差はさほどなく、すべて平安時代前期から中期の遺構として捉える。

また、この轍の残るほどに何を運搬したかである。第一に考えられるのは、土地開発に伴う土砂の運搬である。南では広がって検出できる轍が北にいくほど集約して一箇所にみられるのは、調査区南側の土を削平して牛車に載せ、北側のどこかで降ろして土をならしたためか。北側で集約された轍がそこから東西に広がらないのは、積載荷（土砂）を降ろしてからは人力で小さい単位で運搬したとも考えられるが、あくまでも推測の域を出ない。

あるいは、積載荷は土砂ではなく物資で、掘立柱建物９、10、11 が住居でなく倉庫などであり、ここが物資の集約地点だったと捉えることもできる。

今回検出した遺構中で最大規模の遺構が、溝 S0772 とその続きと捉えられる溝 S1370 である（図 93）。

溝 S0772 はＩ－ｄ２区の北端からほぼ垂直に約 25 m南北にのび、そこから 30°の角度で西に曲がる。そのままＩ－ｃ区へと入り、Ｉ－ｃ区を斜めに縦断して約 60 m南下していく。Ｉ－ｃ区の南端近くで今度は西に曲がり、東西方向の溝となる。Ｉ－ｅ区へ入るとすぐに撹乱によって途切れる。

撹乱や用水路を挟んで、Ⅱ－ａ区で東西方向の溝 S1370 が現れる。溝 S1370 はⅡ－ａ区全域を横断するが、調査区西の 09 －２区で検出した 460 溝と位置も規模も正確に合致する。溝 1370 と 460 溝は同じ溝として差し支えないだろう。溝 S0772 と溝 S1370 の間に空白地があるため別の遺構名称を与えたが、この２つの溝も同一の溝としてほぼ間違いないだろう。

すると、溝 S0772、溝 S1370、460 溝をあわせて南北長 90 m超、東西長 100 m超の長大な溝となる。

北、西とも調査区外にさらにのびているが、西側は未調査である。北側は 05 －１－３区では、延長線上に溝を検出できなかった。05 －１－３区とＣ２－４－２区との間で東西どちらかに曲がるか、収束する可能性がある。

長さだけでなく、幅 0.8 ～ 2.8 m、深さ 0.3 ～ 0.6 mある大規模な溝である（図 28、29、55、67）。平面形からも断面形からも、人為的に掘削された溝であることは間違いない。

Ⅰ－ｄ２区の北側や溝 S1370 の西端など、澱んだ箇所に集中して土器が出土した。出土遺物は８世紀後半、９世紀前半から９世紀後半、10 世紀前半までと時期幅があり、この溝が奈良時代から平安時代中期まで、長期間機能していたと考えられる。この溝の廃絶時期を 10 世紀前半と捉える（図 74、87）。掘立柱建物群より先行して形成され、同時期に廃絶することになる。

溝 S0772 が古代の居住域に伴う遺構とした場合、２つの疑問点が生じる。

１つは古代の遺構のほとんどが、南北か東西のどちらかの方位にあわせて作られているのに、この溝が途中で斜めになる部分をもつのはなぜか。南北にまっすく延伸して、直角に西に曲げることができない要因が何かあったのだろうか。

斜めになる部分の周囲では、遺構が余り検出されておらず、自然地形として掘削を妨げるものがあったかは不明である。高まりをもつ遺構か自然地形があったため、それを避けて掘削したとして、その土砂を運搬するため使用された車両の痕跡が先述の轍であるとすると、無数の轍の説明がつく。しかし、溝 S0772 の両脇、Ⅰ－ｂ２区の西端やⅠ－ｃ区やⅠ－ｃ区の南で轍が検出されていないことや、溝に沿って轍が確認されていない、溝と轍が同時期の遺構でなければいけないので、推測の域を出ない。

ただし、池内遺跡の北東にある長原遺跡でも多数の轍が検出されている。江浦洋はこれを古墳の墳丘を削平した土地開発によるもので、８世紀代に開発が行われたことを示唆する。当遺跡でも７世紀から８世紀後半までの間、断絶があって再び居住域が形成されるので、この間に土地開発が行われたとも考えられる。

２つ目はこの溝の用途が何であるか、ということである。小規模な単位での建物群に伴う溝はあるが、これを小単位の区画溝とし、溝 S0772 と溝 S1370 を大規模な区画溝とするなら、並外れて大きなものとなる。しかし、大規模な集落を区画する溝としても溝によって東西に分けられる建物に時期や規模の差異はないように思われる。ただし、調査区の南端で東西に曲がること、北側も東西どちらかに曲がると推測されることから、やはり１町単位の地区割を意識して構築された溝であることは間違いないだろう。

現時点では、奈良時代から平安時代前期までに、土地開発によって整備された水路という推論をたてておく。09 －２区のさらに西側を調査する機会が生じたとき、南北方向に同規模の溝が検出されるなら、よりこの溝の機能や性格は明確になるであろう。

＜参考文献＞

足利健亮　1985 「第２章３　条里制」『松原市史』第１巻　松原市教育委員会

江浦洋　1996 「轍と開発－新家遺跡「土俵敷き遺構」の再検討」『大阪文化財研究』第 10 号　財団法人大阪府文化財センター

写　真　図　版

１．池内遺跡（Ｃ２－４－２）遺構面全景（空撮合成写真　左が北）

写真図版２

１．調査区遠景（南西から）

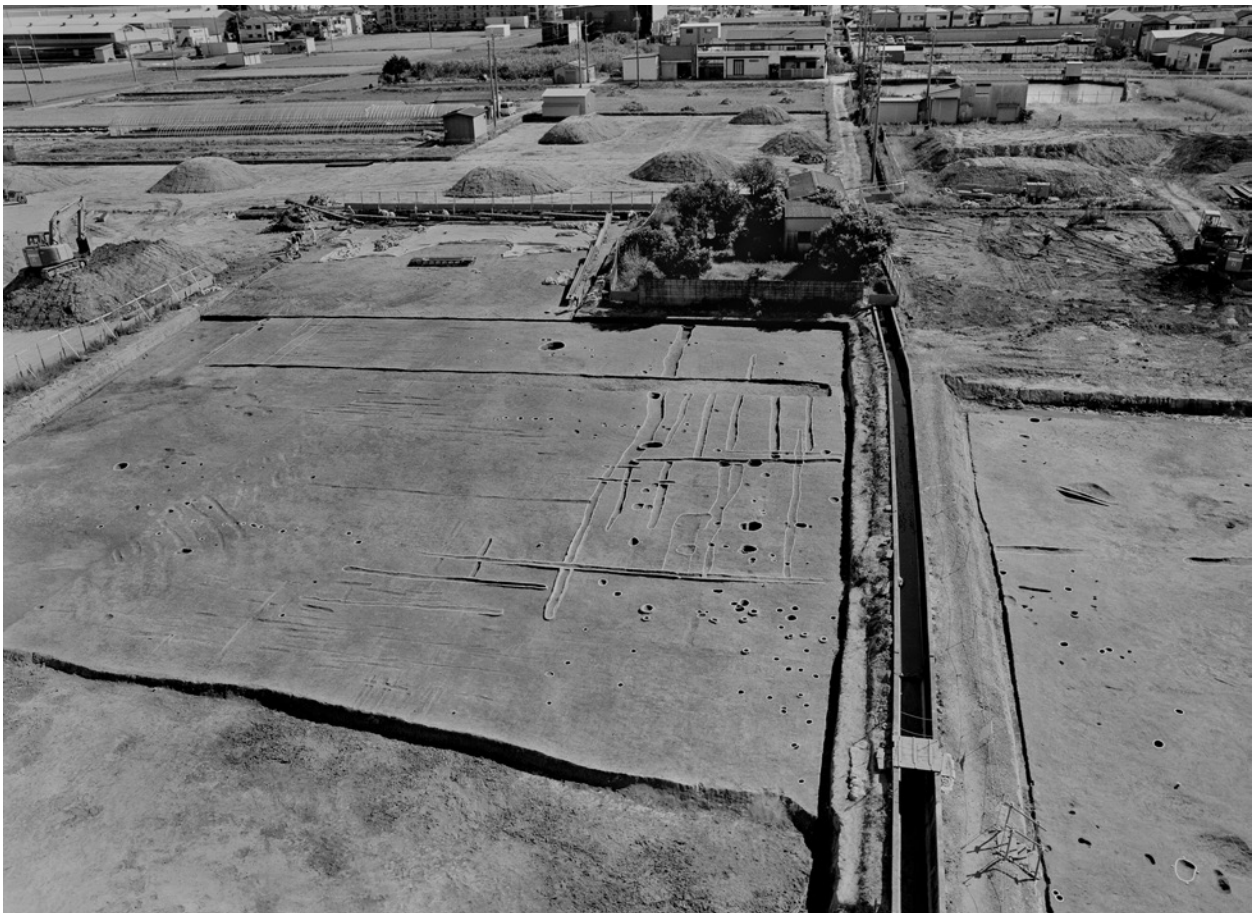
２．調査区遠景（東から）

１．Ｉ－ａ区西半全景（北から）

２．Ｉ－ａ区西半全景（北東から）

写真図版４

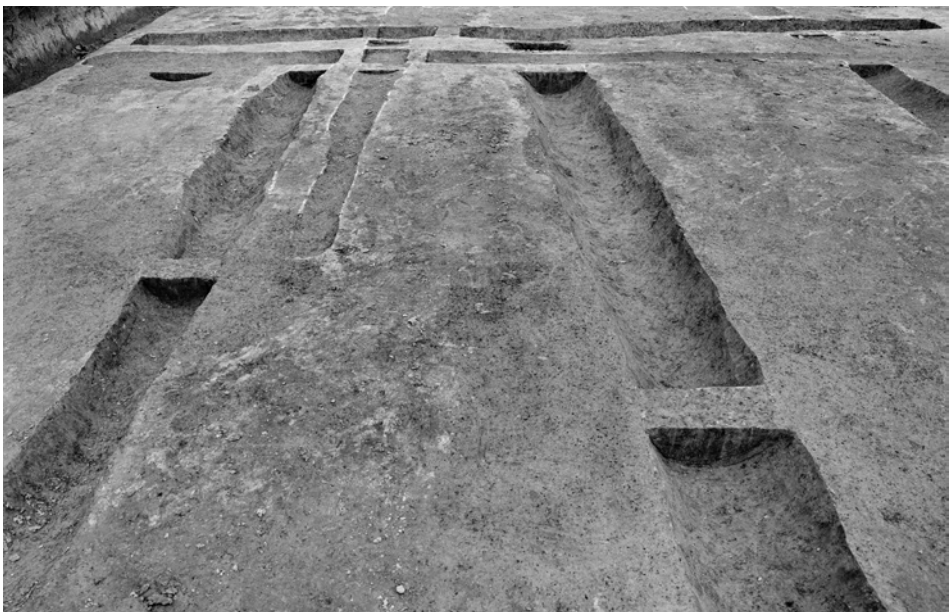
１．Ｉ－ａ区東半全景（北西から）



２．Ｉ－ａ区東半全景（北から）

１．Ｉ－ａ区東半近景
（南西から）

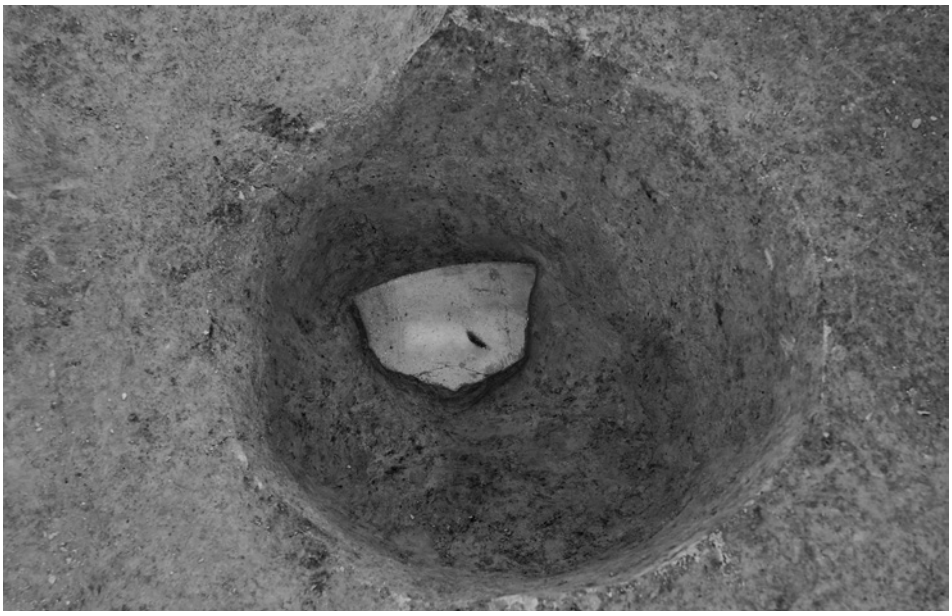
２．掘立柱建物１（北西から）



３．Ｉ－ａ区東半溝群
（南から）

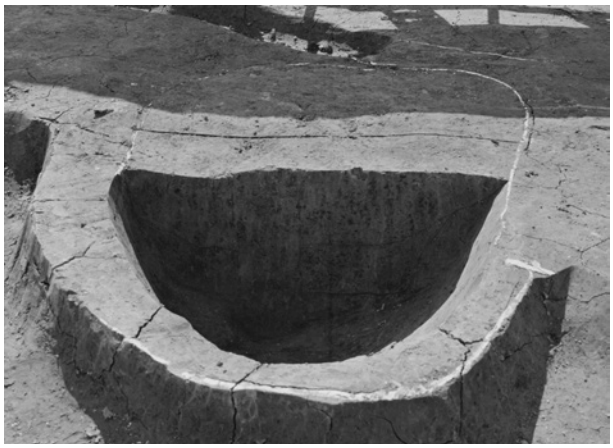
写真図版６

１．土坑 S0205
土器出土状況(北東から)

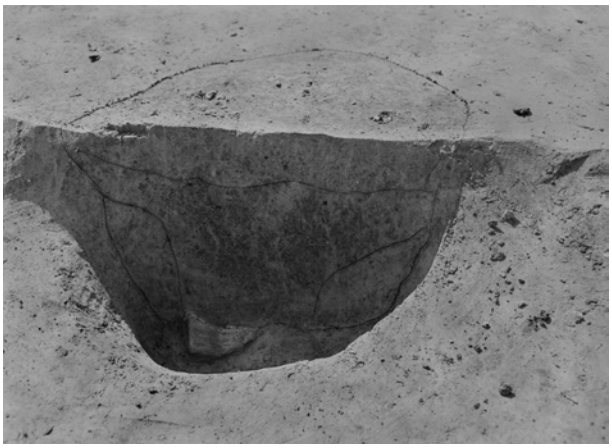


２．土坑 S0199
土器出土状況
（西から）

３．土坑 S0202
土器出土状況（北から）

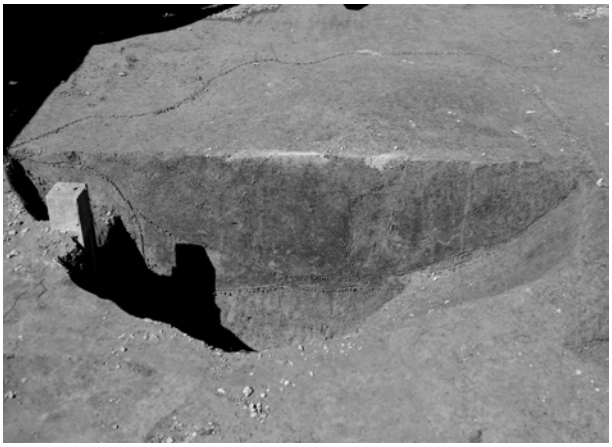


1．土坑 S0144 断面（東から）



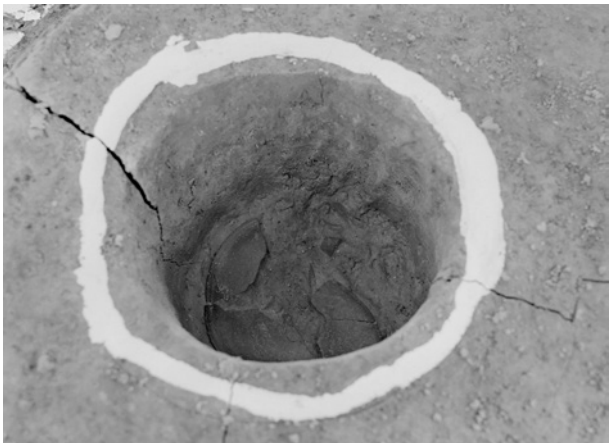
2．土坑 S0199 断面（北から）

3．掘立柱建物 1 柱穴 S0092 断面（北西から）



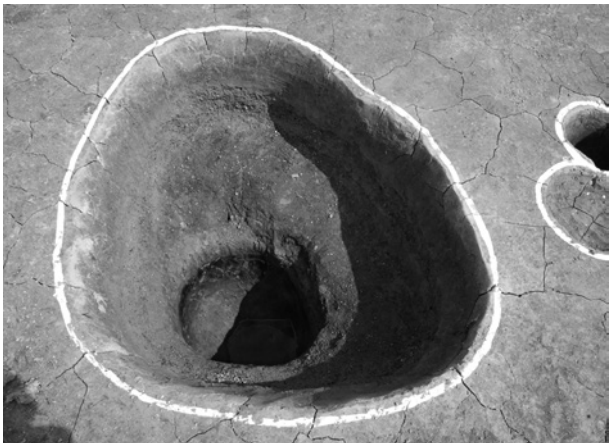
4．土坑 S0207 断面（南から）

5．柱穴 S0190 断面（南から）



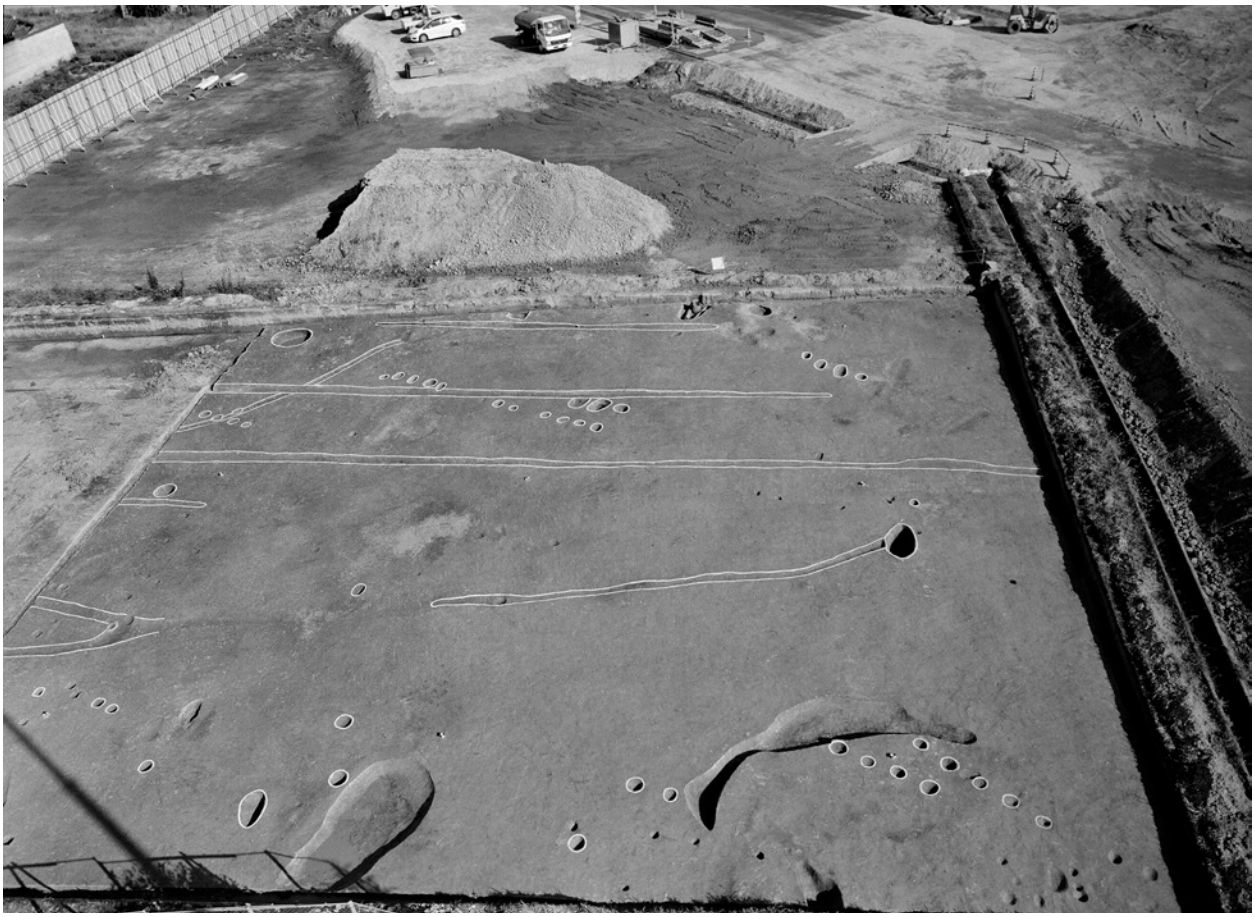
6．柱穴 S0301 土器出土状況（南から）

7．柱穴 S0190 木製品出土状況（南から）



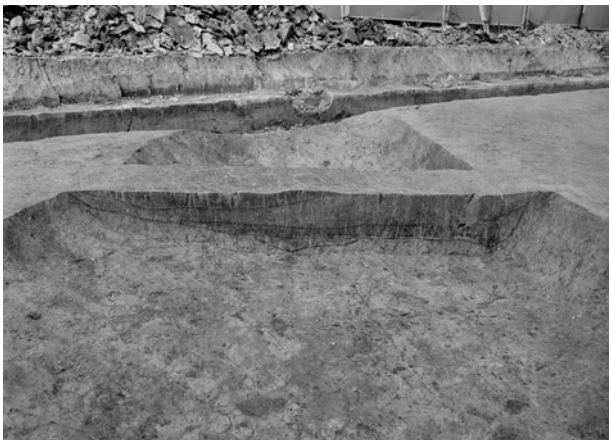
8．井戸 S0142（南西から）

写真図版８



１．Ⅰ－ｂ１区全景（西から）

２．Ⅰ－ｂ１区南壁断面（北から）



３．土坑状変形 S0321 断面（南東から）

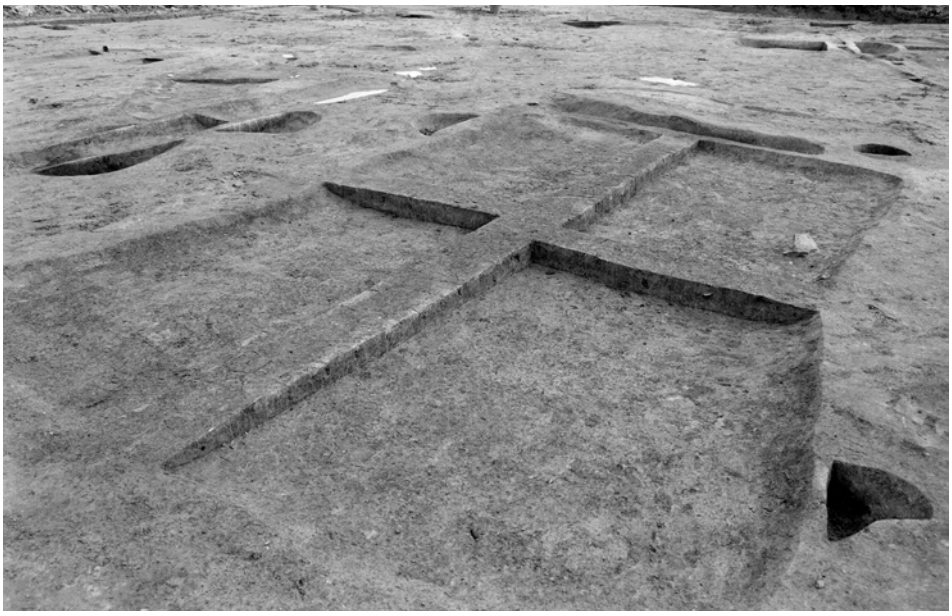
４．土坑 S0328 断面（南から）

５．井戸 S0337 土器出土状況（北から）

１．Ｉ－ｃ２区遺構検出状況（南東から）

２．Ｉ－ｃ２区全景（南東から）

写真図版 10



1．土坑 S0825 検出状況
（北西から）

2．土坑 S0825（北西から）

3．Ｉ－ｃ２区深掘
トレンチ断面(北東から)

1．井戸 S0830 断面
（北西から）

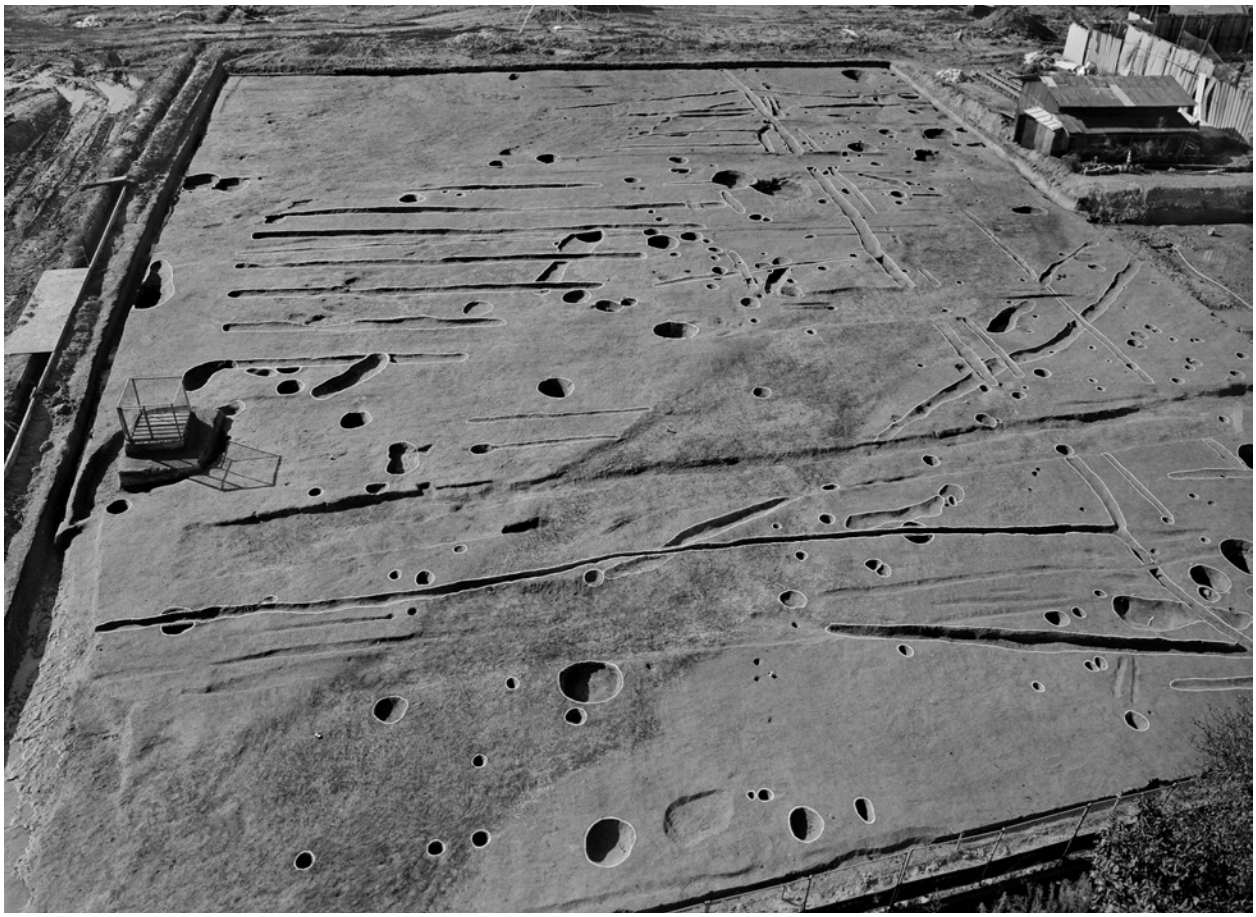
2．土坑 S0841 断面（東から）

3．土坑 S0325
土器出土状況（西から）

写真図版 12

１．Ｉ－ｂ２区全景（南東から）

２．Ｉ－ｂ２区全景（南から）



１．Ⅰ－ｂ２区全景（東から）

２．Ⅰ－ｂ２区全景（西から）

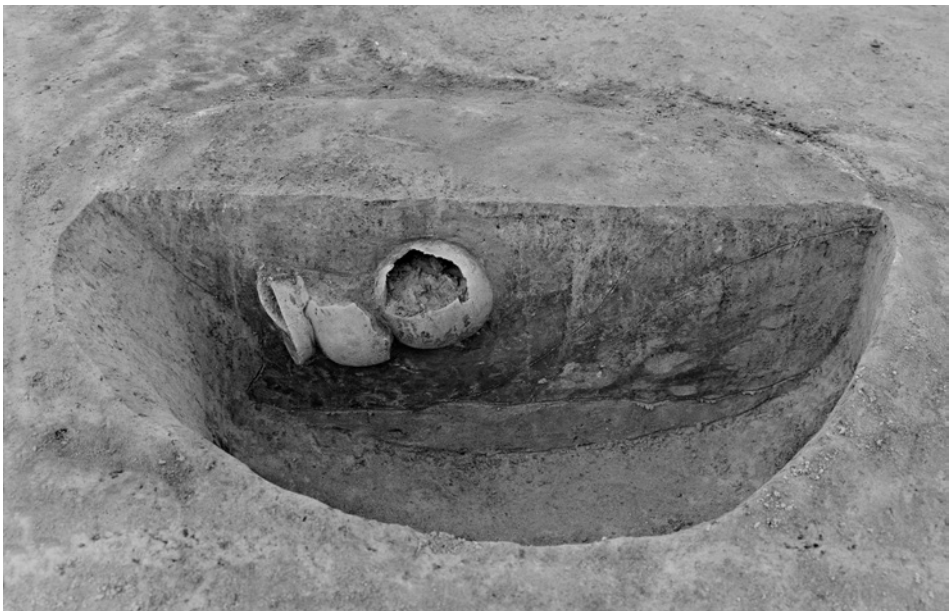
写真図版 14

１．掘立柱建物５
（北西から）

２．Ⅰ－ｂ２区南部中央溝群
近景（南から）

３．Ⅰ－ｂ２区北東部
近景（北西から）

1．土坑 S0540
土器出土状況（南西から）

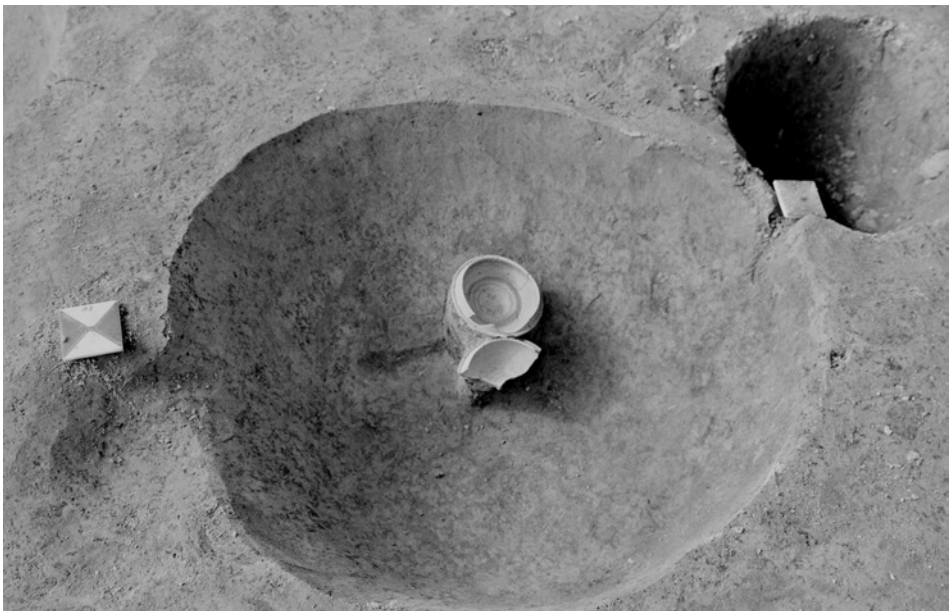


2．土坑 S0515 断面（東から）

3．土坑 S0515
土器出土状況（北東から）

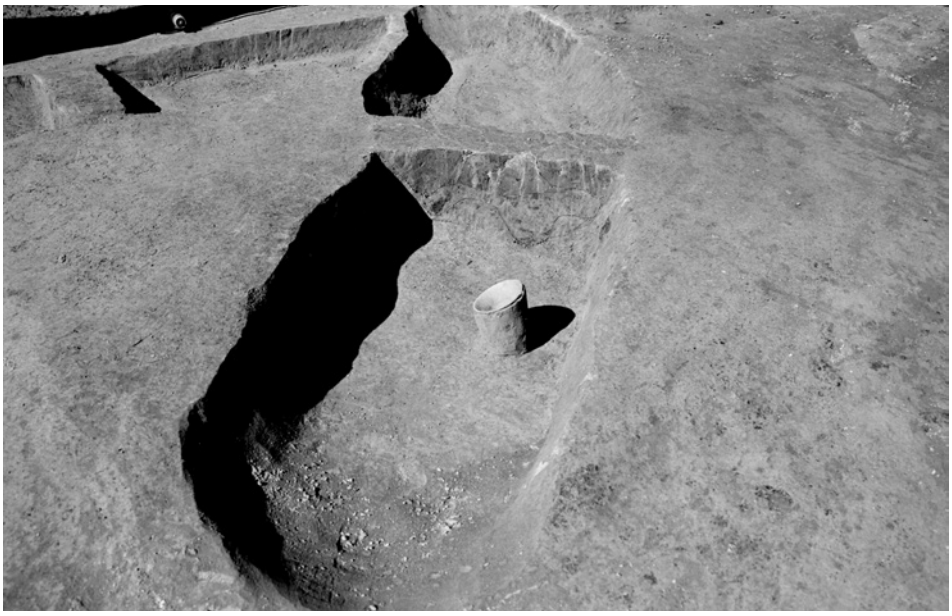
写真図版 16

1．井戸 S0402
土器出土状況（東から）



2．土坑 S0562
土器出土状況（東から）

3．土坑 S0480
土器出土状況（東から）



1．土坑 S0539
土器出土状況（南東から）

2．井戸 S0376
土器出土状況（西から）

3．土坑 S0358 断面（南から）

写真図版 18

1．土坑 S0467、土坑 S0468 断面（南から）

2．土坑 S0466 断面（南から）

3．土坑 S0357 断面（南から）

4．土坑 S0363 断面（南から）

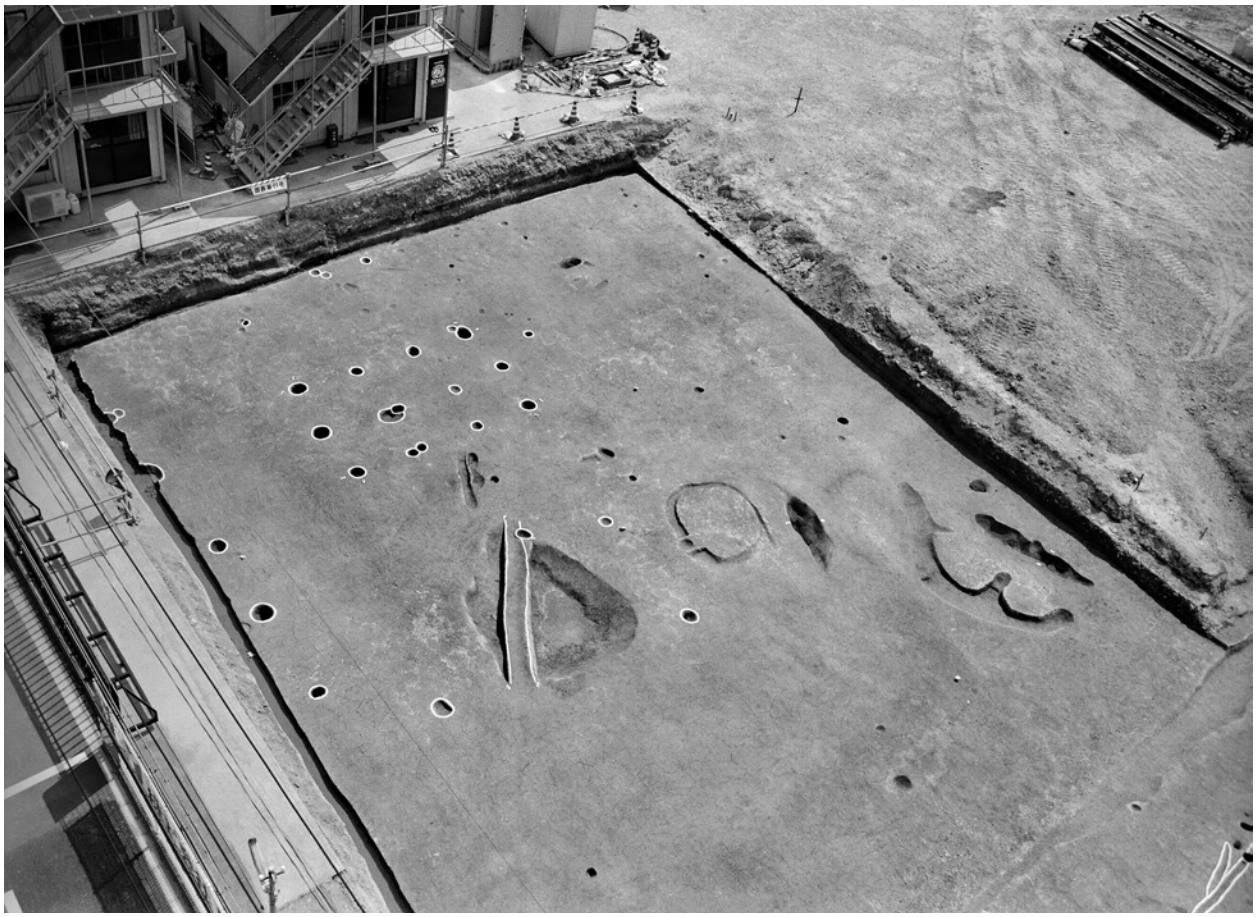
5．掘立柱建物 7 柱穴 S0373 断面（南から）

6．柱穴 S0368、柱穴 S0369 断面（南から）

7．土坑 S0560 断面（南から）

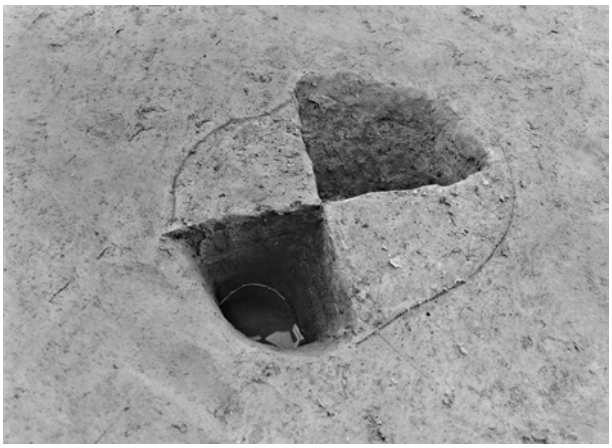
8．土坑 S0565 断面（東から）

1．Ⅰ－ｄ１区遺構検出状況（東から）



2．Ⅰ－ｄ１区全景（北西から）

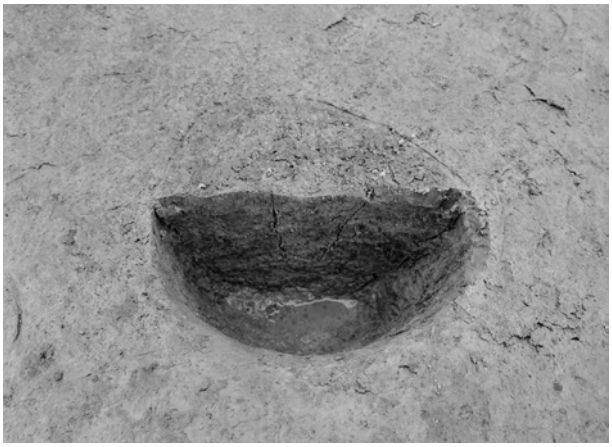
写真図版 20



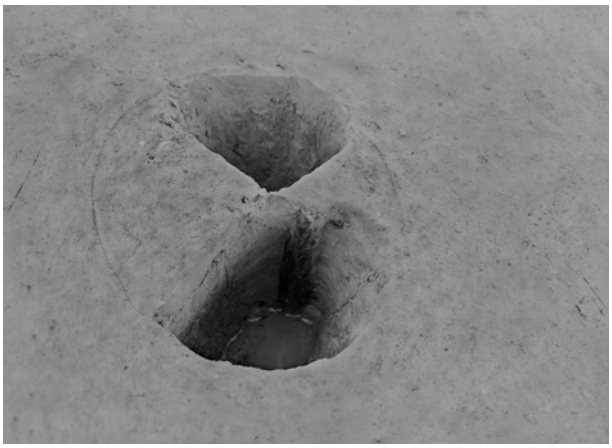
1．掘立柱建物２柱穴 S0891 断面（東から）

2．掘立柱建物２柱穴 S0892 断面（東から）

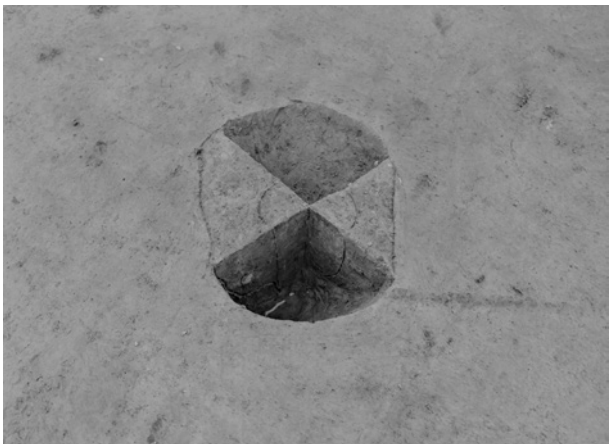
3．掘立柱建物２柱穴 S0893 断面（東から）



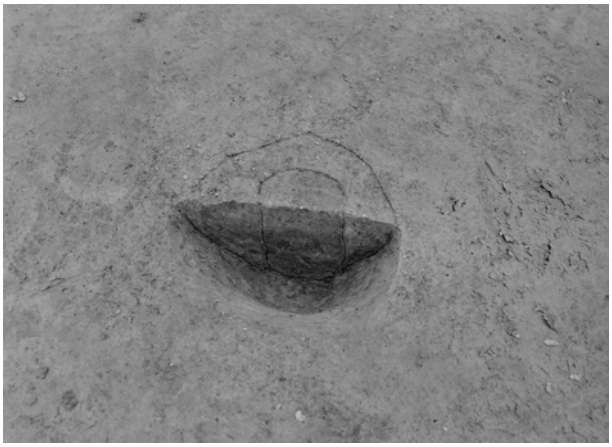
4．掘立柱建物２柱穴 S0901 断面（北から）



5．掘立柱建物２柱穴 S0900 断面（北東から）



6．掘立柱建物２柱穴 S0897 断面（南西から）



7．掘立柱建物２柱穴 S0898 断面（西から）

8．掘立柱建物３柱穴 S0886 断面（南から）

１．Ｉ－ｄ２区全景（南東から）

２．Ｉ－ｄ２区全景（南から）

写真図版 22

１．Ｉ－ｄ２区全景（北東から）

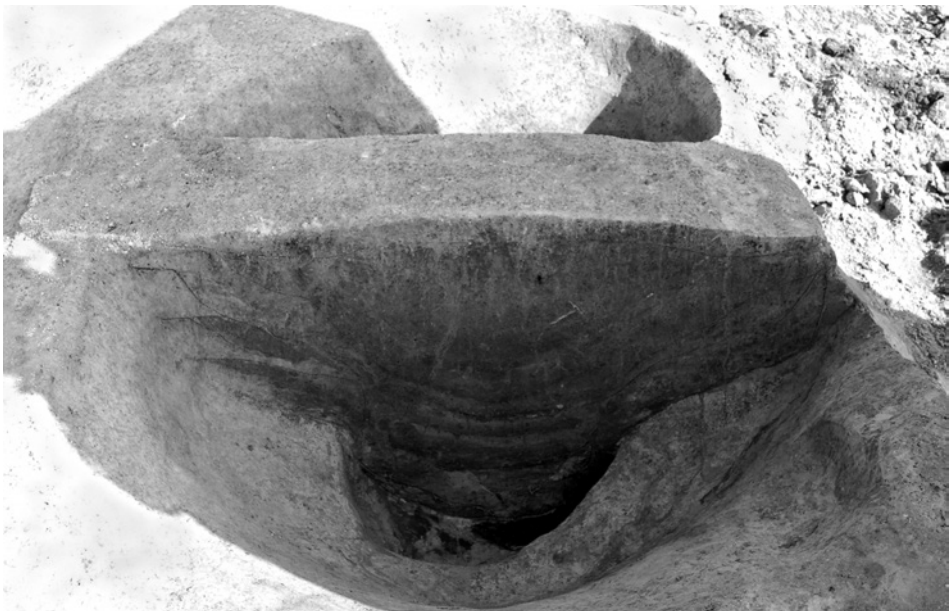
２．Ｉ－ｄ２区全景（北から）

1．溝 S0772(南西から)

2．溝 S0772 断面 (北から)

3．溝 S0772
土器出土状況 (南から)

写真図版 24



1．土坑S0977断面(南から)

2．土坑S0977
土器出土状況（南から）

3．土坑S1134断面(南から)

1．土坑 S1037 断面（西から）

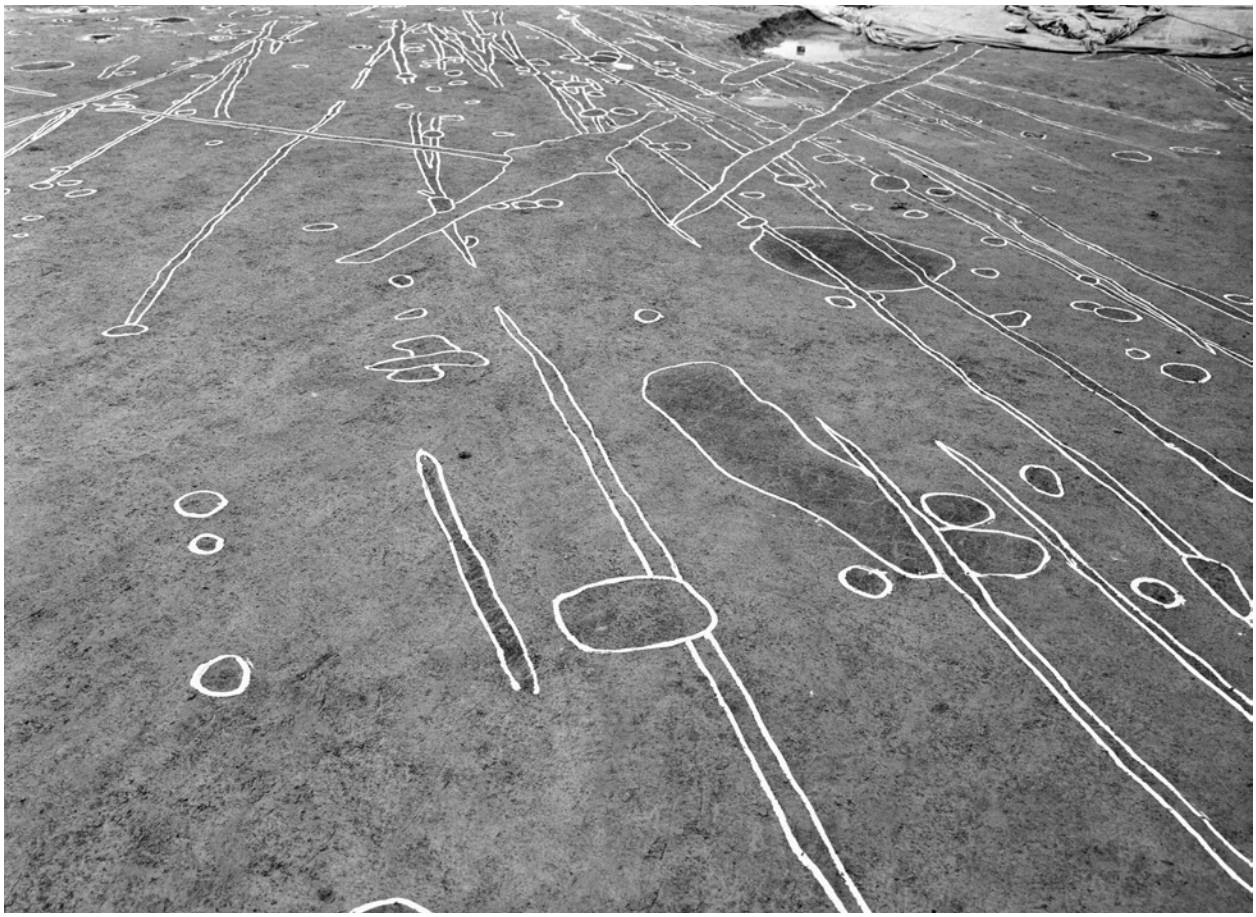
2．井戸 S0986 断面（北から）

3．土坑 S1163 断面
（南西から）

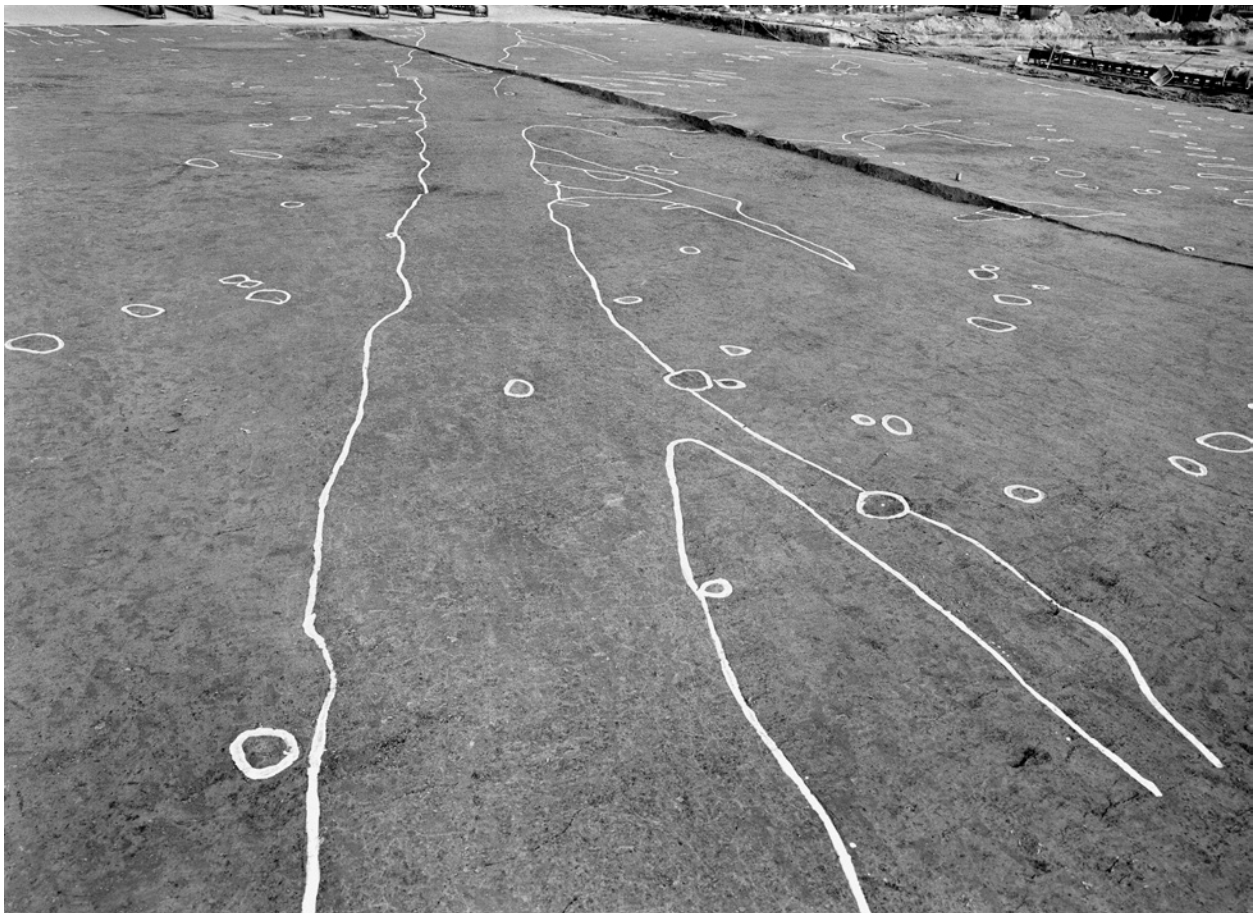
写真図版 26

１．Ｉ－ｃ区南半全景（北東から）

２．Ｉ－ｃ区北半全景（南東から）



1．Ⅰ－c 区轍検出状況（南東から）



2．Ⅰ－c 区溝 S0772 検出状況（南西から）

写真図版 28

１．Ｉ－ｃ区北半全景（北から）

２．Ｉ－ｃ区北側近景（南東から）

1．掘立柱建物 11（南西から）

2．掘立柱建物９（南東から）

写真図版 30

1．掘立柱建物 9 柱穴 S0648 断面（北から）

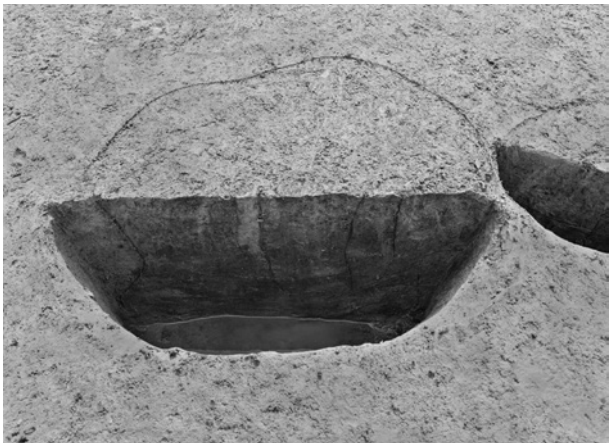
2．掘立柱建物 9 柱穴 S0658、柱穴 S0659 断面（南から）

3．掘立柱建物 11 柱穴 S0690 断面（北東から）

4．掘立柱建物 11 柱穴 S0691 断面（南から）

5．掘立柱建物 11 柱穴 S0693 断面（東から）

6．掘立柱建物 11 柱穴 S0694 断面（北から）



7．柱穴 S0695 断面（北から）

8．轍 S0743 断面（南東から）

1．溝 S0772（北東から）

2．溝 S0772（南西から）

3．溝 S0772 断面（南西から）

写真図版 32

1．土坑S0674断面(南から)

2．土坑S0731断面(西から)

3．土坑S0786断面(北から)

1．土坑 S0673 断面
（南西から）

2．土坑 S0685 断面（東から）

3．土坑 S0685
土器出土状況（北東から）

写真図版 34

１．Ｉ－ｅ区全景（南東から）

２．Ｉ－ｅ区全景（北から）

1．土坑S1169断面(西から)

2．土坑S1174断面(東から)

3．溝S1235断面（南から）

写真図版 36

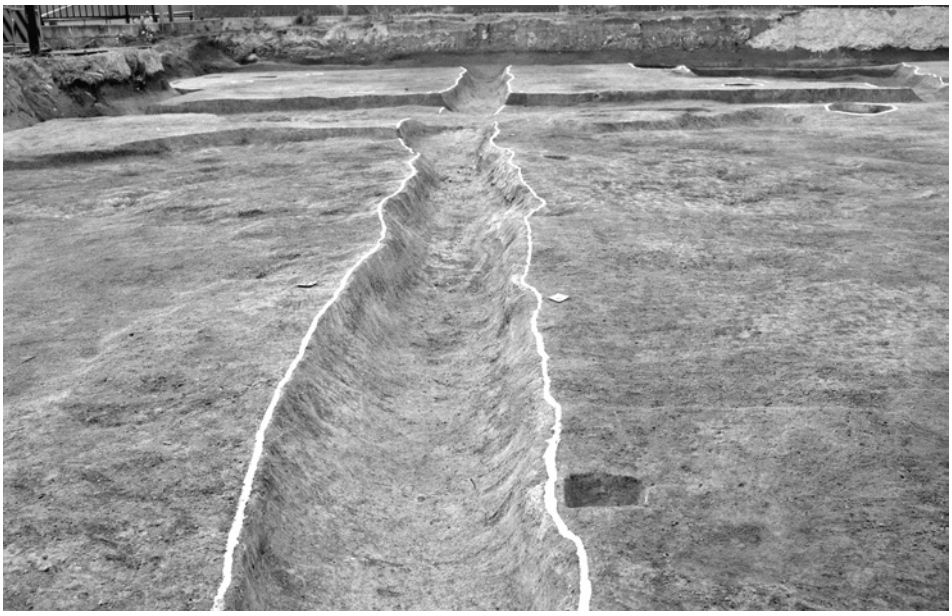
1．Ⅱ－ａ区全景（北から）

2．Ⅱ－ａ区全景（南から）

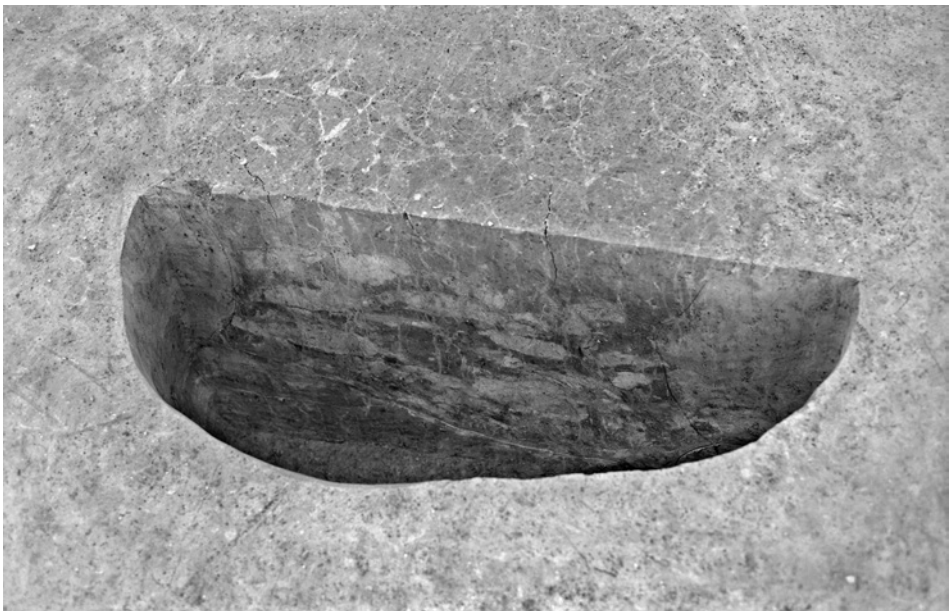
1．掘立柱建物 12 検出状況（北西から）

2．掘立柱建物 12（北西から）

写真図版 38

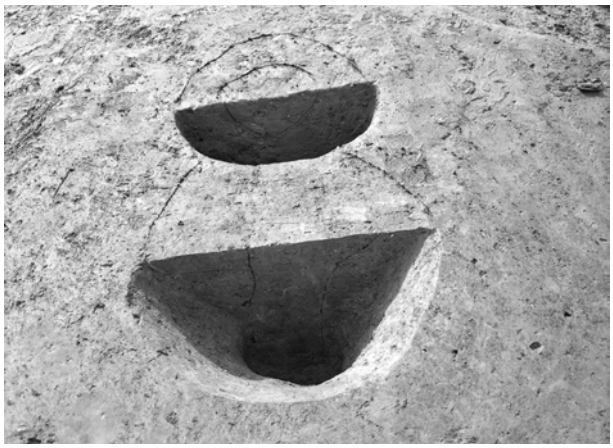


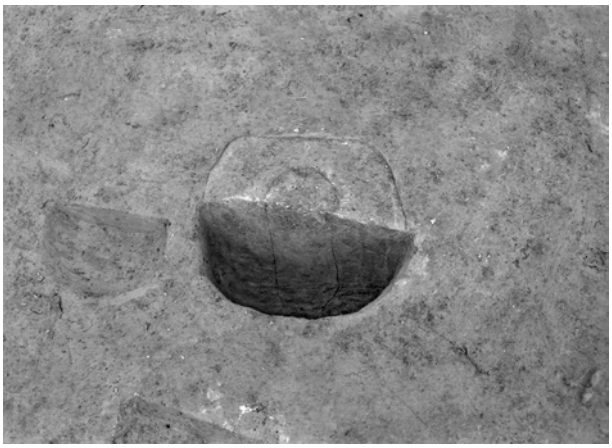
1．溝 S1370（東から）

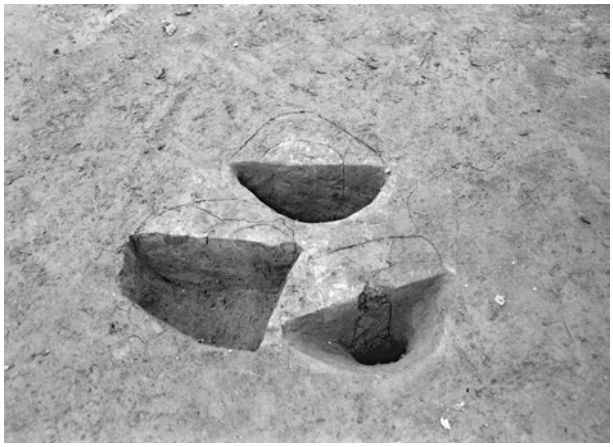


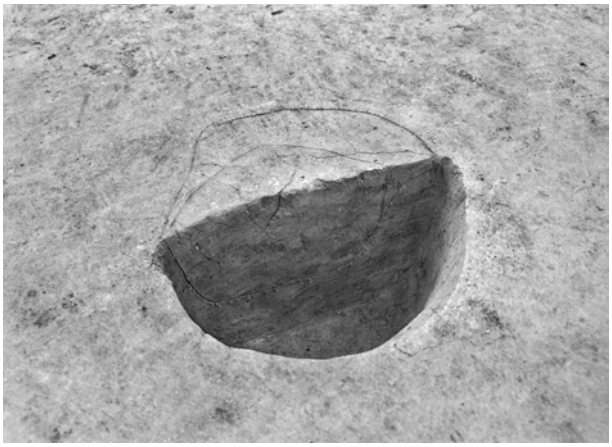
2．土坑 S1340 断面（西から）

3．掘立柱建物 13、
掘立柱建物 14
（南東から）

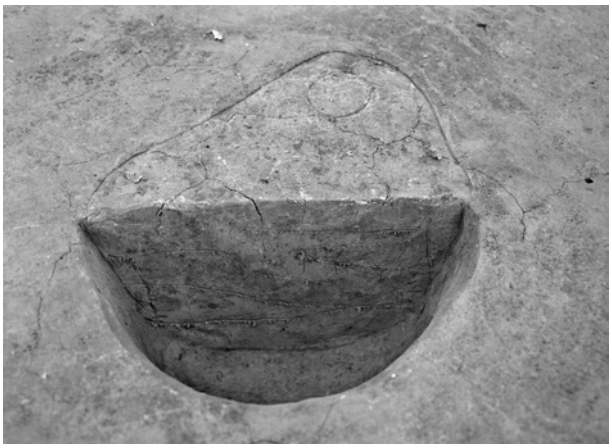

1．掘立柱建物 12 柱穴 S1264、柱穴 S1265 断面（北から）

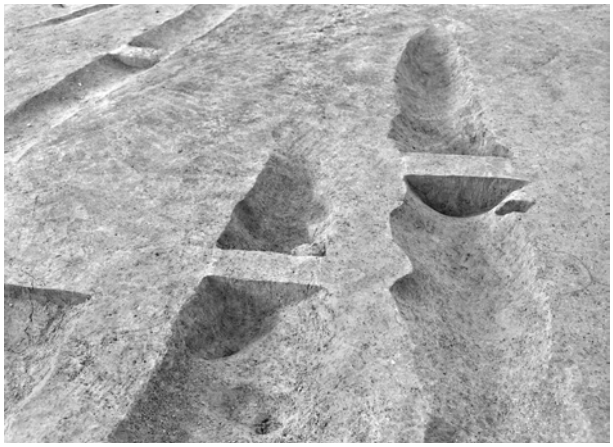

2．掘立柱建物 12 柱穴 S1267 断面（南から）

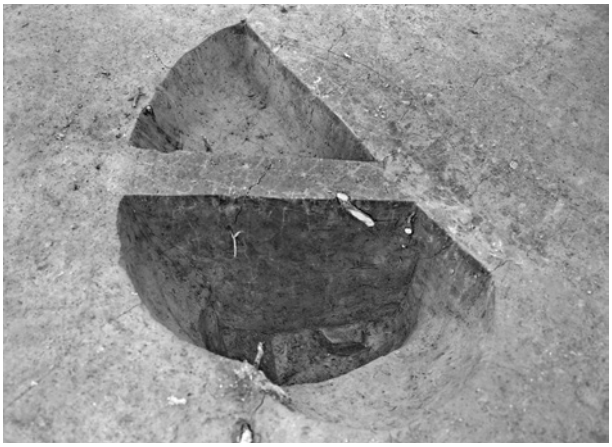

3．掘立柱建物 12 柱穴 S1272、柱穴 S1273、柱穴 S1274 断面（南から）


4．掘立柱建物 12 柱穴 S1277 断面（北から）

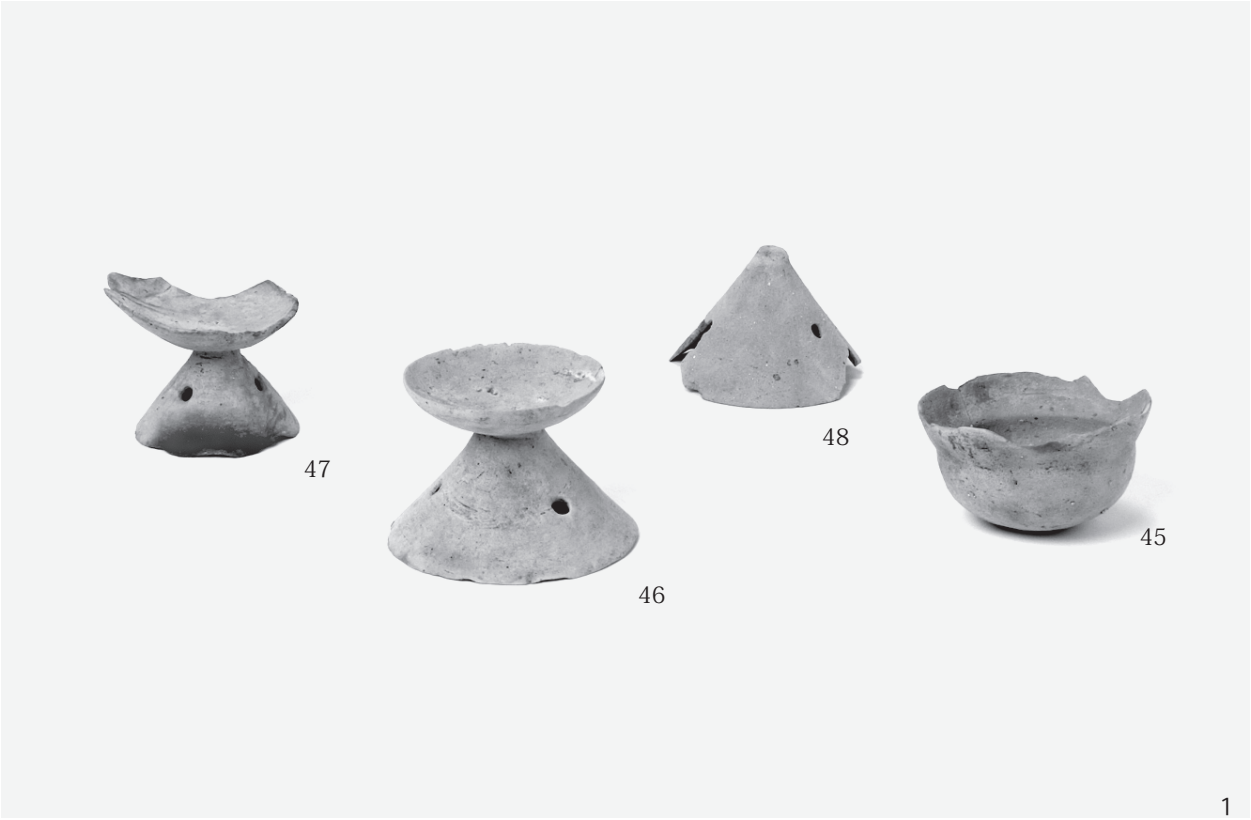
5．掘立柱建物 12 柱穴 S1281 断面（北から）

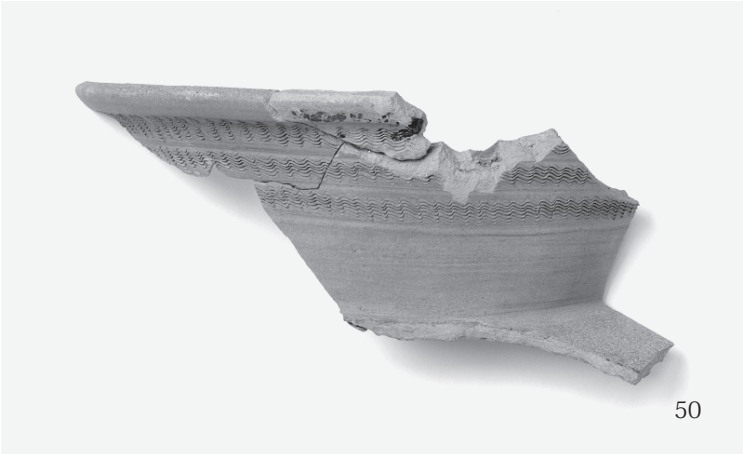

6．掘立柱建物 12 柱穴 S1279 断面（南から）

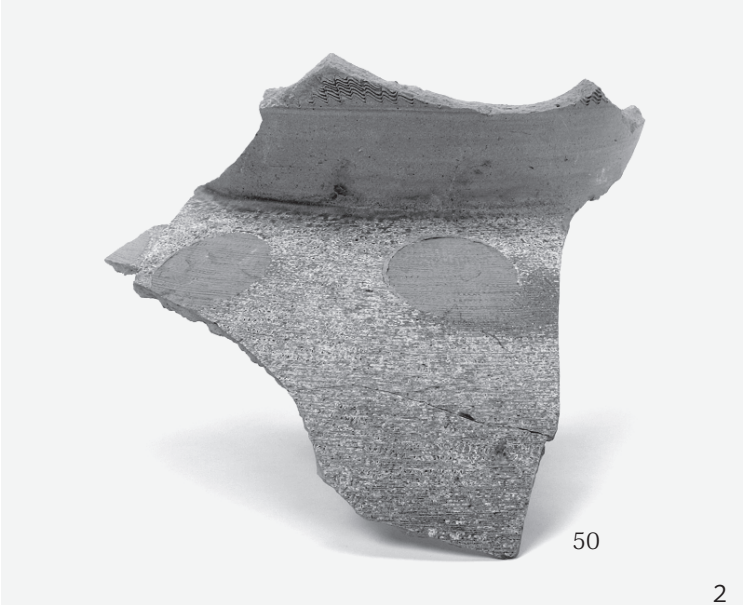

7．溝 S1311、溝 S1312、溝 S1313 断面（南東から）


8．土坑 S1339 断面（南から）

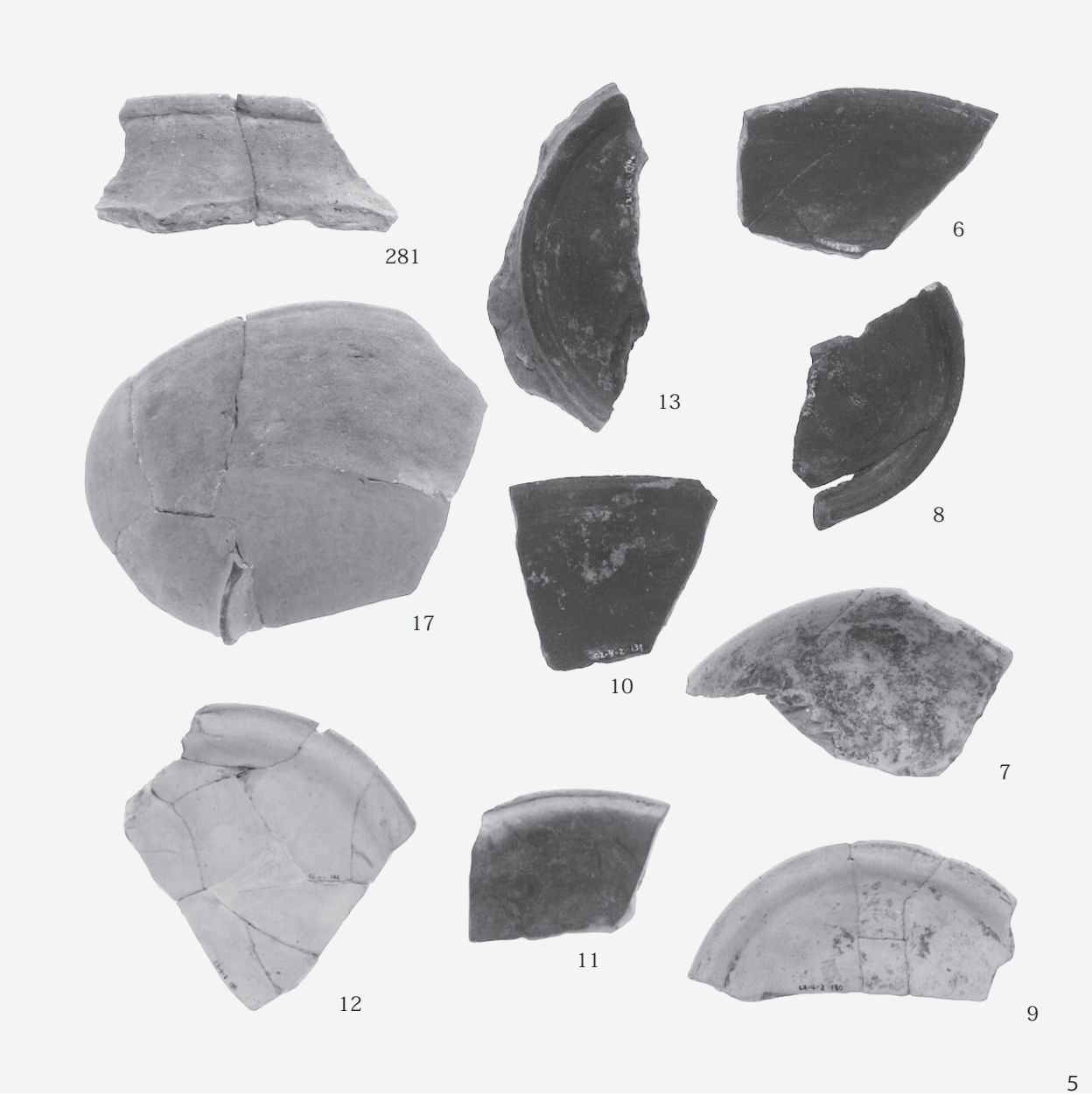
写真图版 40　Ⅰ－a 区土器





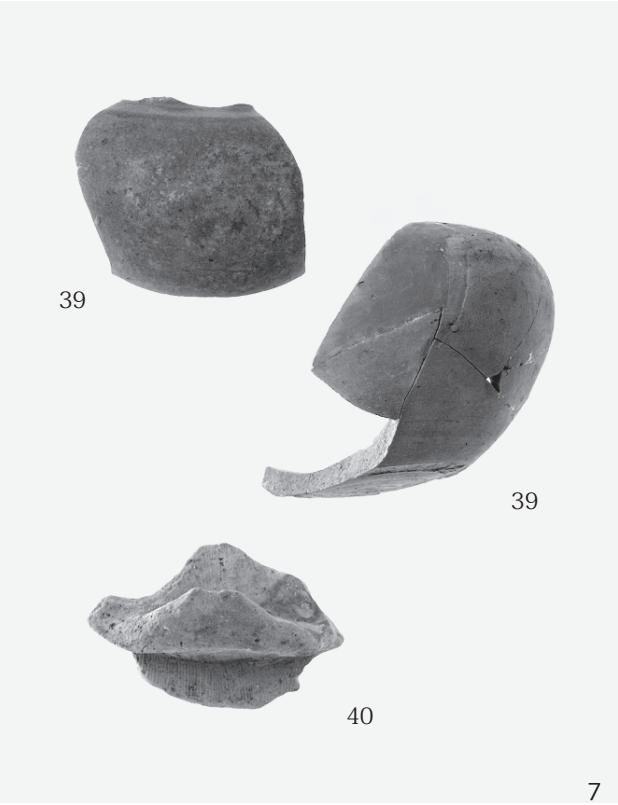


1、3．S0205　2．S0202　4．S0199



1．S0301　2．S0144　3．S0169　4．S0192　5．S0091、S0092、S0100、S0107、S0167 他

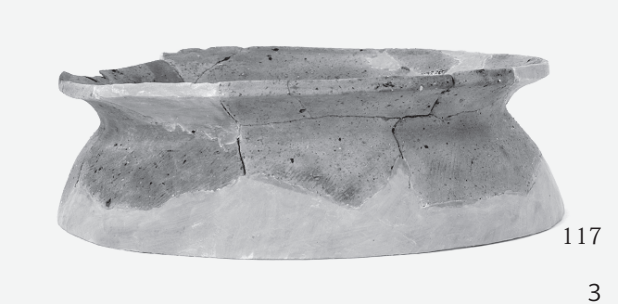
写真図版 42　Ⅰ－ｂ１区、Ⅰ－ｃ２区土器



1．S0337　2．S0321　3．S0841　4．S0325　5．S0837　6．S0825　7．１－ｃ２区第２層

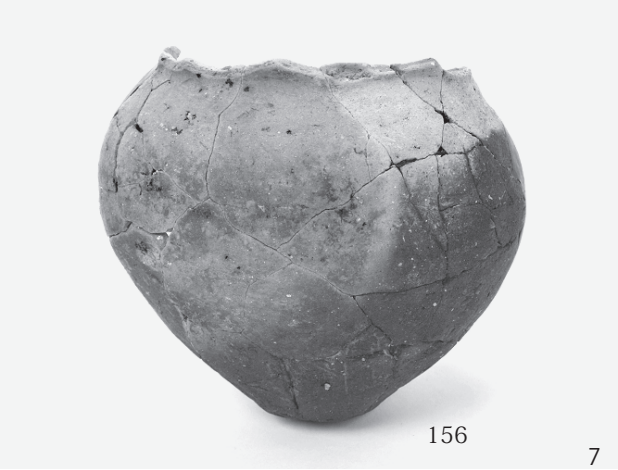
1

2

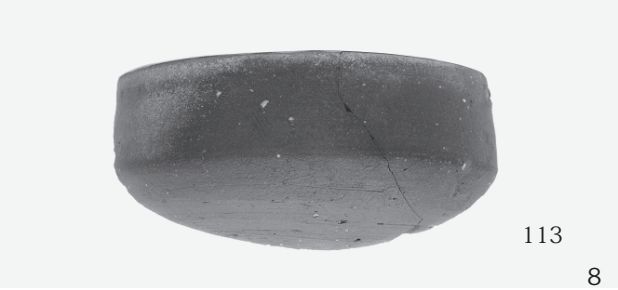


3

6



7



8

4

5

9

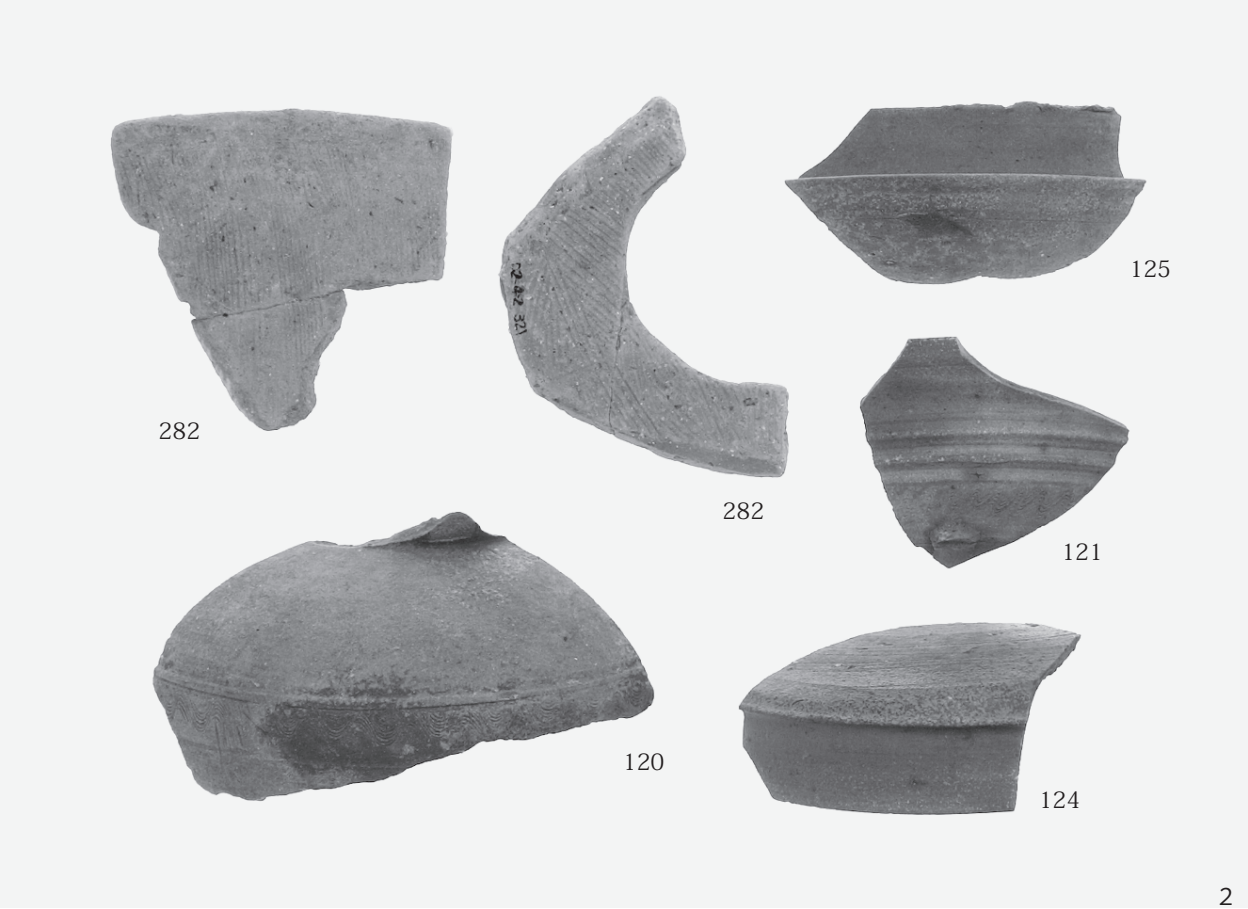
10

1、2．S0357　3～5．S0358　6．S0359、S0360　8．S0363　7、9、10．S0402

写真図版 44　Ⅰ－ｂ２区土器

1～7．S0376

1．S0376 土器集合



2．S0376 土器俯瞰

写真図版 46　Ⅰ－ｂ２区土器

1．S0480　2．S0467　3．S0470　4～6．S0468

1

2

3

4

5

6

7

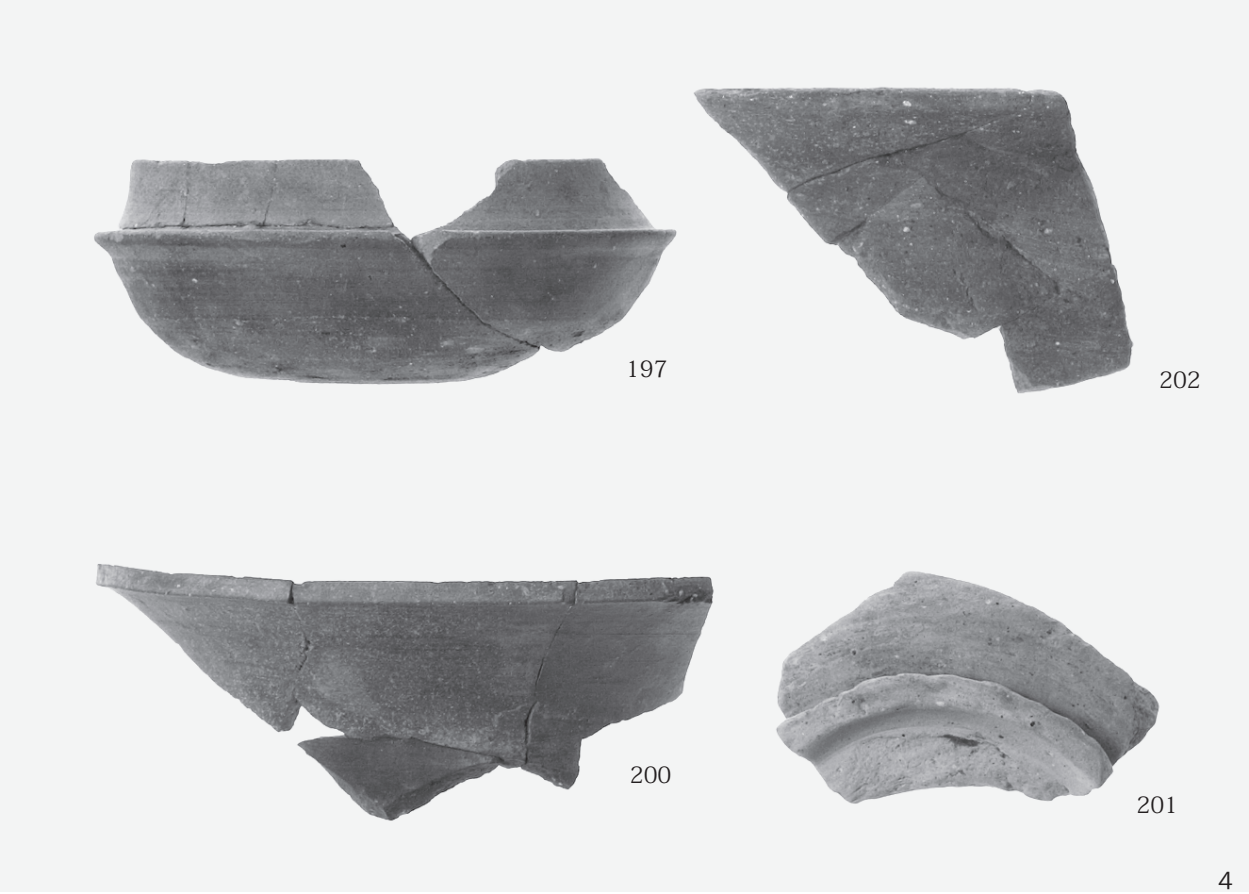
8

9

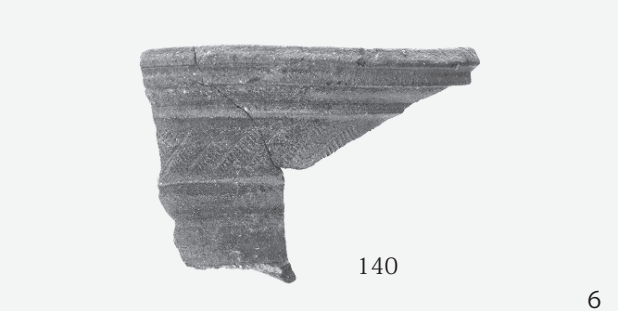
10

1～4．S0406　5．S0429　6．S0414　7～9．S0425　10．S0422、S0466

写真図版 48　Ⅰ－ｂ２区土器

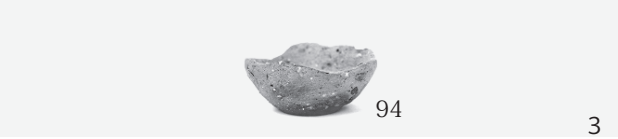


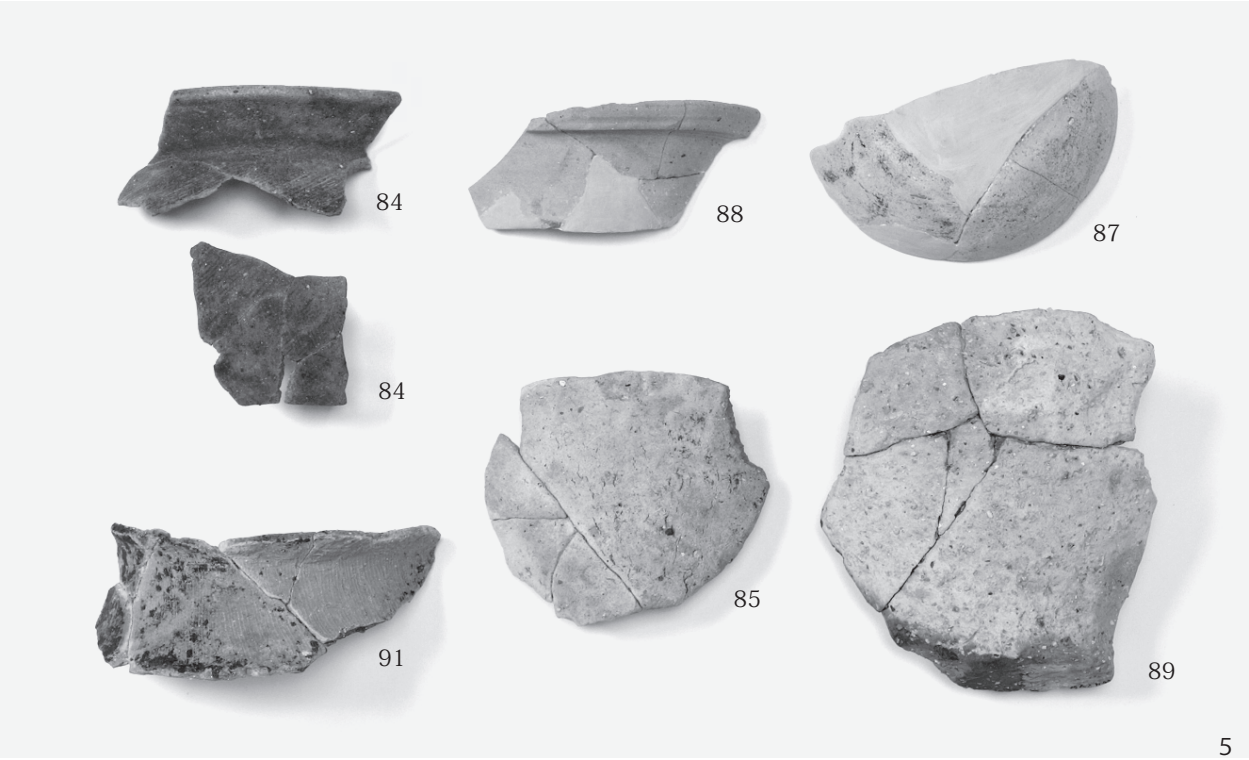
１～３．S0540　４．Ⅰ－ｂ２区第２層



1、2．S0539　3～5．S0562　6．S0534　7．S0542　8、9．S0515　10．S0509

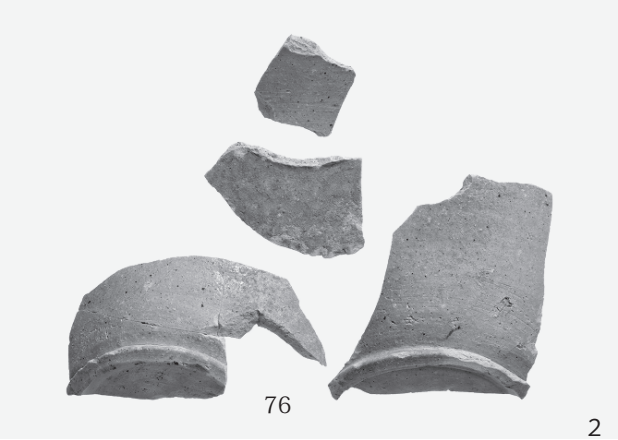
写真図版 50　Ⅰ－ｄ１区、Ⅰ－ｄ２区土器

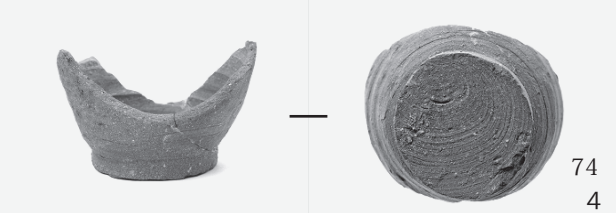


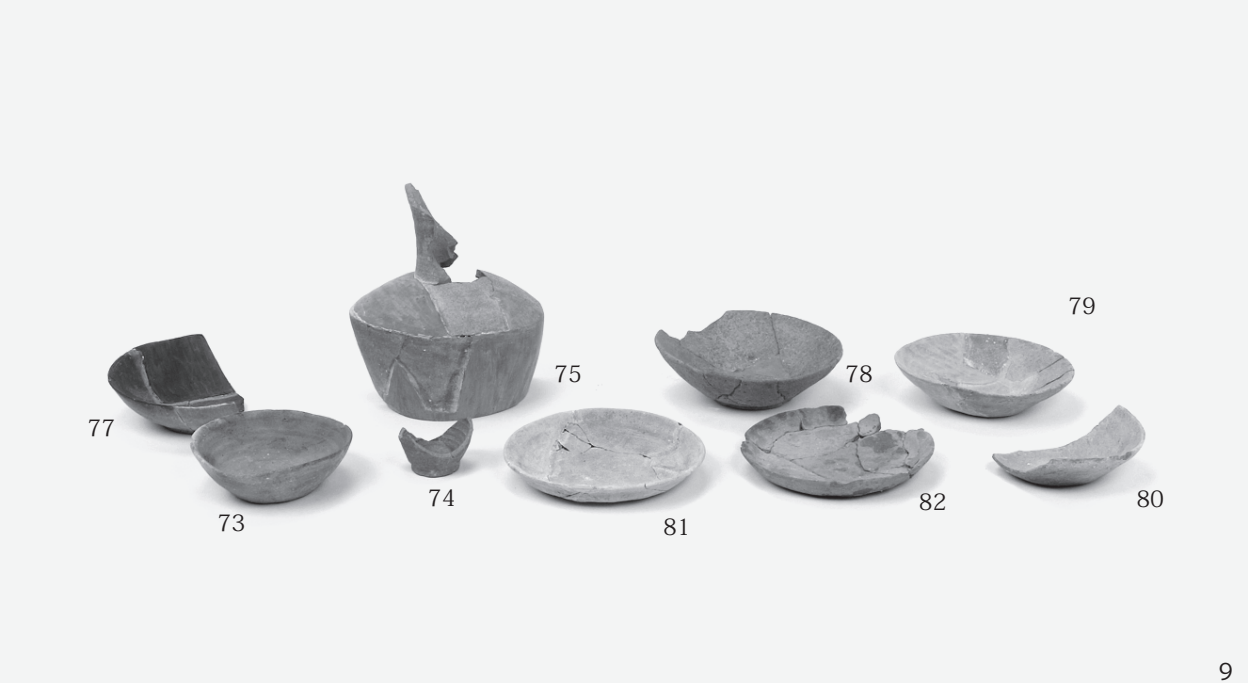


1．S0894、S0911　2～4．S0977
5．S0917、S1094、S0932、S0941、S1070、S1113

写真図版 51　Ⅰ－ｃ区、Ⅰ－ｄ２区土器







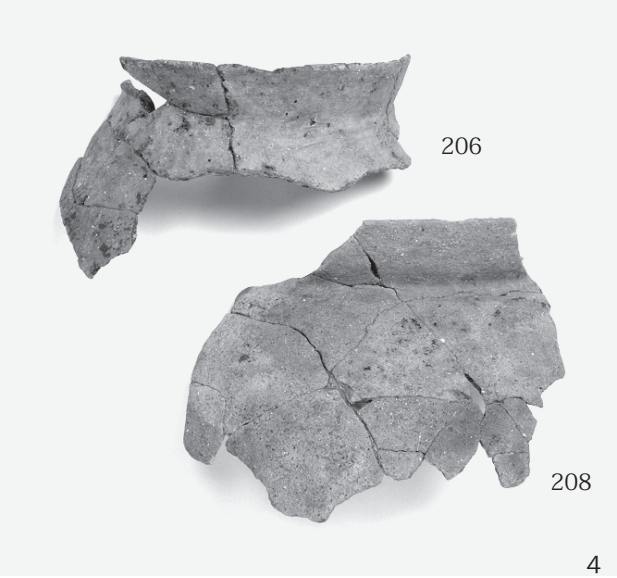
1～9．S0772

写真図版 52　Ⅰ－c 区土器

1

2

3



4

5

6

7

8

1～8．S0673

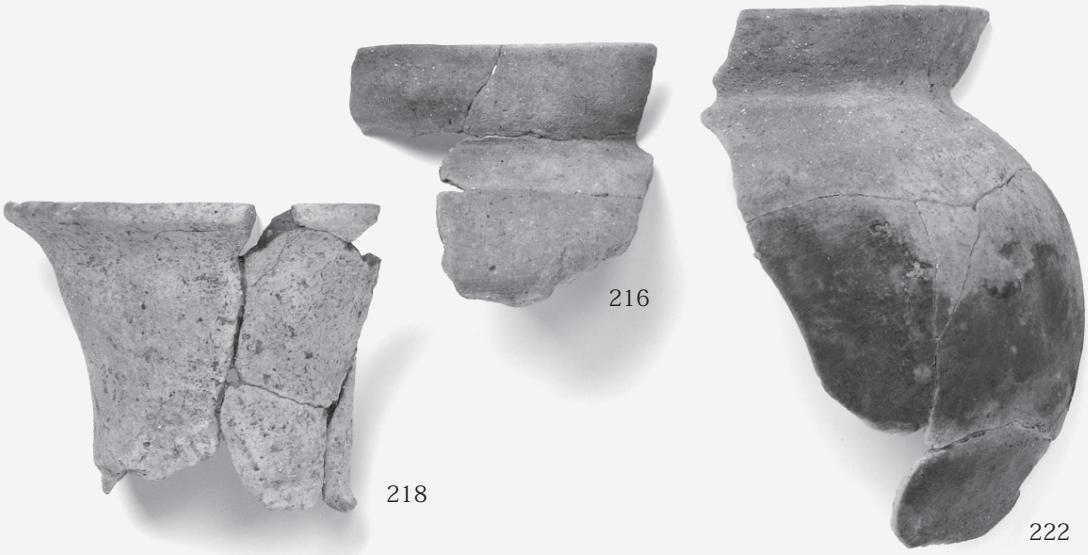
1

2

3

4

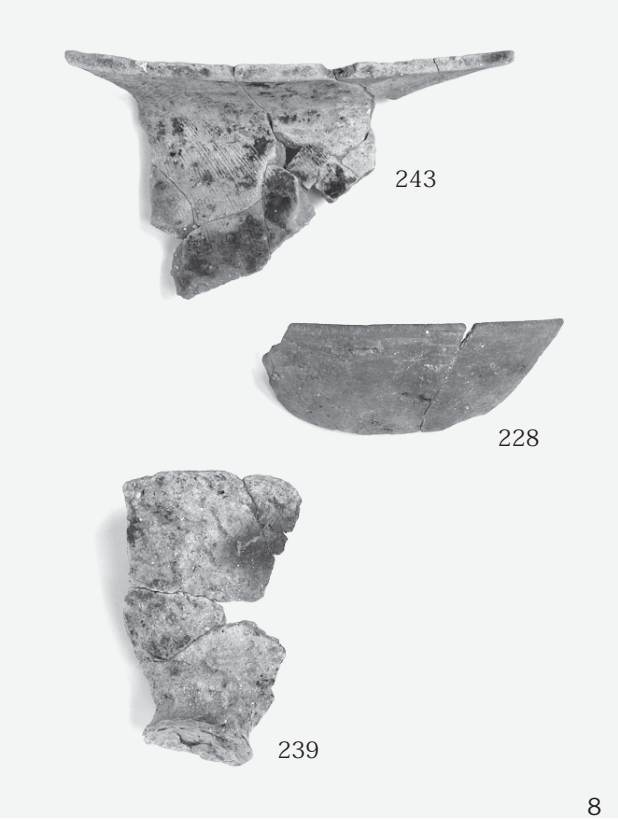
5



6

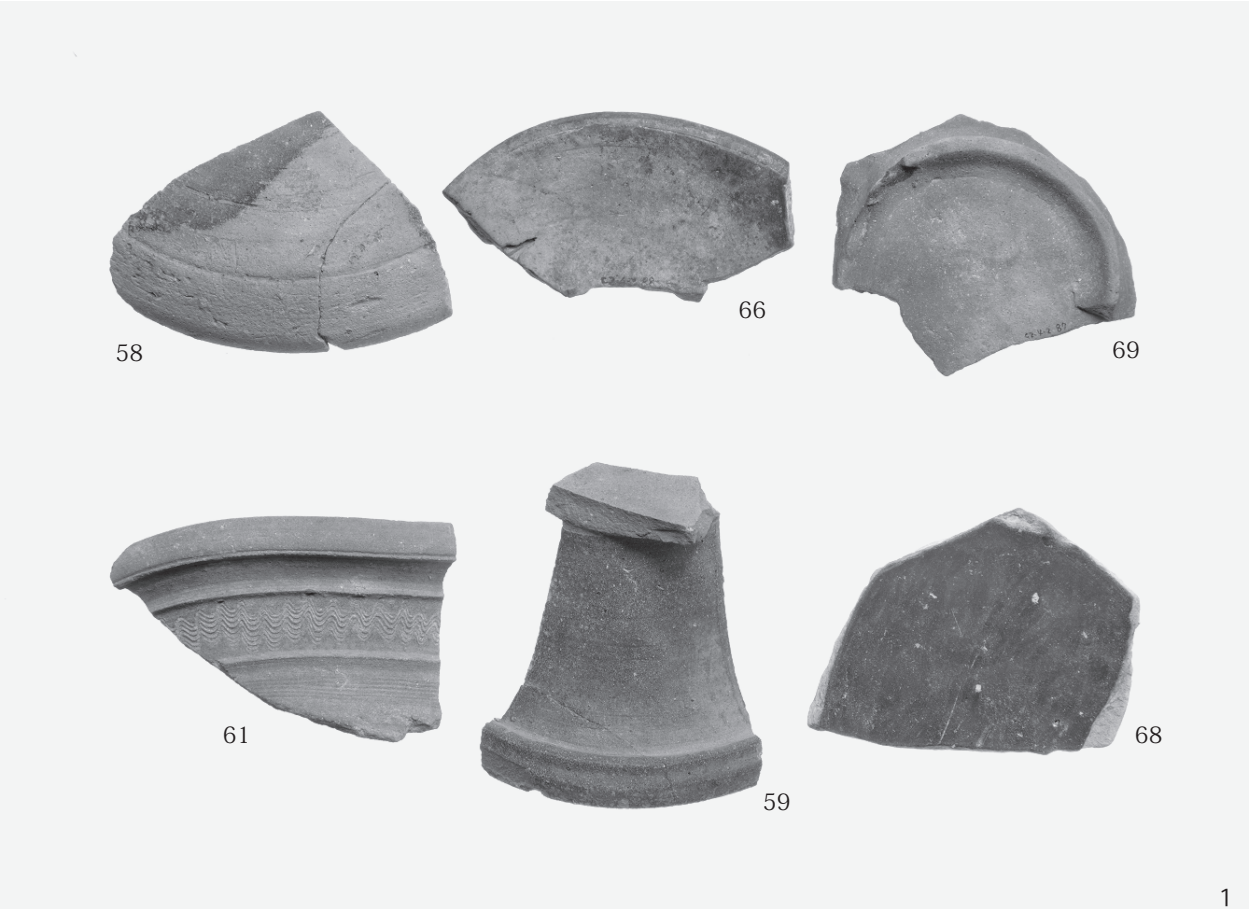
1、2．S0601　3～5．S0608　6．S0601、S0602、S0608

写真図版 54　Ⅰ－c 区土器



1、2．S0631　3．S0687　4．S0637　5．S0786　6．S0683　7．S0685　8．S0670、S0638、S0762

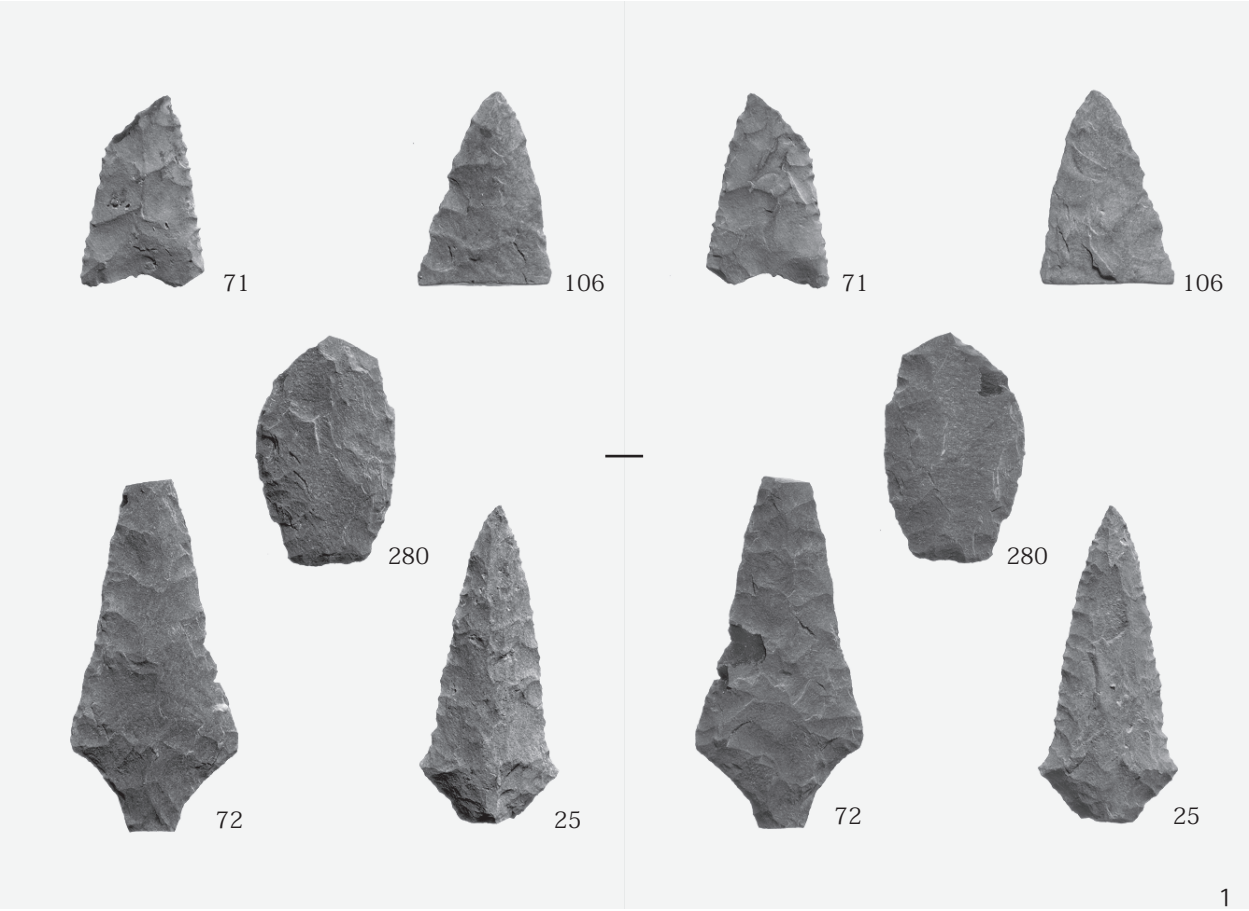
写真図版 55　Ⅰ－a 区、Ⅰ－c 区、Ⅰ－e 区土器



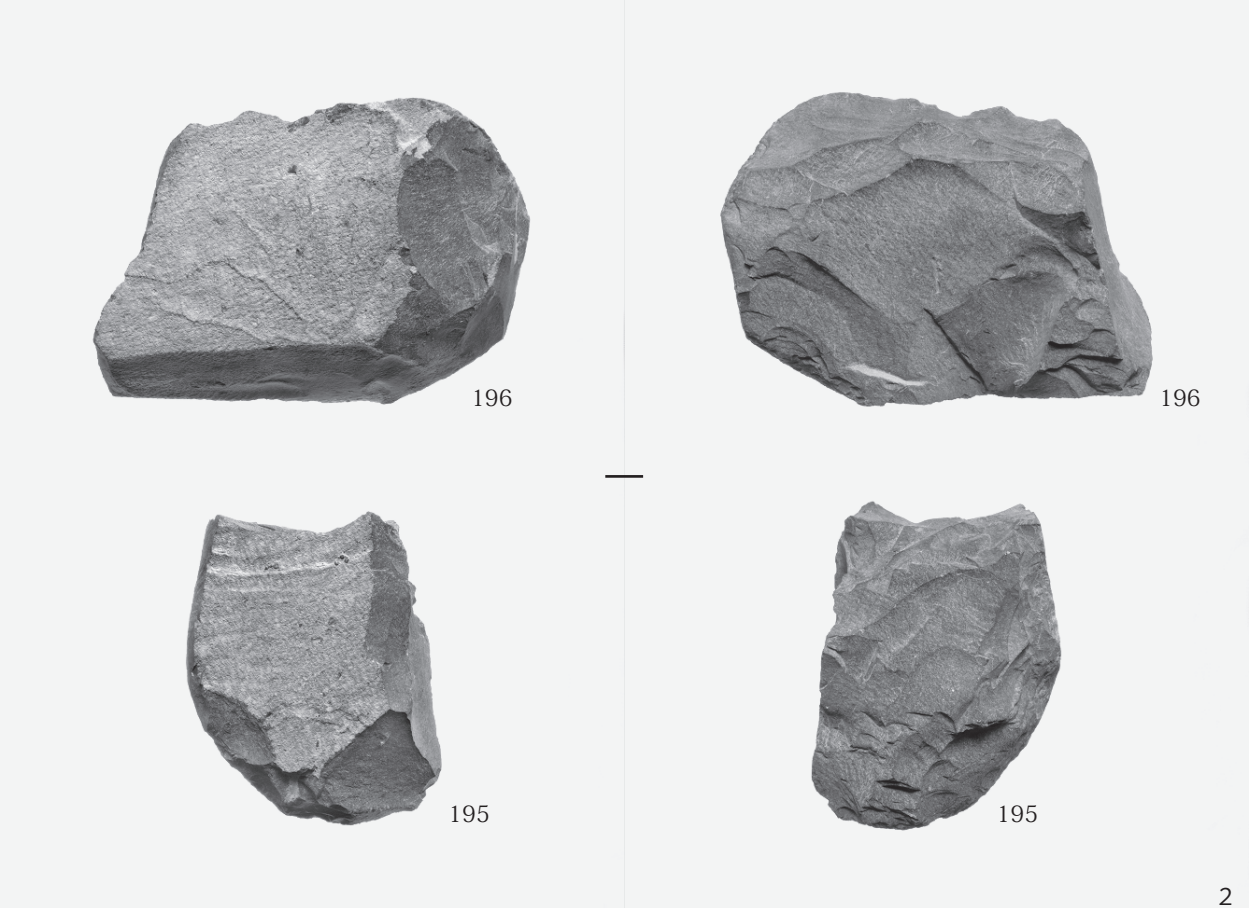
1．Ⅰ－a 区第２層

2．Ⅰ－c 区第２層、Ⅰ－e 区 S1169、S1174、第２層

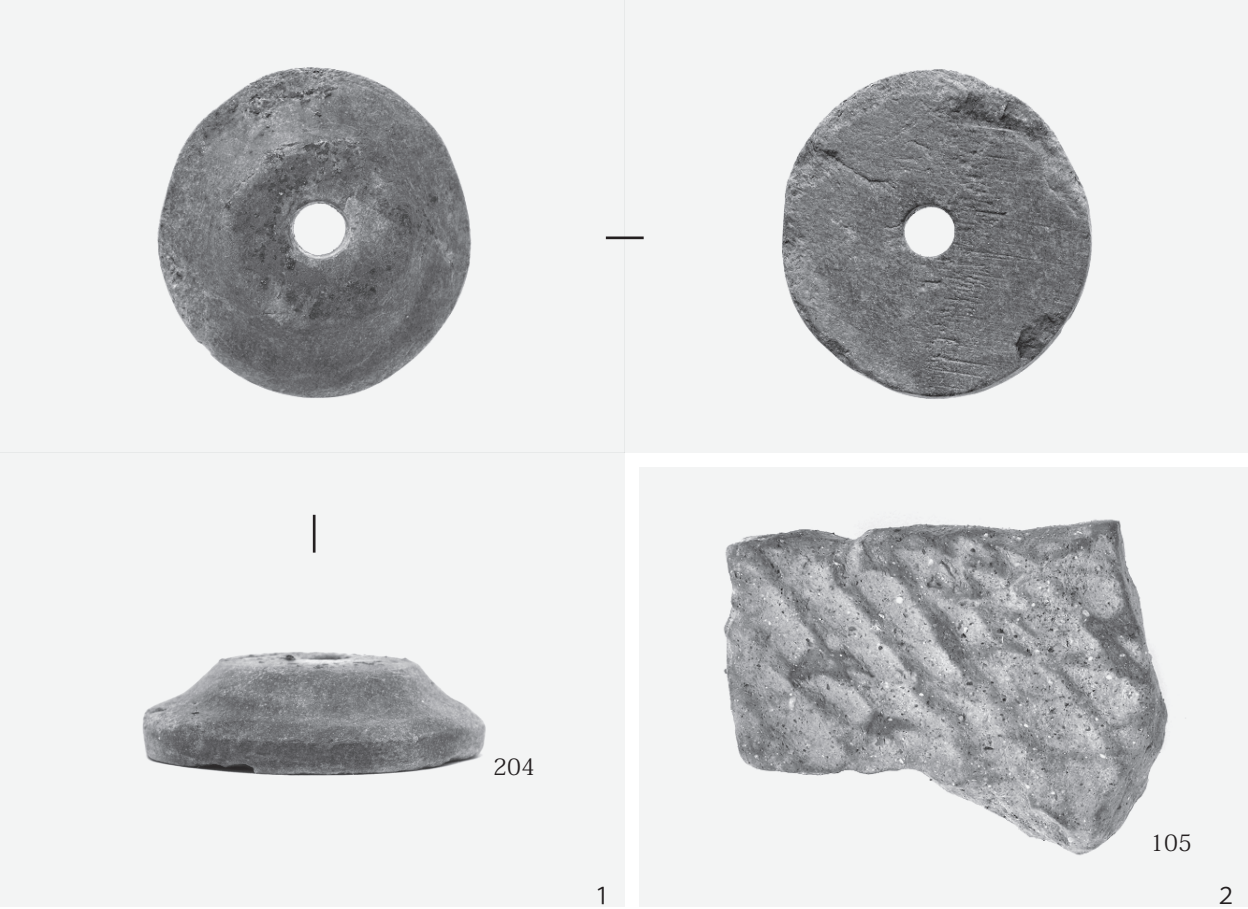
写真図版 56　石器



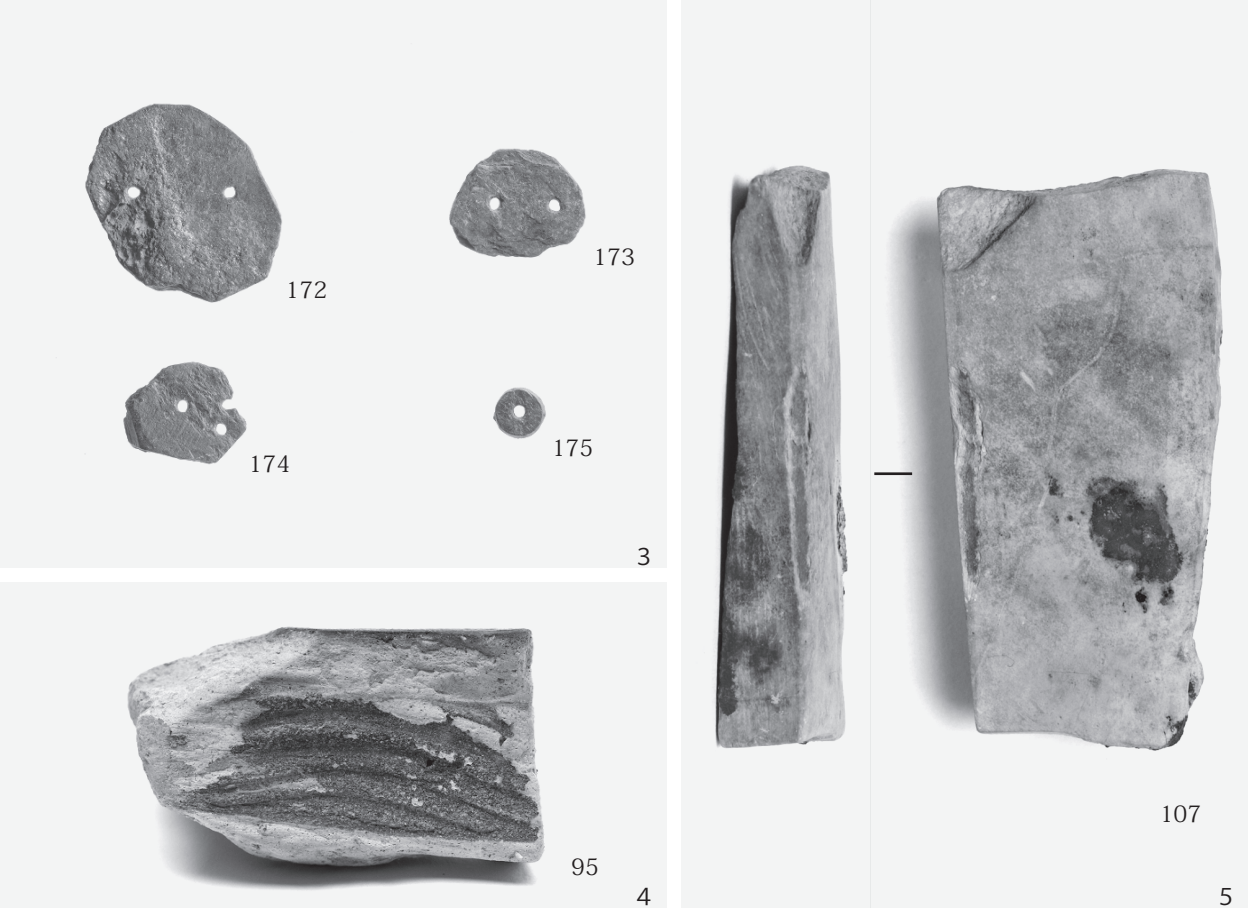
1．石鏃



2．石核

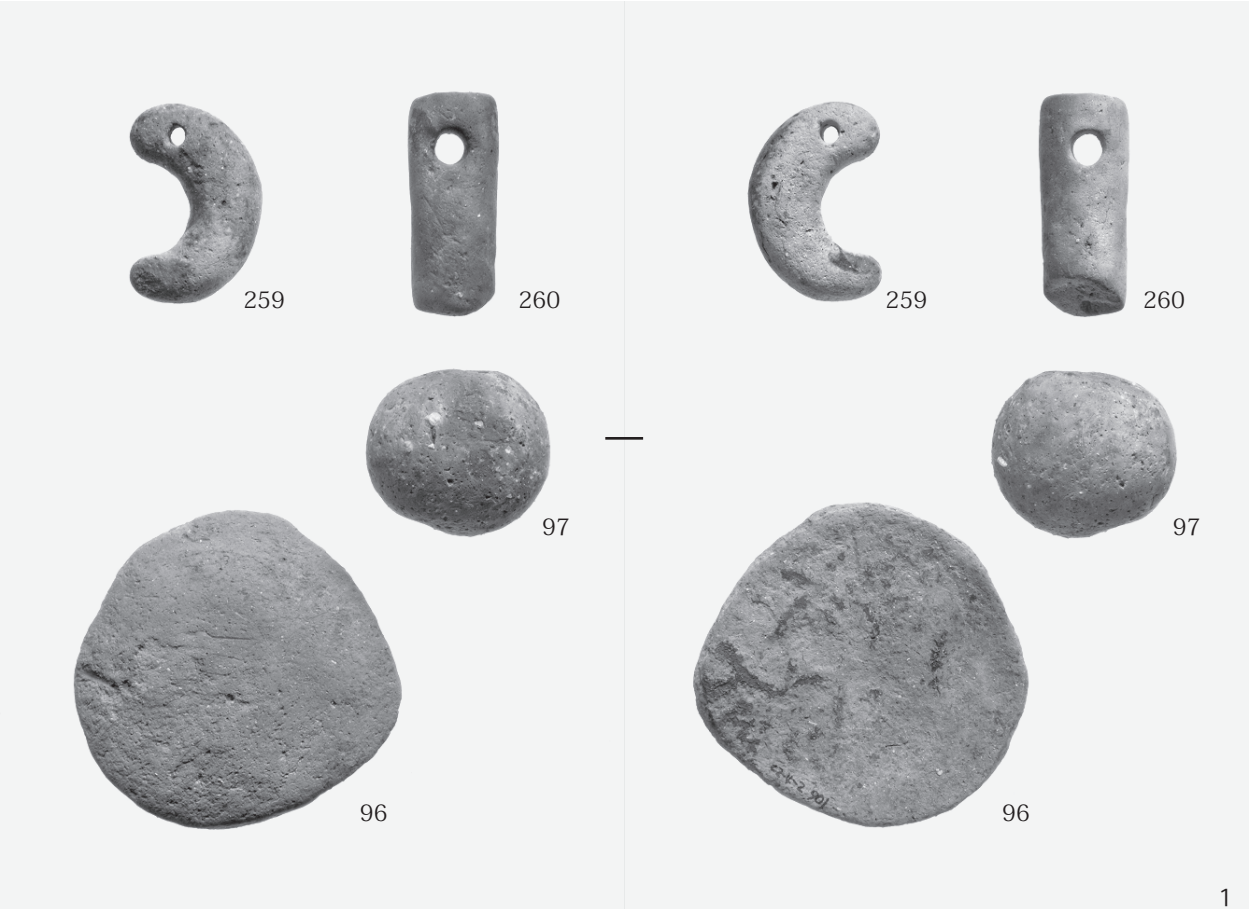


1．滑石製紡錘車　2．平瓦



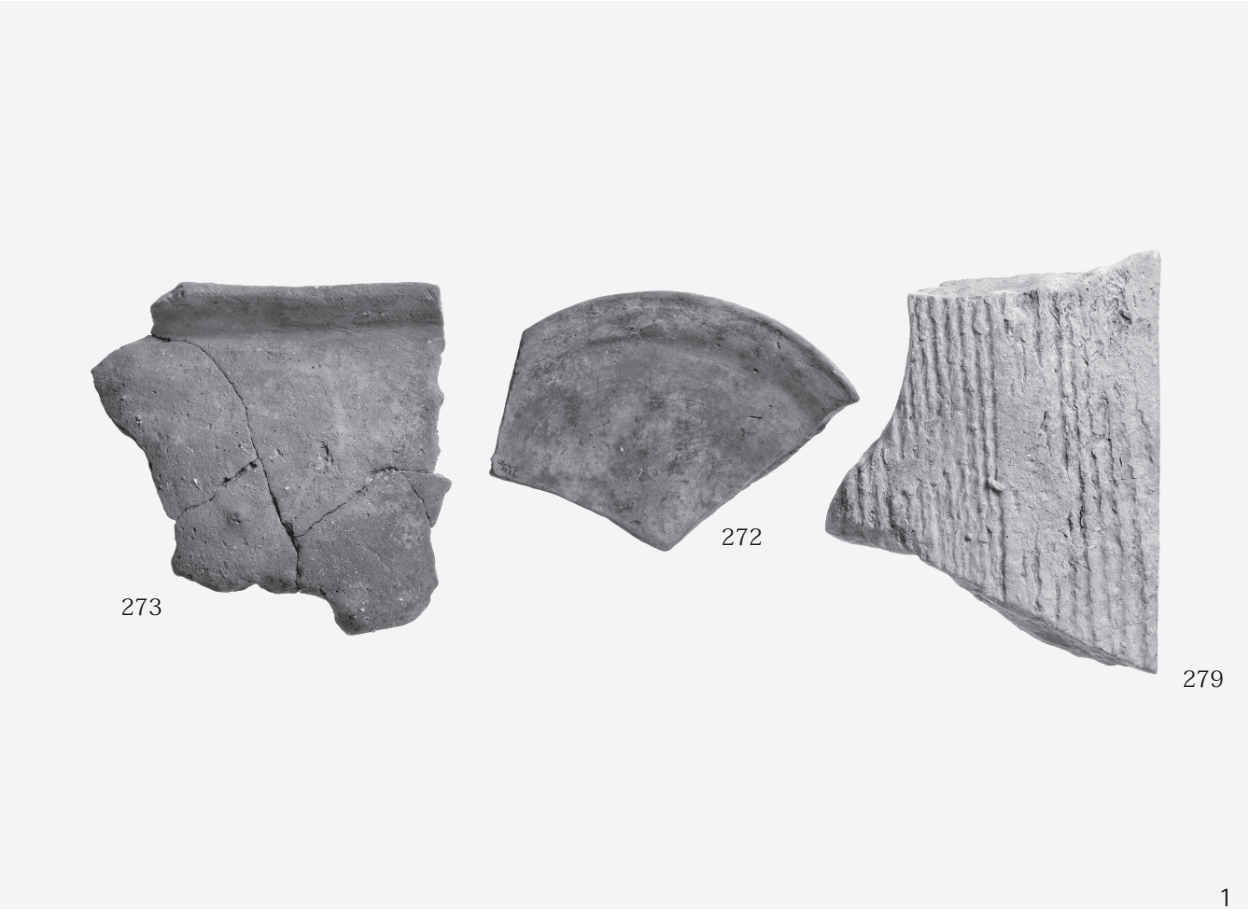
3．滑石製双孔円盤、臼玉　4．軒平瓦　5．砥石

写真図版 58　土製品

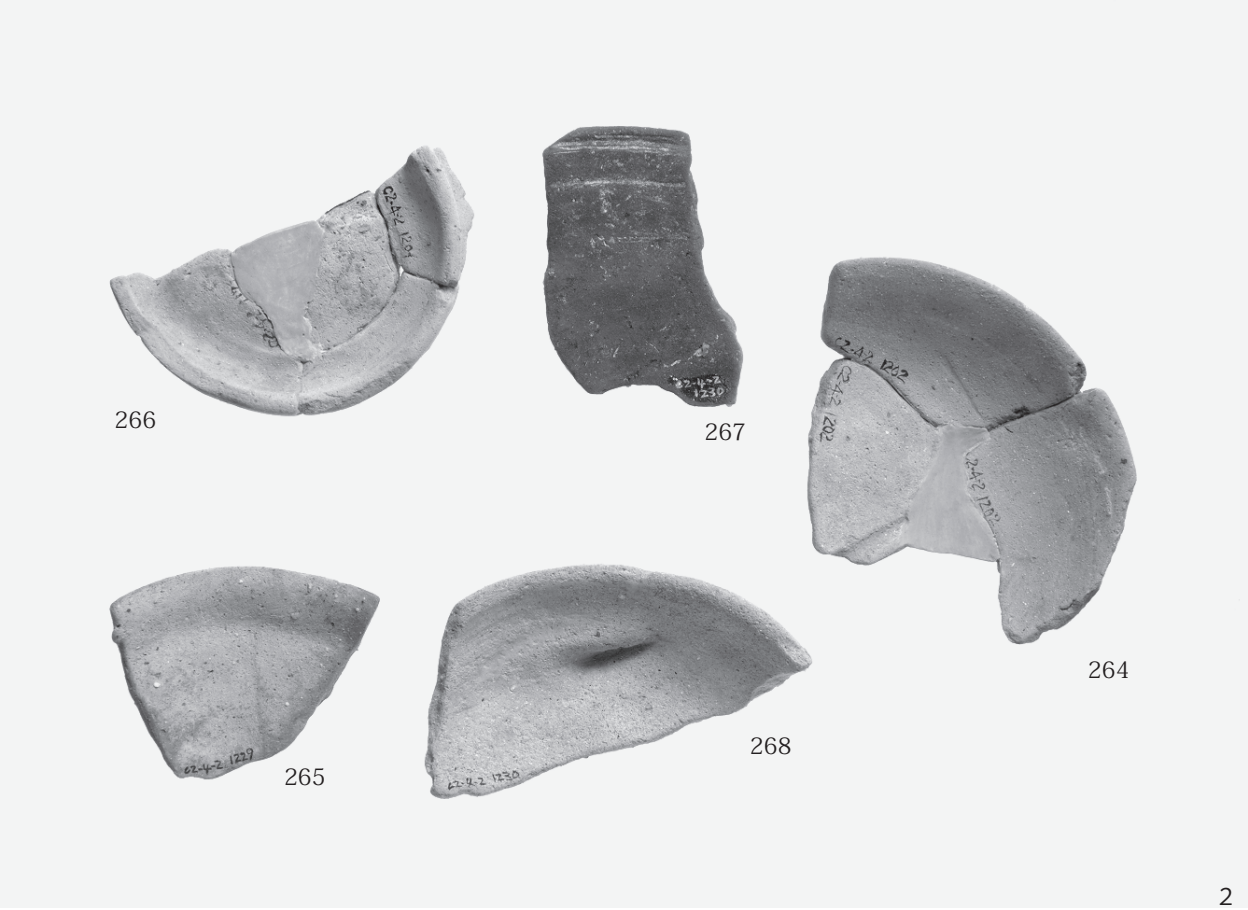


1．土製勾玉、土製円盤、土錘

2．蛸壺



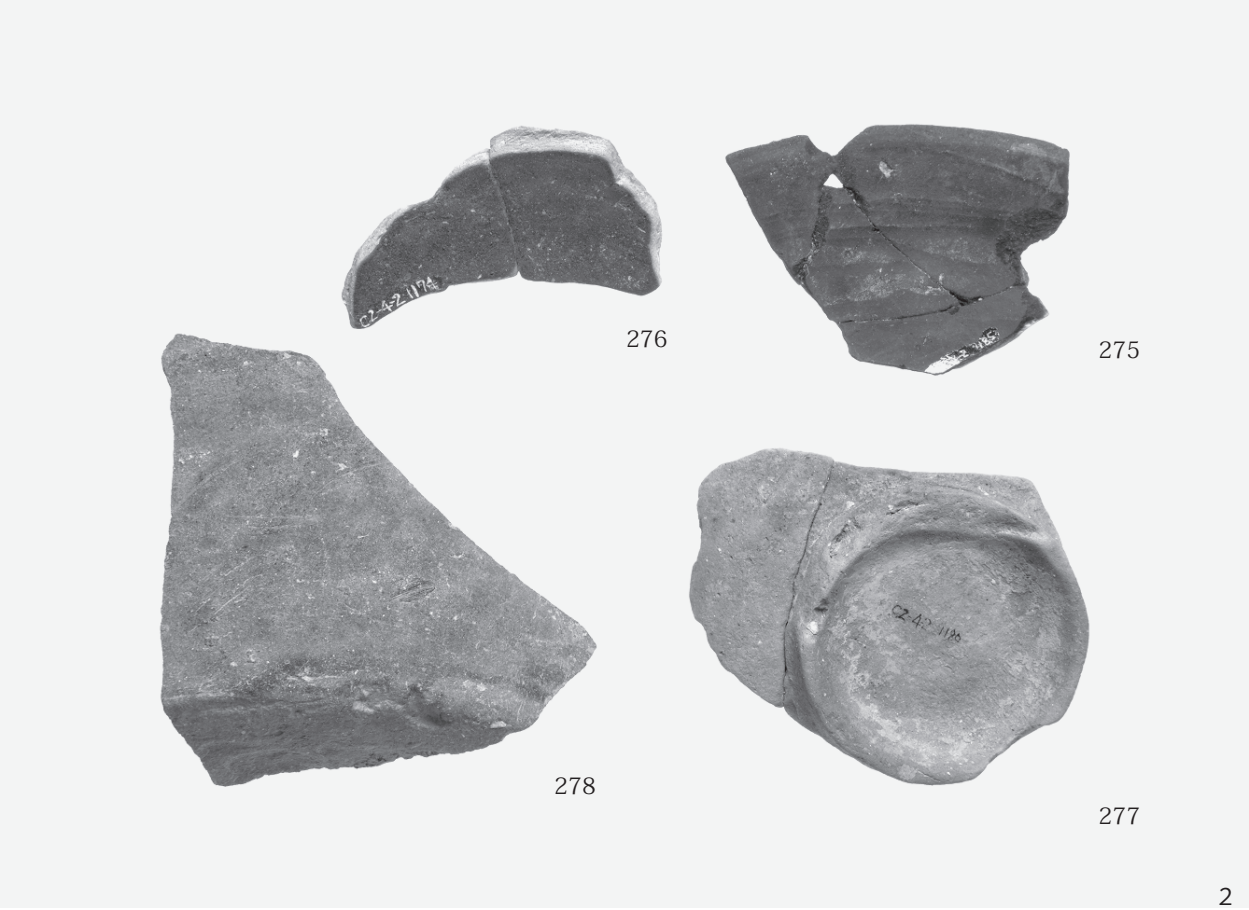
1．S1370



2．掘立柱建物 12 他（S1262、S1263、S1277、S1280）

写真図版 60　Ⅱ－ａ区土器

1．S1369、S1381、S1390



2．Ⅱ－ａ区第２層

報　告　書　抄　録

ふりがな	いけうちいせき
書名	池内遺跡
副書名	松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡（Ｃ２－４－２）埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名①	松原市文化財報告
シリーズ番号①	第１冊
シリーズ名②	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号②	第282集
編著者名	芝田和也、大矢祐司、川瀬貴子
発行機関	松原市教育委員会
所在地	〒580－8501　松原市阿保１丁目１番１号　　TEL 072（334）1550（代）
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　　TEL 072（299）8791
発行年月日	2017年月７月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いけうちいせき 池内遺跡	まつばらし 松原市 あまみひがし 天美東３丁目	27217	18	34° 35′ 77″	135° 32′ 39″	2015.８.１ ～ 2016.12.16	16,365㎡	松原市天美東土地区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
池内遺跡	集落	弥生	土坑	弥生土器・石器	弥生時代後期の土坑他
	集落	古墳	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・土製品・石製品	古墳時代の土坑・井戸
	集落	古代	掘立柱建物・井戸・土坑・溝・轍	須恵器・土師器・黒色土器・土製品・瓦	古代の居住域

要約	古墳時代中期を中心とする時期の土坑や井戸、溝などを検出した。遺構中には須恵器や土師器が多く含まれ、今まで池内遺跡で知られていなかった当時期の生活が明らかになった。 平安時代前期から中期にかけての掘立柱建物14棟や、井戸、溝、土坑、轍など居住に関する遺構を検出した。

松原市文化財報告　第１冊
公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 282 集

池　内　遺　跡

松原市天美東土地区画整理事業に伴う
池内遺跡（Ｃ２－４－２）埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　2017 年 7 月 31 日

編集　公益財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105　大阪府堺市南区竹城台３丁 21 番４号

発行　松原市教育委員会
〒580-8501　松原市阿保１丁１番１号

印刷・製本　株式会社　中島弘文堂印刷所印刷所
大阪府大阪市東成区深江南２丁目６番８号